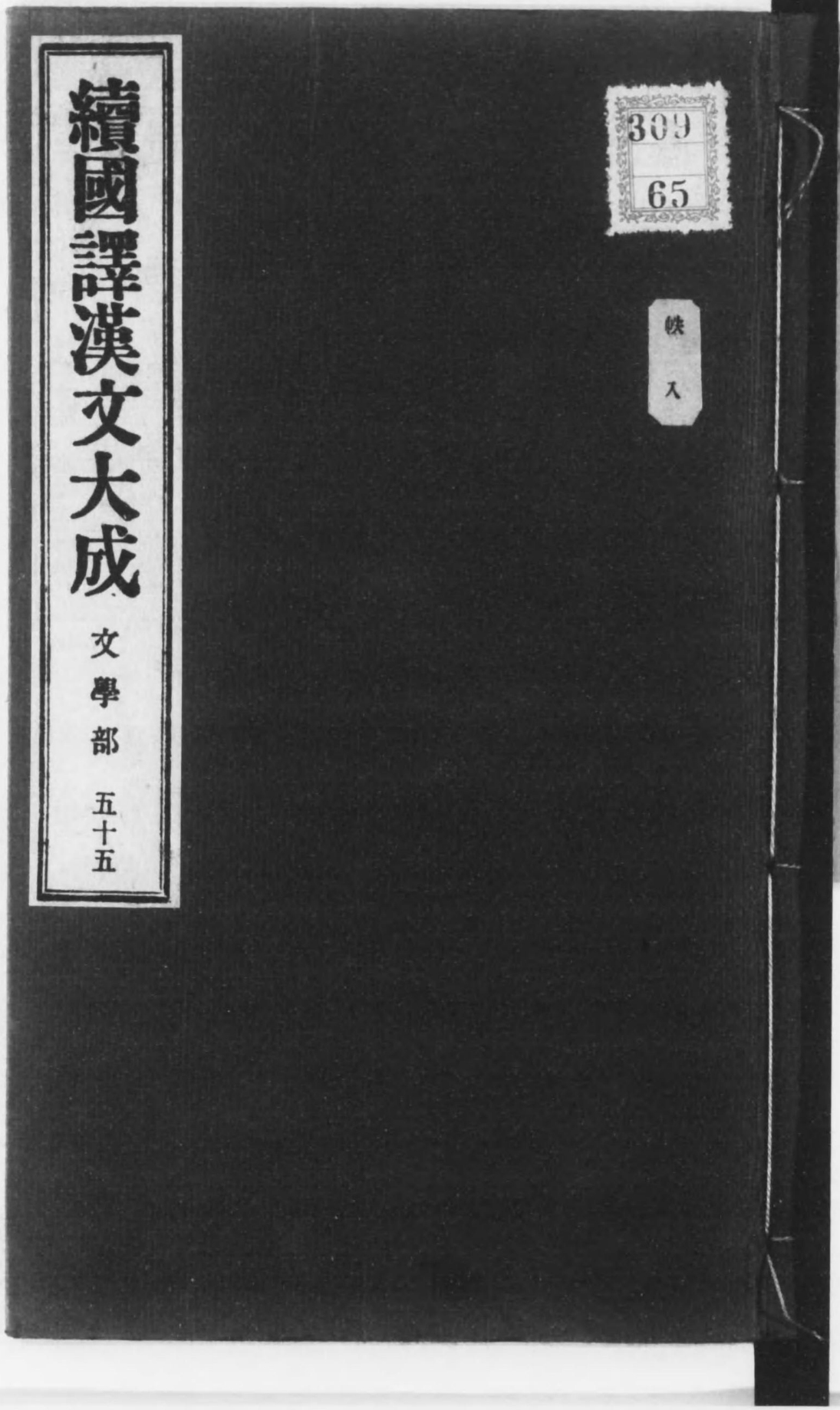

始

續國譯漢文大成

文學部 第五十五册（第十四帙の三）

蘇東坡詩集 二の三

吉田彌氏 寄贈本

昭和十三年 帝國

309
65

蘇東坡詩集　卷十四

古今體詩　六十六首

立春日病中邀安國仍請率禹功同來僕雖不能飲當請成伯主會某當杖策倚几於其間觀諸公醉笑以撥滯悶也二首

立春日、病中、安國を邀へ、仍つて請うて禹功を率ゐて同じく來らしむ。僕飲むこと能はずと雖も、當に成伯に請うて會を主らしむべし、某は當に策を杖いて几に其の間に倚り、諸公の醉笑するを觀て、以て滯悶を撥すべきなり　二首

孤燈照影夜漫漫、
拈得花枝不忍看。
白髮簪羞彩勝。

孤燈影を照して夜漫漫、
花枝を拈り得て看るに忍びず。
白髮簪を攲て彩勝を羞ぢ、

【字解】【一】立春　太陽曆、二月三日頃。二十四氣の一、大寒の次の氣節。史記、天官書四時之卒始也。【三】安國　宋、文勛、字は安國、書

黃耆煮粥薦春盤。
東方烹狗陽初動。
南陌爭牛臥作團。
老子從來興不淺。
向隅誰有滿堂歡。

【一】黃耆 本草に、黃耆、俗作芪、本集の興に米元章に書云、旦復疲甚、食黃芪粥甚美、此因病中用之、非立春故事也。【二】薦春盤 立春の日に、盤に食物を盛る。玉燭寶典に、新正十五日、作春餅生菜、號春盤。【三】烹狗 凡そ祭祀に、犬曰羹獻。曲禮に見ゆ。【四】爭牛 論衡に、立春爲土象人、男女各二、秉耒把鋤、或立土象牛、順氣應時、示率下也。【五】興 不淺 晉の庾亮、字は元規、風格峻整、仕へて散騎侍郎となる。蘇峻反す、亮、諸軍を督して、之を平ぐ。亮、武昌を鎭す、諸佐吏殷浩の徒、秋夜に乘じて南樓に登る。亮忽ち至る。諸人起つて之を避く。亮、徐に曰く、諸君少住、老子於此興復不淺と。便ち據牀に據り、浩等と談詠し、以て夕を竟る。其の坦率多く此に類す。【六】向隅云云 韓詩外傳に、一人向隅、滿坐不樂。

【題義】此詩は熙寧九年（東坡四十一歲）正月の作。立春の日、病中に文助・喬敍・超成伯等を邀へて宴會を爲したが、東坡は酒を飮むことが出來ないので、策杖、几に倚り、諸人の醉笑するのを傍觀して悶滯を攄去したのである。紀昀いふ、五句滯筆、六句鄙俚と。

【詩意】孤燈は影を照して寂しく、夜は漫漫として長い。物思ふ我は、未だ眠を成すことが出來ないのである。白髮の此身には、花も書となつたから、簪花を紋てて彩勝を揷すことを羞ぢる。病中の此身は、疲勞が甚だしいので、黃芪粥を食つて、食慾を助ける。一體、立春の日は、特に春餅や生菜を作つて盤に盛る。これを春盤と號ける。祭祀に、犬肉を宗廟に供へる、之を羹獻といふ。人が食ふ所の餘を取つて犬に與へると、犬は之を食ひて肥える。肥えると、鬼神に獻祭することが出來るといふ意から名ける。東方春の祭に、羹獻を供へて、陽氣が初めて動く。立春には土象人を爲り、土象牛を立てる。南陌（陌はあぜみち）に其の牛を爭うて、臥して一團をなして居る。昔、晉の庾亮の武昌を鎭したとき、諸佐吏が秋夜に乘じて、南樓に登る。亮、忽ち至る。諸人、起つて之を避けると、亮は、徐に曰く、老子此に於て興復淺からずと。今日の宴會も、亦之に類して居る。一人隅に向はば、滿座樂まないのである。今日隅に向はば、誰か滿堂の歡樂があらうぞ。

【餘錄】宗廟の祭にささげる供物の美名を擧げると、禮記の曲禮に、凡祭宗廟之禮、牛曰一元大武、豕曰剛鬣、豚曰腯肥、羊曰柔毛、雞曰翰音、犬曰羹獻、雉曰疏趾、兎曰明視、脯曰尹祭、魚曰商祭、鮮魚曰庭祭、水曰清滌、酒曰清酌、黍曰薌合、粱曰薌萁、稷曰明粢、稻曰嘉蔬、韭曰豐本、鹽曰鹹鹺、玉曰嘉玉、幣曰量幣。一元は一頭で、數をいふ。武は足迹、肥牛は脚大であるから、武も亦

史會要に、助、官太府寺丞、工篆書。東坡全集に、文安國、席上作蠟燭花詞一あり、卽ち廬江文助である。【三】禹功 喬敍、字は禹功。卽ち喬太博、寗州の僚屬。【四】成伯 卽ち趙郎中、亦、寗州の僚屬。紀年錄に據るに、正月立春日、請成伯主會作

【一】黃耆 倚几 几によりもたれる。莊子、齊物論に、隱几而坐。【二】攄去 攄は發去の意、除き去ること。滯悶は、蘇舜欽の詩に觀此巨派注、頗覺滯悶塞。【七】孤燈 白樂天の長慢歌に、夕殿螢飛思悄然、孤燈挑盡未成眠。【八】漫漫 夜の長い貌。寧戚、飯牛歌に、長夜漫漫何時旦。【九】翦彩 白樂天の詩に、翦彩爲人、或鏤金箔爲人、以貼屏風、或戴之頭鬢、又造勝相遺、起於晉代云云。李商隱の詩に、鏤金作勝傳荊俗、翦綵爲人紀昔風。【一〇】羞彩勝 荊楚歲時記に、人日翦綵爲

大、故に大武といふ。剛鬣は豕の肥えるときは、鬣毛剛くして大、故にいふ。膚肥の厖は、充滿の貌。羊毛は細にして柔弱、故に名く。輸音の輸は長なり。雞が肥えると鳴聲が長い。羹獻は、人食ふ所の羹の餘を取りて、犬に與へると、犬が之を食うて肥える。肥えると、鬼神に獻祭すべしといふ意より名く。趾は足、雉が肥えると兩足開張するより名く。兎が肥えると目が開く、故に名く。脯は乾した肉。鰒魚は乾魚。脡祭は新鮮なるものは、煮るときは、脡直である。鄉は香氣。萇は語助。豐本の本は根、韭は根が豐厚なるを以て名く。

齋居臥病禁烟前、　齋居病に臥す禁烟の前、
辜負名花已一年。　名花に辜負する已に一年。
此日使君不強喜、　此日使君強ひて喜ばざれば、
早春風物爲誰妍。　早春の風物誰が爲に妍なる。
青衫公子家千里、　青衫公子家千里、
白髮先生杖百錢。　白髮先生杖百錢。
曷不相將來問病、　曷ぞ相將し來つて病を問はざる、
已敎呼取散花天。　已に呼んで散花天を取らしむ。

【字解】【一】齋居　東坡の詩に、謫官常齋居、散帙滿二前後一。【二】禁烟　寒食の節の異稱。周禮、司烜氏に、仲春以二木鐸一修レ火、禁二於國中一。注にいふ、爲二季春將レ出レ火也と。元徽之の遊昌宮詞に、店舍無レ煙宮樹綠。唐、常袞が大赦の制に、屬二禁烟之令節一。【三】辜負　白樂天の詩に、猶有二一般辜負事一、不レ將二歌舞管絃一來。俗には孤負と同じ意に用ひて居る。【四】使君　漢の世、太守を府君、刺史を使君といふこと、前に出づ。【五】不二強喜一　史記、魏其武安侯傳に、韓御史良久謂二丞相一曰、君何不二自喜一。【六】青衫　青色の衣。衫は單衣の通稱。白樂天の琵琶行、江州司馬青衫濕。【七】杖百錢　晉書、阮修傳に、修、字宣子、嘗步行、以二百錢一挂二杖頭一、至二酒店一便獨酣暢。【八】散花天　維摩經に、舍中有二一天女一、以二天花一散、諸菩薩悉皆隨落。李商隱の詩に、維摩一室無レ多レ病、亦要二天花作一道場一。

【詩意】仲春寒食の節は、店舍に煙なきも宮樹は綠である。併し齋居病に臥して、名花に負くこと既に已に一年となつた。今日の酒宴には、刺史に於かれても、强ひて喜ばなければなるまい。さもなくば、早春の風物は、一體誰が爲に美しいのであるかと言はなければならない。靑衫を著けた公子は、家を離れてここに千里。白髮の先生杖百錢は、晉の阮修が嘗て步行し、百錢を以て杖頭に挂け、酒店に至つて、便ち獨り酣暢したことを言つたのであらう。何ぞ相來つて病を問はざる、已に呼んで散花天を取らしめた。散花天は天花を以て散ずるといふ意である。（宴を開く意）李義山も、維摩一室病多しと雖も、亦、天花の道場を作すを要すと言つた。

答二李邦直一

李邦直に答ふ

美人如二春風一著レ物物未レ知。　美人は春風の如く、物に著いて物未だ知らず。
羈愁似二冰雪一見レ子先流澌。　羈愁は冰雪に似て、子を見て先づ流澌す。
子從二徐方一來。吏民擧熙熙。　子徐方より來り、吏民は擧熙熙。

扶(七)病出見之。驚我一何衰。
知我久慵倦。起以新詩。
詩詞如醇(八)酒。盎(九)然熏四支。
徑(一〇)飲不覺醉。欲和先昏疲。
西齋有蠻(一一)帳。風雨夜紛披。
放懷語(一二)不擇。撫掌笑脫頤。
別(一三)來今幾何。春物已含(一四)姿。
柳色日夜暗。子來竟何時。
徐方雖(一五)云樂。東山禁游嬉。
又無狂太守。何以解憂思。
聞子有賢(一六)婦。華(一七)堂詠盍(一八)斯。
曷不倒(一九)囊橐。賣(二〇)劍買蛾(二一)眉。
不用教絲竹。唱(二二)我新歌詞。

【字解】【一】李邦直　名は清臣。進士に擧げらる。神宗召して國朝國史編修官となす。哲宗の朝、范純仁位を去り、獨り中書を

病を扶けて出て之を見る、我の一に何ぞ衰へたるに驚く。
我の久しく慵倦を知り、我を起すに新詩を以てす。
詩詞醇酒の如く、盎然として四支を熏す。
徑に飲んで醉ふを覺えず、和せんと欲して先づ昏疲す。
西齋蠻帳あり、風雨夜紛披。
懷を放つて語擇ばず、掌を撫し笑つて頤を脫す。
別來今幾何、春物已に含姿。
柳色日夜暗し、子の來る竟に何れの時ぞ。
徐方樂しといふと雖も、東山游嬉を禁ず。
又狂太守なし、何を以て憂思を解かん。
聞く子に賢婦あり、華堂盍斯を詠ずと。
曷ぞ囊橐を倒にし、劍を賣りて蛾眉を買ひ、絲竹を敎ふるを用ひずして、我に新歌の詞を唱へしめざる。

贋にす。邦直は調藻を以て知な人主に受く。然れども利祿に志して、操持惸緟、鄧温伯・章惇諸人と朋黨の說を紹述し、正人竄逐、殫んど噍類なし。後、其の罪を追治し、雷州司戶に貶ぜらる。公、高密に守たるとき、邦直は京東提刑を以て部を行り、密に至る。

【二】美人　楚辭に、望ニ美人一兮未レ來。【三】鞠愁　容愁といふに同じ。陳子良の詩に、故鄉千里外、何以慰ニ鞠愁一。【四】流澌　氷がとけて流れる。韻書にいふ、澌、流氷也と。楚辭に、流澌紛兮將ニ來下一。東方朔七諫に、赴ニ湘沅之流澌一兮、愍遂レ波而復レ東。

【五】從ニ徐方一來　毛詩、大雅、常武に、徐方不レ回、王曰還歸。【六】熙熙　和ぐ貌。老子に、衆人熙熙、如レ享ニ大牢一、如レ登ニ春臺一。

【七】扶レ病　白樂天の寄ニ元微之一詩に、可ニ能扶レ病暫來一無。【八】醇酒　史記、信陵君傳に、飲ニ醇酒一、近ニ婦女一。【九】盎然　盛にあふれる貌。韻後村の詩に、先生如ニ春風一盎然盛ニ陳炙一。

つひにと訓す。【一〇】徑飲不レ覺レ醉　史記、淳于髡傳に、可ニ一斗一徑醉。徑は竟なり。

【一一】紛披　物のばらばらに亂れる。文選、王褒の洞簫賦に、若ニ飄風紛披一、容與而施レ惠。東坡の詩に、讓道茅簷劣容レ膝、掩天風雨看ニ紛披一。【一二】語不レ擇　孝經に、口無ニ擇言一。【一三】撫レ掌笑脫レ頤　晉、陸雲傳に、張華撫レ手大笑。漢、匡衡傳に、諸儒語曰、匡說ニ詩解ニ人頤一。如淳曰く、使ニ人笑而不レ能レ止也と。【一四】別來　晉、溫嶠傳に、王敦與ニ王導書一曰、太眞別來幾日作ニ如レ此事一。【一五】春物方駘蕩。【一六】含姿　韓退之、同冠峽の詩に、春物方駘蕩。東坡の詩に、千花百草爭含レ姿。【一七】華堂　文選、王褒の洞簫賦に、若ニ飄風一盎然盛ニ陳炙一。

【一八】盍斯　毛詩小序に、盍斯、后妃、子孫、衆多也。盍斯は蝗の羣、一回に九十九子を生む。李邦直は初め、韓魏公の兄の女を娶り、再び孫巨源の女を娶る。賢婦は孫氏ないふ。【一九】囊橐　底のある囊と底のない橐。詩、大雅に、于レ橐于レ囊、思ニ戰用光一。【二〇】賣　史記、信陵君傳に、賣ニ劍買ニ美人一。【二一】蛾眉　白樂天の寄ニ元微之一詩に、可ニ能扶レ病暫來一無。【二二】絲竹　禮、樂記に、金石絲竹、樂之器也。尚書序に、金石絲竹之音。【二三】唱我新歌詞　劉禹錫の楊柳枝詞に、請君莫ニ奏前朝曲一、唱ニ我新翻楊柳枝一。

【題義】哲宗の朝、李邦直は、首として紹述を以て帝の意を迎へ、且つ激怒の詞が多かつた。そして鄧温伯・章惇の諸人は之を助けて朋黨をなしたのである。東坡が七年瘴海に在つて、僅かに生還が

出來た。其の副本を推原すると、實に邦直から之を發したのである。此詩は、東坡の密州に在つた時の作である。

【詩意】美人を望むも、未だ來らずといふ言葉がある。美人は春風の如くであつて、物に著いても、物は之を知らずに居る。故郷は千里の外、何を以てか客愁を慰めようぞ。併し客愁は、氷雪の如くであつて、君を見ると、解けて流れてしまふ。君は遠く徐方から來られる、吏民は皆、君を見て熙熙として和らぎ、春臺に登るやうである。それで病を犯してまでも出でて之を見る。君は我の衰へたるに驚き、又、久しい間、慊く倦んで居た我を知る。そこで、我が心を起すに新詩を以てされた。詩詞は、醇酒の如くであり、春風の如くであつて、盎然（あふれる）として四肢を熏ずる。而も覺に飲んで醉ふことを覺えない。又、和せんと欲して、先づ目も昏み、體も疲れる。西齋に、えびす製の帳がある か、風雨の夜などばらばらと亂れて居る。懷を放つて、而も擇言がなく、皆、よい言葉である。手を撫でて大に笑ひ、人をして頤を解かしめる。さて一別以來、幾日ぞ、春物は方に駘蕩、千花百草が爭うて委を含んで居る。客舍は青青であるも、柳色は日夜に暗い。君の來るは覺に何れの時ぞ。徐方は樂しといふと雖も、東山は游嬉を禁じて居るから、何を以て我が憂思を解かうぞ。聞けば君には賢婦人孫氏がおはし、そして家門が繁榮で、螽斯の詵詵（衆多なるをいふ）たるが如しといふことである。なせ財囊を倒にし、劍を賣りて美人を買ひ、そして之に敎へるに、絲竹の樂器を以てして、我が爲に新歌の詞を唱へしめるやうになさらないか。私は切に之を君に懇望するのである。

和文與可洋川園池三十首　　湖橋

朱欄畫柱照湖明。
白葛烏紗曳履行。
橋下龜魚晚無數、
識君拄杖過橋聲。

【字解】【一】文與可　文同、字は與可、東川梓潼の人、晉て洋州に守となり、最後に湖州に知たり。竹を畫くことが精妙である。文湖州畫志に、熙寧中、知二陵州一既復二舊秩一、歷二度支司封員外郎一、後知二洋州一云云。【二】洋川園池　九域志に、洋州、洋川郡屬二利州路一。名勝志に、今漢中府洋縣。唐、地理志に、洋州洋川郡、武德元年、析二梁州之西鄉黃金與勢一置。【三】朱欄　李義山の詩に、朱欄迴遶壓二湖光一。李嘉祐の詩に、高閣朱欄不レ厭レ遊、灜波白水繞二長洲一。【四】烏紗　帽の名。東晉の時、宮官、烏紗帽を著く、卽ち烏紗帽である。其の後、貴賤、宴私に於て、皆之を著く。唐に至つて、遂に官服となる。柳宗元の詩に、朝朝挂二烏紗一。【五】龜魚　韓退之が新亭の詩に、瓦影蔽二龜魚一。【六】無數　戰國策に、呂不韋訓レ父曰、耕田之利、幾倍、曰十倍、珠玉之贏幾倍、曰百倍、立二國家之主一贏幾倍、曰無數。

【題義】文與可は東坡と相厚し、東坡が杭州に通判であつた時、與可が詩を寄せていふ、北客若來休二問話一、西湖雖レ好莫レ吟レ詩と。此三十首は、與可が洋川園池の作に和したのである。

【詩意】朱塗りの欄干や彩色した柱が湖水を照らして、はつきりして居る。人が白い葛の烏紗帽を冠り、履を曳いて歩み行く。橋の下には、龜魚が數知れない。定めし君が杖に拄へられて橋を渡り行く聲を聞き識るであらう。（紀昀いふ、暗用二堂堂策策事一、寫得閒遠と。）

【詮錄】文與可の湖橋詩にいふ、飛橋架二橫湖一、偃若二長虹臥一、自問一日中、往來凡幾過と。

橫湖

貪看翠蓋擁紅粧。不覺湖邊一夜霜。卷却天機雲錦段。從教匹練寫秋光。

宋玉の高唐賦に、紀二翡翠之旖旎一、垂二霧穀之袿撰一とある。ここは天の機織の意。【三】雲錦段　河南記に、嵩山有二雲錦二疋一、錦多二荷花一。吳二於常二孝一。文選、木元虞の海賦に、雲錦散文二於沙汭之際一。韓退之の曲江荷花詩に、擇レ舟昆明度二雲錦一、脚敲二兩鼓一呼二吳歟一。

【詩意】此の橫湖に蓮の花が開いたときは、譬へば紅粧を施した美人を翠の蓋を取つて擁衞して居るやうな狀である。（翠蓋も紅粧も荷花を形容したのである。）此の美景を貪り看て、湖邊に在る我は一夜の中に、霜あることを覺えなかつた。天機卽ち造化の機織で織り成した此の自然の雲錦段を卷き取つてしまひ、跡にはただ水ばかりが澄みきつて居る。其の狀をいふと、恰も一匹の練のやうでまことに美しい。此の練に秋光を寫すのも、妙であらう。荷が盡きて、水は益〻光明となる。（此詩は其の景色の澄靜を寫したのである。紀昀いふ、就二原唱一翻入一層と。）

【字解】【一】橫湖　名勝志に、橫湖在二洋縣城西一、遠望若二西練之橫一、故名。梁城集和二橫湖一詩に、湖裏種二楊柳一、何處渡レ船人、則是人間否。【二】翠蓋　文選、曹子建の七啓に、俯倚二金較一、仰拄二翠蓋一。【三】紅粧　文選、古詩に、娥娥紅粉粧、纖纖出二素手一。【四】天機　淮南子に、內有二以通一于天機一とある。【五】雲錦段　河南記に、嵩山有二雲錦二疋一、錦多二荷花一。吳二於常二孝一。文選、木元虞の海賦に、雲錦散文二於沙汭之際一。韓退之の曲江荷花詩に、擇レ舟昆明度二雲錦一、脚敲二兩鼓一呼二吳歟一。

書軒

雨昏石硯寒雲色。風動牙籤亂葉聲。庭下已生書帶草。使君疑是鄭康成。

【詩意】雨は昏く書軒を鎖して、石硯も寒雲の色である。風は動いて、書帙のこはせは、亂葉の聲をなして居る。書軒の庭の下には已に書帶草を生じた。昔、漢の鄭康成は、不其城南の山中に居つて敎授し、山下の草は蓯蓉の如く、長尺餘、人は康成の書帶草と號したさうである。此の書軒の主人であ

【字解】【一】書軒　名勝志に、書軒在二州宅一。【二】石硯　南史、王慈傳に、取二紫拳石硯及孝子圖一而已。【三】牙籤　書帙のこはぜ。鄴侯家多レ書、插レ架三萬軸、一一題二牙籤一。新若二手未レ觸。【四】書帶草　三齊記略に、鄭康成居二不其城南山中一、敎授、山下草如二蓯蓉一、長尺餘、人號二康成書帶草一。【五】使君　刺史をいふ、文與可を指す。【六】鄭康成　鄭玄、字は康成、高密の人。關に入り、馬融に事ふ。居ること三年、疑義を質し畢りて、辭し歸る。融曰く、鄭生今去る、吾道東すと。

る使君は、疑らくは、是れ鄭康成の再生でもあらうか。（文與可が書斎の詩は、清泉繞三庭除一、綠篠映三軒檻一、坐レ此何所レ爲、惟宜レ弄二鉛槧一。）

冰池　冰池

不レ嫌冰雪繞レ池看。　冰雪を嫌はず池を繞つて看る、
誰似詩人巧耐レ寒。　誰か似ん詩人の巧みに寒に耐ふるに。
記取羲之洗レ硯處。　記取す羲之の硯を洗ふ處、
碧琉璃下黑蛟蟠。　碧琉璃の下黑蛟蟠まるを。

【字解】【一】巧耐レ寒　杜子美の詩に、勝裏金花巧耐レ寒。【二】羲之　晉書、王羲之傳に、晉與レ人書云、須芝、臨レ池學レ書、池水盡黑、使三人效レ之若レ是、未三必後レ之也。【三】洗レ硯　承天師宗寺禪院は、晉咸康六年に王羲之が置いたもので、右軍の硯池がある。【四】碧琉璃　李渉の詩に、雨重星點碧琉璃。【五】黑蛟蟠　杜子美の詩に、滄龍

【詩意】冰雪をば嫌はないで、何時までも池邊を繞つて看て居る。詩人の巧く寒に耐へる此の態度に似たるものは、誰であらうか。思ひ出すのは、昔、晉の王羲之が承天歸宗寺禪院の硯を洗つた處である。碧琉璃の下に、黑蛟の蟠まるのを見るのである。池に臨んで書を學び、池水の盡く墨くなつたのを言つたのである。（文與可の冰池の詩は、日暮池已冰、翩翩下三鳧鶩一、不レ怕池中寒、便於三冰上一宿といふのである。）

竹塢　竹塢

晚節先生道轉孤。　晚節先生道轉た孤なり、
歲寒惟有三竹相娛一。　歲寒惟竹の相娛むあり。
麤才杜牧眞堪レ笑。　麤才杜牧眞に笑ふに堪へたり、
喚作軍中十萬夫。　喚んで軍中の十萬夫となす。

【字解】【一】竹塢　小さい土手。杜牧之の詩に、一隔掩三秋寮一小窓侵三竹陽一。李商隱の詩に、竹陽無レ廬水盤清。【二】晚節　晚年に同じ。文選、謝靈運の詩に、晚節值三衰賢一。杜子美の詩に、晚節漸於二詩律一細。【三】麤材　王注に、先生談錄云、唐之盛時、內重外輕、任三方面一者、月爲三麤材一。蓋燕公云、魏無三通材一、供三國麤使一。白樂天が賈舍人に答ふる詩に、一別三承明一三領レ郡、從教人道是麤材。北夢瑣言に、唐自三大中一以來、以レ兵爲レ戲、廊廟之上、恥レ言三銖略一、就有レ如三盧藩薛能一者、目爲三麤材一。【四】十萬夫　杜牧之の晚晴賦に、竹林外裏令十萬丈夫、甲刃槾槾密陳而環侍。

【詩意】晚節先生、晚節を全うして、道いよいよ高く、いよいよ孤である。歲寒うして、惟竹が青青として相娛めて居る。何ぞ一日も此君なかるべけんや。唐は宣宗の大中以來、兵を以て戲となし、武事に任ずるものを目して麤材となした。杜牧之が賦に竹林外裏の十萬丈夫、甲刃槾槾（樹などの高く茂り合ふ貌）密陳して環侍と、竹を軍事的に喚びなしたのは、其の麤材なる、眞に笑ふに堪へたことである。（文與可の竹塢詩は、文石間三蒼苔一、相引入三深塢一、莫レ憾青琅玕、無三時露如レ雨といふのである。）

荻蒲　荻蒲

雨折霜乾不(一)耐秋。雨に折れ霜に乾いて秋に耐へず、
白花黃葉使(二)人愁。白花黃葉人をして愁へしむ。
月明小(三)艇湖邊宿。月明かにして小艇湖邊に宿す、
便是江南鸚鵡(四)洲。便ち是れ江南の鸚鵡洲。

【字解】【一】荻蒲　荻は蘆の類、蒲はがま、水草の一。【二】不レ耐レ秋　一本に不レ奈レ秋に作る。【三】白花黃葉　韓退之の李花詩に、白花倒燭天夜明、黃雞啄粟官吏起。鳥林に、桑芳詩レ落。與三其黃葉一。【四】小艇　奥信詩に、小艇釣二蓬窓一。【五】鸚鵡洲　鄂州岸下の大江中に在る。九域志に、鄂州古迹有二鸚鵡洲一つ。奥信の詩に、春洲鸚鵡色、流水綾花香。李太白詩に、鸚鵡洲横長陽渡。

【詩意】荻蒲は雨に折れ霜に乾いて秋に耐へない。白花黃葉、將に落ちんとし、人をして愁へしめる。月明の夜、小艇に棹して、湖邊に宿する。便ち是れ江南の鸚鵡洲である。（後漢書に據ると、黃祖が江夏の太守であつた時、長子が犬を射て、賓客を會した。鸚鵡を此洲に獻じたものがあつたから、名けたといふことである。文與可の荻蒲の詩は、枯荻繞二霜風一、暮影寒索索、無レ限有二傲禽一、提レ之宿如レ客といふのである。）

蓼嶼(一)

秋歸南浦蟅(二)蛄鳴。秋歸つて南浦蟅蛄鳴き、
霜落橫湖沙水清。霜落ちて橫湖沙水清し。

【字解】【一】蓼嶼　文與可の蓼嶼の詩に、孤嶼紅蓼深、清波照二衰影一、時有二雙鷺鷥一、飛來作二佳景一。【二】

臥(一)雨幽(二)花無限思。雨に臥す幽花限りなき思ひ、
抱叢寒(三)蝶不勝情。叢を抱く寒蝶情に勝へず。

在二於耳一。蟅蛄は蟬の屬。【二】幽花　杜子美の詩に、幽花似レ有レ恨、寒蝶似レ無レ思。

【詩意】秋になつて、南浦に蟬が鳴いて居る。霜が落ちて、橫湖の沙水が清い。（第一句は時をいひ、第二句は、處をいふ。）幽花は、雨に臥して限りなき思ひをなして居るやうに見え、寒蝶も叢を抱いて情に堪へない樣子である。（第三第四の對句は、蓼嶼中の景物をいふ。露葉今は昔にあらず、霜叢時か依るべきと言つたやうな趣である。）

【字解】【一】臥雨　文選、江文通の別賦に、送二君南浦一傷如レ之何。家語に、孔子謂二宰予一曰、遠レ山十里、蟅蛄之聲猶在二於耳一。【二】幽花　杜子美の詩に、幽花似レ有レ恨、寒蝶似レ無レ思。【三】寒蝶　白樂天の詩に、林間不レ逢レ人、寒蝶飛翩翩。皮日休の詩に、秋花如レ有レ恨、寒蝶似レ無レ思。

望雲樓(一)

陰(二)晴朝暮幾回(三)新。陰晴朝暮幾回か新なり、
已向虛(四)空付此身。已に虛空に向つて此身を付す。
出本無心(五)歸亦好。出づるも本無心歸るも亦好し、
白雲還似望(六)雲人。白雲還雲を望む人に似たり。

虛空二如二蓬花不レ著レ水。【四】無心　陶淵明の歸去來辭に、雲無心而出レ岫。白樂天の詩に、浮雲晴歸レ山。【六】望雲　唐の狄仁傑

【字解】【一】望雲樓　名勝志に、洋州郡圃内有二望雲樓一、極高峻、唐德宗遊幸、題二字於梁上一、及レ還レ京、攜取以歸。【二】陰晴　徐積の詩に、但愁舟行値二早晩一、此時秋色半陰晴。【三】虛空　華嚴經に、處二世界一如二

が他郷に在つて、其の父母の所在地を望んだ故事。舊唐書、狄仁傑傳に、仁傑授二并州法曹參軍一、其親在二河陽別業一、仁傑登二太行山一、反顧見二白雲孤飛一、謂二左右一曰、吾親舍二其下一、瞻悵久レ之、徙移、乃得レ去。仁傑は、中宗の時、梁國公に封ぜられ、文惠と謚す。

【詩意】望雲樓上に立つて望むと、或は陰り或は晴れて朝暮の氣象は幾回か變つて行く。已に虛空に向つて此身を寄せたのであるから、雲の無心にして岫（山の洞穴）を出づるが如く、又、浮雲の暗くなつて山に歸るがやうである。出づるも無心、歸るも亦好い。白雲も亦、秋仁傑のやうに雲を望むがやうである。（仁傑は嘗て并州に赴き、太行山に登り、白雲の孤飛するを見て曰く、吾が親は其下に舍すと。紀昀は此詩を評して、純用二宋格一、然較勝二唐裝面空調一と。文與可の望雲樓の詩に、巴山雲之東、秦嶺樓之北、樓上卷レ簾時、滿樓雲一色とある。）

天漢臺

天漢臺　文與可の天漢臺の詩に、北岸亭館飛、最先登二此臺一、臺高望二幕峰一、萬里碧崔嵬。

(一)漾水　陝西、寧羌縣に在る。倚書注に、孔安國曰、泉始出レ水爲二漾水一、東南流爲二沔水一、至二漢中一、東行爲二漢水一。【三】舊見レ經　經は尚書を指す。尚書、禹貢に、嶓冢導レ漾、東流爲レ漢。記昀いふ、舊見經、字當と。【四】銀漢　宋、夏竦の賦に、銀漢之影橫レ秋、帝臺之樂映レ日。錢昭度集に、許渾謂二銀河一爲二銀漢一、一日二銀漢一。史記、天官書に、紫渠旦二天漢一。【五】閣道　三云　虞、天文志に、天一紫宮後十七星、絕レ漢抵二營室一曰二閣道一。又、營室爲二清廟一曰二離宮閣道一。漢中四星曰二天關一。

漾水東流舊經に見ゆ、
銀漢左界上通レ靈。
此臺試向二天文一覓。
閣道中間第幾星。

【字解】【一】天漢臺　文與可の天漢臺の詩に、北岸亭館飛、最先登二此臺一、臺高望二幕峰一、萬里碧崔嵬。【二】漾水　陝西、寧羌縣に在る。倚書注に、孔安國曰、泉始出レ水爲二漾水一、東南流爲二沔水一、至二漢中一、東行爲二漢水一。【三】舊見レ經　經は尚書を指す。尚書、禹貢に、嶓冢導レ漾、東流爲レ漢。記昀いふ、舊見經、字當と。【四】銀漢　宋、夏竦の賦に、銀漢之影橫レ秋、帝臺之樂映レ日。錢昭度集に、許渾謂二銀河一爲二銀漢一、一日二銀漢一。史記、天官書に、紫渠旦二天漢一。【五】閣道　三云　虞、天文志に、天一紫宮後十七星、絕レ漢抵二營室一曰二閣道一。又、營室爲二清廟一曰二離宮閣道一。漢中四星曰二天關一。

【詩意】天の川といふ名を帶びた天漢臺に登つて、遙に望むと、陝西の漾水は、東南に流れて沔水となり、漢中に至り、東行して、漢水となる。其事は、委しく尚書に書いてある。銀河の左界は、上、靈に通じて居る。今、此の天漢臺を、試みに天文に向つて覓めると、何の星の處になるであらうか。漢を絕つて營室に抵るを閣道といふが、其の閣道中間の第幾星に當るであらうか。

待月臺

待月臺　文與可の待月臺の詩に、城堙築二層臺一、木杪轉二深路一、常此候二明月一、上到二天心一去。

(一)待月臺　文與可の待月臺の詩に、城堙築二層臺一、木杪轉二深路一、常此候二明月一、上到二天心一去。【二】高人　高士といふに同じ。晉書王の詩に、高人儻有レ訪、興盡即須レ回。【三】挂レ簷　唐、李咸用の詩に、挂レ簷晩雨思二山閣一。【四】蛾眉　美人の眉。詩、衞風、碩人篇に、螓首蛾眉。鮑照が翫レ月詩に、月映二西北堤一、娟娟似二蛾眉一。白樂天が燕子樓の詩に、黃金不レ惜買二蛾眉一。【五】冰輪　月の異名。東坡の詩に、雲峰缺處涌二冰輪一。

月與二高人一本有レ期。
挂レ簷低レ戸映二蛾眉一。
只從二昨夜十分滿一。
漸覺冰輪出二海遲一。

古今體詩　和文與可洋川園池三十首・天漢臺・待月臺　　四三七

【詩意】文與可は高人といふべきである。月は此の高人と、何か期約でもあるらしい。なせといふに、月が來つて簷に挂つたり、又、戸に低れさがつたり、又、與可が房中の美人に映じたりなどして遊んで居るやうである。只、昨夜は十五夜で、十分の滿月であつたから、だんだん月が海上に出ることの遲きを覺えた。（この中に待月の意を含んで居る。紀昀いふ、寫二待字一好、惟嫌レ不レ似二寄題一耳と。）

（一）二樂榭

此間眞趣豈容レ談。（二）二樂幷君已是三。
仁智更煩訶二妄見一。（四）坐令魯叟作二瞿曇一。（五）

【詩意】此間の眞の面白味は、神會にあつて、口に出しては言へないものがある。知者は水を樂しみ、仁者は山を樂しむ。山水の二樂に、君を幷せて是れ三樂である。更に此の仁の力、智の力を煩はして理に背いた虛妄の思想を訶止する。これは要するに孔夫子をして釋氏の事を作さしめるのである。

【字解】【一】二樂榭　名靜志に、二樂榭、在二洋州郡圖北隅一。樂城集に和二二樂榭一詩を載せていふ、動靜惟所レ遇、仁智亦偶然、誰見二物外一、猶有天地全。【三】眞趣　江淹の詩に、悠悠蘊二眞趣一。王禹偁の詩に、忘レ機得二眞趣一。【三】二樂　論語、雍也篇に、知者樂レ水、仁者樂レ山、知者動、仁者靜、知者樂、仁者壽。【四】訶二妄見一　訶は遏じて呵に作る。苦むる意。妄見は虛妄の思想といふ意で、迷へる心の前に現ずる假相をいふ。東坡の自注にいふ、來詩云、二見因レ妄生と。【五】魯叟　孔子をいふ。叟は長老の稱。東坡の詩に、空餘魯叟乘レ桴意。【六】瞿曇　佛をいふ。釋迦譜に、釋飯達王、捨レ國修行、受二瞿曇姓一、故曰二瞿曇氏一。涅槃經に、迦毗羅城有二釋種子一、字、悉達多、姓瞿曇氏、道誠。

（二）濯泉亭

聞道池亭勝二兩川一。應須爛醉答二雲烟一。
勸君多揀二長腰米一。消破亭中萬斛泉。

【詩意】聞けば、濯泉亭の勝景は、劍南の兩川に勝つて居ると、應に酒を此亭に呼んで酣醉して雲烟に答ふべきである。就いては、君に勸めることがある。多く長腰の米を揀ぶやうに。それは長腰の糈は酒を釀すに、極めて佳いからである。既に長腰の米を得て、亭中の萬斛の泉を消破したいものである。

【字解】【一】濯泉　名勝志に、儀谷在二洋縣北三十里一。儀水出焉、後魏之儀城郡以レ此名、儀水源出二石鉦山一、在二縣北六十里一。樂城集に、和二濯泉亭二詩一云、泉來草木茂、泉去池塘滿、委曲到二庭除一、清冷備二晨盥一。【二】兩川　東川・西川をいふ。舊唐書、嚴武傳に、上皇語以二劍南兩川一合爲二一道一、拜二武成都尹一、充二劍南節度使一。【三】爛醉　醉酔といふに同じ。杜子美の詩に、爛醉是生涯。黃庭堅の文に、爛醉不レ醒謝二而就レ臥、鼻鼾如レ雷。【四】雲烟　劉孝孫の詩に、飛軒倚二松柏一、抗殿接二雲烟一。【五】長腰米　王注にいふ、長腰米、漢上米之粗好者、諺云、長腰粳米、縮項鯿魚、皆言二其好一也と。長腰粳、酒を釀して極めて佳。李賀の憶二昌谷山居一詩に、長鎗江米熟、小樹棗花香。

る。（王文誥いふ、句足二爛醉之義一と。）

吏隱亭

縱橫憂患滿二人間一。頗怪先生日日閒。昨夜清風眠二北牖一。朝來爽氣在二西山一。

【字解】【一】吏隱　汝南先賢傳、鄭欽の事に出づ。宋之問の詩に、宦遊非二吏隱一。杜子美の詩に、浣花溪裏花含レ笑、青信吾廬二吏隱者一。【二】縱橫　縱、虚論の詩に、川原唯寂寞、岐路各縱橫。【三】日日閒　閒は忙の反。閒暇閒居などの閒。後漢、王符傳に、其民閒暇、而力有レ餘。孝經に仲尼閒居。【四】北牖　北のまど。王粲が涼風至賦に、北牖開兮、西園夜宴。【五】爽氣在二西山一　韓偓の詩に、西山爽氣生二襟袖一。

【詩意】縱横と色色な憂患は、絶えず人間に滿ちて居るのに、先生の日日に閒暇無事であるのは不思議である。昨夜、清風が至つて、北の牖で閒かに眠つた。今朝起きて見ると、西山の爽かな氣持が襟や袖に生じた。（王文誥いふ、同一太守也、與可、無二時不レ樂、而公以爲レ憂、蓋、其趣向不レ同故也と。文與可の吏隱亭詩は、竹籬如二雞栖一、茅屋類二蝸殼一、靜几默如レ禪、往來人不レ覺といふのである。）

霜筠亭

解レ籜新篁不二自持一。婵娟已有二歲寒姿一。要レ看二凜凜霜前意一。須待二秋風粉落時一。

【字解】【一】霜筠亭　文與可の霜筠亭の詩に、危亭入レ水深、正坐修篁裏、坐久寒侵レ人、暫來須二素起一。【二】解レ籜　籜明道の詩に、曉篁初解レ籜。籜は竹皮。箏の譜に、箏一名、初篁。【三】不二自持一　文選、任彦昇が贈二郭桐廬一詩に、悲歡不二自持一。【四】婵娟　好き貌。楚辭に、修竹之婵娟。文選、嘯賦に、蔭二修竹之婵娟一。白樂天が悟眞寺の詩に、亂竹低二婵娟一。孟東野の婵娟篇に、曉煙つ【五】歲寒姿　歲寒委　虞世南の詩に、欲レ識二凌寒性一、惟有二歲寒知一。【六】凜凜　凜清の貌。唐の方干が詩に、墓見凌レ霜凜、粉落。

【詩意】新しい篁の外皮が解れたばかりの時は、見るからに弱くて、自ら維持も出來ないやうである。併し已に歲寒の姿がある。歲寒うして然る後に、松柏の後凋を知る。竹も同じで、未だ杪霜に到らなければ、猶ほ飛卉と雜然として羣を同じうして居る。秋風粉落の後に至つて、始めて其の特操を見るのである。

無言亭

殷勤稽首維摩詰。

【字解】【一】無言亭　蘇城集に、和二無言亭一詩云、處レ世欲レ無レ言、事

敢問如何是法門。(一)敢て問ふ如何是れ法門。
彈指未終千偈了。(二)彈指未だ終らず千偈了す、
向人還道本無言。(三)人に向つて還道ふ本言無しと。

首。荀子、大略篇に、平衡曰レ拜、下レ衡曰レ稽首、至レ地曰レ稽顙。頭と腰と衡の平かなるが如きを平衡といひ、頭を屈して地に至るを稽首といふ。【二】維摩詰　梵名と譯す。毗舍離國、毘耶離城の長者にして、釋尊と時代を同じうす。【三】法門　佛門に同じ。維摩經に、梁武帝に心于釋氏、前文載二意于法門一。【四】彈指　維摩經に、慶二百千劫一、猶如二彈指一。印度に於ける時の最大單位。刹那は其の最小單位。壯士の一彈指の間には、六十五刹那があるといふ。東坡の詩に、三過二門前一老病死、一彈指頃去來今。【五】偈　具には偈陀、釋氏の詩詞、佛の功德を讚美する頌詩の類、漢譯されたるのは、多く四句を用ふ。【六】無言　蘇子由の詩、去住只今誰定是、相逢一笑各無レ言。

【詩意】毘耶離城の長者維摩詰は、鄭重に稽首をなして、さて言ふやう、法門とは是れ如何なるものぞ。法門とは佛道に入る門戸で、彈指の間に佛道が行はれて居る。卽ち一彈指の間に、六十五刹那がある。刹那は時の最小單位である。又、其の一彈指の間に、過去・未來・現在があり、そして千偈陀の佛の功德を讚美する頌詩が了るのである。そこで、人に向つて、また道ふのに、佛法の極意は、本來無言で、文字を立てないと。(紀昀いふ、氣機一片と。又いふ、此宋格而不レ雜二宋格一者、無言亭、先是宋題、則不レ得レ不レ作二宋詩一矣と。)

至臧未レ可、惟有二此亭一空、燕坐聊從レ我。【三】殷勤　慇懃と同じ。鄭重なる意。維摩經、問疾品に、療治有レ損、不レ至レ增乎、世尊慇懃致レ問無量。【三】稽首　書經に、王拜首稽

露香亭

亭下佳人錦繡衣。(一)亭下の佳人錦繡の衣、
滿身瓔珞綴明璣。(二)滿身の瓔珞明璣を綴る。
晚香消歇無尋處。(三)晚香消歇して尋ぬるに處なし、
花已飄零露已晞。(四)花は已に飄零し露は已に晞く。

三韓傳に、嬰珞以飾レ衣爲レ飾。西域記に、西域國人、首冠二花鬘一、身衣二瓔珞一。【二】明璣　左思の吳都賦に、蟠丹明璣。【三】晚香　晚香玉は花の名。一名な月下香といふ。暮に開き、朝に斂まりて、香氣が頗る烈しい。夜に入つて尤も馥郁、故に此稱がある。【四】消歇　消えてやむ。文選、鮑明遠が城東橋詩に、容華坐消歇。庾信が詩に、壯情已消歇、雄圖不二復申一。【五】飄零　文選、謝惠連の雪賦に、從レ風飄零。新論に、秋葉誠危、因二衆風一而飄零。【六】已晞　詩に白露未レ晞。同じく小雅、湛露に、湛湛露斯、匪レ陽不レ晞。湛湛は、露茂盛の貌。潘安仁、藉田賦にも、若二湛露之晞一二朝陽一。

【詩意】露香亭下の美人は、身に錦繡を纏うて居る。(盧山記に、由二天池一直下レ山十五里、洞名二錦繡谷一、谷中奇花異卉、不レ可レ殫述、三四月間、紅紫匝レ地、如レ被二錦繡一とあるが、此詩は、此を用ひたのであらう。)滿身の瓔珞は、明璣を綴つて、まことに、美事である。晚香の花も消えやんで、馥郁たる香も尋ねるに所がない。花は已に飄零し、露も已に朝陽に晞いたのである。

【字解】【一】露香亭　文與可が露香亭の詩に、宿露濃晞花、阿孃清香發、隨レ風入二懷袖一、累日不二消歇一。【二】錦繡　戰國策に、不レ能二由一其金玉錦繡一取一相之意一者乎。【三】瓔珞　玉をつなげる飾。後漢書、

涵虛亭

古今體詩　和文與可洋川園池三十首・露香亭・涵虛亭

水軒花樹兩爭(一)妍。　水軒花樹兩ながら妍を爭ふ、
秋月春風各自偏。　秋月春風各〻自ら偏す。
惟有(二)此亭(二)無(二)一物(一)、　惟此亭あつて一物なし、
坐觀萬景得(二)天全(一)。　坐して觀る萬景の天全を得るを。

（一）爭妍　闘ㇾ妍と同じ。陸游の詩に、野草閑花自闘ㇾ妍。（二）萬景　實、陸雲の南征賦に、端證形於萬景。

【詩意】水軒と花樹と、何れも美を爭つて居る。從つて秋月と春風とは、各〻自ら偏つて居る。軒は水の旁に在り、樹は花の上に在る。見る所のものは、水の景であり、又、花の景である。故に秋月と春風とに在つて、各〻偏つて居る譯である。若し虚を涵せば、則ち一物を著けないのであるから、天全の景でなくて何であらうか。虚を涵すといふ名を帶びた此の涵虚亭、見る所ただ一の亭があるのみで、他に一物もない。坐して萬景の天全を得るを觀るのである。（王文誥いふ、空卽是色、莫ㇾ不ㇾ有ㇾ是理ㇾ也、如必謂ニ之譚一、則大可ㇾ笑矣と。）

【字解】（一）涵虚亭　蘇城集に、和ニ涵虚亭ニ詩云、虚亭面ニ疏簾一、窈窕飛景翠、夏與ニ坐中人一、行尋望ニ來處一。（二）水軒　劉克莊の詩に、先借ニ青風ニ掃ニ水軒一、更呼ニ涼月ニ倒ニ金罍一。（三）花樹　許渾の詩に、楊堤惜別春潮晩、花樹留歡夜漏分。樹は屋ありて（一）

谿光亭　（一）谿光亭

決去湖波尚有(一)情。　決去する湖波尚情あり、
却隨(二)初日(一)動簷楹(二)。　却つて初日に隨つて簷楹に動く。

【詩意】谿光亭の眺めをいふと、先づ目に映るは横湖で、谿の水を決して横湖として居る。そして其の波は日光に隨つて以て動き、檐と楹との間に旋つて居る。戀戀として去り兼ねる趣があるから、此を情ありと言つたのであらう。此の谿光は、古より畫にした人がない。畫は古來無聲の詩として居る。それで有聲の畫ともいふべき新詩に賴つて、之を寫し成したのである。（梅聖俞の言に、詩家必能有聲の畫の妙處を言つたのである。さて紀昀は此詩を評して、本色語、却極ニ清楚一と言つて居る。）

【字解】【一】谿光亭　文與可が谿光亭の詩に、横湖決ニ綠波一、潮頭揚ニ悪潤一、日景上ニ高林一、清光動ニ亩牖一。【二】簷楹　簷は檐と同じ。ノキ。楹は圓く大いなる柱。【三】憑仗　頼谷の慶花詩に、故郷歸不ㇾ得、憑仗寄ニ（三）

谿光自(一)古無(二)人畫(一)。　谿光古より人の畫くなし、
憑(二)仗新詩(一)與寫成(一)。　憑仗新詩に與に寫成す。

（一）憑仗　賴ㇾ仗と同じ。（二）新詩　古詩話に、詩人以ㇾ畫爲ニ無聲詩一、詩爲ニ有聲畫一。

過溪亭　（一）過溪亭

身輕步穩去忘(一)歸(一)。　身は輕く步穩かに去つて歸るを忘る、
四柱亭前野(二)杓微(一)。　四柱亭前野杓微なり。
忽悟(一)過(二)溪還(一)一笑(一)。　忽ち溪を過ぐるを悟りて還一笑、
水禽驚落翠毛衣(一)。　水禽驚き落す翠毛の衣。

【字解】【一】過溪亭　文與可の過谿亭詩に、小杓過ニ清谿一、有ㇾ亭纔四柱、地僻少ニ人行一、關關下ニ鳴鳖一。【二】野杓　爾雅に、畸杓、獨木橋也。王注に、杓、横ㇾ木、渡ㇾ水也、名略約。陸龜蒙の詩に、經ニ畸杓一時延ㇾ佇、

佩二茶香一（魚籃）後帯頻掬。又、東坡の詩にも、略■■槎三秋水一。【三】過レ路一笑云云　廬山記に、太平興國寺、流泉匝三寺下一、入二虎谿一。昔遠師送レ客過レ此、虎則鼓鳴、時、陶元亮、居二栗里山南一、陸修靖、亦有道之士、遠師嘗送二此二人一、與語レ道合、不レ覺過レ之、因相與大笑、今世傳三送客圖一、蓋起二於此一。

【詩意】一身輕く、行歩は穩かに、去つて家に歸るを忘れる。地は僻なるが故に、人の行くこと少く、獨木を横へて、清谿を過ぐ。亭あれども、纔に四柱、故に四柱亭と名ける。昔、遠公は陶元亮・陸修靖と道を談じて、覺えず虎溪を過ぎ、因つて相與に大に笑つた。水禽は定めし笑聲に驚いて、翠毛の衣を落したことであらう。（紀昀いふ、末句渲染有レ神と。王文誥いふ、今詳翫二此語一、實從二虎號一奪胎、可レ謂二變化無一レ迹矣と。）

披錦亭

烟紅露綠曉風香。　烟は紅に露は綠にして曉風香しく、
燕舞鶯啼春日長。　燕は舞ひ鶯は啼いて春日長し。
誰道使君貧且老。　誰か道ふ使君貧しうして且つ老ゆと、
繡屏錦帳咽笙簧。　繡屏錦帳笙簧咽ぶ。

【字解】【一】披錦亭　文興可の披錦亭詩に、紫紅層若レ雪、密葉蔭如レ氈、青帝下二春、滿園開二步幃一。【二】曉風　唐、明皇の詩に、馬色分二朝影一、雞聲逐二曉風一。杜常の詩に、曉風殘月入二簾清一。【三】燕舞鶯啼　孟東野の傷レ春詩に、鶯啼燕語芝城裏。【四】春日長　白樂天の牡丹芳詩に、戲蝶雙舞看レ人久、殘鶯一聲春日長。【五】繡屏　唐、薛逢詩に、人倚二繡屏一閑賞レ夜。温庭筠詩に、繡屏銀鴨香猶煖。【六】錦帳　梁、簡文帝の詩に、斜燈入二錦帳一。徐陵の詩に、流蘇錦帳挂二香囊一。【七】笙簧　笙のふえの舌。庾信の春賦に、更奏二笙簧一、遷移二律柱一。

【詩意】披錦亭の眺をいふと、滿園歩檐を開いたやうで、烟は紅に、露は綠で、曉風も香しい。又、青空には燕が舞ひ、樹には鶯が啼いて、轉た春日の長きを覺えしめる。使君（刺史）は貧しくして且つ老ゆと誰がいふのか。貧しいどころではない、繡屏に倚つて居り、錦帳を繞らして居り、そして笙の笛を弄して居る。（咽二笙簧一、笙の笛の舌に咽ぶは、笙の笛を弄する意である。）

禊亭

曲池流水細鱗鱗。　曲池流水細鱗鱗、
高會傳觴似二洛濱一。　高會觴を傳へて洛濱に似たり。
紅粉翠蛾應レ不レ要。　紅粉翠蛾應に要せざるべし、
畫船來往勝二於人一。　畫船來往人に勝る。

【字解】【一】禊亭　司馬彪、續漢郡國志に、三月上巳、官民並禊、飲二於東流水上一。曹植集に、和二禊亭一詩云、觴流無二定處一、客醉醒還酌、毋レ令二仲御歎一空使二人覺一。【二】曲池流水　曲水流觴に同じ。晉三月三日の酒宴をいふ。曲折せる水流に盃を泛べて飲む。【三】鱗鱗　水紋の鱗の狀をなせる形容。何遜の下二方山一詩に、鱗鱗遊去レ水、湯湯（水の流れる貌）急還レ舟。【四】高會　盛會に同じ。史記、高祖紀に、置酒高會。【五】似二洛濱一　竹林七賢論に、王濟嘗解二禊洛水一。晉書、夏統傳に、統聞レ洛、三月上巳、洛中王公已下、並至二浮橋一、士女群嬉、車服燭レ路。晉、東晉傳に、武帝問二三日曲水之義一、晉遂曰、昔、周公城二洛邑一、因二流水一以泛レ酒、故逸詩云、羽觴隨レ波。又、秦昭王以二三日一置二酒河曲一、見二金人奉一水心之劒一、曰令二君制一有二西夏一、乃霸二諸侯一、因レ此立爲二曲水一。二漢相繼、皆爲二盛集一。文選、顔延年應レ詔燕二曲水一詩に、李善曰、水經注云、舊樂遊苑、宋元嘉十一年、以二其地一爲二曲水一、文帝引レ流轉酌賦レ詩。【六】紅粉翠蛾　鄭豐叟の詩に、翠蛾紅粉擁娟女、殺二盡世人一人不レ知。李太白の

舊三巻司馬一詩に、百尺清潭寫二翠娥一。【七】畫船・畫舫・畫舸に同じ。白樂天の詩に、泰娘八九曲、畫舫兩三雙。東坡の詩に、全家候二畫舫一、極目風二紅柱一。五代史、前蜀世家に、龍舟畫舸、照二耀江水一。

【詩意】晉の永和九年三月三日、王羲之は、文人を會稽山陰の蘭亭にあつめ、曲水流觴の遊をなした。其の蘭亭集の序に、此地有二崇山峻嶺、茂林脩竹一、又、有二清流激湍一、映二帶左右一、引以爲二流觴曲水一とある。今、此の禊亭の波に隨つて觴を傳へる盛會は、洛水の濱の宴游によく似て居る。李太白の詩に百尺清潭寫二翠娥一とあるが、禊亭曲水の宴には、必ずしも紅粉翠蛾の美人を要しない。畫舫・畫船の來往して、人の目を樂しましめることは、粉黛の美人に勝つて居る。

菌萓亭　菌萓亭

日日移レ牀趁二下風一。【一】菌萓亭　蓮の花。

清香不レ斷思何窮。【二】牀　輿信の詩に、隔レ花遙勸レ酒、就レ水更移レ牀。【三】下風　下方の義。左傳、僖公十五年に、擧臣敢在二下風一。【四】清香　韓偓の詩に、卷荷留雨二微風一過、滴下清香露一杯。【五】若爲　いかでと訓す。如何なり。香信若爲題、若爲看去鳳二鄉愁一、など用例多し。【六】化作二龜千歲一　柳子厚の詩に、若爲二化作一身千億一、編上二峰頭一望二故鄉一。史記、龜策傳に、有二神龜一、在二江南嘉林中一、常巢二於芳蓮之上一。又いふ、余至二江南一、長老云、龜千歲乃遊二蓮葉之上一。抱朴

若爲化作龜千歲。

巢向二田田亂葉中一。【七】巢うて　田田たる　亂葉の中に向はん。

【字解】【一】菌萓亭　蓮の花。實雅に、荷、芙蕖、其華、菡萏。文興可の菌萓軒詩に、朝陽耀二秋滿一、菌萓隔二深竹一、誰開翠錦俥、無レ限點二銀塢一。【二】移レ牀　輿信の詩に、隔レ花遙勸レ酒、就レ水更移レ牀。【三】下風　下方の義。左傳、僖公十五年に、擧臣敢在二下風一。【四】清香　韓偓の詩に、卷荷留雨二微風一過、滴下清香露一杯。【五】若爲　いかでと訓す。如何なり。香信若爲題、若爲看去鳳二鄉愁一、など用例多し。【六】化作二龜千歲一　柳子厚の詩に、若爲二化作一身千億一、編上二峰頭一望二故鄉一。史記、龜策傳に、有二神龜一、在二江南嘉林中一、常巢二於芳蓮之上一。又いふ、余至二江南一、長老云、龜千歲乃遊二蓮葉之上一。抱朴子に、千歲龜、浮二於蓮葉之上一、或在二蓮蕖之下一。【七】田田　荷葉の水に浮べる貌。樂府、江南曲に、江南可レ採レ蓮、蓮葉何田田。李商隱の詩に、荷葉正田田。

【詩意】蓮の花の亭、花を愛し、花を隔てて相語る。水に臨み水に就いて牀を移す。日日牀を移しては、下方を趁うて居る。窓荷は忽ち微風に觸れて、清香を瀉ぎ出す。清香は斷えないで、思は何ぞ窮りあらうぞ。いかでか、化して龜千歲と作り、巢うて田田たる蓮の亂葉の中に向はん。（田田は、荷葉の水に浮べるを形容した言葉である。樂府、江南曲に、江南可レ採レ蓮、蓮葉何田田とある。）

茶蘼洞　茶蘼洞

長憶故山寒食夜。【一】長も憶ふ故山寒食の夜、

野茶蘼發暗香來。【二】野茶蘼の發いて暗香の來りしを。

分レ無二素手簪一羅髻。【三】素手の羅髻に簪するなきを分とし、

且折二霜蕤一浸二玉醅一。【四】且つ霜蕤を折りて玉醅に浸す。

【字解】【一】茶蘼洞　叢生の灌木。蘇城集に、和二茶蘼洞一詩に、綺綺翠蔓長、藹藹繁香足、綺席墮二殘英一芳樽濱二餘馥一。【二】長憶故山　一本、中雨中晴に作る。【三】寒食　冬至の後、一百五日にして、疾風甚雨あり、之を寒食といふ。清明節の前二日。【四】霜蕤　說文に、蕤、草木華垂の貌。【五】玉醅　醅は酒の未だ漉さないもの。【詩意】平生夢寐の間に往來するものは、父母の地であつて、長も故山の寒食の夜、野茶蘼が開いて、

何處からとなく香が來つたことを憶ひ出すのである。白く美しい手で頭髪に簪を插すことも、今の我身にはないから、暫く白い蓬草でも手折りてよい酒に浸すことでもしよう。

【餘錄】王文誥いふ、曉嵐（紀昀をいふ）論ず和二洋州一詩、毎謂、寄題詩、不レ便全著二自己一、此固哉高叟之說也、（孟子、告子篇に、固哉、高叟之爲レ詩也とある。固は固陋、執滯して通せざるをいふ。爲レ詩は猶ほ說レ詩といふが如し。）一題作二三十首一、非二一題作二二三首一者可レ比、何死法之足レ論乎、且與可、只有二老妻一、竝無二姬侍一、亦蜀人也、此詩、本意就二與可一論、亦恐道レ治平末、同二與可一在レ蜀之事一、不レ可二死看一也、彼以爲理法細密、我以爲眼界窄塞、識者辨レ之と。

（一）篔簹谷　篔簹谷

（二）漢川修竹賤如レ蓬。　漢川の修竹賤うして蓬の如し、

（三）斤斧何曾赦二簒龍一。　斤斧何ぞ曾て簒龍を赦さん。

（六）料得清貧饞太守。　料り得たり清貧の饞太守、

（七）渭川千畝在二胸中一。　渭川の千畝胸中に在ることを。

【字解】【一】篔簹谷　陝西、洋縣の西北に在る。谷中に竹多し。名勝志に、篔簹谷在二洋縣城西北五里一。篔簹は大竹の名、射筒となすによるし。柳宗元、柳州山水記に、篔簹湘潮間、皆有レ之。異物志に、篔簹生二水邊一長數尺、圍一尺五六寸、一節相去六七寸、廬陵界有レ之、始興（江名）以南尤多。【二】漢川　宋の縣名。故城は今の湖北漢川縣北に在る。【三】修竹　長く延びた竹。北史、柳弘傳に、修竹夾レ池。【四】斤斧　なの、まさかり。大なるを斧といひ、小なるを斤といふ。斧斤といふに同じ。淮南子に、草木未レ落、斤斧不レ得レ入二山林一。孟子、梁惠王篇に、斧斤以レ時入二山林一。【五】簒龍　簒龍兒は筍子。朱喬年の詩に、一管驚起簒龍兒。盧仝寄レ男詩に、竹林晉最惜、新筍好看守、萬錢抱二龍兒一、攜送盜二林藪一、晉眼慎不レ見、心腸痛如レ搗、雖レ能正稱レ寃。墓穀入二汝口一、丁寧囑二付汝一、汝活二簒龍一否。【六】清貧饞太守　傳燈錄に、寧可二清貧自樂一、不レ作二濁富多レ愛。饞は食物を貪る意。【七】渭川千畝　史記、貨殖傳に、渭川千畝竹、此其人與二千戶侯一等。

【詩意】漢川縣には竹が多い。長く延びた竹も價が賤くて蓬のやうである。草木未だ落ちざれば、斤斧、山林に入るを得ずといふが、斤斧、何ぞ曾て簒龍兒を赦さうぞ、片端から掘つて食用に供する。文與可には、竹の多い地に太守となつて居らるるが、料り得たり、清貧にして而も平生食物を貪る太守の胸中には、渭川千畝の竹があることを。（東坡嘗て文洋州の爲に、篔簹偃竹記を作つていふ、余詩、料得清貧饞太守、渭川千畝在二胸中一、與可、是日與レ妻游二谷中一、燒レ筍晩食、發レ函得二此詩一、失笑、噴飯滿レ案と。さて、文與可の篔簹谷の詩は、千與翠羽蓋、萬錡絲沈レ槍、定有葛陂種、不レ知何處藏。又、欒城集、和二篔簹谷一詩にいふ、誰言使君貧、已用レ谷量レ竹、盈レ谷萬萬竿、何曾一竿曲と。）

寒蘆港　寒蘆港

（一）溶溶晴港漾二春暉一。　溶溶たる晴港春暉を漾はし、

（二）蘆筍生時柳絮飛。　蘆筍生ずる時柳絮飛ぶ。

還有二江南風物一否。　還江南の風物ありや否や、

桃花流水鱖魚肥。　桃花流水鱖魚肥えたり。

【字解】【一】寒蘆港　蘆は多の初に枯れて、花さく。之を貫して蓑蘆港と名く。港は水派、溝の類。文與可が寒蘆港の詩に、落月照二氷簟一、曉氣何太爽、兩岸雪蘆香、鳧鷗出二深港一。【二】溶溶　水の盛に流れる貌。

調向の九款に、揚三流波之潰潰一兮、體滂滂而東回。杜牧之が阿房宮の賦に、二川滾滾、流入三宮牆一。【三】春暉　李白の詩に、暉背堆豪如三夢寐一、相逢且飲レ醉二春暉一。【四】蘆筍　蘆牙に同じ。あしの根に生ずるめばえ。猗嗟の詩に、南塘水深蘆筍齊。【五】柳絮飛　柳の實の熟して飛散する。晉書、王凝之妻謝道韞傳に、謝安嘗内集、俄而雪驟下、安曰、何所レ似也、安兄子朗曰、撒三鹽空中一、差可レ擬、道韞曰、未レ若三柳絮因レ風起一。【六】桃花流水　桃の花の開く頃、河氷融解して、水勢急漲する、之を桃花水といふ。永衡記に、黄河二月三月水、名三桃花水一。續仙傳に、張志和が流釣詞に、西塞山邊白鷺飛、桃花流水鱖魚肥。【七】鱖魚　玉篇に、刀魚也。刀魚は、身狹く薄く、頭は長い。恰も刀の形をなせるよりいふ。

【詩意】溶溶として流れる晴港の水は、春の光を漾はして居る。蘆の芽生がする時分に、柳の綿のやうな雪が亂れ飛ぶ。以上二句の景の外に、更に又、江南の風物ありや否や。（斯やうに問ひかけて、從つて江南の風物を擧げる）曰く、桃花の開く頃の暖かい水や鱖魚は、皆、江南の賞すべきものである。（山海經に據るに、鱖は狹薄にして長頭、大なるものは長尺餘、一名は刀魚ともいふ。三月八月を以て出づ。故に順時といふ云云とある。）桃花水の時分は、鱖魚はまさに肥えて居る。

野人廬

野人の廬

少年辛苦事二犁鋤一。
剛厭青山遶二故居一。
老覺二華堂無一意味一。
却須下時到二野人廬一上。

少年辛苦犁鋤を事とし、
剛に厭ふ青山の故居を遶るを。
老いて覺る華堂の意味なきを、
却つて須らく時に野人の廬に到るべし。

【字解】【一】野人廬　文與可、野人廬詩に、蕭條野人廬、蓬巷絶二經車一、每二一過一衝門一歸心爲レ之起。【二】辛苦　左傳、昭公三十年に、子西謂曰、吳光新得レ國、而親二其民一、親レ民如レ子、辛苦同レ之、勞レ用レ之也と。【三】犁鋤　犁は牛馬に牽かせて耕す農具。鋤は草を去る耕具。杜子美の詩に、歸來觀鋭背二鋤犁一。韓退之の贈二唐衢一詩に、手把二鋤犁一日二晒二空谷一。【四】剛　マサニと讀す、詩に用ふる俗語、適然の意。【五】華堂　李太白の詩に、好鳥集二嘉木一、高才列二華堂一。杜牧之の詩に、華堂今日綺筵開、謾喚二分司御史一來。【六】野人廬　柳子厚の章使君の詩に、稍窮憐客路、遠莊野人居。

【詩意】少年の時は、辛苦力を勞して、ただ耕作を事としたので、まさに青山の故居を遶るのを厭つたものである。老い來つては華堂の全く意味のないことが解かつた。却つて須らく時に野人の廬に到るべきである。（王注に、方在二田畝一見二青山一、爲レ可レ厭、爲レ官則思二野樂一と。此詩は此意を敷衍したものである。紀昀いふ、漫語却眞と。）

此君庵

此君庵

寄レ語庵前抱節君、
與レ君到處合二相親一。
寫レ眞雖レ是文夫子、
我亦眞堂作レ記人。

語を寄す庵前の抱節君、
君と到る處合に相親しむべし。
眞を寫すは是れ文夫子と雖も、
我も亦眞堂記を作る人。

【字解】【一】此君庵　文與可の此君庵の詩にいふ、叢筠裏二閒棚一（棚は大木）篩影碧如レ水、誰深愛二君心一、過レ橋先到レ此。此君は、竹の異名。晉書、王徽之傳に、嘗寄二居空宅中一、便令レ種レ竹、或問二其故一、但嘯詠指レ竹曰、何可二一日無一此君一耶。【二】抱節君　竹の異名。張正見が階前嫩竹の詩に、欲レ知抱節成レ龍處。【三】寫レ眞　杜子美の丹青引

に、必ず佳士に赤寫ㇾ眞。

【詩意】王徽之は竹を指して、何ぞ一日も此君なかるべけんやと言つた。此君庵の前に在る竹君に言葉を寄せる、君とは到る處で、まさに相親しむべし。文夫子（與可）は、能く竹を畫いて眞を寫すが我も亦、眞堂記を作る人である。（王注にいふ、名ㇾ竹爲ニ抱節君ㇾ、先生之新語也、與可畫ㇾ竹、名ㇾ之曰ニ墨君ㇾ、有ㇾ堂焉、先生作ニ墨君堂記ㇾ。紀昀は此詩を評して波峭多ㇾ姿と言つた。）

金橙徑

金橙縱復里人知。　金橙縱ひ復里人知るも、
不ㇾ見ニ鱸魚ㇾ價自低。　鱸魚を見ざれば價自から低し。
須是松江烟雨裏。　須らく是れ松江烟雨の裏に、
小船燒ㇾ薤搗香虀。　小船薤を燒いて香虀を搗くべし。

【字解】【一】金橙徑　舊本に、香橙徑に作る、王文誥いふ、公詩亦作ニ金橙ㇾ、則題作ニ香橙徑ㇾ、似ㇾ誤、今更正。文與可が金橙徑の詩に、金橙實佳果、不ㇾ爲ニ土人ニ重い上苑間未ㇾ多、誰能爲移種。藥城集、和ニ金橙徑ㇾ詩に、葉如ニ石衲ニ墜、實比ニ霜柑ニ大、寧ㇾ徑得ニ新意ㇾ、令ニ公憶ニ鱸魚鱠ㇾ。郟谷詩に、秋風不ニ敢憶ㇾ鱸。【三】松江　吳松江（今の江蘇、華亭縣）には鱸魚を產す。赤壁賦に、巨口細鱗、狀如ニ松江之鱸ㇾ。【四】烟雨裏　杜牧之の江南春詩に、南朝四百八十寺、多少樓臺煙雨中。【五】薤　おほにら。葱に似た菜菜。【六】虀　あへもの。種種の味を合せ調へた料理。

【詩意】蘇子由の詩に、漂泊江南春欲ㇾ盡、金橙彷彿慰ニ人心ㇾ、とある。金橙は江南の珍味である。金橙はたとひ、里人が之を賞美しても、鱸魚を見なければ、價は自から低い。鱸魚の鱠、金橙の虀、相待ちて美味をなすのである。須らく是れ鱸魚の產地である吳松江の烟雨の中、小船に坐し、薤を燒いて香虀を搗くべきである。（王注にいふ、鱸魚所ニ以爲ㇾ鱠、金橙所ニ以爲ㇾ虀、松江之鱸、江南所ㇾ稱也、此爲ニ以下者ㇾ作ㇾ之、以ニ香菜花葉ニ相間、和以ニ細縷金橙ニ食ㇾ之、所謂金虀玉鱠東南之佳味也と。）

南園

不ㇾ種ニ夭桃與ニ綠楊ㇾ。　夭桃と綠楊とを種ゑずんば、
使君應ㇾ欲ㇾ候ニ農桑ㇾ。　使君應に農桑を候することを欲すべし。
春疇雨過羅紈膩。　春疇雨過ぎて羅紈膩かに、
麥壟風來餅餌香。　麥壟風來つて餅餌香ばし。

【字解】【一】南園　文與可が南園の詩に、眞桑乘ニ驄日ㇾ、綠亂如ニ碧油ㇾ、紫椹熟未ㇾ熟、但聞黃栗留。【二】夭桃　若くて美しい桃の木。詩、周南の桃夭に、桃之夭夭、灼灼其華、之子于歸、宜ニ其室家ㇾ。【三】綠楊　翠楊といふに同じ。王融の詩に、洪上綠楊稱。【四】春疇　一本に桑畦に作る。【五】羅紈　羅紈綺繡に、羅紈交輪。羅は帛の美なるもの。紈は素である。【六】麥壟　一本に夏壟に作る。壟は田中の高い處。【七】餅餌　金瓶梅に、餅餌麥飯甘ニ豆羹ㇾ。

【詩意】此詩は勸農をいひ、暗に太守に切なら ば、使君（太守）は應に農桑の事を務めるを欲するであらう。（彼を抑へて、此を揚ぐ。そして重きこ

とは下の聯にある。）春の晴に雨が過ぎて、羅紈が肥えた。（桑と言はないで、羅紈と言つたのは、桑の用である。）夏の墟に風が來つて、餅餌が香しい。（麥と言はないで、餅餌と言つたのは麥の用である。）

【餘錄】宋の釋惠洪が冷齋夜話に、荊公詩、繰ニ成白雪一桑重綠、割ニ盡黃雲一稻正青。東坡詩、春畦雨過羅紈膩、夏墟風來餅餌香。如下華嚴經、舉レ果知レ因、譬如ニ蓮花一方ニ其吐レ花、而果具ニ蕊中一、造語之工、至レ此盡ニ古今之變一とある。

北園

漢水巴山樂有レ餘。
一麾從レ此首ニ歸塗一。
北園草木憑レ君問。
許ニ我他年作ニ主無一。

漢水巴山樂み餘あり、
一麾此より歸塗に首はん。
北園の草木君に憑つて問ふ、
我に他年主と作ることを許さんや無や。

【詩意】東漢水は洋洋として、漢中・興安・鄖陽・襄陽・安陸・漢陽の六府の境を流れて大江に入る。大巴の嶺の流貫して、江に入る大川。名勝志に、漢中府、洋縣、東連ニ襄漢一、南藩ニ巴蜀一。又いふ、漢山在ニ漢中府西南二十里一、北距ニ漢水一、南接ニ巴山一。いふ。陝西西鄉縣西南に在る。【餘錄】一麾　王注にいふ、一麾字、顏延年詩ニ阮始平一詩、屢薦不レ入レ官、一麾乃出守、本言ニ麾去之麾一。杜牧詩云、欲ニ把ニ一麾ニ江海去一。乃謂ニ以爲ニ旄麾之麾一、今先生卻用ニ杜牧詩一。と。王文誥いふ、顏延年詩、作ニ麾旄一解義亦通。【字解】歸塗　歸路に同じ。晉、孔德紹詩に、今日桃源客、相顧失ニ歸途一。

【字解】【一】北園　樊城集、和ニ北園一詩に、使君美且仁、擧レ地種ニ桃李一、豈獨放ニ春花一、行看食ニ秋子一。【二】漢水　東漢水ともいふ。舊、漢中・興安・鄖陽・襄陽・安陸・漢陽・六府の境を流貫して、江に入る大川。名勝志に、漢中府、洋縣、東連ニ襄漢一、南藩ニ巴蜀一。又いふ、漢山在ニ漢中府西南二十里一、北距ニ漢水一、南接ニ巴山一。【三】巴山　大巴山ともいふ。陝西西鄉縣西南に在る。【四】一麾　王注にいふ、一麾字、顏延年詩ニ阮始平一詩、屢薦不レ入レ官、一麾乃出守、本言ニ麾去之麾一。杜牧詩云、欲ニ把ニ一麾ニ江海去一。乃謂ニ以爲ニ旄麾之麾一、今先生卻用ニ杜牧詩一。と。王文誥いふ、顏延年詩、作ニ麾旄一解義亦通。【五】歸塗　歸路に同じ。晉、孔德紹詩に、今日桃源客、相顧失ニ歸途一。

山は、漢江に臨み、三峽に接す。山南は、卽ち古の巴國である。漢水・巴山、遊覽の樂みが餘ある。一たび麾いて、此より歸路に向はうと思ふ。就いては、試みに君に憑つて北園の草木に尋ねて見たいことがある。それは別でもない、他年、我が來つて、此土の主となるを許してくれるか、どうかである。

【餘錄】紀昀いふ、三十首、各自爲レ意、然湖橋一首、確是總起、此首確是總結、而又各自還ニ本位一、不レ著ニ痕迹一、此布局之妙と。王文誥いふ、但南園北園、非ニ游覽地一、知州勸農處也、每三月至レ園、散ニ父老酒食一、謂ニ之開園一、故二題獨殿後、曉嵐（紀昀）未レ通ニ全部一、而所レ論近レ是、已仁至義盡矣。

寄題刁景純藏春塢

白首歸來種ニ萬松一。
待看千尺舞ニ霜風一。
年抛ニ造物陶甄外一。
春在ニ先生杖屨中一。
楊柳長齊ニ低レ戶暗一。
櫻桃爛熟滴レ階紅。
何時却與ニ徐元直一。

白首歸り來りて萬松を種ゑ、
待ち看る千尺霜風に舞ふを。
年は造物陶甄の外に抛ち、
春は先生杖屨の中に在り。
楊柳長齊戶に低れて暗く、
櫻桃爛熟階に滴りて紅なり。
何れの時か却つて徐元直と、

【字解】【一】寄題　其の地に至らないで、其の狀況を想像して作り寄するをいふ。【二】刁景純　刁約字は景純。丹陽の人。宋の康定中、歐陽永叔と同じく館閣に在りて讐書を修む。後、史館に直し、憮然として山林の志あり。冠を掛けて歸り、室を潤州に築き、藏春塢と號し、日日其中に游息す。【三】陶甄　埴なこれて陶器を作る。揚子に、甄ニ陶天

共訪襄陽龐德公。

（七）共に襄陽の龐徳公を訪はん。

龐夏ニ謂ニ甄氏曰一ク何晏が景福殿の賦に、龐ニ陶閻風一ツ張華が女史箴に、茫茫造化、剛儁始分、散レ氣流レ形、既陶且甄。【六】楊柳長齊云云　白樂天が夢游レ春詩に、門柳暗全低、簷櫻紅半熟。【五】櫻熟　陸游の詩に、世態十年看櫻熟。【六】徐元直　嘗て諸葛亮を晤レ之、未レ免レ學ニ步趨一、至ニ五六一聯一、賦乃脫ニ化張謂春園家宴詩、櫻桃解結垂レ檐子、楊柳能低入レ戶之句一、今注レ詩者、乃引ニ白居易夢游レ春五言云、門柳暗全低、簷櫻紅半熟一而不レ引ニ張詩一、既爲レ未レ諳ニ源委一、且奈ニ何舍ニ盛唐一而逃ニ中唐一也と見えて居る。又、王直方の詩話にいふ、東坡作ニ藏春塢詩一、有ニ年拋下一、其在ニ和平一。晉書、樂志に、弘ニ清

【題義】此詩は熙寧九年、東坡が四十一歳の時の作。時に東坡は密州に在り、祠部員外郎に遷り、十二月、移つて徐州に知となつた。刁景純は、時に年八十二。王文誥いふ、此後無下復有ニ與ニ景純一唱和詩上矣と。

【詩意】刁景純が藏春塢の前には、岡があつて、皆、松を種ゑて居る。之を萬松岡といふ。東坡詩あり、いふ、與レ君栽插萬松岡と。松を種ゑて千尺の長きに至り、霜風の中に、舞ふやうになるまでには、十年や二十年では、到底望まれない。ましして白首となつて歸り來り、はじめて之を種ゑたるに於ては、なほ更のことである。（これは長生の意を言つたのであらう。）衆人は、皆、造物が陶甄、陶甄とは、萬物を造り出すことである。其の作用の中に在るなれど、景純はさうではない。其の長壽は、人に過ぎ超えて居る。これは要するに、流年を陶甄の外に拋つたものである。（起句より此に至る三句は、共に一意である。此の次の三句は、皆、藏春のことをいふ。）それで景純は春は杖屨の中に在つて自然を友として居る。藏春塢は、景純の樂地である。其の景物をいふと、楊柳は長く齊しく戶に低れて暗い。櫻桃は爛熟して階に滴つて紅である。何れの時か徐元直と共に襄陽の龐德公を訪問しようぞ。（これは東坡が自らを司馬德操に比し、景純を以て龐德公に比したのである。徐庶（字は元直）司馬徽（字は德操）及び諸葛孔明などは、皆、龐德公に從つて益を受けた人人である。そして德公（字は山民）は鹿門山に隱れた君子である。）

【餘錄】龐德公は南郡襄陽の人、峴山の南に居て、未だ嘗て城府に入らず。襄陽記に詳かなり。襄陽記に、諸葛孔明毎レ至ニ德公家一、獨拜ニ牀下一、德公初不レ令レ止。司馬德操、嘗詣ニ德公一、值ニ其渡レ沔上ニ家、德操徑入ニ其室一、呼ニ德公妻子一、使ニ速作一レ黍。徐元直向云、當下來就レ我與ニ德公一談上、其妻子皆、羅ニ拜堂下一、奔走共設、須臾、德公還直入相就、不レ知ニ何者是客一也。唐宋詩醇の評に、三四一聯、句法獨創、後人效

玉盤盂二首　并序

東武舊俗。每歲四月。大會于南禪資福兩寺。以芍藥供佛。而今歲最盛。凡七千餘朶。皆重跗累蕚。繁麗豐碩。中有白花。正圓如覆盂。其下十餘葉。稍大承之。如盤。姿格絶異。獨出於七千朶之上。云得之于城北蘇氏園中。周宰相莒公之別業也。而其名俚甚。乃爲易之。

【訓讀】東武の舊俗、毎歲四月に、大に南禪・資福兩寺に會し、芍藥を以て佛に供す。而して今歲最も盛に、凡そ七千餘朶、皆重跗累蕚、繁麗豐碩、中に白花あり、正圓にして覆盂の如し。其の下十餘葉、稍大にして之を承くる盤の如し。姿格絶異、獨り七千朶の上に出づ。云ふ、之を城北蘇氏の園中に得と。周宰相莒公の別業なり。而して其の名俚甚だし、乃ち爲に之を易ふ。

【字解】【一】玉盤盂　芍藥の覆盂の如きより名く。牡丹にも、玉盤妝あること、洛陽花木記に見ゆ。【二】重跗累蕚　跗は草木の貴の盤(子房)、蕚は花のうてな、花被の外側の部分。【三】豐碩　宋史、張齊賢傳に、齊賢奏儀豐碩、議論慷慨有二大略一。【四】姿格　厚德錄に、李丞相沆有二一世儁一、遣二宅金數十千一遺去、有レ女時二十歲一、美二姿格一、自寫二一券一、繫二于帶一、贖寶二于宅一、以償焉、丞相大倜レ之。【五】莒公　王注に、莒公、卽蘇舜元也、爲二周相一、後周、慶順元年罷。【六】別業　別墅に同じ。南史、謝靈運傳に、修二營別業一。傍レ山帶レ江、臺二閣居之美一。

雜花狼藉占春餘。

【字解】【一】狼藉　紛亂の意。

芍藥開時掃レ地無。
兩寺粧成寶瓔珞。
一枝爭看玉盤盂。
佳名會作二新翻曲一、
絶品難レ逢舊畫圖。
從レ此定知年穀熟。
姑山親見雪肌膚一。

芍藥開く時地を掃うて無し。
兩寺粧ひ成す寶瓔珞、
一枝爭ひ看る玉盤盂。
佳名會す新翻曲と作らん、
絶品逢ひ難し舊畫圖。
此より定めて知る年穀の熟することを、
姑山に親しく雪の肌膚を見る。

歐陽修の詩に、杜家花難レ非二絶品一、猶可二開レ顏笑一之飲一。冰雪、涼約若二處子一、其神機、使レ物不二能奪一而年穀熟。

【題義】此詩は熙寧九年四月の作である。東武には、毎年四月、芍藥を佛に供する風俗がある。今年は花が盛に南禪・資福の二寺に開いたので、東坡は美事な一朶を取り、玉盤盂と名けた。美しい妾は、他朶の及ぶ所ではない。そこで此の二首を作つたのである。

【詩意】色色の花は、咲き亂れて、晩春の花壇を占めて居たが、芍藥の開く時分は、何れも凋んで、地を掃つて無くなつた。南禪寺、資福寺では、四月の佛會に澤山な芍藥を佛に供する。重つた子房、花の夢、其の美事なことは、恰も寶瓔珞を垂れて、寶鈴が無數に其の上に懸つて居るがやうである。（瓔

史記、滑稽傳に、履舃交錯、杯盤狼藉。【二】寶瓔珞　西域の人、身に佩ぶる裝具。頭に在るを瓔といひ、身に在るを珞といふ。法華經に、有二七寶塔一、從レ地涌出、無數幢幡、以爲二嚴飾一、垂二寶瓔珞一、寶鈴萬億而懸二其上一。【三】佳名　陶淵明が斜川詩の序に、有レ愛二佳名一、欣對不レ足、李商隱の詩に、佳名留二渭川一。【四】絶品　宋史、食貨志に、皆、絶品也。

珞は身に佩ぶる飾のことで、頭にあるを瓔といひ、身にあるを珞といふ。）其の中でも、白い花の一枝があある。形は正圓で覆盂（盂は鉢）のやうで、下に十餘葉が之を承けて居るのは、盤のやうである。玉盤盂の名は、まことに空しくない。佳名を撰んだので、必ず新翻の曲も出來よう。絕品は逢ひ難き脊畫圖であるが、忽ち麗日に鮮色を籠め、和風が異香を散ずる。やがて綠葉は陰を成して花も子を結ぶ。此より定めて年穀の熟することと信ずる。そして姑射山に親しく雪の肌の神人を見るのである。（莊子に據ると、藐たる姑射山に神人がある。肌は氷雪の如く、綽約として處子の如し。風を吸ひ露を飲み、五穀をば食はない、雲に乘り、龍に御し、そして四海の外に遊ぶ。又、其の神人の精神は、凝り定まつて、何事に遇ふも、決して動くことなく、其の住める處は、百物疵癘の患なくて、五穀豐熟の樂がある。）此詩の結句は、此故事を用ひたのである。

花不レ能レ言意可レ知。　花言ふこと能はざるも意知るべし、
令君痛飲更無レ疑。　君をして痛飲せしめて更に疑ふ無し。
但持二白酒一勸二佳客一。　但白酒を持して佳客に勸め、
直待二瓊舟覆玉彝一。　直ちに瓊舟の玉彝を覆ふを待つ。
負郭相君初擇レ地。　負郭の相君初めて地を擇び、

【字解】【一】痛飲　劇飲に同じ。世說、任誕に、痛二飲酒一熱二讀離騷一、便可レ稱二名士一。【二】白酒　梁武帝の詩に、玉盤著二朱李一、金杯盛二白酒一。【三】瓊舟覆二玉彝一　周禮に、六彝皆有レ舟。六彝は雞彝・鳥彝・鳳彝・黃彝・虎彝・蜼彝をいふ。彝は酒樽、舟は尊の下臺、今の承盤の如きものである。【四】負郭相君　負郭は、城に近くして、よく肥えた田。史記、蘇秦傳に、蘇秦既約二六國從一、爲二從約長一、并相二六國一。又、使二晉有二洛陽負郭二頃田一。吾豈能佩二六國相印一乎。【五】看羊屬國　漢書に、蘇武使二匈奴一、欲レ降レ之、知二武終不レ可レ屈、乃徙二武北海上一、使レ牧レ羝、武仗二漢節一、牧レ羊、臥起操持、節旄盡落、後歸拜二典屬國一。典屬國は、古、爽秋の事を掌る官名。

看羊屬國首吟詩。　看羊の屬國首めて詩を吟ず。
吾家豈與花相厚。　吾が家豈花と相厚きか、
更問殘芳有二幾枝一。　更に問ふ殘芳幾枝あると。

【詩意】花は語らないが、其の意の在る所は、よく知れる。卽ち君に十分酒を飲ませて、更に疑ふ所がないやうに思はれる。ただ白酒をば佳客に勸め、瓊舟に酒樽を覆ふの時を待つのである。吾をして洛陽負郭の田二頃あらしめば、豈、能く六國の相印を佩びんやと言つた蘇秦は、初めて地を擇び、從約の長となつた。又、匈奴に使して、屈せず、十九年の間、漢節を持して辛苦した蘇武も、漢が匈奴と和親してなつたので、還ることが出來た。其の時、河梁の別を愴み、李陵と五言の詩の唱和があつた。玉盤盂は、之を城北の蘇氏園中に得たのであるから、蘇秦や蘇武の故事を引用したのである。（查初白いふ、拈二蘇字一、痕迹不レ化と。）蘇氏の園、蘇家の花、我家は、なんと花と緣の厚いのであるか。更に問ふ、殘花は、なほ幾枝あるかと。

【餘錄】姑谿題跋にいふ、東坡守二東武一、得二異花於芍藥品中一、既名レ之、又賦二二詩一、以志二其事一、崇寧（宋徽宗の年號）四年、傳君仲訓、偶出二花圖一相示、而東坡小楷二詩、在二其下一、蓋當日本也、予得二此花一、

又見二其字一、泫然流涕、因次二其韻一と。姑蘇集の懐舊詩にいふ、陳迹回レ頭似二夢餘一、花應二長好一但人無、詩成固已名二千古一、墓上誰傾飯一盂、流落丹青驚始見、形容筆墨竟難レ圖、公孫自是天同派、謾說周人載二碩膚一。第二首にいふ、花存人往祇天知、目暗心搖卻自疑、尚向二漢廷一傳二詔令一、如下登二魯殿一見中檜葬上一、時鸚鵡娯二賓賦一、百世甘棠美二召詩一、安得殘春逢二海上一、盡傾二衰淚一灑二新枝一。

和潞公超然臺次レ韻

潞公の超然臺に和して韻に次す

我公厭二富貴一、常苦勳業尋。
我が公は富貴を厭ひ、常に苦しむ勳業の尋ぐを。

相期赤松子、永望白雲岑。
相期す赤松子、永く望む白雲の岑。

清風出二談笑一、萬竅爲號吟。
清風は談笑に出で、萬竅爲に號吟す。

吟成超然詩、洗二我蓬之心一。
吟じて超然の詩を成し、我が蓬の心を洗ふ。

嗟我本何人、麋鹿强冠襟。
嗟我は本何人ぞ、麋鹿强ひて冠襟。

身微空志大、交淺屢言深。
身は微にして空しく志大に、交は淺くして屢ゝ言深し。

囑レ公如二得レ謝、呼我幸寄レ音。
公に囑す如し謝するを得ば、呼我は幸に音を寄す。

但恐酒錢盡、煩レ公揮二橐金一。
但恐る酒錢盡き、公を煩はして橐金を揮ふを。

【字解】【一】潞公　東都事略に、文彦博、字は寛夫、汾州介休の人。嘉祐中、河陽三城節度使・同平章事を以て潞國公に封ぜらる。宋史本傳に、位二昇相一五十餘年、圖二歸休一公孤二爾以二太師一致仕、元豐中居二洛陽一、與二富弼等十三人一爲二耆英會一。【二】超然臺　子由超然臺賦敍略にいふ、子瞻守二高密一、因二其城上之廢臺一、而增二葺之一、以名レ轍曰、天下之士、奔二走於是非之場一、浮二沈於榮辱之海一、置然棄レ力、而忘レ反、亦莫二自知一也、而遺者哀レ之、非レ以二其超然不レ累二於物一耶、老子曰、雖レ有二榮觀一、燕處超然、試以二超然一名レ之可乎、乃爲二之賦一と。【三】勳業　宋史、韓琦傳に、琦與二范仲淹・富弼一、皆以二海内人望一、同時登用、中外鼓二想其勳業一。【四】赤松子　仙人の號。神農の時、雨師となること、劉向列傳に見ゆ。【五】白雲　莊子、天地篇に、乘二彼白雲一、至二於帝鄉一。東坡の潮州韓文公廟碑に、公昔騎レ龍白雲鄉、手抉二雲漢一分二天章一。【六】清風　詩、大雅に、吉甫作レ頌、穆如二清風一。東坡、赤壁賦に、清風徐來、水波不レ興。【七】談笑　孟子、告子篇に、越人關レ弓而射レ之、則己談笑而道レ之。【八】萬竅爲號吟　莊子、齊物論に、大塊噫レ氣、其名爲レ風、是唯無レ作、作則萬竅怒呺。萬木の穴、風を受けて鳴り響く。【九】蓬之心　莊子、逍遙游に、夫子猶有二蓬之心一也夫。其心を茅塞する義。心の邪に比す。【一〇】麋鹿　麋は鹿の大なるもの。孟子、梁惠王篇に、樂レ其有二麋鹿魚鼈一。晉、陸機傳に、山鹿野麋。【一一】志大　毛詩傳に、志大心勞、所二以求一者、非二其道一也。【一二】交淺屢言深　史記、范雎傳に、何交疏而言深也。戰國策に、客有レ見二人於服子一者曰、服子卽レ之日、交淺而言深、是亂也、客曰、不レ然、交淺而言深忠也、昔者、堯見二舜於草茅之中一、桑陰移而受二天下傳一、使二交淺者一、不レ可二以深談一、則天下不レ傳也と。【一三】得謝　禮記に、大夫七十而致レ事、若不レ得レ謝、則必賜二之几杖一。【一四】寄音　陸機の詩に、歸雲難レ寄レ音。【一五】酒錢　杜子美の戲簡二鄭廣文一詩に、賴有二蘇司業一、時時與二酒錢一。【一六】揮二橐金一　古詩に、揮レ金留二上客一。杜子美の詩に、揮レ金應二物理一。文選、張景陽、詠史の詩に、揮レ金樂二當年一、千載暮不レ留レ歡。漢書、陸賈傳に、出二所レ使レ越橐中裝一、賣二千金一分二其子一。蔡襄の詩に、橐金均散心如レ水。

【題義】此詩は熙寧九年四月の作。文彦博に答へて、超然臺の詩に和したのである。續通鑑長編に據るに、熙寧九年八月、判大名府文彦博再任とあれば、東坡との倡和は、潞公が正に大名に在る時であ

つた。文彦博の超然臺の詩は、莒侯之燕處、層臺踰二十尋一、俛鎭千乘國、前瞻九仙岑、勿レ作二西州意一、姑爲二東武吟一、名敎有二靜樂一、紛華無二動心一、憑レ高肆二遠目一、懷レ往散二沖襟一、琴觴與不レ淺、風月情更深、民被二襦袴一、神惠、境絕二枹鼓音一、欲レ識二超然意一、鴒原賦二鄰金一といふのである。

【詩意】天下の士は、是非の場に奔走し、榮辱の海に浮沈して居るが、我が豁國公は、元來、富貴を厭ひ、常に勳業の尋ぐを煩はしく思つて居られる。それで仙人赤松子と相約して、かの白雲を望んで帝鄕に遊ばうと欲するのが、平生の志であるやうに思はれる。故に談笑も自ら淸い風を生じ、風が作れば則ち萬木の穴が鳴り響く。其の聲が、この超然の詩を作り成して、我が茅塞した心を洗ふのである。ああ我は元來、何人ぞ、山の鹿、野の麋と毫も異らないのに、强ひて冠を著けたり襟を正したりする。身は微でも、志が大であり、交の淺いのに、言が深いのである。君によく御依頼をする。我がもし致仕が出來た曉には、幸に音信をするが、但、心配なのは、我に酒を買ふ錢が無くなることである。君よ、どうか、其の橐金を揮つて、我に散じて下さい。

聞二喬一太博換二左藏一知二欽州一以詩招飲

喬太博左藏に換つて欽州に知たるを聞き、詩を以て招飲す

今年果起二故將軍一。

【字解】【一】喬太博　喬姓、字は

禹功、太博となり、欽州に知たり。東坡の詩にいふ、云侯胡適器、淸廣常蔦豐と。再び旌州に知たり。東坡の詩に又いふ、愧無二負郭田千頃一、空有二鼓行書五車一と。【三】左藏　武職である。宋史、職官志に、西京左藏庫使あり。蓋し喬禹功、文階を以て武職に改めたのであらう。【三】欽州　元和郡縣志に、漢平二南越一、置二合浦郡一。欽州は卽ち合浦縣の地。果起故將軍　王注に、先生鐵溝行贈二喬太博一詩云、明年定起故將軍、未二肯先誅一劉段尉。李廣、嘗て、夜、一騎を從へ、劉陵亭に至る。劉陵の將、醉うて廣を呵止す。廣は右北平の太守となる。卽ち劉陵の尉を請ひ、之を斬る。施注に、故此云レ果、且曰二信有一レ神也と。【五】幽夢　柳子厚の詩に、月明空階曙、幽夢繰雲生。【六】信有レ神　杜子美の獨酌詩に、幽夢淸詩信有レ神。馬革裹レ屍　後漢、馬援傳に男兒、要當レ死二於邊野一、以二馬革一裹レ屍還葬一耳、何能臥二牀上一、在二兒女子手中一耶。【七】虎頭食レ肉　後漢、班超傳に、超行詣二相者一、相者曰、生、燕頷虎頸、飛而食レ肉、此萬里侯相也。【九】陣雲　史記、天官書に、陣雲如レ立レ垣。庾信の擬二詠懷一詩に、陣雲平不レ動、秋蓬卷欲レ飛。【一〇】黃茅瘴　通眞子、瘴氣論に、嶺南瘴、猶如二嶺北傷寒一也、從二仲春一訖二仲夏一、行二靑草瘴一、季夏訖二孟冬一、行二黃茅瘴一。黃茅は、本草に、黃茅似レ菅茅一而葉上開レ業、可レ爲二索綯一。【一一】羽扇　語林に、諸葛武侯、提二白羽扇一、指二揮三軍一。蜀、諸葛亮傳に、亮與二司馬宣王一對二於渭濱一、王皮服莅レ事、使二人視一レ亮、乘二素輿一、葛巾羽扇、指二揮三軍一。【一二】白葛巾　葛巾は葛製の頭巾、宋書

陶潛傳に、値二其酒熟一、取二頭上葛巾一漉レ酒。

【題義】此詩も、熙寧九年四月の作である。喬禹功が欽州に知となつたと聞いて詩を以て招宴したのである。紀昀いふ、招飲說得眞至と。

【詩意】東坡の前年、喬太博に贈つた詩にいふ、明年定起故將軍、未三肯先誅二霸陵尉一と。昔、李將軍が、或夜、一騎を從へ、霸陵亭に至つた。霸陵の將、醉うて虜を呵止す。虜の騎曰く、故の李將軍であると。尉曰く、今の將軍でも夜行は出來ない。まして故をやと。さて喬禹功は、明年は必ず故將軍を起さうと言つてたが、果して今年は故將軍を起すこととなつた。（喬禹功の欽州に知事となつたことをいふ。）幽夢も、淸詩も、まことに神通があつた譯である。後漢の馬援は、男兒は戰場に活動し馬革を以て其の屍を裹むべきである。何ぞ牀上に臥して、兒女子の手に死なんやと言つたが、馬革を以て屍を裹むは、眞に細事である。又、同じく後漢の班超は、燕頷虎頭で、萬里侯の相があると相者に評されたが、虎頭、肉を食ふは、更に何人であらう。思へば陣雲は冷かで且つ垣を立てたやうに黃茅瘴（病氣の名）を壓し去つた。又、白葛巾を著け、羽扇を斜に揮つて居る喬禹功をも、思うて已まない。たとひ、痛飮しても、今より幾日を得られようぞ。頭を擧げると、月色は西軒を照らして夜來殊に新なるを覺える。（東坡の詩話にいふ、昔、余與二北使劉霄一會食、霄誦二僕詩一、痛飮從レ今有二幾日一、西軒月色夜來新、曰、公豈不レ飮者耶と。）

【餘錄】左藏は國庫なり。隋の文帝の時、庫藏みな滿つ。乃ち更に左藏の院を開き、屋を構へて以て之を受く。唐の時、左右藏、皆、令丞を置く。左藏は錢帛・雜綵・天下の賦調を掌る。右藏は金・玉・珠寶・銅鐵・骨角・齒毛・綵畫を掌る。宋の初め、諸州貢賦、均しく左藏に輸す。南渡せしの後、左藏內庫及び封樁庫（宋の太祖の時、帑藏盈溢を以て、講武殿後に於て、別に內庫を爲り、以て軍旅饑饉の預防となす、之を封樁庫といふ。）を分設す。元、禁中出納は、三庫に分つ。御用寶玉・遠方珍異は、內藏に隸す。金銀・質孫衣段は（質孫衣は一色衣をいふ、元史に、質孫、漢言一色服也、內庭大宴、別服レ之。）右藏に隸す。常課衣段・綺羅・綿布は左藏に隸す。

喬將レ行。烹二鸐鹿一。出二刀劍一以飮レ客。以レ詩戲之

喬將に行かんとす、鸐鹿を烹、刀劍を出し以て客に飮ましむ、詩を以て之に戲る

破匣哀鳴出二素蚪一。
倦レ看二鵂鶹一聽二呦呦一。
明朝只恐兼烹レ鶴。
此去還須却佩レ牛。
便可先呼二報恩子一。

破匣哀鳴素蚪を出す、
看るに倦む鵂鶹呦呦を聽くに。
明朝只恐る兼ねて鶴を烹るを、
此に去り還須らく却つて牛を佩ぶべし。
便ち先づ報恩子と呼ぶべし、

【字解】【一】破匣　匣は箱。大なるを箱といひ、小なるを匣といふ。杜子美の詩に、平生白羽扇、零落蛟龍匣。【二】素蚪　蚪はミヅチ。龍の子の角あるもの。素蚪は刀劍をいふ。後漢、馬衍の賦に、劚二素蚪一而龍騁兮。【三】鵂鶹　鵂の鳴く聲。孟

不ㇾ妨仍帶二醉鄉侯一。妨げず仍ほ醉鄉侯を帶ぶるを。
他年萬【九】騎歸應ㇾ好。他年萬騎歸る應に好かるべし、
奈有二移【一〇】文在一故邱一。奈んぞ文を移して故邱に在る有らん。

鶴鳧ㇾ琴後、背二御青山一臥二明月一つ李曦山雜墓に、燒ㇾ琴煮ㇾ鶴。【六】佩ㇾ牛　漢、龔遂の事を用ふ。民、皆劍を賣りて牛を買ひ、刀を賣りて犢を買ひ、境内に治る。【七】報恩子　韓退之の送二石處士赴二河陽幕一詩に、長把二種樹書一、人云避ㇾ世士、愈時三將軍馬一、自號二報ㇾ恩子一。【八】醉鄉侯　唐、王績は、醉鄉記を撰し、以て劉伶の酒德頌に配す。皮日休の詩に、他年謁ㇾ帝言二何事一、請贈二劉伶一作二醉侯一つ唐人の詩に、若使二劉伶爲一酒帝一、亦須ㇾ封二我醉鄉侯一つ【九】萬騎　文選、班孟堅の東都賦に、萬騎紛紜。【一〇】移ㇾ文　孔稚珪、北山移文引にいふ、周彦倫、先壓二北山一、後出爲二海鹽令一、欲ㇾ還ㇾ山、稚珪乃假二山靈之意一、作ㇾ文移之、不ㇾ許二其至一。

【題義】此詩も前詩と同じく、熙寧九年四月の作である。喬禹功の送別に、鵝や鹿を烹、刀劍を出して客に飲ましめ、詩を以て之に戲れたのである。紀昀いふ、哀鳴字不ㇾ妥と。

【詩意】破匣の中から、刀劍が哀鳴して出た。行く人を送るのであらう。又、送別の酒宴には、鵝の肉や鹿の肉を烹る。所謂嘒嘒の聲は、鵝の發する所で、我は之を看るに倦む。嘒嘒は鹿の鳴く聲、其の聲を聞けば、其の肉を食ふに忍びない。更に明朝の酒宴には、兼ねて鶴をも烹ることを恐れる。李義山が殺風景にも、煮ㇾ鶴燒ㇾ琴ことが載つて居る。さて喬君には此を去つて、また須らく却つて牛を佩ぶべきである。昔、漢の宣帝の時、龔遂は渤海の太守となり、民に農桑を勸めた所、民は皆劍を賣つて牛を買ひ、境内が大に治まつたといふことである。喬君も龔遂に倣うて歸耕する。便ち先づ知遇に感じて恩を報ゆるといふ意より、報恩子と呼んだのであらう。古人の詩にも、若し劉伶をして酒帝とならしめば、亦須らく我を醉鄉侯に封ずべしとあるが、喬君にも十分に酒を飲んで醉鄉侯となることは、固より御隨意である。北山移文の引に、周彦倫は、先づ北山に隱れ、後に出でて、海鹽の令となつた。山に還らうとすると、稚珪は、乃ち山靈の意を假り、文を作つて之を移して、其の至るを許さなかつたといふ話がある。併し喬君は他年、萬騎を率ゐて、歸るが好いであらう。奈んぞ北山移文に倣うて文を移し、故邱に在らしめるといふことがあらうぞ。言ひ替へると、故山を出でて、四方の人となるべきである。

奉和成伯兼戲禹功

成伯に奉和し、兼ねて禹功に戲る

金錢石竹道傍秋、
翠黛紅裙馬上謳。
無限小兒齊拍手、
山公又作習池遊。

【字解】【一】成伯　趙成伯ないふ。御書院を以て密州に停たり。【二】禹功　喬鈭、字は禹功。前に出づ。【三】金錢　金錢花をいふ。翠芳譜に、草本、秋開ㇾ花、色黃、似ㇾ錢而欠二棱廉一、午開子落、故名二子午花一つ又名二夜落金錢一。西陽雜俎に、金錢花、一云出二外國一、乘時、霜州掾屬、雙陸賭二金錢一、錢盡以二金錢花一相足、魚宏謂、得ㇾ花勝ㇾ得ㇾ錢。

子勝文公篇に、惡用二是鳴鳴者一爲ㇾ哉。鳴は鶴に同じ。【四】嘒嘒　鹿の鳴く聲。詩、小雅に、嘒嘒鹿鳴、食二野之芩一つ【五】烹ㇾ鵝　晉郗友議に、韋鵬翼題二盱眙郡明府壁一云、自從烹二鵝待一レ客、不ㇾ見二雙鵝一上二碧霄一。

【典】石竹　カラナデシコ。山野に自生する草、夏月花開く。【景】翠黛紅裙　杜子美の詩に、燕姫翠黛愁ニ紅裙一。又、越女紅裙濶、燕有ニ高閣一種ニ竹及長楸一、芙蓉菱芡覆レ水、是雖ニ無名處也、山簡毎臨ニ此池一、未ニ嘗不一ニ大醉而還一、曰、此是我高陽池也、襄陽小兒歌レ之曰、山公時一醉、倒載歸、茗芋無レ所レ知。茗芋の者は、酪に適す。韓退之の詩に、茗芋馬上知爲レ誰。

【題義】此詩も、前と同じく熙寧九年四月の作。趙成伯の詩に和し、兼ねて喬禹功に戯れたのである。

【詩意】金錢花や石竹が道傍に、秋を飾つて居る。又、翠黛の美人、紅の裙の妓女が馬上に謳つて過ぎ行く。晉の山簡は、高陽習家の池に至る毎に、酒を飲んで輒ち大に醉つて歸つた。歌にいふ、山公出ニ何許一、往至ニ高陽池一、日夕倒載（後向に馬を騎る）歸、酩酊無所レ知と。襄陽の小兒は、齊しく手を拍つて囃したてた、といふことである。今、喬禹功も、亦、然りで、山公のやうに習池の遊をなされることであらう。

寄ニ黎眉州一

黎眉州に寄す

膠西高處望ニ西川一。　膠西高き處西川を望めば、
應在ニ孤雲落照邊一。　應に孤雲落照の邊に在るべし。
瓦屋寒堆春後雪。　瓦屋寒は堆し春後の雪、
戞眉翠掃雨餘天。　戞眉翠は掃ふ雨餘の天。

【字解】【一】黎眉州　名は錞、字は希聲。熙寧八年、尚書屯田郎中を以て眉州に知たり。希聲、春秋を治めて歐陽修に知らる。宋史に、黎錞、巢江人、英宗以ニ蜀士一問ニ歐陽修一、對曰、文行蘇軾、經術黎錞。本集の眉山逸景樓記略に、太守黎希聲先君子之友人也。子由集末の自注に、黎希聲二郎ニ居大學前一。【二】膠西　今の山東膠縣高密等の地。【三】西川　蜀の地。元和郡縣志に、眉州屬ニ劍南道一、西川節度使所轄云云。【四】落照　梁、簡文帝の詩に、落照度ニ窗邊一。【五】瓦屋　山の名。太平寰宇記に、嘉州榮經縣榮水在ニ城北一、經水在ニ城南一、一出ニ瓦屋山一、一出ニ改丁河一。名勝志に、瓦屋山在ニ榮經縣東北二十里一、形如ニ瓦屋一、上有ニ念佛鳥・娑羅花一、其巖朝現ニ辟支一、午現ニ普賢一。【六】戞眉　蜀の山名。水經注に、峨眉山去ニ成都一南千里、秋日清澄、望見ニ兩山相峙如ニ蛾眉一焉。名山記に、峨眉山、周匝千里、石龍一百十二、大洞十二、小洞二十八。蜀都賦に、抗ニ峨眉之重阻一。【七】治レ經云云　韓退之が寄ニ盧同一詩に、春秋三傳東ニ高閣一、獨抱ニ遺經一究ニ終始一。宋の晁端彙が貴耳集に、王荊公斥ニ詞賦一尊レ經、獨以ニ春秋一非ニ聖經一不レ試、所レ以元祐諸人多作ニ春秋傳解一、則其議論素不レ同矣。宋の晁公武が讀書志に、春秋經解、黎錞撰、錞、蜀人、歐陽公之客、名ニ其書一爲ニ經解一者、以レ經解レ經也、後、又爲ニ經筵一所レ寫。

治レ經方笑春秋學。　經を治して方に笑ふ春秋の學、
好レ士今無ニ六一賢一。　士を好む今六一の賢無し。
且待ニ淵明賦ニ歸去一。　且つ淵明の歸去を賦するを待つて、
共將ニ詩酒ニ趁ニ流年一。　共に詩酒を將て流年を趁はん。

【題義】黎眉州は春秋を治めて家法あるので、歐陽文忠公は之を喜んだ。王安石は素より春秋を喜ばない、目して斷爛朝報となす。是の時、安石方に志を得たから、故にいふ、治レ經方笑春秋學と。又、歐陽公の黎生蜀に還るを送る詩がある、故にいふ好レ士今無ニ六一賢一と。東坡は眉の人、そして黎は方に眉に守たり。故に淵明歸去の句がある。紀昀いふ、懸空擲レ筆而下、起勢極爲ニ超拔一、三四接得有レ力、後半亦沈著と。

【詩意】　膠西の高い處から蜀の地西川を望むと、西川は一片の離れ雲に、夕陽の落ちて居る邊に在るであらう。其の地方は氣候も寒く、春後の雪は、瓦屋山に堆く、そして、雨後の空には峩眉山の翠色が天に秀でるを見るであらう。君は其地に在つて經書を研究し、春秋の學を治めて、かの王安石一派の春秋を喜ばない辮見を笑ふのは、卓見といふべきである。方今、世に士を好むこと歐陽公の如き賢人のないことを惜しむのである。（東坡の自注に、君以二春秋一受二知歐陽文忠公一、公自號二六一居士一とある。）併しながら、我も他日、陶淵明のやうに、歸去來の辭を賦して眉州に歸ることを得たならば、共に詩酒を以て樂しく餘生を送らうと思ふ。（東坡は眉山の人であるから、淵明賦二歸去一といつたのである。）亙に其の時の到るを樂みにして相待たう。（共將二詩酒一と言つたのは、陶淵明の歸去來の辭に、携レ幼入レ室、有レ酒盈レ樽とあるからである。）

和趙郎中捕蝗見寄次韻

趙郎中蝗を捕へて寄せらるるに和して次韻す

麥穗人許長。穀苗牛可沒。　麥穗人許く長く、穀苗牛沒すべし。
天公獨何意。忍使蝗蟲發。　天公獨り何の意ぞ、蝗蟲をして發せしむるに忍びんや。
驅攘著令典。農事安可忽。　驅攘は令典に著はる、農事安くんぞ忽にすべけんや。
我僕既胖胝。我馬亦款矻。　我が僕既に胖胝、我が馬亦款矻。
飛騰漸云少。筋力亦已竭。　飛騰漸く云に少なく、筋力亦已に竭く。
苟無二百篇詩一。何以醒二睡兀一。　苟くも百篇の詩なくば、何を以て睡兀を醒まさん。
初如二疏吠滄一。漸若二決澥渤一。　初めは吠滄を疏するが如く、漸くにして澥渤を決するが若し。
往來供二十吏一。腕脫不レ容レ歇。　往來十吏に供す、腕脫するも歇むを容さず。
平生輕二妄庸一。熟視笑二魏勃一。　平生妄庸を輕んじ、熟視して魏勃を笑ふ。
愛二君有一逸氣一。詩壇專二斬伐一。　君が逸氣あるを愛す、詩壇に斬伐を專にす。
民病何時休。吏職不レ可レ越。　民の病は何れの時か休まん、吏の職は越ゆべからず。
愼毋及二世事一。向レ空書二咄咄一。　愼んで世事に及ぶこと毋れ、空に向つて咄咄と書す。

【字解】【一】趙郎中　趙郎中成伯をいふ。施注に、趙成伯、時官制未レ改、以二倘書郎一倅二密州一。【二】參穗　唐、戴叔倫（字は幼公）の詩に、曙日來心稠、晴煙參穗抽。【三】許長　韻會に、許、語助也。かくと訓す。東坡の詩に、明朝門外泥一尺、始悟三更雨如レ許。【四】牛可レ沒　韓退之の稻畦の詩に、魚肥知二已秀一、鵜浪覺二初深一。【五】天公　天帝に同じ。晉書、天文志に、是天公憤、無二阜白二之徵也。阜白は黑白といふ同じ。【六】驅攘著二令典一　唐の開元四年に、山東大に蝗あり。民祭り、且つ拜して、敢て捕へず。姚崇曰く、詩云、去二其螟螣一、及二其蟊賊一、乘界二炎火一。光武昭曰、勉順二時政一、去二彼螟蝗一。此除レ蝗證也。【七】胖胝　ひびあかぎれ。手に胖といひ、足に胝といふ。莊子、讓王篇に、手足胖胝。王注に、禹治レ水、手足胖胝、謂二手足上重繭一也。淮南子に、舜、徹黑、禹胖胝。呂氏春秋に、舜之未レ遇、手足胖胝。【八】款矻　骨折りて疲れる。【九】飛騰　飛揚と同じ。韓退之の詩に、飛

貴鹽陷去。【一〇】睡兀　酒德頌に、兀然而醉。【一一】畎澮　畎澮二川。管康の養生論に、蓼ゝ之以二畎澮一、而澤ゝ之以二尾閭一。注にいふ、畎澮、縄流也、尾閭、海水泄處也と。【一二】衡漳　漳の別名。漢、司馬相如の子虚賦に、浮二渤澥一遊二孟諸一。【一三】僕二十吏一　漢、游俠傳に、陳遵爲二河内太守一、至レ官、召二善レ書吏十人一治二私書一、謝二京師故人一、遵馬レ几口占書レ數百封。唐、王勃傳に、爲二鳳閣舎人一、毒春等五王出レ閤、有司具レ儀、忘レ載二勃文一、墓臣已在、方悟二其闕一、勃召二五吏一、執レ筆分占、其辞榮然。【一四】脱屣云云　唐、蘇頲傳に、玄宗平二内難一、書詔塡委、獨頲爲二中書舎人一在二太極後閤一口所二占授一、功狀百緒、輕重無レ所レ差、書吏白日、丙公徐レ之、不レ爲手脱屣矣。【一五】熟視笑二龔勝一　前漢、高五王傳に、灌嬰聞二龔勝本教二齊王反一、既降二呂氏一、罷二齊兵一、使レ使召レ賞二問龔勝一、勝曰、失火之家、豈暇レ先言二丈人一、後救レ火乎、（師古曰、言以二社稷將レ危、故擧レ兵以匡レ之、不レ暇レ待レ有二詔命一也。）因退立、殿最而果、恐不レ能レ言者、終無二他語一、灌將軍熟視笑曰、人謂二龔勝勇一、妄庸人耳。【一六】逸氣　すぐれた氣象。晉書、王舒傳に、正足レ舒二其逸氣一耳。文心雕龍に、時有二逸氣一。【一七】斬伐　詩の小雅に、斬二伐四國一。【一八】吏職不レ可レ廢　漢宣帝紀に、吏或鯁レ職廢レ法、以取二名譽一、譬猶レ競二薄冰一、以待レ白日一、豈不レ殆哉。【一九】及二世事一　白樂天の重題詩に、宦游自レ此心常別、世事從レ今口不レ言。【二〇】書二咄咄一　晉、殷浩傳に、雖レ被二放廢一、口無二怨言一、但終日書レ空作二咄咄怪事四字一而已。

【題義】趙成伯が密州に倅であつた時、蝗蟲の害が甚しかつたので、捕レ蝗といふことを詩に作つて寄せられた。其の詩に次韻したものである。紀昀いふ、不レ免レ有二努力之狀一と。

【詩意】麥の穂は秀でて、人の丈位に長くなつた。穀の苗も、牛を隠す程に生長した。然るに天帝には何の御心で、蝗蟲を降したまうたのであるか、併し蝗蟲はどこまでも除かなければならない。故に之を驅り、之を擾ふべきことは、其の都度お上の令典に著はれて居る。農事は一日も忽にすることが出來ないからである。かくて我が僕は日日の勞働の爲に、手も足も皸となつた。我馬も毎日耕作に使はれて、全く疲れてしまつた。其の爲に、飛揚することも少くなり、筋力も已に竭きた。もし、我に百篇の詩の心を慰めることでもなかつたなら、何を以て睡魔の兀兀たるを醒まさうぞ。最初は、田間の溝を疏するがやうに心地よく、だんだん海水を決するがやうに、愉快となつて來た。昔、漢の陳遵は、河内の太守となつて、書を善くするもの十人を召して、私書を治めしめたといふことであるが、往來の文通は十吏に書かせて、其の手腕の脱けるやうになつても歇めることを容さなかつた。前漢の瀧嬰は、魏勃が齊王に反を敎へたと聞き、既に呂氏を誅し、齊兵を罷めた後に使を使はして魏勃を責問した。勃は失火の家、豈、先づ丈人に言つて、後に火を救ふに暇あらんやと分疏した。併し、退き立ち、股戰して言ふことが出來なかつた。灌將軍は、之を熟視して笑つていふやう、人は魏勃を勇ありと評判して居るも、全く安庸人のみと。君も平生、妄庸を輕んずる。そして熟視して魏勃を笑つて居られる。我は君のすぐれた氣象のあるのを愛する。君は詩壇に雄飛して斬伐を專らにして居る。其の後塵を逐ふものもない。又、今の世、民の疾苦は、何れの時か休まうぞ。併し、吏たるもの、職を越え、法を踰えて名譽を取るは、譬へば猶は薄冰を蹑んで白日を待つやうなもので、殆いと謂ふべきである。それで愼んで世事を口にすること勿れ、かの晉の殷浩のやうに、ただ終日、空に向つて咄咄怪事の四字を書するのみで居られたがよい。

登二常山絶頂廣麗亭一

西望穆陵關。東望琅邪臺。酌二常山之絶頂一。廣麗亭に登る。西のかた穆陵關を望み、東のかた琅邪臺を望み、

南望九嶷山。北望空飛埃。
相將叫虞舜。遂欲歸蓬萊。
嗟我二三子。狂飲亦荒哉。
紅裙欲嶷去。長笛有餘哀。
清歌入雲霄。妙舞纖腰回。
自從有此山。白日封蒼苔。
何嘗有此樂。將去復徘徊。
人生如朝露。白髮日夜催。
棄置當何言。萬劫終飛灰。

【字解】【一】穆陵關　史記、齊世家に、管仲曰、昔、召康公命我先君太公曰、東至於海、西至於河、南至於穆陵、北至於無棣。唐、地理志に、沂州沂水縣龍山北有穆陵關。元和郡縣志に、穆陵山在沂水縣北一百九十里。名勝志に、大峴山在臨朐縣東南、上有穆陵關。【二】琅邪臺　玉注に、穆陵山在沂水縣、琅邪山在沂水・朐山・諸城三縣界、始皇嘗登ㇾ山樂ㇾ之、作琅邪臺、地在今諸城東南。史記、始皇二十八年に、南登琅邪、留三月、徒三黔首三萬戸琅邪臺下、立ㇾ石刻頌二秦德一。太平寰宇記に、臺基三層、層高三丈、上有始皇碑、碑有六百字可ㇾ識、餘多剝落、李斯書。【三】九嶷山　錢塘臨安に在り。或はいふ、寧州諸城縣に在りと。名勝志に、廬山在二諸城縣東南四十五里一。又、二十五里爲二九嶷山一、高聳摩ㇾ空、常有二嶷人一居ㇾ之、峰巒十有一、盤石十有八。本集に有二九嶷一、今已屬二京東一。自注にいふ、九嶷在二東武一、奇秀不ㇾ減二匡廬一と。匪蕩は山の名。浙江、樂清縣東九十里にある。【四】飛埃　蘇題、

南のかた九嶷山を望み、北望すれば空しく飛埃。
相將ゐて虞舜を叫び、遂に蓬萊に歸せんと欲す。
嗟我二三子、狂飲亦荒なるかな。
紅裙嶷居せんと欲し、長笛餘哀あり。
清歌雲霄に入り、妙舞纖腰回る。
此山ありしより、白日蒼苔を封ず。
何ぞ嘗て此樂あらん、將に去らんとして復徘徊。
人生は朝露の如く、白髮日夜催す。
棄置當に何を言ふべき、萬劫終に飛灰。

泰遊の詩に、飛埃結二紅霧一、湧蓋飄二青雲一。【五】叫虞舜　叫は一本に呼に作る。杜子美の慈恩塔詩に、回ㇾ首叫二虞舜一、蒼梧雲正愁。【六】歸二蓬萊一　盧同謝二孟諫議寄二新茶一詩に、蓬萊山在二何處一、玉川子乘二此清風一欲ㇾ歸去。【七】嗟我二三子　韓退之、山石篇に、嗟哉吾黨二三子。【八】狂飲　蘇舜欽の詩に、放歌狂飲不ㇾ知ㇾ曉。【九】紅裙欲二嶷去一　趙飛燕外傳に、帝嘗與ㇾ后坐二瀛州閣一、后歌二歸風送遠之曲一、帝以二文犀筋一擊二玉甌一、令二后所ㇾ愛侍郎馬無方、吹ㇾ篴倚二后歌一、中流歌酣、風大起、后揖ㇾ帷曰、仙乎仙乎、去ㇾ故而就ㇾ新、順ㇾ風揚ㇾ音、無方長嘯細指、與相屬、帝曰、無方爲ㇾ我持ㇾ后、遽捨ㇾ篴持二后履一、久ㇾ之、風霽、后泣曰、帝思ㇾ我、使二我仙去不ㇾ得、悵然泣數行下、他日宮妓成ㇾ羣爲ㇾ綸、健ㇾ留仙羣。【一〇】餘哀　古詩に、一彈再三歎、慷慨有二餘哀一。【一一】清歌　謝靈運の擬鄴中詩に、清歌拂二梁塵一。【一二】妙舞纖腰回　白孔六帖に、飛燕舞腰宛轉、若二流風之回雪一。謝希逸の月賦に、敢二妙舞一兮清縣。【一三】自二從有一此山一　晉、羊祜傳に、登二峴山一、顧謂二鄒湛等一曰、自ㇾ有二宇宙一、便有二此山一、由來、賢達勝士、登ㇾ此遠望如ㇾ我與ㇾ卿者多矣、然湮滅無ㇾ聞、使二人悲傷一、如百歲後有ㇾ知、魂魄猶應ㇾ登二此山一也。【一四】白日　孔融の詩に、浮雲翳二白日一。【一五】棄置　文選、魏文帝の詩に、棄置勿二復陳一。【一六】萬劫　梁、簡文帝の文に、萬劫不ㇾ朽。劫は梵語、劫籃の略。極めて永い時間。三輔黃圖に、漢武帝穿二昆明池一、極深、悉是灰墨、有二方士一、言、此天地劫灰之餘。【一七】飛灰　唐、陰先行の詩に、重陽初啓ㇾ飾、無射正飛ㇾ灰。無射は十二律の一。

【題義】此詩は會稽常山の絶頂廣麗亭に登臨した時の感興を寫したのである。紀昀いふ、篇幅不ㇾ長而氣脈極濶と。又いふ、一起從老杜熊羆咆二我東一四句上化出、好在作二起筆一、若在二中間一、則凡語矣と。

【詩意】常山の絶頂に登つて、四方を眺めると、西方には穆陵關を望み、東方には琅邪臺を望み、南方には九嶷山を望み、北の方を望むと、空しく飛埃の紅霧を結んで居るのを見る。首を回らすと、蒼梧の方は、雲がかかつて居るので、相將ゐて虞舜を叫ぶ。虞舜は南に巡狩して蒼梧の野に崩れた。

遂に蓬萊山を思ふ。蓬萊山は何處ぞ、此の清風に乘じて歸り去らうと思ふ。ああ我黨の二三子は、放歌し、狂飮して夜の明けるをも知らないで居る。亦、荒なるかな。昔、漢の成帝は、趙飛燕をして歸風送遠の曲を歌はしめた。歌が酣にして、風が大に起つた。飛燕は袖を揚げ、仙か仙か、故を去つて新に就かんと呼んだ。帝は侍郎をして之を持せしむ。風が霽れると、飛燕は泣いて曰く、帝は我を思ひ、我をして仙去することを得ざらしむと。歌に合せた長笛に餘哀があり、清歌は梁塵を拂つて、雲霄に入る。飛燕の舞腰は、宛轉として流風回雪のやうであつた。宇宙ありしより此山がある。此山があり、しより白日が蒼い苔を封ずる。何ぞ嘗て當年の此の樂があらうぞ。將に去らうとして、また徘徊する。人生は朝露の日を待つて晞くが如く、まことに果敢無い。白髮日夜に催して、餘命幾くもなくなる。萬事棄置して、復、陳ぶることなかれ。萬劫極みないと言つても、終に灰を飛ばすやうなものである。

薄薄酒二首　薄薄酒　二首

膠西先生趙明叔。家貧好飮。不擇酒而醉。常云。薄薄酒勝茶湯。醜醜婦勝空房。其言雖俚而近乎達。故推而廣之。以補東州之樂府。既又以爲未也。復自和一篇。聊以發覽者之一噱云爾。

薄薄酒。勝茶湯。
醜醜婦。無寵。
醜妻惡妾勝空房。
五更待漏鞾滿霜。
不如三伏日高。
睡足北窗涼。
珠襦玉柙。
萬人相送歸北邙。
不如懸鶉百結。

【訓讀】膠西の先生趙明叔、家貧うして飮を好み、酒を擇ばずして醉ふ。常にいふ、薄薄の酒も茶湯に勝り、醜醜の婦も空房に勝れりと。其言は俚なりと雖も、達に近し。故に推して之を廣め、以て東州の樂府を補ふ。既にして又以て未しと爲し、復自ら一篇を和して、聊か以て覽者の一噱を發すと云ふ爾。

【字解】【一】趙明叔　名は杲卿。密州の總貫進士、行義あり。【二】一噱　說文、噱、大笑也。

薄薄酒　酒味淡薄で醇くない。春秋繁露に、厚厚而薄薄。【二】勝二茶湯一　王褒の宮詞に、宮人手裏過二茶湯一。【三】醜醜布　管子に、粗惡假レ牛馭、醜布衣令組縫。【四】醜妻惡妾　古樂府に、雁鶩が道上逢二三叟一詞に、道上逢二三叟一何以得二此妻一、中叟前致レ詞、室內妻妾醜。睡北窗涼に足るには。【五】勝二空房一　王粲の詩に、回レ身入二空房一。【六】待漏　國史補に、百官早朝、必立二馬於望仙建福門外一、宰相部於二光宅東坊一、以避二風雨一。元和初、始置二待漏院一。宋朝は丹鳳

獨坐負朝陽。
生前富貴死後文章。
百年瞬息萬世忙。
夷齊盜跖俱亡羊。
不如眼前一醉。
是非憂樂兩都忘。

【題義】此詩は熙寧九年六月、密州の作である。（東坡四十二歳の時）趙明叔が語を把つて題となし、其の意を推し廣めて、樂府體にものしたのである。紀昀いふ、此種究是野調、以二近レ俗易レ解、故傳誦者衆耳と。

【詩意】酒味の薄いといふ薄薄酒は、魯酒千鍾不レ醉レ人の類である。此の如き酒でも、飲めば醉を取つて、心を樂ましめる。茶湯よりは勝つて居る。麻縄太くて粗い布は、賤者の服する所、固より鮮美ではないが、身を蔽うて暖を取るに異はない。故に衣裳の無いよりは勝つて居る。醜い妻や惡い妾、目を悅ばしめるには足らないが、室を僧にし、使令に奉ずるは同じである。故に空虚の房中に、獨居するよりは勝つて居ると思ふ。宰相たる人が、五更の時分に、朝廷に朝すると、天子の門闕が猶ほ未だ開けないから、暫く門外に在つて、禁中の漏刻の曉を報じて門の開くのを待つて居る。冬の時、昧爽に朝するから、晨の霜が靴中に滿つるのである。かやうに、宰相の高官となつて、五更、朝に進んで漏を待ち、寒を凌いで立ち、靴中に霜を滿たすのと比、北窗の清風が颯と來て涼しい下で晝寢し、睡が足つて快きが勝つて居る。珠襦や玉柙、珍奇の葬具で禮をなし、萬人相送つて北邙に埋葬されんよりは、生きて懸鶉百結の賤しい衣を被て獨坐し、朝日を負ひ、俯して背を日に曬す快樂の方が餘程勝つて居る。世に生れて未だ死せざる前に、富貴なるも、死んだ後は、只、文章のみが世の中に遺る。百年の星霜は、一瞬一息の間の如くして、萬世も速かに推し移つて忙はしい。伯夷・叔齊は、一門の右に待漏院を置く。これ宰相が漏を待つの處である。【六】滿レ霤　白樂天の晏起詩に、早朝霤滴レ衣。【七】三伏　夏至の後、三庚を初伏となし、第四庚を中伏となし、立秋の後、初庚を末伏となす。初伏より末伏に至るまでの間、極熱の時を三伏といふ。【八】日高睡足　白樂天の詩に、酒醒夜深後、睡足日高時。【九】北窗涼　晉、陶潛明傳に、夏月虛閑高臥北窗之下、清風颯至、自謂羲皇上人。【一〇】百年瞬息萬世忙　百年瞬息萬世忙はし。【一一】夷齊盜跖俱亡羊　夷齊盜跖倶に羊を亡がす、【一二】珠襦玉柙　漢の文帝、儉め、東園の祕器・珠襦・玉柙を以て霊霓に賜ふ。西京雜記に、漢帝送レ死、皆珠襦玉匣、匪形如二鎧甲一、連以二金縷一。襦は短衣、珠を以て飾とする。玉匣は天子の葬に、之を用ひて其の體を東ぬ。【一三】北邙　北邙山は河南、偃師縣の東北に在り。王公多く其の地に葬る。文選、七哀詩に、北邙何纍纍。陶潛明の詩に、一旦百歳後、相與還二北邙一。唐人の詩に、孟郊死葬北邙山。【一四】懸鶉百結　敝れ裂けたる百處も結び集めた衣。逸士傳に、甯戚商旅の間に居り、以二飯牛一自給、擊二牛角一而歌。桓公聞レ之、以二殘粟縁糸一爲レ衣、敝二百結衣一。【一五】負二朝陽一　列子に、宋國有二田夫一、曾衣二縕絮一、自曝二於日一、顧謂二其妻一曰、負レ日之暄、人莫二知者一、以獻二吾君一、將レ有二重賞一。【一六】夷齊　伯夷・叔齊。【一七】亡羊　莊子、駢拇篇に、臧與レ穀二人相與牧レ羊、而俱亡二其羊一、問二臧奚事一、則挾レ策讀レ書、問二穀奚事一、則博塞以遊、二人者、事業不レ同、其於レ亡レ羊均也、伯夷死二名於首陽之下一、盜跖死二利於東陵之上一、二人者所レ死不レ同、其於二殘レ生傷レ性均也、奚必伯夷之是、而盜跖之非乎。【一八】兩都忘　韓退之が忽忽の詩に、生死哀樂兩相忘、是非得失付二閒人一。

じでないが、かの臧と穀との二人、相與に羊を牧して倶に羊を亡がしたやうに、歸する所は、皆同じく死んでしまひ、彼れ此れの別もない。因襲や羈絆に苦められんよりは、眼前酒を呼び、一醉して世上の是非憂樂、すべて忘れて樂んだ方が增しである。

薄薄酒飲二兩鍾一。　薄薄の酒　兩鍾を飲み、
蠢蠢布著二兩重一。　蠢蠢の布　兩重を著く。
美惡雖レ異醉暖同。　美惡は異りと雖も醉暖は同じ。
醜妻惡妾壽二乃公一。　醜妻惡妾乃公を壽にす、
隱居求レ志義之從。　隱居志を求めて義に之れ從ふ。
本不二計較一東華塵　本計較せず東華の塵
土北窗風。　土北窗の風。
百年雖レ長要有レ終。　百年長しと雖も要するに終あり、
富死未二必輸一生窮。　富死未だ必ずしも生窮を輸さず。
但恐珠玉留二君容一。　但恐る珠玉君が容を留め、
千載不レ朽遭二樊崇一。　千載朽ちざるも樊崇に遭ふを。
文章自足レ欺二盲聾一。　文章自ら足レ欺二盲聾一。
誰使二一朝富貴面一　誰か一朝富貴をして面
發レ紅。　紅を發せしむ。
達人自達酒何功。　達人は自ら達す酒何の功かある、
世間是非憂樂本　世間の是非憂樂は本來
來空。　來空し。

【字解】【一】兩鍾　鍾は酒器。孔叢子に、堯舜千鍾。【二】醜妻惡妾　妾娶二乃公一　應璩の古樂府に、道上逢二三叟一、何以得二此壽一、中叟前致レ詞、室内妻妾醜。乃公は、前漢の高帝紀に、幾敗二乃公事一。【三】隱居求レ志義之從　王注に、言二醜婦可二與同醜一、如二梁鴻孟光一是也。【四】計較　肉量といふに同じ。三國志、孫堅傳に、夜臨見二袁紹一、爭レ地計較。【五】東華塵土云云　東華は門の名。王注に、東華門、百官入朝、所二從出入一之門也。東坡の從二駕景靈宮一詩の注に、前輩戲詩、有二西湖風月、不レ如二東華軟紅土一。【六】北窗風　李太白の詩に、清風北窓下、自謂羲皇人。陶淵明は夏月虛閑、北窗の下に高臥す。清風風として至る、自ら謂ふ羲皇上の人と。【七】珠玉留二君容一云云　後漢、劉盆子傳に、赤眉發二掘諸陵一、凡有二玉柙斂者一、率皆如レ生、故多行二淫穢一。【八】遭二樊崇一　漢の王莽傳に、赤眉樊崇等入レ關、燔二長安宮室一爲レ墟、宗廟・園陵、皆發掘、

嚭鄧陵杜陵完。文帝霸陵、宣帝杜陵。【九】文章欺二盲聾一　莊子、逍遙遊に、瞽者、無二以與二乎文章一、聾者、無二以與二乎鐘鼓一。【一〇】面發レ紅　古樂府に、今日牛羊上二邱壟一、當時近前面發レ紅。【一一】達人　賈誼、鵩鳥賦に、達人大觀兮、物亡レ不レ可。【一二】酒何功　白樂天、嘗て酒功贊を作る。

【詩意】我は味の薄い酒、兩鍾を飲み、蠢い布の衣、兩重ねを著ける。薄い酒と、蠢い布、美惡は異つても、醉と暖とは同じである。又、醜い妻や、惡い妻は、我を長壽にした。古樂府にも、道上三叟に逢ふ、何を以て此壽を得たる、中叟は前んで詞を致す、室内の妻妾醜ければなりとある。昔、漢の梁鴻（字は伯鸞）は孟氏の女を娶る、孟光といふ。肥醜にして黑く、力能く石を擧げる。共に霸陵山中に入り、耕織を以て業とし、咏詩彈琴、以て自ら娛んだといふことであるが、隱居して志を求

め、義に之れ従ふのである。西湖の風月は、東華の軟紅土に如かないといふが、東華門の塵土と清風北窓の下と、必ずしも計較をしない。百年は長いやうであるが、要するに終がある。富んで死するものは、未だ必ずしも生きて窮することを輸さない。但恐れるのは、珠玉を以て君が容を留め、千載朽ちないやうにしても、赤眉の賊樊崇の如きものの發掘に遭ふことである。樊崇等は關に入り、長安の宮室を燒いて墟とし、宗廟・園陵皆發掘した。赤眉の賊が諸陵を發掘したとき、凡そ玉柙斂するもの、率ね皆生けるが如くであつたといふ。瞽者は、以て文章に與るなく、聾者は、以て鐘鼓に與るなしといふが、文章は、自ら盲者や聾者を欺くに足るのである。誰か一朝、富貴のものをして、面に紅を發し、邱隴に埋沒するを免れしめる。（文章は不朽の盛事である）達人は大觀する、必ずしも酒の力を借らない。白樂天は嘗て酒功贊を作つたが、酒、何の功かある。世間の是非憂樂、觀じ來れば、本來空しく、是もなく非もなく、憂もなければ樂もない。

（一）同年王中甫（二）挽詞

同年王中甫の挽詞

（三）先帝親收十五人。　先帝親しく收む十五人、
四方爭看擊（四）鵬鶉。　四方爭ひ看る鵬鶉を擊つを。
如君事業眞堪用。　君が事業の如きは眞に用ゐるに堪へたり、
出處升沈十年後。　出處升沈十年の後、
死生契濶（五）幾人存。　死生契濶幾人か存する。
他時京口尋遺跡。　他時京口遺跡を尋ねば、
宿草猶應有（六）淚痕。　宿草は猶ほ應に淚痕あるべし。

【字解】【一】同年　同じ年に、進士の試驗に及第したもの。國史補に、俱捷、謂ふ之同年、捷は及第の意。前に屬一注す。【二】王中甫　名は介、常山の人。性強記、直氣を負ふ。制科に擧げられ、累官して諫書校理に至る。王安石と游ぶも、未だ嘗て相下らず。熙寧の初、安石召され、復、辭せず。中甫、詩を寄せて曰く、草廬三顧動二興雲一、豪俊一空生二曉寒一と、蓋し諷する所があつた。【三】挽詞　挽歌に同じ。晉書、

顧我衰遲不レ足レ論。　顧みるに我の衰遲論ずるに足らず。

【注義】此詩は、熙寧九年六月の作である。王安石既に政を得。神宗は羣臣に轉對すると、中甫、進疏していふ、願陛下師レ心、勿レ師レ人と。帝、之を納れ、以て安石を喩し、且つ奏疏を以て之に示した。安石は樂まないで、深く其の言を斥けたさうである。王安石が王中甫を挽く詞にいふ、同學二金陵一最少年、奏書曾用牘三千、盛名非二復居一人後一、壯歲如何棄レ我先、種橘園林無二舊業一、采蘋洲渚有二新篇一、蒜山東路春風綠、埋沒誰知太守阡と。紀昀は此詩を評して、其言沈著、非二他挽詩有レ文無レ情之比一と

出處升沈　出處は出でて官に仕へると、退いて家に處ることである。易經に、君子之道、或出或處。升沈は、浮沈といふに同じ。李太白の詩に、升沈應二已定一、不レ必問二窮平一。【七】死生契濶　詩、邶風に、死生契闊、與レ子成レ說、執二子之手一、與レ子偕老。【八】幾人存　杜子美の詩に、他時一笑後、今日幾人存。【九】淚痕　李太白の詩に、但見淚痕濕、不レ知心恨レ誰。

言つた。

【詩意】仁宗は親しく賓良科出身の十五人を收められた。十五人は何詠・蘇紳・田況・張方平・錢彥遠・吳奎・錢藻・王介・蘇軾・蘇轍・富弼・吳育・錢明逸・夏噩・陳舜兪である。當時、四方の人は爭うて諸賢が鵬翼の活躍振を刮目して看んとしたのであるものとした。顧みれば我の衰遲せる、固より論ずるに足らないが、前に擧げた諸賢が、或は出でて官に仕へ、或は退いて家に處る。かくて浮沈十年の後、死ぬとも、生きるとも、會ふとも、離れるとも、互に約束は違へないといふ間柄の人人も、今、幾人か存する。東坡の自注に據れば、富鄭公・張宣徽・錢純老及び東坡兄弟のみである。他日、京口に、諸賢の遺跡を尋ねる時、枯れ殘りの草に、猶ほ淚を流した痕のあることに氣付かれるであらう。

【餘錄】續通鑑長編に、仁宗朝、策二試賢良方正能直言極諫科一、天聖（仁宗の年號）八年七月、何詠、景祐（仁宗の年號）元年六月、蘇紳、五年、卽實元（仁宗の年號）元年七月、田況・張方平、慶曆（仁宗の年號）六年七月、錢彥遠、皇祐（仁宗の年號）元年八月、吳奎、嘉祐（仁宗の年號）四年八月、錢藻、六年八月、王介・蘇軾・蘇轍共十人、又、茂才異等科、天聖八年七月、富弼、才識兼茂明二於體用一科、景祐元年六月、吳育、慶曆三年八月、錢明逸、嘉祐二年七月、夏噩、四年八月、陳舜兪、共五人。

奉和成伯大雨中會客解嘲

成伯大雨中客を會し嘲を解くを奉和す

樂事難(三)并眞實語。坐排用(レ)意多乖(二)誤。興來取(四)次或成(レ)歡。瓦(五)鉤却勝(二)黃金注(一)。我生禍患久不(レ)擇。肯爲(二)一時風雨(一)阻。天公變化豈有(レ)常。明月行看照(二)歸路(一)。

【字解】〔一〕成伯　趙成伯は、個書郎を以て密州に倅たり。前に出づ。〔二〕解嘲　人のあざけりを辨解する。揚雄に解嘲の文あり。漢書本傳及び文選等に載す。〔三〕樂事難并　謝靈運、擬魏太子鄴中集詩序に、天下良辰・美景・賞心・樂事、四者難レ并。〔四〕取次　白樂天の詩に、醉把二花枝一取次吟。〔五〕瓦鉤　鉤は鉤心。屋の中心の窠る所。杜牧之の阿房宮賦に、鉤心鬬角、盤盤焉囷囷焉。

【題義】趙成伯が大雨中に客を會し、嘲を解いて、詩を賦した。其の詩を和韻したのである。

【詩意】良辰と美景と賞心と樂事と、四者は幷せ難いと言つた謝靈運の言葉は、眞に實を穿つて居る。客を會して、坐排に意を用ひるも、兎角、乖誤することが多い。興が來ると、つぎつぎ次第に歡を成すので、歡を得れば、瓦の鉤心も、黃金の柱に勝る。我が生涯は、禍患の來る、久しく之を擇び取ら

なかつたが、宵て一時風雨の爲に阻められたのである。天公の變化は常がない。忽ち晴れて、又、忽ち曇る。今は大雨に阻められても、明月は行く〳〵歸路を照らすことにならう。

七月五日二首

避レ謗詩尋レ醫。畏レ病酒入レ務。
謗を避けて詩醫を尋ね、病を畏れて酒務に入る。

蕭條北窗下。長日誰與度。
蕭條として北窗の下、長日誰と與にか度らん。

今年苦二炎熱一。草木困二薰煮一。
今年炎熱を苦しみ、草木薰煮を困しむ。

況我早衰人。幽居氣如レ縷。
況んや我早衰の人、幽居氣縷の如し。

秋來有二佳興一。秋稻已含レ露。
秋來佳興あり、秋稻已に露を含む、

還復此徵吟。往和二糟牀注一。
還復此に徵吟、往いて糟牀の注ぐに和す。

【字解】【一】避レ謗　唐、陸贄傳に、避レ謗不レ言レ書。いふ、謂二此レ酒不レ飲也と。晉、顧榮傳に、恆縱レ酒閭巷、謂二友人一曰、惟酒可二以忘レ憂、但無二如レ作レ病何一耳。【四】蕭條　物寂しい。唐の西都賦に、原野蕭條。【五】長日　遙篤、唐宣宗紀に、令狐綯擬二李遠杭州刺史一、上曰、吾聞、遠詩云、長日惟消一局棊、安能理レ人、綯曰、詩人託レ此爲二高興一耳、未二必實然一。【六】幽居　幽棲に同じ。蕉窗の詩に、鶴峯寺後著二幽居一。【七】氣如レ縷　杜子美の詩に、漁汙臥二江亭一、夏深氣如レ縷。【八】秋稻　もちいね。晉書、陶潛傳に、公田悉令二吏種一二秋稻一。【九】徵吟　魏文帝、

燕歌行に、短歌微吟不レ能レ長。【一〇】糟牀注　杜子美の羌村詩に、賴知禾黍收、已覺二糟牀注一。糟牀は、酒の糟をしぼる臺。きびなどの收穫がすんだので、糟牀に酒の汁が滴たるかの心地するといふ意。

【題義】此詩は熙寧九年七月五日の作。超然臺に登つて、超郎中成伯に答へ、其の詩に和したのである。施注に、法令所レ載、尋レ醫、爲レ去レ官、入レ務、乃住レ理、詩中所レ用蓋出レ此と。紀昀は此詩を評して、不レ作二古音一、而自有二古意一と言つた。

【詩意】謗を避けて、詩を作らない。又、病を畏れて、酒も飲まない。（架閣酒無レ債、編修詩未レ工といふ詩もある。）物寂しく北窗の下に高臥し、夏の長い日を、誰と與にか度らうぞ。今年は殊に炎熱を苦しみ、草も木も、薰煮されてしまつた。まして我は早衰の人、幽居して力なく、氣も縷の如くである。併し、秋になると、さすがに佳興が多く、秋稻も、已に露を含んだ。また此に小聲にて詩を歌ひ、往いて杜子美が頼ひに知る禾黍の收められるを、已に覺ゆ糟牀の注ぐを、と言つた詩に和して見よう。

何處覓二新秋一。蕭然北臺上。
何れの處にか新秋を覓めん、蕭然北臺の上。

秋來未二云幾一。風日已清亮。
秋來つて未だ云に幾ならず、風日已に清亮。

雲間鴈二孤翠一。林表浮二遠漲一。
雲間孤翠鴈え、林表遠漲を浮ぶ。

新凉漸堪レ剝。晩瓜猶可レ餉。
新凉漸く剝ぐに堪へ、晩瓜猶ほ餉すべし。

西風送落日。萬竅含悽愴。
念當急行樂。白髮不汝放。

【字解】【一】何處覓新秋二云云　李太白の詩に、何處覓三秋望一、蕭蕭北窓竹。【二】風日　晉書、陶潛傳に、環堵蕭然、不蔽三風日一。【三】清亮　後漢書、胡廣傳に、清亮自然、被レ褐懷レ寶。【四】雪間雖二孤槊一　韓詩外傳に、展而書間。藝文類聚、徐湛賦に、被二殘心於孤槊一。【五】林表　文選、謝玄暉の休沐重還道中の詩に、林表明霞斷、巖際重花落。【六】新涼漸堪レ刺　詩、幽風、七月に、八月剝レ棗、一之日觱發、二之日栗烈。【七】晩瓜猶可レ餉　白樂天の遊二原上一詩に、新瓜來未レ全赤、晩瓜有二餘蔓一。【八】西風送二落日一　西風は秋風。五行説によると、秋を西に配するからである。李太白の詩に、八月西風起。文選、謝靈運、盧陵王墓下詩に、落日次二朱方一。朱方は春秋時代には吳の地。今の江蘇丹徒縣。【九】萬竅　莊子、齊物篇に、萬竅怒呺、萬木の穴が風を受けて鳴り響く。前に出づ。【一〇】悽愴　禮、祭義に、秋霜露既降、君子履レ之、必有二悽愴之心一、非二其寒之謂一也。【一一】行樂　楊惲の詩に、人生行樂耳、須二富貴一何時。李太白の詩に、行樂須レ及レ春。【一二】白髮不二汝放一　杜子美の詩に、苦レ遭二白髮不一相放一。白樂天の詩に、紅顏今日難レ敵レ我、白髮他年不レ放レ君。

【詩意】時、秋にして積雨霽れ、新涼は郊墟に入るとか、何れの處にか其の新秋を覓めようぞ、蕭然たる北臺の上に秋を見るのである。秋になつて、まだ幾何も過ぎないのに、風日は已に淸亮で、大空も澄み渡つて、雲の間に孤翠が聳えて居る。又、森の外に遠く張つて居るものは、連山が水波のやうに浮んで居るのであらう。新しい凉も、だんだんもぎ取るに堪へ、晩瓜も餘馨があつて、猶は辨當とすることが出來る。かくて秋の風が落日を送り、萬木の穴が風を受けて鳴り響くと、萬象自ら悲しみと痛みとを含むやうになる。當に速かに行樂すべきである。人生は行樂のみ。なせといふに、白樂

天も言つたやうに、紅顏今日我を欺くと雖も、白髮他年君を放たずだからである。

趙郎中見和。戲復答之

趙郎中和せられ、戲れに復之に答ふ

趙子吟レ詩如レ潑レ水。
一揮三百六十字。
奈何效レ我欲レ尋レ醫。
恰似西施藏二白地一。
趙子飮レ酒如レ淋レ灰。
一年十萬八千杯。
若不レ令二君早入一レ務。
飮レ竭東海一生二黃埃一。
我衰臨レ政多二繆錯一。
羨君精采如二秋鶚一。
頗哀二老子一令二日飮一。

趙子詩を吟ずる水を潑するが如し、
一揮三百六十字。
奈何ぞ我に效うて醫を尋ねんと欲する、
恰も似たり西施の白地に藏るるに。
趙子酒を飮む灰を淋るが如し、
一年十萬八千杯。
若し君をして早く務に入らしめずば、
東海を飮み竭して黃埃を生ぜん。
我衰へ政に臨んで繆錯多し、
羨む君が精采秋鶚の如きを。
頗る老子を哀れみ日に飮ましむ、

【字解】【一】如レ潑レ水　潑はそそぐ意。實斷に、以レ潑潑レ耕。韓退之の寄二盧立之一詩に、文如レ翻レ水成、初不二用レ意爲一。【二】三百六十字　合注に、趙彧職和三矣、七月五日二首詩、則共得三三百六十字一矣。【三】尋レ醫　詩を作らざるをいふ。前にも注した。【四】西施藏二白地一　白樂天の簡簡吟に、十三行坐事二調品一、不二肯迭頭白地藏一。行坐は、あるいたり、坐つたりする。調品は、行儀作法を學ぶ。迭頭白地藏は、提迭藏のことで、匿妨をいふ。【五】如レ淋レ灰　宋、陸游の老學庵筆記に、唐人愛レ飮二灰酒一、陸龜蒙詩、酒滴灰香似二去年一。宋、史照頌の學齋佔畢に、其

爲レ君坐嘯主二畫諾一。君が爲に坐嘯して畫諾を主どる。

人である。【六】十萬八千杯　李太白、襄陽歌にいふ、百年三萬六千日、一日須レ傾三三百杯一と。日を以て之を計れば、即ち一年當に十萬八千杯を飲むべきである。【七】入レ晉　酒を止めて飲まざるをいふ。前にも注した。【八】黃埃　紅塵に同じ。飽照の蕪城賦に、直視千里外、惟見起二黃埃一。又、神仙傳に、麻姑曰、海中行復揚レ塵。【九】臨レ政多二餘閒一　漢、童仲舒傳に、臨レ政而願レ治。【一〇】精采如二秋鶴一　精采は、生き生きした風采、揚雄の書、劉勳精采。晉書、嵇康傳贊に、精采秀發。秋鶴は、杜子美の詩に、鶴俟骨蘚精神聚、幡侯骨蘚之、蜀の人）爲二劉關眞贊一云、雲鶴出レ水、秋鶴愛レ風。【一一】老子含二日飲一　後漢、馬援傳に、援爲二隴西太守一、任レ更以レ職、但總二大體一而已、賓客故人、日滿二其門一、諸曹吏、時白二外事一、輒曰、伏波將軍、飲レ酒乃爾、此丞掾之任、何足二相煩一、願哀二老子一、使得二遨遊一、若大姓侵二小民一、黠羌欲レ犯レ法、此太守事耳。日飲は、漢、袁盎傳に、盎使二吳相一、辭行、兄子種謂レ盎曰、吳王驕日久、國多レ姦、南方卑濕、棘（種稱二叔父字一曰レ棘）能日飲亡レ何（更無二餘事一）說二王毋一反而已、如レ此幸得レ說。【一二】坐嘯主二畫諾一　後漢、黨錮傳に、汝南太守宗資任二功曹范滂一、南陽太守成瑨亦委二功曹岑晊一、二郡爲諺曰、汝南太守范孟博、南陽宗資主二畫諾一、南陽太守岑公孝、弘農成瑨但坐嘯。畫諾は猶ほ簽字（署名）と言ふが如し。凡そ文書契約、此を以て承認の據となす。

【題義】此詩は熙寧九年七月の作で、趙郎中成伯が和せられた詩に復答へたのである。紀昀いふ、亦是滑稽と。

【詩意】趙郎中が詩を吟ずるは、水を潑するがやうで、一たび筆を揮ふと、三百六十字が成つた。かかる奇才の君が、いかんぞ我に效つて詩を作らずに居ようとする。それは恰も、西施のやうな美人が人目を避けて、捉迷藏をするやうなものである。又、趙郎中はよく酒を飲む。飲むこと灰を漏るがやうである。一年三百六十日、百年三萬六千日、一日に三百杯を傾け、日を以て之を計ると、一年に十萬八千杯を飲み竭して、紅塵を生ずることにでもなるであらう。我は衰へ、政に臨んで繆錯のことが多い。君が生き生きとした氣象の秋鶴（鶴は鷹鸇の屬）の如きを羨ましく思ふ。昔、馬援は隴西の太守となつて、吏に任するに職を以てし、ただ大體を總べるのみであつた。賓客や故人が日に其門に滿ちた。諸曹吏が時に外事を白すると、これ丞掾の任であると。何ぞ相煩はすに足らん。顏る老子を哀れみ、遨遊を得しめよ。若しも大姓が小民を侵し、黠羌が旅を拒がうとするときは、此れ太守の事であると言つたさうである。今、顏る老子を哀れみて日に酒を飲ましむ。ここに君が爲に坐嘯して、文書の署名を主どらうと思ふのである。

次韻周邠寄二雁蕩山圖一二首　周邠が雁蕩山圖に寄するに次韻す　二首

【字解】【一】周邠　字は開祖、錢塘の人。東坡は杭に倅たること三年、開祖と數ゝ湖山の游に從つたことは酬唱に見えて居る。故にいふ、西湖三載與レ君同と。【二】雁蕩山　温州樂清縣に在る。開祖は樂清縣の令たり。【三】指點　杜子美の少年指二點先ツ憑一レ藥翁一。指點先づ藥を採る翁に憑つて、

丹青化出大槐宮。丹青化し出す大槐宮。

眼明小閣浮二烟翠一。眼は明かなり小閣の烟翠に浮ぶに、

齒冷新詩嚼二雪風一。齒は冷かなり新詩の雪風を嚼むに。

二華行看雄二陝右一。二華行くゆく看る陝右に雄なるを、

(九)九仙今已歷二京東一。
(一〇)此生的有二尋レ山分一。
(一一)已覺溫台落二手中一。

慧之傳に、善二丹青一、圖寫特妙。【六】大槐宮　吳聞集に、淳子棻家二居廣陵一、宅南有二古槐樹一、棻醉臥二其下一、夢二紫衣吏召レ棻曰、大槐安國王敎レ命以爲二南柯太守一、及レ覺、尋二其所一レ經由一、乃宅南大槐下蟻穴耳。【七】齒冷　李洞送二遠上人一詩に、齒因レ吟後冷。【八】二華　文選、張平子の西京賦に、殿以二三華一、注にいふ、大華・少華也と見ゆ。山海經に、太華之山削成、而四方其高五千仞、其廣十里、又西八十里曰二小華之山一、注卽小華山。【九】九仙今已歷二京東一　東坡の自注に、時レ赴二河中一、寄二邁太華一、九仙在二東武一、奇秀不レ減二雁蕩一也と。【一〇】此生　杜子美の詩に、自斷此生休レ問レ天。【一一】溫台落二手中一　王注に、雁蕩山在二溫州一、台州有二天台山一、太平寰宇記に、上元二年、分二括州二置二溫州一、以二溫嶠嶺一爲レ名、北至二台州二五百里、台州、卽回浦縣地、三國、吳少帝置二臨海郡一、唐、武德五年、改二台州一、北至二越州二五百里。落二手中一には、杜子美の將レ適二吳楚一詩に、不レ意青草湖、扁舟落二吾手一。白樂天の泛二春池一詩に、天與二愛レ水人一、終焉落二吾手一。

【題義】此詩は熙寧九年十月の作である。東坡が密州に在るとき、周開祖に尺牘を與へていふ、脫二湖北之行一、而得二樂清一、正如二舍レ魚而取一熊掌一也と。又いふ、寄二示山圖一、欲レ求二善本一而不レ可レ得者、新詩清絕、輒和二二首一と。紀昀は此詩を評して、此首却排宕、然二首相連、不レ能レ割二取此首一、凡詩有下可二刪取一者上、有下必不レ可二刪取一者上、覓陵笑二選詩之惜翠一、非二知レ詩者之言一也と。

【詩意】雁蕩山は、龐公といふ藥を採る翁に憑つて、一一指し示された。そして美しく彩色をして大槐安國の宮殿をば寫し出したのである。殊に目も明かであるのは、烟翠に浮んだ小閣である。齒の冷さを覺するのは、雪風を嚼む如き新詩である。太華・少華の二山は、陝西の右に聳えて居る。(卽ち太華の山は華州華陰縣の南に在る。其の高さは五千仞、其の廣さは一十里、少華の山は、其の西八十里に在る。佐命の山とも見える。東坡は河中に赴かんとして、太華の山に密邇したが、九仙は東武に在つて、奇秀であることは、雁蕩山に劣らなく、山勢は京東を壓して居る。此の生涯は、常に山を尋ねる分があるので、已に溫州に在る雁蕩山や台州に在る天台山が、手の中に落ちたことを覺える。

西湖三載與レ君同。
馬入二塵埃一鶴入レ籠。
東海獨來看二出日一。
石橋先去踏二長虹一。
遙知別後添二華髮一。
時向二尊前一說二病翁一。
所レ恨蜀山君未レ見。

(一)西湖三載與レ君同　西湖三載云云　東坡が杭州に通判であつた時、周開祖と屢〻湖山の遊をなした。王注にいふ、公通二守杭州一時、開祖知二錢塘縣一と。(二)鶴入レ籠　顧況の贈二柳相公一詩に、箇身恰似籠中鶴。(三)看二出日一　尙書に、寅賓二出日一、平二秩東作一。漢官儀にいふ、泰山東南名曰二日觀一、雞一鳴時、見二日始出一。齊地記に、秦始皇作二石橋一欲レ過レ海、

行に、指二點銀甁一索レ酒嘗。【一二】採レ藥翁　後漢、龐公傳に、携二其妻子一登二鹿門山一、因採レ藥不レ返。【一三】丹青　漢書、蘇武傳に、畫二竹帛所レ載、丹青所レ畫、何以過二子卿一。晉書、顧

他年攜手醉郫筒。（他年手を攜へて郫筒に醉はん。）

石橋　山志に、天台山石橋、廣不レ盈レ尺、長數十丈、下瞰二絕澗一、波得二平路一、上有二瓊樓・玉闕・碧林・醴泉・瑤草一、神奇莫レ可二名狀一、舊稱二金庭洞天一。天台記に、石橋、長七丈、北闊二尺一、南闊七尺、龍形鱗背、蒓苔甚滑、孫綽天台賦に、踰二蒓苔之滑石一、是也。【三】華髮　晉、羊紘の讓二開府一表に、服二事華髮一。晉、傅玄傳に、十五入二晉門一、一別終華髮。李太白の詩に、華髮不レ耐レ秋、風然成二衰蓬一。【六】郫筒　華陽風俗錄に、郫人刳レ竹爲レ筒、貯レ酒、筒中閉以二藕絲一、包以二蕉葉一、信宿、香達二於外一、然後斲レ之、俗號二郫筒酒一。成都記に、郫縣因レ水得レ名。杜子美の詩に、酒憶二郫筒一不レ用レ沽。

【詩意】我は杭州に倅となり、西湖に在ること三年、其の間、君と同じく湖山に遊んで、酬唱をなしたことは、今に忘れない。當時を憶ふと、出遊しても、馬は塵埃の中に入つた。そして此の身は恰も甕の中の鶴のやうであつた。然るに圖らずも、獨り、東海に來つて、出づる日を看、海中の石橋を先づ渡るときは、恰も長虹を踏むの思がある。遙に知る一別の後は定めし華髮を添へられたことを。そして、折折は酒樽の前で、此の病翁のことをも話されることと存ずる。ただ殘念なのは、蜀山で、君ににお目に懸ることが出來なかつたことである。他年、共に手を攜へて、ここの郫縣の酒に醉はうではないか。（昔、山濤が蜀の郫城を治めたとき、筠管を用ひ、醪醴（重釀の酒）を釀して、酒を作り、浹旬（十日間）にして方に開いた所、香が百步に聞えたさうである。故に蜀の人は、其の法を傳へ、之を郫筒と號けたのである。）

【餘錄】雁蕩山は溫州の樂清縣に在り、天下の奇秀である。然れども古より圖牒に記したものがない。祥符中、玉清宮を造るに因つて、山を伐りて材を取る。方に人あり之を見る。此時、尙ほ未だ名がなかつた。按ずるに西域書に、阿羅漢諾矩羅居二震旦東南大海際雁蕩山芙蓉峰龍湫一とある。唐の貫休、諸矩羅の贊を爲る。雁蕩經行雲漠漠、龍湫宴坐雨濛濛の句あり。此山の南に芙蓉峰あり、下に芙蓉驛ありて、前は大海に臨む。然れども未だ雁蕩・龍湫の所在を知らない。後、木を伐るに因つて始めて此山を見る。山頂に大池あり、相傳へて以て雁蕩となす。下に二潭水あり、龍湫となす。經行峽・宴坐峰あり、皆、後人、貫休の詩に因つて之を名けたものであらう。唐宋詩醇に、雁蕩爲二自レ古圖牒所レ不レ記、祥符中、因レ採二官木一、始見レ之、此雖レ覽レ圖、未レ歷二其地一、故但以下小閣浮二煙翠一一語上、形二容其妙一、以二所レ得レ見之二華九仙一作レ陪、按、周邠生於西湖、而官二於雁蕩一、軾生二於蜀山一、而官二於西湖一、次作稱二西湖同遊一、蓋因二其所レ見、以致二未レ見之思一、結更以二蜀山君未レ見爲レ恨、匪二自矜以傲レ人、蓋其交誼反覆纏綿、益二然言表一と言つて居る。

和魯人孔周翰題詩二首　并序　魯人孔周翰が題詩に和す　二首并に序

孔周翰嘗爲仙源令。中秋夜以レ事留於東武官舍中。時陳君宗古。任君建中。皆在レ郡。其後十七年中秋。軾與レ客飲於超然臺上。聞周翰乞二此郡一。客留詩於壁。又其後五年中秋。軾與レ客飲於超然臺上。聞周翰乞二此郡一。客

有誦其詩者。乃次其韻二篇。以爲他日一笑。

【訓讀】孔周翰嘗て仙源の令となる、中秋の夜、事を以て東武の官舍の中に留まる。時に陳君宗古・任君建中、皆、郡に在り。其後、十七年中秋、周翰は節を持して郡を過ぐ。而して二君已に亡し。時に感じ舊を懷ひ、詩を壁に留む。又、其後五年中秋、軾は客と超然臺上に飮む。周翰此郡を乞ふと聞く。客に其詩を誦するものあり。乃ち其韻に次す二篇、以て他日の一笑となす。

【字解】【一】仙源令　宋史、地理志に、仙源、鐵、曲阜縣。大中祥符五年、改、證志に、孔氏子孫、知仙源縣事。【二】中秋　白樂天の詩に、中秋三五夜、明月在二前軒一つ。宋、吳自牧の夢粱錄に、八月十五日、中秋節、此日三秋恰半、故謂二之中秋一、此夜月色倍二明于常時一、又謂二之月夕一つ。【三】持レ節　天子より符節を賜はる。又、天子の勅命を符命といふ。文心雕龍に、符命炳煥。【四】留二詩於壁一　七集、孔周翰の詩にいふ、屈指從來十七年、交親零落一清然、嶂前再見中秋月、依舊清輝照二客眠一つ

【題義】此の詩は熙寧九年八月の作。東坡は十五日に客と超然臺上に飮み、孔周翰が方に密州を乞ふと聞いて、周翰が前に、東武を過ぎて壁に題した詩を和したのである。紀昀いふ、二詩、皆淺而有レ致と。

壞壁題レ詩已五年。故人風物兩依然。
定知來歲中秋月。又照二先生枕一レ麴眠一。

【字解】【一】壞壁　一本に壞筆に作る。【二】故人　史記、范雎傳に、綈袍戀戀、有二故人之意一つ。唐、崔護の詩に、故人家在二桃花岸一つ。【三】風物　風景に同じ。陶淵明の文に、天氣澄和、風物閒美。【四】依然

【詩意】壞壁の詩を題してから已に五年となつた。故人風物兩ながら依然。定めて知る來歲中秋の月、又先生の麴を枕にして眠るを照らさん。

【題義】此の詩は熙寧九年八月の作。東坡は十五日に客と超然臺上に飮み、孔周翰が方に密州を乞ふと聞いて、周翰が前に、東武を過ぎて壁に題した詩を和したのである。紀昀いふ、二詩、皆淺而有レ致と。

更邀二明月一說二明年一。記取孤吟孟浩然。
此去宦遊如二傳舍一。揀レ枝驚鵲幾時眠。

【字解】【一】邀　要と音義通ず。待ち受けて迎へる意。【二】記取　記得といふに同じ。取は助字。【三】孤吟孟浩然　孟襄陽の、秋宵月下有レ懷の詩に、秋空明月懸、驚鵲棲未レ定の句あり。孟襄陽集の序に、開二潛絕世一、仕宦不レ遂而來過レ我。白樂天の詩に、自三我從二宦遊一、七年在二長安一つ。【四】宦遊　仕宦して他鄉に寄寓、諸葵菲賦詩作レ會、浩然句曰、微雲淡二河漢一、疎雨滴二梧桐一、擧坐嗟二其清絕一、閣筆不二復爲一レ繼。【五】傳舍　史記、酈食其傳に、沛公至二高陽傳舍一つ。【六】揀レ枝　劉孔嘉の詩に玉樹容權莫レ揀レ枝。

【詩意】今夜、超然臺上の月、明年も亦、同じく此の明月を迎へることであらう。明月を望んで、明年を說く。憶ひ起すのは孟浩然の秋空うして明月懸り、驚鵲棲むこと未だ定まらずの句である。此

處を去つて、宦遊する。宦遊の身は傳舍に在るが如く、轉轉して定めがない。譬へば棲む枝を擇ぶ鷲鵲の如く、幾時か眠るであらうか。

送碧香酒與趙明叔教授

碧香酒を送つて趙明叔教授に與ふ

聞君有婦賢且廉、勸君愼勿爲楚相。不羨紫駝分御食、自遣赤脚沽村醸。嗟君老狂不知愧、更吟醜婦惡嘲謗。諸生聞語定失笑、冬暖號寒臥無帳。碧香近出帝子家、鵝兒破殼酥流盎。

聞く君が婦あり賢にして且つ廉、君に勸む愼んで楚の相と爲ること勿れと。紫駝の御食を分つを羨ます、自ら赤脚をして村醸を沽はしむ。嗟す君が老狂にして愧づることを知らざるを、更に吟ず醜婦の嘲謗を惡むを。諸生語を聞かば定す失笑せん、冬暖なるに寒を號ぶは臥すに帳なければなり。碧香近く帝子の家に出づ、鵝兒殼を破つて酥盎に流る。

【字解】【一】碧香酒　東坡の詩に、碧香近出帝子家の句がある。王晉馬（都尉王詵）の家で、碧香酒を造つたことをいふ。黄山谷集に、送碧香酒、用子瞻韻、贈晉卿彦朗一詩がある。【二】趙明叔教授　膠西の人。東坡が密州に守たりしとき、先づ薄薄酒詩を賦して之に贈り、元豐八年、冬、文登（縣の名、山東、膠東道に屬す）に赴き、密州を過ぎ、趙明叔・喬禹功に次韻す。先生依舊文貧の句がある。【三】勿爲楚相　史記、滑稽傳に、優孟爲孫叔敖衣冠、抵掌談語、歲餘、像三孫叔敖一、莊王置酒、優孟前爲壽、王大驚、欲三以爲一相、優孟曰、請歸與二婦計一之、三日後、復來曰、婦言、愼無レ爲、楚

不レ學劉伶獨自飲。【三】劉伶が獨り自ら飲むを學ばず、一壺往いて助く眉に齊しうする餉。一壺往いて助く眉に齊しうする餉。

相不レ足レ爲也、如三孫叔敖一、盡忠爲レ楚、以治レ楚、今死、其子無二立錐之地一、必如三叔敖一、不レ如二自殺一、於レ是、莊王謝三優孟一、召二叔敖子一、封三之寢丘一。【四】紫駝　杜子美の麗人行に、紫駝之峰出二翠釜一、水精之盤行二素鱗一。厨膳の驕奢をいふ。【五】分二御食一　屈人行に、御厨絡繹送二八珍一。【六】赤脚　素足をいふ。韓退之の寄二盧仝一詩に、一奴長鬚不レ冠レ頭、一婢赤脚老無レ裳。杜子美の苦熱詩に、安得赤脚踏二層氷一。【七】村醸　村酒といふに同じ。韓退之の縣齋の詩に、村酒時邀飲。陸游の詩に、細傾二村醸一聽二新蛙一。【八】失笑　噴飯といふに同じ。吳志、步騭傳の注に、每レ讀二騭表一、輒失笑。【九】冬暖號レ寒云云　韓退之の進學解に、冬煖而兒號レ寒、年豐而妻啼レ飢、頭童齒豁、竟死何裨。【一〇】碧香　都尉王詵の家醸である。前に注す。【一一】帝子　楚辭、屈原九歌に、帝子降二兮北渚一。注にいふ、帝子謂二堯女娥皇女英一也と。【一二】鵝兒　杜子美の詩に、鵝兒黄似レ酒、對レ酒愛二新鵝一。鵝黄酒は、黄色を帶びた酒。東坡の詩に、應レ傾半熟鵝黄酒、照見新晴卵碧天。【一三】劉伶獨自飲云云　晉、劉伶傳に、伶求二酒於妻一、妻捨泣諫曰、君酒太過、必宜レ斷レ之、伶曰、善、吾不レ能二自禁一、惟當レ祝二鬼神一自誓一以便可レ具二酒肉一妻從レ之、伶跪祝曰、天生二劉伶一、以レ酒爲レ名、一飲一斛、五斗解醒、婦兒之言、愼勿レ可レ聽、仍引レ酒御レ肉、隗然復醉。前にも出づ。【一四】齊レ眉餉　後漢、梁鴻傳に、其妻孟光爲具レ食、不レ敢於二鴻前一仰視、舉レ案齊レ眉。

【題義】此詩は熙寧九年八月の作。碧香酒を趙明叔に送つたとき添へた詩である。紀昀いふ、亦滑調と。

【詩意】承はれば君には賢明にして廉潔な奥方が居られ、平生君に決して國の相とはならないやうにと勸めて居られるといふことである。（昔、優孟は孫叔敖の衣冠を爲り、掌を抵つて談じ、孫叔敖と

見聞違ふばかりになつた。そこで莊王の前に進んで壽を爲すと、王は大に驚いて、之を相となさうとした。優孟は歸つて妻と相談致したいと請ふ。三日の後、復、來つていふやう、妻は愼んで楚の相となるなかれといふから、折角なれど御承けは申し兼ねると。此の故事に據つたのである。）富貴の身分となつて、紫駝（橐駝）の脊肉（極めて美味）を御前から賜はることは、羨ましくはない。自ら一婢赤脚をして村酒を沽はしめる。これが君の態度である。君の老狂にして外觀を愧ぢないのを嗟くが、更に吟ず、醜い女でありながら、他の嘲謗を惡んで居ることを。かの粉黛を極め、盛服を窮めても、未だ必ずしも醜婦なくんばあらず。華采を廢し、文繡を去つても、未だ必ずしも美人なくんばあらずといふ古語もある。諸生は此を聞かば、必ず吹き出すことであらう。冬、暖かであつても、寒いと號ぶのは、臥するに帳がないからであらう。何事も無理があつてはならない。さて碧香の酒は、近頃、王詵駙馬都尉（天子の女婿）の家で釀される。又、鵝兒黃は酒に似、穀を破つて、其の酥（牛酪の類）は盎に流れる。酒に對して、新鵝を愛するは、人情の變する。昔、劉伶は酒を妻に求めると、妻は泣いて之を諫めた。伶いふ、當に鬼神に祝して、自ら誓ふべしと。妻、之に從ふ。伶、酒を引き肉を御し、塊然として復、醉うたといふ話がある。劉伶が獨り、自ら酒を飲む態度を學んではならない。案を擧げること、眉に齊うして食を其夫（梁鴻）の前に致したのは孟光である。其孟光のやうな妻が捧げる一壺の酒は、固より飲むことを勸めるのである。

趙旣見和復次韻答之　趙旣に和せられ、復次韻して之に答ふ

長安小吏天所放。（一）　長安の小吏は天の放つ所、
日夜歌呼和丞相。（二）　日夜歌呼丞相に和す。
豈知後世有阿瞞。（三）　豈知らんや後世阿瞞あるを、
北海樽前捉私釀。（四）　北海樽前私釀を捉ふ。
先生未出禁酒國。（五）　先生未だ出でず禁酒國、
詩語孤高常近謗。（六）　詩語孤高常に謗に近し。
幾回無酒欲沽君。（七）　幾回か酒なく君に沽はんと欲す。
却畏有司書簿帳。（八）　却つて畏る有司の簿帳に書するを。
酸寒可笑分一斗。（九）　酸寒笑ふべし一斗を分つを。
日飲無何足衰盎。（一〇）　日に飲む何もなく衰盎を足らしむ。
更將險語壓衰翁。（一一）　更に險語を將つて衰翁を壓す、
只恐自是臺無餉。（一二）　只恐る是より臺に餉なきを。

【字解】【一】天所ㇾ放　莊子、馬蹄篇に、一而不ㇾ黨、命曰ニ天放一。天放は天の放つ所の意で、拘縛されないことである。【二】日夜歌呼　漢、曹操傳に、相舍後園、近ニ吏舍一、吏舍日飲歌呼、聲聞ㇾ外。【三】阿瞞　魏の曹操、字は孟德。小字は阿瞞。漢の相國曹參の後。東坡の自注に、曹公自言、參之後。【四】北海樽前云云　後漢孔融傳に、曹操以ニ年饑兵興一、表制ニ酒禁一、融頗有ニ爭ㇾ之、多ニ侮慢之辭一、融嘗爲ニ北海相一。融常に曰く、座上客常滿、樽中酒不ㇾ空、吾憂なしと。【五】禁酒國　虛空の飲酣日の詩に、何時得ㇾ出ニ禁酒國一、滿ㇾ盛隨酒曝ㇾ背眠。【六】無ㇾ酒欲ㇾ沽ㇾ君　毛詩に、酸寒可ㇾ笑云云　唐、王績傳に、待ニ詔有ㇾ酒聽ㇾ我、無ㇾ酒酤ㇾ我。【七】書ニ簿帳一　東坡の自注に、近制公使ニ酒過ㇾ數、法表裏と。【八】

門下者、故事、官給ㇾ酒日三升、或同、待詔何樂、答曰、良醞可ㇾ鑒耳、侍中陳叔達聞ㇾ之、日給二一斗一、時稱二斗酒學士一。東坡の詩に、故人留飲獻二酸寒一。【九】日飲無ㇾ何云云　漢、袁盎傳に、南方卑濕、孫臨日飲云云、前に出づ。【一〇】醑語　韓退之の醉贈二張祕一詩に、醑語破二鬼膽一。【一一】憲無ㇾ餘　孟子萬章篇に、自ㇾ是憲無ㇾ餘也。憲は賤吏の使命を主るもの。

【題義】前詩の趙明叔教授が既に東坡の詩に和せられたのを、東坡はまた次韻して之に答へたのである。紀昀いふ此首差可、然亦不ㇾ佳と。

【詩意】長安の小吏は、吏にして吏でないから、之を天放と名ける。彼等は日夜、吏舍に在つて、酒を飲んで歌呼を事とする。吏舍は相舍の後園に近いので、丞相曹參も酒を呼んで、與に相和したのである。豈に知らんや、自分の後世に曹操（小字を阿瞞といふ）といふ英雄が出でて、凶年に際し特に禁酒をなし、北海の相、孔融の樽前で、其の私醸を捉へることがあらうとは。さて趙先生には未だ禁酒國を出でないから、所謂、滿ㇾ甕釀酒壓ㇾ背眠といふ醉鄉に遊ぶことが出來ないであらう。而も先生の詩語は孤高にして、常に誹謗に近い。又、幾度も酒がなくて、一宿酒を醸さうとした。却つて畏れるのは、酒法が嚴重であるために、役人に私醸の數を過したことを咎められ、簿帳に記されることである。唐の王績は門下省に待詔であつた頃、省中の故事によつて、酒を給はること、日に三升であつたのを、特別に一斗を給せられたので、時に斗酒學士と稱された。赤貧の我身にも亦、一斗を分けてもらひたい。かくて日に飲む、飲むことの外には餘事がないのは、例の袁盎を滿足させた所以である。更に險語を以て衰へた此の翁を壓することは、自今臺吏（賤吏の使命を主る吏）の食を餉ることがなくなる事である。（酒を釀すことが多いと、食べる穀物が少くなる譯である。）

趙郎中往莒縣。逾ㇾ月而歸。復以二一壺一遺之。仍用二前韻一

趙郎中莒縣に往き、月を逾えて歸り、復一壺を以て之に遺り、仍つて前韻を用ふ

東隣主人游不ㇾ歸。悲歌夜夜聞二春相一。門前人鬧馬嘶急。一家喜氣如二春釀一。王事何曾怨二獨賢一。室人豈忍交譏謗。大兒踉蹡越二門限一。小兒咿啞語二繡帳一。定敎舞袖擊二伊涼一。

【字解】【一】莒縣　春秋隱公二年、莒人入ㇾ向。莒も向も小國の名。漢書、地理志に、莒縣屬二城陽國一。隋は莒縣を廢して莒州に屬す。貞觀八年、莒州を廢し、莒縣を以て密州に屬す。名勝志に、今爲二莒州一屬二青州府一。【二】東隣　周易、既濟に、東隣殺ㇾ牛、不ㇾ如二西隣之禴祭一、實受二其福一。禴祭は薄祭、東隣の牛を殺して盛祭を行ふは、西隣の薄祭を以てするも、其の時を得るに如かざるなりといふ意。東隣は、東家といふに同じ。孟子、告子篇に、聆二東家雞一

更想夜庖鳴[一]饕盆。更に想ふ夜庖の饕盆に鳴くを。
題レ詩送レ酒君[二]勿[三]誚。詩を題して酒を送る君誚るなかれ、
免レ使[四]退之[五]嘲二一餉一。退之をして一餉を嘲らしむるを免る。

羽記に、項王乃悲歌忼慨、自為レ詩。陶淵明の楚調示二龐鄧一詩に、慷慨時悲歌、値期信為レ賢。いふ。礼、曲礼に、鄰有レ喪、春不レ相。史記、商君傳に、童子不二歌謡一、舂者不レ相レ杵、此五段大夫之節也。【六】舂臆　舂く者の歌ふ杵うたを王績の詩に、春臆雷三松葉一。孟賁の詩に、石泉舂レ酒、松火煮レ茶。【七】王事　詩、唐風に、王事靡レ盬、憂二我父母一。又、小雅、四牡篇に、王事靡レ盬、我心傷悲。【八】獨賢　詩、小雅に、大夫不レ均、我従レ事獨賢。【九】室人交謫我　室人皆怒二交謫レ我一　詩、国風に、王事適レ我、政事一埤二益我一、我入自レ外、室人交偏謫レ我。【一〇】大兒　世説に、嵇喜與二孔融・楊修一、友善、常曰、大兒孔文挙、小兒楊德祖、雖レ不レ足レ異云云。【一一】狼藉越二門限一　狼藉は行くことの正しくないこと。韓退之の詩に有レ兒甥二甚憍一、教示不レ免レ簡、君来好呼出、狼藉越二門限一。【一二】咿喔語二繡幌一　咿喔は、小兒の語を學ぶ聲。漢書、東方朔傳に、伊優咿喔者辞来レ定也。徐陵の詩に、繡幌・羅幃隔二燈燭一。【一三】伊涼　曲調の名。商調の大曲。開元中、西涼節度使楽嘉慶進む。白樂天の詩に、新教二小玉唱一伊州一。【一四】勿レ誚　史記、奚嗇傳に、誚二讓項羽一。【一五】退之嘲二一餉一　韓退之の酢贈二張祕書一詩に、長安衆富兒、盤饌羅二羣歌一、不レ解文字飲、惟能酔二紅粉一、驅レ得一餉樂一、有レ如二聚飛蚊一。

【題義】此詩は熙寧九年八月の作。趙成伯が莒縣に往いて蝗を捕へ、月を逾えて歸る。復一壺を遣り、前韻を用ひた詩を添へたのである。

【詩意】東隣の主人は、四方に游んで歸らない。悲歌夜夜舂くものの杵歌を聞くのみである。門前は人で闇がしく、馬の嘶く聲も急である。一家の喜びの氣に滿ちて居るは、春醸す酒のやうであつて、王事は堅固でなくてはならないから、我は王事の爲に、心を傷めしめる。我は王事に從つて、獨り賢としてゐるを怨みない。かく我は外に苦勞し、時に外より家に入れば、室人が変つて偏く我を誚めたてる。まことに堪へ難いのである。我家の大兒は狼藉として歩行も正しくない。又、小兒は言葉もまだ十分でなく、繡帳の中に語つて居る。君の方は定めし舞袖をして伊涼の曲でも奏せしめて居られることであらう。又夜會の料理など、甕や盆に盛られて居るであらう。ここに詩を題して酒一壺を送る程に、君よ、請つてはならない。昔、韓退之は醉うて張祕書に詩を贈つて、文字の飲を解せずして、惟よく紅裙に醉ふ。一餉の樂みを得ても、聚飛の蚊の如きであると言つたが、今我は、退之が一餉の嘲りを免れた譯である。

蘇潜聖挽詞

蘇潜聖の挽詞

妙齡馳[一]譽百[二]夫雄。妙齡譽を馳す百夫の雄、
晩節忘レ懐大[三]隱中。晩節懐を忘る大隱の中。
悃愊無華眞[四]漢吏。悃愊無華は眞に漢吏、
文章爾雅稱[五]吾宗。文章爾雅吾宗と稱す。
趨時肯負[六]平生志。趨時肯て平生の志に負かんや、

【字解】【一】蘇潜聖　名は泳、成都、新繁の人。進士に擧げられ、乾州に知となり、又、邛州に知となつた。官は職方郎中に至つて致仕す。年六十餘で卒す。三子あり。中子名は嶷、年十八、嘉祐四年登第し著作郎に終はる。【二】挽詞　挽歌

(一三)有レ子還應(一四)不レ死同。子あれば還應に死せざると同かるべし。
惟我閒思二十年事一。惟我閒に十年の事を思へば、
(一五)數行老淚寄二西風一(一六)。數行の老淚西風に寄す。

陲の北山移文に、驕二紲於斷右一つ。【五】百夫雄　詩、秦風、黃鳥に、百夫之特。文選、王仲宣の詩に、生爲二百夫雄一、死爲二壯士規一つ。【六】晚節　老年をいふ。節は時の意。唐書に、晚節僞褻、爲二姦臣所レ擠。【七】大隱　王康琚の詩に、小隱隱二陵藪一、大隱隱二朝市一。白樂天の詩に、大隱住二朝市一、小隱住二丘樊一つ。【八】悁悁無聊　悁悁は至誠の意。漢書、劉禹傳に、愛憤悁悁、信有二憂國之心一つ。後漢、章帝紀に、元和二年、詔曰、安靜之吏、悁悁無聞。【九】歲吏　後漢、公孫述傳に、號爲二漢吏一、無レ所二選賞一。【一〇】文章爾雅　爾雅は正しく美はしい。庾、儒林傳に、公孫宏言、臣謹案、詔書律令下者、文章爾雅、訓詞深厚。【一一】吾宗　左傳、昭公四年に、魯以二先子之故一、靜レ存二吾宗一つ。【一二】趙時　時世をおふ意。周易に、變通者趨レ時者也。【一三】有レ子　左傳、昭公十六年に、季平子日、子服氏有レ子哉。【一四】不レ死同　三國、吳、孫權傳に、孫權問二公瑾一曰、温、當今與レ誰爲比、瑾應曰、當今無レ雙、權曰、如レ是、孤尤不レ死也。【一五】數行老淚　韓退之の詩に、幾行哀淚落二經傳一つ。【一六】西風　李太白の詩に、八月西風起。前にも注す。

【題義】此詩は熙寧九年九月の作。蘇潛聖の訃を聞いて、挽詞を作つたのである。潛聖は、慶歷二年に登第した人である。

【詩意】蘇潛聖は、年の若い時分から、聰敏秀發で、夙に文苑に譽を馳せ、所謂百夫中の雄俊であつた。(詩經に百夫之特といふ字面がある。)晚年には世に懷を忘れて、眞の隱者となつた。朝市に隱れたのである。又、至誠にして少しも修飾をしないことは、眞に漢の吏たるに愧ぢない。そして文章の正しく美はしいことも、吾宗と稱されて居る。其の時勢を觀て、よく之に應ずることは、肯て平生の志に負かなかつた。今は此世の人でないが、立派な子があつて進士に擧げられ著作郎とまでなつたから、また應に死なないと同じである。ただ我は閒に過ぎし十年の事を思へば、萬感が胸に攢まつて、數行の老淚を西風に寄するのである。(西風は秋風である。五行說に據ると秋を西に配するからである。)

和晁同年九日見寄　晁同年九日に寄せらるるに和す

仰看鸞鵠刺レ天飛。仰ぎ見る鸞鵠の天を刺して飛ぶを、
富貴功名老不レ思。富貴功名老いて思はず。
病馬已無二千里志一。病馬已に千里の志なく、
騷人長負二一秋悲一。騷人長へに一秋の悲みを負ふ。
古來重九皆如レ此。古來重九皆此の如し、
別後西湖付二與誰一。別後西湖誰に付與せん。
遺二子窮愁一天有レ意。子をして窮愁せしむるは天に意あり。
吳中山水要二清詩一。吳中の山水は清詩を要す。

【字解】【一】晁同年　晁端彦、字は美叔。時に提點兩浙刑獄監司杭州であつた。同年は、國史補に、俱進謂二之同年一。【二】鸞鵠刺レ天飛　鸞は神鳥、鵠は白鳥。韓退之の祭二柳子厚一文に、一斥不レ復、翬飛刺レ天。【三】千里志　晉、王敦傳に、每三酒後一輒詠二魏武樂府歌一曰、老驥伏レ櫪、志在二千里一、烈士暮年、壯心不レ已。【四】騷人　正字通に、屈原作二離騷一、言レ遭レ憂也、今謂二詩人一爲二騷人一つ。【五】一秋悲　楚辭、宋玉九辨に、悲哉之爲レ氣也。又、皇天平二分四時一兮、窃獨悲二此凉秋一つ。【六】重九　重陽といふに同じ、陰曆九月九日の節句。王筠の詩に、重九

惟嘉節。【七】皆如レ此　古往今來只如レ此、牛山何必霑沾レ衣。【八】付與　杜子美の詩に、付二與後世一傳。須鮎の詩に、孔雀羅衫付二阿誰一。【九】窮愁　史記、虞卿傳に、太史公曰、虞卿非二窮愁一、亦不レ能レ著レ書以自見二於後世一。【一〇】要二清詩一　白樂天の讀二李杜集一詩に、天意豈須レ會、人間要二好詩一。

【語義】此詩も熙寧九年九月の作である。晁端彥が九月九日に寄せられた詩に和したのである。端彥は東坡と同じ年に進士の試驗に及第したから、晁同年といつたのである。紀昀は此詩を評して沈著排宕と。查愼行はいふ、淡而彌旨、知レ此者鮮矣と。王文誥いふ、永叔謂、公必名レ世、使二美叔訂一交兩公一、亦顚自負、此在二嘉祐極盛時一也、詩前半、皆寓二此慨一、後之本事、乃順レ流而下、合二成一局一者也と。

【詩意】仰いで見ると、鷺や鵠などが天を剩して、翬り飛んで居る。青空の念が起るであらう。併しこの身は已に老いて功名富貴を思はない。老驥伏レ櫪志在二千里一は、心持のよい名句であるが、病馬の如きわが身には已に千里の志もない。古來重陽の節の感じは、皆、此の如きである。詩人は、長へに此の秋の哀れを悲しむのである。一別後、西湖の風光は誰に付與するか。（王文誥いふ、此句乃待レ鞫之證、時已不レ在レ杭也と。）詩人は窮してますます見はる。子をして窮愁の境遇に在らしめるは、天に意がある。白樂天も、天意君須らく會すべし、人間好詩を要すと言つた。然り吳中の好山水は、君の清詩を要するのである。

【餘錄】晁端彥、字は美叔、章惇（子厚）と同じく乙亥に生れ、同榜に及第し、又、同じく館職となつたから、常に三同を以て相呼ぶ。宋、哲宗の紹聖の初、子厚は入りて相となつた。叔美は其の施設の大に金山に在つた時に言つた所と背くを見、力を竭くして之を諫めた。子厚は怒り、黜けて陝守とした。叔美は所親に謂つて曰く、三同今は百不同なりと。續通鑑長編に據ると、熙寧九年五月、晁端彥待二鞫於潤州一、因レ違レ法赴二杭州一云云と。東坡の此の和詩は、端彥が尙ほ潤州に在つた時であらう。

送喬施州

喬施州を送る

恨無負郭田二頃。　恨むらくは負郭の田二頃なきを、
空有載行書五車。　空しく載行の書五車あり。
江上青山橫絕壁。　江上の青山絕壁に橫はり、
雲間細路躡飛蛇。　雲間の細路飛蛇を躡む。
鷄號黑暗通蠻貨。　鷄は黑暗に號いて蠻貨に通じ、
蜂鬧黃連採蜜花。　蜂は黃連を鬧して蜜花を採る。
共怪河南門下士。　共に怪む河南門下の士、
不應萬里向長沙。　應に萬里長沙に向ふべからず。

【字解】【一】喬施州　喬紘、字は孟功。嘗て太博となり、左藏となる。（唐の時、左右藏に、皆、令丞を置く。）又、欽州に知となり、施州に知となる。元和郡縣志に、春秋巴國之界、漢爲二巫縣之境一、後周置二施州一。奧地廣記に、施州屬二夔州路一。【二】負郭田二頃　史記、蘇秦傳に、使二吾有二洛陽負郭田二頃一、吾豈能佩二六國相印一乎。【三】書五車　藏書の多きをいふ。莊子、天下篇に、惠施多

方、其書五車。唐、李嶠謝傳に、詔三子孫二曰、負京有三陽田十頃一、耕レ之、足三以食一、江都書、力讀、可三遍求一レ官。杜子美の詩に、男兒須レ讀三五車書一。【四】絕壁　世說に、桓溫入レ峽、絕壁天懸。【五】鬱三黑晴一　東坡の自注に、胡人謂レ犀爲二黑晴一、西陽雜俎に、犀角通者、其理有三倒插・正插・腰鼓插一、倒者、一半已下通、正者、一半已上通、腰鼓者、中斷不レ通、故波斯人謂レ牙爲二白晴一、犀爲二黑晴一、拘朴子に、通天犀角有二白理一如レ綯、（易の上を覆ふ板）自レ本徹レ末、以置三米中一、犀雖欲三往啄一レ米、至輒驚卻、故南人名曰二驚鶴犀一也。【六】黃連　本草に、南中有レ蜜、色黃、味苦、蜂採二黃連花一作レ之。【七】不レ應レ向三長沙一　東坡の自注に、晉受二知於吳丞相一、而施州風土大類三長沙一。漢、賈誼傳に、河南守吳公聞二其秀才一、召置二門下一、文帝初立、聞三吳公治平爲二天下第一一、徵爲二廷尉一、廷尉乃言、誼年少頗通二諸家之書一、上召以爲二博士一、議以任二公卿之位一、絳灌之屬、皆害レ之、以レ誼爲二長沙王太傅一。

【題義】此詩も熙寧九年九月の作。喬敍が移つて施州に知たるを送つた詩である。

【詩意】昔、蘇秦は、吾に洛陽負郭の田二頃もあらば、豈よく六國の相印を佩びんやと言つたが、君にも亦都近くに肥えた田地二百畝の無いのが殘念である。田地がなくて、空しく載せて行く書五車が任の途中、江上の青山は、絕壁に横はつて居り、雲間の細路は、飛蛇を踏むがやうである。胡人は犀を黑暗といふ。犀角を米中に置くと、羣鼠は知らずに、往いて米を啄まうとする、忽ち黑暗に驚いて號ぶのである。蠻貨交易の事が始まる。又、南方の宜州には、黃連花が多い。蜂は黃連花を關して蜜花を採る。南中に苦蜜の多いのは、蜂が黃連花を採つて之を爲るからである。共に怪しむことであるが、河南門下の士（喬禹功を指す）は、萬里の長沙に向つてはならない。（施州の風土は、大に長沙に似て居るからである。一體、喬君は吳丞相に知遇を受けて居る。其の吳丞相は、東都事略に、吳育、字春卿、仁宗朝拜レ相、後以三資政殿學士一知二河南一、卒謚三正肅一とある。查初白いふ、公詩用レ事親切如レ此と。）

雪夜獨宿柏仙菴

雪夜獨り柏仙菴に宿す

晚雨纖纖變二玉霙一。小菴高臥有二餘淸一。夢驚忽有二穿レ窗片一。夜靜惟聞瀉レ竹聲。稍歷二冬溫一聊得レ健。未レ濡二秋旱一若爲耕。天公用レ意眞難レ會。又作二春風爛漫晴一。

晚雨纖纖として玉霙に變じ、小菴高臥餘淸あり。夢驚いて忽ち窗を穿つの片あり、夜靜にして惟聞く竹に瀉ぐの聲。稍く冬溫を歷して聊か健を得、未だ秋旱を濡さず若爲ぞ耕さん。天公の意を用ふるは眞に會し難し、又春風爛漫の晴るるを作す。

【字解】【一】晚雨　韓退之の詩に、廉纖晚雨不レ能レ晴。【二】纖纖　尖銳の貌。古詩に、兩頭纖纖月初生。【三】玉霙　韓詩外傳に、雪花曰レ霙。【四】高臥　宋書、袁粲門無三雜客一、閉居高臥。【五】穿レ窗　謝惠連の雪賦に、始縁レ簷而冒レ檻、終開レ牖而入レ帷。【六】瀉レ竹聲　杜荀鶴の雪詩に、江湖不レ見飛禽影、嵩谷惟聞折レ竹聲。【七】春風爛漫晴　李太白の答三丁十二詩に、待得明朝酒醒後、與レ君爛漫等二春暉一。

【題義】此詩は熙寧九年十一月の作である。紀昀いふ、絕勝尖叉韻詩、而人多稱二彼故險韻爲一欺レ人之

巧策一と。

【詩意】雪の夜、一人で柏仙菴に宿すると、晩雨は纖纖として雪花と變じた。雪花は霙で、雨が少し凍つて、雪となりかけたものである。埤雅に雪寒甚則爲レ粒(霰)、淺則成レ華、華謂二之霙一とある。其の霙と降り、霰と散るのを、小菴に高臥して見るのも、まことに餘情がある。清夢は忽ち窗を打つ雪片に驚かされる。雪の夜は、靜である。ただ時時竹に瀉ぐの聲あるのみ。だんだん炙溫を歷しつけて、健かになつたが、まだ秋旱を濡さないから、どうして耕されようぞ。造化の意は眞に測り難い。さまざまに心を惱まして、又、春風爛漫の晴るるをなして居る。

和二孔郎中荊林馬上見一寄　孔郎中が荊林馬上寄せらるるに和す

秋禾不レ滿レ眼。宿麥種亦稀。
永愧此邦人。芒刺在二膚肌一。
平生五千卷。一字不レ救レ饑。
方將怨レ無レ襦。忽復歌二緇衣一。
堂堂孔北海。直氣凜二羣兒一。
朱輪未レ及レ郊。淸風已先馳。

秋禾は眼に滿たず、宿麥の種も亦稀なり。
永く愧づ此邦の人、芒刺膚肌に在り。
平生五千卷、一字饑を救はず。
方將襦なきを怨み、忽ち復緇衣を歌ふ。
堂堂孔北海、直氣羣兒に凜たり。
朱輪未だ郊に及ばず、淸風已に先づ馳す。

何以累二君子一。十萬貲與レ贏。
滔滔滿二四方一。我行竟安之。
何時劍閣路。春山聞二子規一。

何を以て君子を累はさん、十萬貲と贏と。
滔滔四方に滿ち、我が行は竟に安くに之く。
何れの時か劍閣の路、春山子規を聞かん。

【字解】【一】孔郎中　東都事略に、孔宗翰、字周翰、孔子四十五代孫道輔之子、以二父任一爲二將作監主簿一、復舉二逸士一王建・司馬光、奉レ敎纂レ士、皆以二宗翰一應レ詔、知二巖・密・陝・揚・洪・兗、六州一、元祐初、除二司農少卿刑部侍郎一卒。【二】不レ滿レ眼　杜子美の入奏行に、爲レ君酤レ酒滿レ眼酤、與二奴白飯一馬青芻。竹の筒を以て酒を酤ふ。筒の上に、提げ繩を穿ち通す穴がある。其の筒に滿て繩際まで酒の及ぶを滿眼酤といふ。【三】宿麥　後漢書に、明帝有レ云、宿麥不レ下。麥は隔年秋に種ゑ、明年の夏に至つて收む。宿麥といふ所以である。漢書、食貨志に、董仲舒曰、願詔二大司農一、使二關中民益種二宿麥一。【四】芒刺在二膚肌一　漢書、霍光傳に、宣帝始立、謁二見高廟一光從參乘、上內慙二憚之一、若レ有二芒刺在レ背。【五】五千卷　北史、崔儦傳に、大署二其戶一曰、不レ讀二五千卷書一者、無レ得入二此室一。三國遺錄に、魏文帝云、文爲二當代所レ宗、讀レ書五千卷、許二登レ閣觀レ書、登者才六人。【六】一字不レ救レ饑　李太白の詩に、萬言不レ直二一杯水一、又豈可二以救一飢乎。【七】方將怨レ無レ襦　東坡の詩に、君家聯翩三將相、富貴未レ已今方將。後漢、廉范傳に、遷二蜀郡太守一、百姓歌レ之曰、廉叔度來何暮、平生無レ襦今五綺。【八】緇衣　禮記に、孔子曰、好賢如二緇衣一。毛詩、緇衣小序に、緇衣美二武公一也。緇衣之宜兮、敝予又改爲兮。【九】堂堂孔北海　堂堂は容儀の盛なる貌。論語、子張に、堂堂乎張也。後漢、孔融傳に、字文擧、魯國人、孔子二十世孫、爲二北海相一、爲二賊管亥一所レ圍、遣二東萊太史慈一求レ救於平原相劉備一、備聲曰、孔北海、乃復知二天下有一劉備一耶。【一〇】羣兒　韓退之の詩に、不レ知二羣兒愚一、那用二故誇傷一。後漢、輿服志に、中二千石・二千石、皆皁絳子碌碌不レ足レ數也。前にも出づ。【一一】朱輪　漢、景帝紀に、令二長史二千石朱二兩轓一。後漢、輿服志に、中二千石・二千石、皆皁蓋朱二兩轓一、其子石・六百石朱二左轓一。轓は車のおほひ。塵泥を防ぐもの。漢の制、高貴の人は、馬車の輪を赤くし、轂を華に飾る。漢書、劉向傳に、王氏一姓、乘二朱輪華轂一者三十三人。【一二】十萬貲與レ贏　唐書、陳子昂傳に、一州得二才剌史一、十萬戶受二其福一、得

不才刺史、十萬戶受二其困一。【二】劍關路　九域志に、劍門關、隸二利州路一。

【題義】此詩も熙寧九年十一月の作である。孔周翰が東坡と密州の交代をなし、未だ至らない前に、詩を寄せて之に先んじたのである。之を和したのが此詩である。

【詩意】密州の地方では、秋の禾がまだ眼に滿つるほどには秀でて居ない。杜子美の詩に、爲レ君酤レ酒滿眼酤といふ句がある。蜀の人は酒を酤うに竹筒を以てする。筒の上に、繩を穿つ爲めの眼がある。其の眼の際まで酒の及ぶのを滿眼酤といふ。ここの滿眼の字面は、ここから出たのである。又、去年播いた麥の種もまた生長が稀である。さて永く愧かしく思ふのは、此邦の人が、日常の生活を安んずることが出來なくて、草木のとげが、膚肌に在るやうなことである。昔、崔儦は、大に其の戶に署して、五千卷の書を讀まざるものは、此室に入るを得ないと言つたが、平生五千卷を讀破しても、一字の饑を救ふことも出來ないとあつては情ない。後漢の廉范は蜀郡の太守に遷つた時、百姓は歌つていふ、廉叔度來る何ぞ暮き、平生襦なく今は五絝（袴と同じ、脛衣）と言つた。方將に襦なきを怨むも、忽ち復、縞衣の宜しきを歌ふのである。堂堂たる北海の相、孔宗翰、其の直氣は羣兒に凜たるものがある。君の朱輪華轂は、未だ郊に及ばないが、其の淸風は已に先づ馳せて居る。ここに何を以て君子を累はさん、卽ち十萬戶の貧と贏とを救ふことである。一州才刺史を得れば、十萬戶が其の福を受ける。不才刺史を得れば、十萬戶が其の困を受けるといふことを聞いて居る。（王文誥いふ、君子二字下得得二抱要一、不二但能添二宗翰聲價一、且、通首神韻、皆此句領起也と。又いふ、自二起句一至二此一節一、所謂舊令尹之政、必以告二新令尹一者云云と。）さて滔滔として四方に滿ちて、我が行は竟に安くに之くのである。（王文誥いふ、二句、別有二寄託一、自レ此入レ結、灑落之甚と）何れの時か、劍關の路に出でて、春山、子規の啼くを聞くべきことぞ。

【餘錄】王文誥いふ、宗翰之父道輔、乃與二范仲淹一、諫二廢后事一、爲二呂夷簡一驅逐者也。但東都事略云、孔道輔、孔子四十五世孫。宋史、道輔爲二孔子四十五代孫一、溫公集、宗翰爲二孔子四十七代孫一、邵注謂、宗翰孔子五十世侯、轇轕難レ辨云云と。

別東武流杯

東武流杯に別る

莫笑官居如二傳舍一。　笑ふこと莫れ官居は傳舍の如しと、
故應二人世等浮雲一。　故に應に人世をして浮雲に等しからしむべし。
百年父老知誰在。　百年の父老知る誰か在る、
惟有雙松識二使君一。　惟雙松の使君を識るあるのみ。

【字解】【一】東武流杯　名勝志に、諸城縣有二柳林河一、出二石門山一、流徑二縣西北一入二於扶淇一、害人爲二上巳祓除之所一。【二】傳舍　史記、鄧食其傳に、沛公至二高陽傳舍一。【三】雙松識二使君一　韓退之の藍田縣丞廳壁記に、對二樹二松一、日吟二哦其間一。使君は、漢の世、太守を府君といひ、刺史を使君といふ。前に屢ゝ出づ。

【題義】此詩は熙寧九年十二月の作である。十二月上旬に、孔宗翰が來つて代つたので、東坡は密

州の任を罷め、東武流杯に留別を作したのである。

【詩意】官居は傳舍の如く、去るもの、來るもの、轉轉相傳へて常の主がない。此の浮草の如き生活を笑つてはならない。もと人世は浮雲に等しかるべし。試みに見よ、百年の後、今日の父老、誰か在る。ただ雙松の使君を識るのみである。

留別零泉

零泉に留別す

擧酒屬零泉。白髮日夜新。
何時泉中天。復照泉上人。
二年飲泉水。魚鳥亦相親。
還將弄泉手。遮日向西秦。

酒を擧げて零泉に屬す、白髮日夜に新なり。
何れの時か泉中の天、復照らす泉上の人。
二年泉水を飲み、魚鳥亦相親しむ。
還泉を弄するの手を將て、日を遮りて西秦に向ふ。

【字解】【一】零泉　東坡、零泉記に、常山西南有レ泉、乃琢レ石爲レ井、作二亭其上一、而名レ之曰二零泉一、古者、謂二吁嗟而求レ雨曰レ零。零は請レ雨祭。春秋繁露に、大旱、零祭而請レ雨。【二】擧レ酒屬　韓退之の詩に、一杯相屬君當レ歌。【三】白髮新　王維の送二邱爲一詩に、爲レ客黃金盡、還レ家白髮新。【四】魚鳥相親　世說に、晉、簡文入二華林園一、顧謂二左右一曰、會心處、不二必在一レ遠、翳然林水、便自有二濠濮間想一也、覺二鳥獸禽魚、自來親一レ人。【五】遮レ日向二西秦一　杜牧之の途中絕句に、惆悵江湖釣竿手、卻遮二西日一向二長安一。

【語釋】此詩も前詩と同じく、十二月上旬、密州の任を罷めた際、零泉に留別したのである。東坡の零泉詩敍に、廟門之西南十五步有レ泉、汪洋折旋如二車輪一、乃琢レ石爲レ井、作二亭於其上一、名レ之曰二零泉一とある。

【詩意】別に臨んで、酒を擧げて零泉に屬する。客と爲つて黃金盡き、家に還つて白髮新なりといふ王維の句は、此際、よくよく身にしみる。何れの時か、此の零泉中の天は、復、此の零泉上の人を照らすことぞ。我は二年間も、此の泉水を飲んだので、ここの魚や鳥とも、日に相親しくなつた。此處に閒居すると、鳥獸禽魚が自ら來つて人に親しむのである。杜牧之の詩に、惆悵す江湖釣竿の手、卻つて西日を遮つて長安に向ふとあるが、我も亦、泉を弄するの手を將て、日を遮つて、西秦に向はう。（王文誥いふ、謂レ欲レ赴二河中一也と。）

留別釋迦院牡丹呈趙倅

釋迦院の牡丹に留別し、趙倅に呈す

春風小院初來時。
壁間惟見使君詩。
應問使君何處去。
憑花說與春風知。

春風小院初めて來る時、
壁間惟見る使君の詩。
應に問ふべし使君何れの處にか去りしと、
花に憑つて說與すれば春風知る。

【字解】【一】趙倅　趙成伯、杭州に倅たり。【二】初來時　初の字一に卻に作る。【三】使君　漢の時、太守を府君、刺史を使君といへるは、前に注した通りである。【四】說與　增韻に、與、從也、爲二相從之辭一。釋

年年歲歲何窮已。　年年歳歳何ぞ窮まり已まん、
花似二今年一人老矣。　花は今年に似て人は老いたり。
去年崔護若重來。　去年の崔護若し重ねて來らば、
前度劉郎在二千里一。　前度の劉郎は千里に在り。

【題義】此詩も前詩と同じく十二月上旬の作である。紀昀いふ、前四句、運意奇幻、後四句、出以二曼聲一、亦情思惘然不レ盡と。

【詩意】春風の通ふ小院に初めて來た時、先づ目に入つたのは、壁間に揭げてある使君の詩である。其詩を誦して、應に問ふべし、使君は何處へ去つたかと。かく花に憑つて說けば、春風は使君の消息を知つて居る。年年歲歲風光は流轉して、窮まりがない。花は今年に似て變らないが、見る人は老いて、同じ容貌ではない。昔、博陵の崔護は、淸明の日に、一人で都城の南に遊んだ。居人の莊を扣いて、美しい女子を見、瞻眄（戀ひ慕ふ）として歸つた。來年の淸明の日になつて、忽ち之を思ひ、直に往いて尋ねると、門牆は故の如くであつたが、已に之を鎖してあつた。此詩は、此故事を用ひて、崔護が若しも重ねて來たなら、以前に來た劉郎（東坡自らいふ）は、去つて千里に在ると語げられよ。これを釋迦院の牡丹に留別の辭とし、兼ねて趙倅に呈する傳言とする。

季漢の詩に、說二與勞人一都來レ信。讀レ書の詩に、說二與江東日暮雲一つ【六】春風知　杜子美の詩に、偉歟風光共流轉。【六】花似二今年一云云　唐人の詩に、菊花一歲歲相似、人與二一年一年不レ同。【七】去年崔護云云　餘は前に見ゆ。

【箋銓】唐、孟啓の本事詩に、博陵崔護、資質甚美、擧二進士一下第、淸明日、獨遊二都城南一、得二居人莊一、一畝之宮、而花木叢萃、寂若レ無レ人、扣レ門久レ之、有二女子自一門隙一窺レ之、問曰、誰耶、以二姓字一對曰、尋レ春獨行、酒渴求レ飮、女入以二杯水一至、獨倚二小桃斜柯一、佇立、而意屬殊厚、妖姿媚態、綽有二餘妍一、及二來歲淸明日一、忽思レ之、情不レ可レ抑、徑往尋レ之、門牆如レ故、而已鎖二扃之一、因題二詩於左扉一曰、去年今日此門中、人面桃花相映紅、人面祇今何處去、桃花依レ舊笑二春風一云云。

董儲郎中嘗知二眉州一。與二先人一遊。過二安邱一。訪二其故居一。見二其子希甫一。留二詩屋壁一

董儲郎中嘗て眉州に知たり、先人と遊び、安邱を過ぎ、其の故居を訪ひ、其の子希甫を見、詩を屋壁に留む

自髮郎潛舊使君。　白髮の郎は潛む舊使君、
至レ今人道最能レ文。　今に至るまで人は道ふ最も文を能くすと。
隻雞敢忘橋公語。　隻雞敢て忘れんや橋公の語、
下レ馬來尋董相墳。　馬を下りて來り尋ぬ董相の墳。

【字解】【一】董儲　密州、安邱人。宋、仁宗の寶元二年、都官員外郎を以て眉州に知たり。東坡集に、董儲能レ詩有レ名、寶元・慶曆間、其嘗尤工、而人莫レ知、僕以爲靜二西塞一也。【二】眉州　唐の置く所。淸は

(八)冬月負ㇾ薪雖ㇾ得ㇾ免。　冬月薪を負ふは免るるを得と雖も、
(九)鄰人吹ㇾ笛不ㇾ堪ㇾ聞。　鄰人の笛を吹くは聞くに堪へず。
(一〇)死生契濶君休ㇾ問。　死生契濶君問ふを休めよ、
灑ㇾ涙西南向(一一)白雲。　涙を灑いで西南白雲に向ふ。

ㇾ知二何許人一、帝亟三郎署一、見二顔駟眉皓髮一、問、何時爲ㇾ郎、何其老也、對曰、臣文帝時、爲ㇾ郎、文帝好ㇾ文而臣好ㇾ武、景帝好ㇾ美而臣貌醜、陛下好ㇾ少而臣已老、是以三世不ㇾ遇、上感二其言一、擢爲二會稽都尉一、遷三槀二而遇ㇾ武。【九】能ㇾ文合注に、董田廟有二石刻一、前過士董錡、重修元鼎文宣王廟記一、亦可ㇾ爲二能文之證一、惜其他不ㇾ傳。【六】隻雞致客云云　後漢、橋玄傳に、曹操感二其知己一、及三後經二過玄墓一、輒懐愴致ㇾ祭、自爲二祭文一曰、士死二知己一、懐ㇾ此無ㇾ忘、又承二徴辟一、誓約之言、徂沒之後、略有二經由一、不ㇾ以二斗酒隻雞一過相沃酹一、車過三步、腹痛勿ㇾ怪、葢二臨ㇾ時戯笑之言一、非二至親之篤好一、胡清爲二此辭一哉。【七】下ㇾ馬來等云云　國史補に、董仲舒墳在二長安門一、人過、皆下ㇾ馬、故謂二之下馬陵一、面部訛謂二蝦蟇陵一。宋の程大昌の雍錄に、下馬陵、在二萬年縣南六里一、章述西征記曰、本、董仲舒墓。【八】冬月負ㇾ薪　史記、滑稽傳に、楚相孫叔敖死、其子窮困負ㇾ薪。文選、謝靈運の詩に、已免負薪苦、乃遊衡陽室。【九】鄰人吹ㇾ笛云云　向秀は思舊賦の序を作つていふ、余少與二嵇康・呂安一、居止接近、其人並有二不羈之才一、其後、各以ㇾ事見ㇾ法、遂幷二四遇一、嵇二其爲盧一、于ㇾ時日暮、聞二鄰人有一吹ㇾ笛者一、發ㇾ聲寥亮、追二思曩昔遊宴之好一、感ㇾ音而歎、故作ㇾ賦云。【一〇】死生契闊　詩、邶風、擊鼓に、死生契闊、與ㇾ子成ㇾ說。【一一】向二白雲一　唐書に、狄仁傑赴二并州一、其親在二河陽一、過二大行山一、反顧見二白雲孤飛一、謂二左右一曰、吾親舍其下一、杜子美が懐舊の詩に、老語知二明鏡一愁來望二白雲一。

【語義】此詩も前詩と同じく十二月上旬の作である。安邱縣を過ぎて、董儲の故居を訪ね、其の子希甫を見て、屋壁に留題したのである。紀昀いふ、殊有二情思一、語亦清穩と。又いふ。補ㇾ出與二先人一遊憲ㇾ好と。

【詩意】漢の顔駟は、三代も不遇であつた。文帝は文を好んで、駟は武を好む。景帝は美を好んで、駟は容貌が醜かつた。武帝は若い人を好み、駟は既に老人となつた。駟眉皓髪、郎署に在つたので、武帝は之を憐み、拔擢して會稽都尉となした。董儲郎中にも、この白髪の郎は潜む舊使君の言葉が適用される。併し、今に至るまで人は道ふ、最も文を能くすと。(顔駟は武の人で、文を好まなかつた。)魏の曹操は、橋玄の知己に感じ、玄の墓を過ぎた時、斗酒隻雞を以て弔祭を致した。又、董仲舒の墓は、長安に在る。武帝が宜春苑に幸し、此に至る毎に、馬を下つたので、時に之を下馬陵といふ。歳久しく謌つて蝦墓陵となつたといふことである。楚の相孫叔敖の子や、任昉の子が薪を負ふの窮困は、免るることが出來たが、鄰人の吹笛を聞くと、曩者游宴の好を追思して感傷に堪へない。死生は契濶、君之を問ふことを休めよ、我は涙を灑いで西南に白雲の孤飛するを望むのである。

直隸州となし、四川に屬す。民國、改めて眉山縣となす。【三】安邱　太平寰宇記に、安邱縣在二密州西北一百二十里一、漢舊縣、屬二北海郡一、大業二年、改二本山縣一爲二安邱一、復二舊名一。【四】白髮郎　漢武故事に、顔駟不

蘇東坡詩集　卷十五

古今體詩　六十四首

除夜大雪留濰州。元日早晴。遂行。中途雪復作

除夜大雪、濰州に留る、元日早晴、遂に行く、中途にして雪復作る

除夜雪相留。元日晴相送。
東風吹宿酒。痩馬兀殘夢。
葱曨曉光開。旋轉餘花弄。
下馬成野酌。佳哉誰與共。
須臾晩雲合。亂灑無缺空。
鵝毛垂馬鬣。自怪騎白鳳。
三年東方旱。逃戸鼓棟。
老農釋耒歎。淚入饑腸痛。

除夜雪ふりて相留り、元日晴れて相送る。
東風宿酒を吹き、瘦馬殘夢兀たり。
葱曨曉光開き、旋轉餘花弄す。
馬を下りて野酌を成す、佳なるかな誰と與にか共にせん。
須臾に晩雲合し、亂灑缺空なし。
鵝毛馬鬣に垂れ、自ら怪む白鳳に騎るを。
三年東方旱して、逃戸鼓棟を連ぬ。
老農耒を釋てて歎じ、淚は饑腸に入つて痛む。

春雪雖云晩。春麥猶可種。春雪は云に晩るると雖も、春麥猶ほ種うべし。
敢怨行役勞。助爾歌飯甕。敢て怨む行役の勞、爾を助けて飯甕を歌ふ。

【字解】【一】濰州　濰水は琅邪箕屋山に出づ。太平寰宇記に、青州北海縣、隋置濰州、宋建隆五年建爲北海軍、西至東京二千三百二十里、東南至密州界二七十五里。曾鞏の隆平集にいふ、乾德三年、以北海軍爲濰州。【二】宿酒　越合峠の詞に、宿酒醒遲、惱破春情緒。宿醉・宿醒といふに同じ。【三】復馬兀　殘夢　馬嘶時復覺。【四】葱曨　曨は日出の貌。東坡の師田園二詩序に、曉日葱曨、竹陰翳銘。又、東坡の詩に、江郊葱曨、雲水蒲綠。【五】旋轉　旋回といふに同じ。北史に、雪表見二一大鳥一射レ之、正中二其翼一、狀如二車輪一、旋轉而下、乃鶴也。【六】餘花弄　文選、謝朓の詩に、鳥散餘花落。【七】須臾　少頃、中庸に、道也者、不レ可二須臾離一也。【八】鵝毛　白樂天が春雪の詩に、大似レ落二鵝毛一、密如レ飄二玉屑一。又、房家夜宴詩に、門前雪片似二鵝毛一。【九】騎二白鳳一　曹唐、遊仙の詩に、玉詔新除沈侍郎、便分二茅土一領二東方一、不レ知今夜遊二何處一、侍從曾騎白鳳皇。晏元獻が雪詩に、聞思北海銀宮畔、誰駕丹山白鳳遊。【一〇】三年東方旱　漢、于定國傳に、東海殺二孝婦一、郡中枯旱三年。【一一】逃戸　唐書、食貨志に、括二籍外・羨田・逃戸自占者一云云。【一二】敲椎　盧綸の詩に、敲椎止二擊鼓一。【一三】歌二飯甕一　隋書、五行志に、童謠曰、七月刈レ禾傷レ早、九月喫レ糕正好、十月洗二蕩飯甕一云云。農諺、窮漢備二飯甕一。

【題義】此詩は熙寧十年正月元日（東坡の四十二歳の時）の作である。除夜、大雪の爲に濰州に止まつたが、元日早晴、濰州を出發し、途中で、雪が復、降つたので、此詩を作つたのである。紀昀いふ、鷲毛字、本俚語、得二下五字一、便成二奇采一、於レ此悟二點化之妙一と。又いふ、收處波瀾壯闊、立言亦極得レ體と。

【詩意】除夜に雪が降つたので、已むなく濰州に逗留したが、一夜明け、元日は早く晴れたから、出發した。春風は二日酔の此身を吹き、痩せた馬の上に殘夢兀兀（酒德頌に、兀然而醉とある）として騎つて居る。馬は嘶いて、時に復、驚く。東天が徹白となつて、曉光が開けたので、旋り回つて餘花を弄する。途上の風光は、我を勤住せしめるものがある。そこで馬を下つて野酌をする。陶然として佳いかな、誰と與にか、此の行樂を共にしよう。暫くして晩雲が相合し、忽ちにして亂れ灑いで、大空一面に擴がつた。雪が復、降り來つたのである。白樂天の所謂大さは鵝毛を落すに似、密なること玉屑を飄すがやうである。かくて鵝毛は馬の鬃に垂れ、自ら怪しむ、我は是れ白鳳凰に騎つて居るのではないかと。首を回せば、三年、東の地方が旱して、逃亡の家が多く、街上には敲いた棟を連ねて居る。老農は耒を釋てて歎息し、淚は飢腸に入つて痛む。春の雪はここに晩れても、春の麥を種ゑねばならないから、少しも暇がない。敢てお上から命せられる行役の勞を怨むのである。爾を助けて飯甕の童謠でも歌はうか。

大雪青州道上。有レ懷二東武園亭一。寄二交代孔周翰一

大雪青州道上、東武園亭を懷ふあり、交代の孔周翰に寄す

超然臺上雪、　超然臺上の雪、
城郭山川兩奇絕。　城郭山川兩ながら奇絕。

【字解】【一】青州　元和郡縣志に、青州北海郡、齊營邱、漢爲二臨淄一、魏、武德二年、改二青州一置二總管府一、東

海風吹碎碧琉璃、
時見三山白銀闕。
蓋公堂前雪。
綠窗朱戸相明滅。
堂中美人雪爭妍。
粲然一笑玉齒頰。
就中山堂雪更奇。
青松怪石亂瓊絲。
惟有使君游不歸。
五更馬上愁欹眉。
君不見淮西李侍中、
夜入蔡州縛取吳
元濟。

里ニ密州ニ三百三十里。【三】交代ハ後漢書ニ、傅燮爲ニ漢陽太守ニ、初范津擧ニ燮孝廉ニ、及ニ津爲ニ漢陽ニ、介ノ将而去。因擧紀聞ニいふ、交代宇、出ニ漢書蓋寛饒傳ニ一。【三】超然臺　使岡の北に在る。東坡の記に、園之北、因ノ城以爲ノ臺者、舊矣、稍葺而新ノ之云云。【四】碧琉璃　杜子美の詩ニ、天地翻惨怳異ノ色、波濤萬頃堆ニ琉璃ニ一。【五】三山白銀闕　史記、封禪書ニ、三神山、其物禽獣盡白、金銀爲ニ宮闕ニ一。【六】蓋公堂　本集、蓋公堂の記に、曹參爲ニ齊相ニ、避ニ正堂ニ一、以舍ニ蓋公ニ一、吾爲ニ膠西守ニ一、知ニ公之爲ニ邦人ニ一也、治ニ新寢於東堂之北ニ一、名ノ之曰ニ蓋公堂ニ一。【七】粲然　笑ふ貌。曹操傳、昭公四年ニ、軍人粲然皆笑。【八】玉齒頬　戴叔倫の詩ニ、玉頬朱顋紅夢初醒。【九】山堂　本集、山堂銘ニ、熙寧九年六月大雨、野人來

又不ノ見襄陽孟浩然、
長安道上騎ニ驢吟一
雪詩。
何當閉ノ門飲ニ美酒一。
無ニ人毀ニ譽河東守一。

又見ずや襄陽の孟浩然、
長安道上驢に騎つて雪の詩を吟せしを。
何か當に戸を閉ぢて美酒を飲み、
人の河東の守を毀譽する無かるべき。

骨、故東武城中、溝澮圮壊、亂石無數、取而儲ノ之、因守居ニ之北墉一、爲ノ山五成、且開ニ新堂一、北向以遊ノ心寓ノ意焉。【一〇】青松怪石　禹貢ニ、青州、厥貢鉛松怪石。注ニいふ、怪異好石似ノ玉者。【一一】亂ニ瓊絲一　劉禹錫の玉蕊花詩ニ、雪繁瓊蘂滿院春、羽衣鱗歩不ノ生塵。【一二】淮不ノ歸　楚辭ニ、王孫遊兮不ノ歸、春草生兮萋萋。【一三】五更　五夜に同じ。一夜を五分し、甲夜（午後八時）、乙夜（午後十時ノ）、丙夜（夜半十二時）、丁夜（午前二時ノ）、戊夜（午前四時）とする。夜番のものが、甲乙順番に更代するより五更といふ。杜子美の詩ニ、五更漏聲催ニ曉箭一。【一四】欹ノ眉　庾信の詩ニ、畏ニ君ノ花定欹ノ眉。【一五】李侍中、入ニ蔡州一云云　李愿、吳元濟を討ち、雪夜、蔡城に入り、黎明、元濟を禽にす。舊唐書ニ、李愿以ニ散騎常侍一充ニ隋唐鄧節度使一、鎮ニ蔡州一至ニ懸瓠城一、夜半、雪意甚、賊宴然、無ニ一人知者一、遂入ニ蔡州一、禽ニ元濟一、檄ニ送京師一。【一六】騎ノ驢吟ニ雪詩一　孟浩然が途中雪詩ニ、迢遞秦京道、蒼茫歲暮天、驢背上殘夢、灞橋雪中寒ニ、灞橋雪中驢背上一人題一。又、長安道中の雪詩ニ、積雪及ニ平皐一、飢鷹捉ニ寒兎一。王注ニ、戚問ニ鄰叟詩思ニ、對日、詩思在ニ灞橋雪中驢背上一。【一七】毀ニ譽河東守一　史記ニ、季布爲ニ河東守一、孝文時、人有ノ言ニ其勇使ノ酒難ノ近、至、留ノ邸一月見ノ罷、布遍曰、陛下以ニ一人譽一召ノ臣、以ニ一人毀一去ノ臣、臣恐天下有ノ識者、聞ノ之、有ニ以窺ニ陛下一也。

【題義】此詩も熙寧十年正月の作である。青州の道上で大雪に遭ひ、東武の園亭を懐うて、交代の孔宗翰に寄せた詩である。王文誥いふ、君不ノ見以下六句、皆公自謂也と。

【詩意】超然臺上から見た雪の景色をいふと、城郭も、山川も、兩ながら奇絶の二字に盡きて居る。海風が吹き來ると、忽ち波濤萬里の碧琉璃を碎いて、時に蓬萊・方丈・瀛洲の三神山を見る。三神山は黄金・白銀を宮闕とし、之を望むに雲の如く、三山に到るに及び、之に臨めば、風輒ち引き去るといふことである。さて、蓋公堂の由來をいふと、昔、曹參が齊の相となり、正堂を避けて、蓋公を舍した。東坡が膠西の太守となつた時、蓋公の此の邦の人であることを知つて、此堂を造つたのである。蓋公堂前の雪は白く、堂の綠窻朱戸と相明滅する。又、堂中の美人は、雪と其の美しさを相爭ひ、粲然として一笑し、紅頰は玉齒を見はす。又、東武城中山堂の雪は、更に奇である。かの青州から貢する鉛松怪石の形をなして居る。又、雪の絮、瓊の絲を亂したやうである。ただ使君は遊んで歸らないので、五夜、馬上に愁へて、眉を斂める。君見すや、淮西の李侍中(李愬)を。吳元濟を討ち、雪夜に蔡州の城に入り、黎明に元濟を禽にした。又、見すや、襄陽の孟浩然を。長安の道上、驢馬に騎つて雪の詩を吟じつつ行く。何れの時か、雪中戸を閉ぢて美酒を飲み、人が河東の守を毀つたりすることのないやうにしたい。(昔、季布が河東の守となつたとき、其の賢を言ふものがあつた。文帝は召して御史大夫となさんとした。復、其の勇にして酒を使ひ、近づけ難きを言ふものがあつたので、至れば邸に留めた。布は進んでいふやう、陛下は一人の譽めるを以て臣を召し、一人の毀るを以て臣を去ると言つたさうである。此故事に據つたものである。合注に、河東守、當レ指レ自、言レ將レ赴河中一とある。)

至濟南李公擇以詩相迎次其韻二首

濟南に至る、李公擇詩を以て相迎ふ、其の韻に次す　二首

敝裘羸馬古河濱、
野闊天低慘玉塵、
自笑餐氈典屬國、
來看換酒謫仙人。
宦遊到處身如寄、
農事何時手自親。
剩作新詩與君和、
莫因風雨廢鳴晨。

敝裘羸馬古河の濱、
野闊く天低れて玉塵を慘にす。
自ら笑ふ氈を餐ふ典屬國、
來り看る酒に換ふる謫仙人。
宦遊到る處身寄するが如く、
農事何の時か手自ら親うせん。
剩へ新詩を作つて君と和す、
風雨に因つて鳴晨を廢すること莫れ。

【字解】【一】濟南　漢の濟南國は、元魏の時、齊州と改め、天寶中、濟南郡と改む。【二】李公擇　行狀に、神宗初、爲二右正言一、力二詆新法一落職、還二列滑州一、幾餘復職、知二鄧州一、徙知二湖州一、遷二尚書祠部員外郎一、徙知二齊州一。東坡の密州を離れしは、正に公擇の齊州に知たり一時であつた。【三】敝裘羸馬　裘氅の詩に、自愛悲二明鏡一、青春換二敝裘一。羸は瘦せる意。韓退之の詩に、日西入二軍門一、風雨因つて鳴晨を廢す。【四】野闊天低　孟浩然の詩に、野曠天低レ樹。【五】慘二玉塵一　慘は米粒。何遜の詠レ雪詩に、時逐二微風一起、誰言非二玉塵一。秦觀の雪の詩に、雲重寒空思寂寥、玉塵如レ篩滿二春潮一。【六】餐レ氈典屬國　漢の蘇武、字は子卿、杜陵の人。天漢の初、匈奴に使して、拘留せらる。雪を嚙み、氈を餐ひ、節に仗りて、羝を牧す。居ること十九年、還るを得て、典屬國に拜せらる。【七】換レ酒謫仙人　紀昀いふ、金龜換レ酒、是賀監(賀知章は祕書監である)非二李白一と。五代、王定保の摭言に、賀知章、一見二李白一、呼爲二謫仙人一、因解二金龜一換レ酒爲レ樂。金龜は、唐の初、品官は皆、魚を佩び、以て召命の詐を防ぐ。天授二年、佩魚を改めて龜となす。【八】鳴晨　詩、國風、風雨如レ晦、雞鳴不レ已。杜子美の催宗文樹雞柵詩に、不レ昧風雨長、亂離滅二憂感一。

【題義】　此詩も熙寧十年正月の作。東坡が濟南に赴かんとする時、李常(公擇)は詩を以て相迎へたので、其の韻に次したのが此の二首である。施注に、公擇知二湖州一、東坡以二杭倅一來會、今自二高密一、官滿過二濟南一、而公擇復爲レ守在焉と見ゆ。紀昀いふ、五句、語太率易、結亦清薄と。

【詩意】　斃れた裘を著け、痩せた馬に騎つて古河の濱を行く。天、雪意を催ほして、野が闊くなる。野が闊くなると、天は低いやうに感ずる。(孟浩然も、野曠うして天、樹に低ると言つた。)野闊く天低れ、玉の塵は、米粒のやうに撒かれる。雪の飛び散るのである。さて、降る雪につけて憶ひ起すのは蘇武の事である。蘇武は匈奴に使して拘留され、人なき北海の地に移さる。彼は雪に和して、旃毛を食ひ、漢節を持して失はなかつた。匈奴に在る十九年、本國に還ることを得て、典屬國に拜せられた。斃裘瘦馬の我は、北海、人無き地に羝を牧する蘇武を思うて、自ら笑ふのである。又、賀知章は、一たび李白を見て、謫仙人と呼び、因つて品官として身に佩びて居る金龜を解いて、酒に換へ、樂をなしたといふことである。今、來つて賀知章や、李太白に比すべき詩人の李公擇を見るのである。宦遊は浮草の如く、到る處、寄寓の思をする。何れの時か、故山に歸つて、自ら農事をなしたいものである。そして、又、新詩を作つて、君と和したいものである。風雨の爲に、晨を告げることを廢めてはならない。

夜擁笙歌雪水濱。

夜笙歌を擁す雪水の濱、

～【字解】【一】笙歌　笙は竹製の樂器、禮弓に、孔子既葬、五日彈レ琴而不レ成レ聲、十日而成二笙歌一。【二】雪水　雪溪は、浙江、吳興縣の南に在る。雪字記に、凡四水、合爲二一溪一、東北流入二太湖一。【三】樂事總成レ塵　樂事總て塵と成る。

頭を回せば樂事總て塵と成る。

今年送二汝作一太守一。

今年汝が太守と作るを送り、

到處逢レ君是主人。

到る處君に逢ふ是れ主人。

聚散細思都是夢。

聚散細思すれば都て是れ夢、

身名漸覺兩非レ親。

身名漸く覺ゆ兩ながら親にあらざるを。

相從繼レ燭何須レ問。

相從つて燭を繼ぐ何ぞ問ふを須ゐん、

蝙蝠飛時日正晨。

蝙蝠飛ぶ時日は正に晨なり。

鄭檢二云只見二汝送二人作一レ郡、不レ見二人送二汝作一レ郡、温笑以爲二襄陽太守一。【五】聚散　杜子美、別二蔡著作一詩に、憶念鳳翔都、聚散俄十春。【六】身名漸覺兩非レ親　老子に、名與レ身孰親。【七】繼レ燭云云　左傳、莊公二十二年に、陳公子完奔レ齊、齊侯使レ爲二工正一、(工正は百工を掌る官)飲レ酒、樂、公曰、以レ火繼レ之、辭曰、臣卜二其晝一、未レ卜二其夜一。【八】蝙蝠飛時　韓退之の詩に、黄昏到レ寺蝙蝠飛。

【詩意】　一夜、我は笙歌を擁して吳興雪水の濱に在る。我は昔、張子野・劉孝叔・李公擇・陳令舉・楊元素等と吳興に會合したことがある。其時、張子野は、六客の詞を作つたが、頭を回せば、風流樂事すべて塵となる。今年、汝が太守となつて行くのを送る。昔、羅友は家が貧しかつた爲に、祿を桓溫に乞うていへるやう、私は昨日、一鬼に逢うた。鬼はいふ、只、汝の人が郡の太守となつて行くを送るを見、人の汝が郡の太守となつて行くを送るを見ないと。桓溫は笑つて羅友をば襄陽の太守としたと

いふ話がある。此の故事に據つたのである。汝が太守となるを送つて、到る處、相逢へば、是れ主人と同じである。暫時相逢ひ、又、相別る。人間の聚散も、細思すれば、すべて是れ夢である。老子はいふ、名と身と孰れか親しきと、我は身と名と兩ながら親しきものでないと思ふ。陳の公子完、齊に奔る。齊侯は工正といふ百工を掌る官となした。公子完は、公に酒を飲ましむ。公は樂んで、火を以て之を繼がんと。公子完は辭していふ、臣は其の晝を卜して、未だ其の夜を卜しないと。相會して相話するのに、燭を繼ぐなど、固より問ふ必要もない。なせといふに、蝙蝠飛ぶ黃昏の時と思ふ間もなく、日は正に晨である。

和孔君亮郎中見贈

孔君亮郎中見贈　孔君亮、嗣里志に

偶對先生盡一樽。偶〻先生に對して一樽を盡す、

醉看萬物洶崩奔。醉うて看る萬物の洶として崩奔するを。

優游共我聊卒歲。優游我と共に聊か歲を卒ふ、

骯髒如君合倚門。骯髒君の如く合に門に倚るべし。

只恐掉頭難久住。只恐る頭を掉うて久しく住し難きを、

【字解】【一】孔君亮　嗣里志に孔舜亮、字君亮、道輔長子、嘉祐四年、進士、位至三左中散大夫一致仕、累三特進少師一。【二】偶對　偶は思ひ設けない意。字彙に、合也對也。韻會に、不レ期而合の義である。【三】洶崩奔　洶はさわぎ立つ意。文選、謝靈運の入三彭蠡一詩に、坻岸屢崩奔。【四】優游、卒レ歲　史記、孔子世家に、優哉游哉、維以卒レ歲。【五】骯髒、倚レ門　骯髒は、掉レ頭難三久住一　杜子美の送三孔巢父一詩に、巢父掉レ頭不三肯住一、東將三入レ海隨三煙霧一。【六】應須　東坡の詩に、應須傾レ蓋便深論。【七】應須傾レ蓋　馬車の蓋を傾け、兩車を接近せしめて相語る。孔子家語、致思篇に、孔子之レ郯、遭三程子於塗一、傾レ蓋而語、終日甚親。又、鄒陽の獄中上三梁王一書に、諺曰、有三白頭如レ新、傾レ蓋如レ故。【八】骯髒　東坡の自注に、幾、字君冀、弟載、字君勝、退之志三其墓一云、孔世卅八、吾見三其孫、白而長身一、今官殿四十八世矣。

【題義】孔君亮郎が贈られた詩に和韻したのである。欒城集に、孔君亮郎中、新葺三嗣里西園一、棄レ官而歸、七律一首、亦宣聖後裔也とある。

【詩意】思ひ設けず先生と相對して一樽を傾け盡した。醉うて萬物の洶洶としてさわがしく崩れ奔れるさまを看る。身を忙はしくしても、心は閒にしなくてはならない。世態の洶涌を外に、我は優游以て歲を卒ふるのである。高亢婞直（剛直にしてもとることをいふ）君はまさに門邊に倚つて、一世を睥睨するであらう。ただ恐れるのは、杜子美の所謂、巢父頭を掉うて肯て住まらず、東の方、將に海に入つて煙霧に隨はうとするのである。まさに須らく車の蓋を傾けて相語る、孔子の程子に於けるが如くなるべきである。程子は、名を本といひ、齊の人で、鄒より反り、孔子に塗に遇ひ、蓋を傾け

て輿に語つて日を終へたのである。孔君厳・孔君勝、韓退之は其の墓に志して、孔世三十八、吾、其の孫、白うして長身なるを見ると言つたが、今、君亮は四十八世である。

【餘論】王文誥いふ、孔宗翰、即君亮之弟、公先與二宗翰一交代至レ此、又遇二其兄君亮一、故引二殘・數一爲レ比、有二又見長身之句一、謂下已見二宗翰一而又見中君亮上也、又、自二孔世三十八一至二君亮一、已四十八世、故云十世孫、其引用親切如レ此、斷無レ有下誤二其世次一者上、可レ見宗翰四十八世、公在レ密、已具知レ之、否則并二君亮一無二此詩一云云と。

顔樂亭詩

顔樂亭の詩

顔子之故居。所レ謂陋巷者。有二井存一焉。而不レ在二顔氏一久矣。膠西太守孔君宗翰。始得二其地一。浚二治其井一。作レ亭於其上。命レ之曰二顔樂一。昔夫子以二簞食瓢飲賢二顔子一。而韓子乃以爲二哲人之細事一。何哉。蘇子曰。古之觀レ人也。必於小者一觀レ之。其大者。容レ有レ僞焉。人能碎二千金之璧一。不レ能レ無レ失レ聲於破レ釜。能搏二猛虎一。不レ能レ無レ變レ色於蜂蠆一。孰知二簞食瓢飲之爲一哲人之大事一乎。乃作二顔樂亭詩一。以遣二孔君一。正二韓子之說一。且用以自警云。

【訓讀】顔子の故居、所謂陋巷なるものに、井の存するあり。而して顔氏にあらざること久し。膠西の太守孔君宗翰、始めて其の地を得、其の井を浚治し、亭を其の上に作り、之を命けて顔樂といふ。昔、夫子は簞食瓢飲を以て顔子を賢とす。而して韓子は乃ち以て哲人の細事となすは何ぞや。蘇子曰く、古の人を觀るや、必ず小なる者に於て之を觀る。其の大なる者は、僞あるべし。人能く千金の璧を砕いて、聲を破釜に失するなき能はず。能く猛虎を搏ちて、色を蜂蠆に變ずるなき能はず。孰か簞食瓢飲の哲人の大事たるを知らんや。乃ち顔樂亭の詩を作り、以て孔君に遣り、韓子の說を正し、且用ひて以て自ら警むと云ふ。

【字解】【一】顔樂亭　司馬君實に顔樂亭の頌あり、李邦直に顔樂亭の銘あり。【二】陋巷　狹くきたない小路。直にして廣い道筋を街といひ、曲つて狹い道筋を巷といふ。論語、雍也篇に、一簞食・一瓢飲、在二陋巷一つ【三】膠西　濮の膠西王國、今、山東膠縣、高密等の地。【四】孔君宗翰　道輔の子、字は周翰、遯士及第、哲宗の時、刑部侍郎に累遷す。【五】浚治　井戸をさらふ。孟子、萬章に、使レ浚レ井云云。【六】簞食瓢飲　簞は竹で編んだ飯を入れる器、食は飯、瓢は匏の小なるもの、飲は水漿。【七】哲人之細事　道理に明かなる人に取りては、簞食瓢飲は細事といふ意。韓退之の貞元十年、應二博學宏詞科一作に、居二陋巷一以救二其說一、飲二一瓢一以求二其志一。【八】碎二千金之璧一云云　王文誥いふ、四句、惟見二於酣鼠賦及此段中一、其原文已佚去矣と。蜂蠆は、左傳、僖公二十二年に、蠆有レ毒卷。

天生烝民。爲之鼻口。

天烝民を生じ、之が鼻口を爲る。

美者可(レ)嚼。芬者可(レ)嗅。
美必有(レ)惡。芬必有(レ)臭。
我無(二)天游(一)。六鑿交鬪。
鷲而不(レ)返。跬步商受。
偉哉先師。安(二)此微陋(一)。
孟賁股栗。虎豹却走。
眇然其身。中亦何有。
我求(二)至樂(一)。千載無(レ)偶。
執(レ)瓢從(レ)之。忽焉在(レ)後。

美なるものは嚙むべく、芬なるものは嗅ぐべし。
美必ず惡あり、芬必ず臭あり。
我に天游なければ、六鑿交〻鬪ふ。
驚せて返らず、跬步の商受。
偉なる哉先師、此微陋に安んず。
孟賁股栗し、虎豹却き走る。
眇然たる其身、中に亦何か有る。
我至樂を求むるも、千載偶なし。
瓢を執りて之に從へば、忽焉として後に在り。

【字解】【一】天生(二)烝民(一)　詩、大雅烝民に、天生(二)烝民(一)、有(レ)物有(レ)則、民之秉(レ)彝、好(二)是懿德(一)。烝民の烝はもろもろの意。【二】芬　花草の香氣、東坡の詩に、草木變(二)芬薌(一)。【三】天游　莊子、外物篇に、心有(二)天游(一)、室無(二)空虛(一)、則婦姑勃谿、心無(二)天游(一)、則六鑿相擾。勃谿は、爭鬪するないふ。【四】六鑿　耳・目・鼻・口・心・知の六根をいふ。【五】跬步　半步、跬、祭禮に、故曾子跬步而不(レ)忘(レ)孝也。荀子に、不(レ)積(二)蹞步(一)、無(二)以至(二)千里(一)。注にいふ、蹞與(レ)跬同。凡そ舉足は、孔子を尊んで先聖となし、先師顏子を配す。【六】商受　商(殷)の紂王は名は受。【七】先師　顏子をいふ。【八】微陋　東坡の詩に、孤光照(二)微陋(一)、眇如(二)月在(レ)盆。【九】孟賁　古の勇士、能く生牛の角を抜く。【一〇】股栗　戰慄の意。史記、齊、悼惠王世家に、股戰而栗、懾不(レ)能(レ)言。酷吏傳に、族(二)滅嚴氏首惡(一)、餘皆股栗。【一一】眇然　漢書、文帝紀に、以(二)微眇之身(一)、王資、聖主得(二)賢臣(一)頃、眇然絕(レ)俗離(レ)世哉。【一二】無(レ)偶　魏志、管寧傳に、德行卓絕、海內無(レ)偶。【一三】忽焉在(レ)後　論語、子罕篇に、瞻(レ)之在(レ)前、忽焉在(レ)後。

【題義】此詩は熙寧十年十月の作である。王文誥いふ、眇は此詩を語自脫洒と評して居る。

【詩意】天が此の烝民を生ずる、先づ之が鼻や口を爲る。物あれば則ありで、美しいものは嚙むべく、香ひのよいものは嗅ぐべきである。そして美には必ず惡があり、芬には必ず臭がある。從つて心に天游がなければ、游あるを要する。（心に天游ありとは、小中に大あるの謂である。）若しも我に心の天游がなければ、耳・目・鼻・口・心・知の六根は、交〻鬪ふのである。彼此相爭へば、各〻守執する所があつて、ただ驚するのみで返らない。跬步の紂王といふ意は論語の紂の不善の章を用ひたのであらう。卽ち紂王の不善は、是の如く甚しくはなかつた。是を以て君子は下流に居るを惡むといふ意を取つたのであらう。偉大なるかな、先師顏子、一簞の食、一瓢の飮、陋巷に在つて、微陋に安んじて、其の樂みをば改めない。古の勇士孟賁も、之に逢へば戰慄する。偉大なるかな先師顏子。飜つて此身を顧るに、我は自然の神を存する たる其身の中に、亦何かある。虎や豹の猛獸も、之を見れば却き走る。顏子が眇然至樂の地を求めるも、千載遂に偶がない。試みに顏子の瓢を執つて之に從はんとすれば、之を瞻る前に在り、忽焉として後に在る。恍惚として終に從ふべき路がない。

送范景仁游洛中

小人眞閣ㇾ事。閒退豈公難。
道大吾何病。言深聽者寒。
憂ㇾ時雖ニ早白一。駐ㇾ世有ニ還丹一。
得ㇾ酒相逢樂。無心所ㇾ遇安。
去年行ニ萬里一。蜀路走千盤。
投ㇾ老身彌健。登ㇾ山意未ㇾ闌。
西游爲ニ櫻筍一。東道盡ニ鵁鶄一。
杖屨攜ㇾ兒去。園亭借ㇾ客看。
折ㇾ花斑竹寺。弄ㇾ水石樓灘。
鬻ㇾ馬衰憐ㇾ白。驚ㇾ雷怯笑ㇾ韓。
蘇書標ニ洞府一。松蓋偃ニ天壇一。
試與ニ劉夫子一。重尋ニ靖長官一。

【字解】【一】范景仁　范鎭字は景仁、過士第一に擧げらる。仁宗の時、諫院に知たり。帝、在位三十五年、未だ嗣嗣あらず。景仁、儲を建てんことを請ふ。面陳懇切、泣下るに至る。帝曰く、朕、躬の忠を知る、當に之を俟つべしと。前後筆十九上り、命を待つ百餘日、鬢髮爲に白し。後、翰林學士となる。新法を論じて、王安石と合はず、遂に致仕す。哲宗卽位し、起して端明殿學士となす、固辭して拜せず。累に蜀郡公に封ぜらる。卒して忠文と謚す。【二】閒退　宋史、高宗記に、戊辰、置ニ路分總管一、以處ニ閒退武臣一。伽藍記に、李延實曰、臣久乞ニ閒退一、陛下消陽興ノ念、寵及ニ老臣一。【三】道大何病　史記、孔子世家に、顏回曰、夫子之道至大、故天下莫ニ能容一。雖ノ然夫子推而行ノ之、不ノ容何病、不ノ容然後見ニ君子一。是亂也、客曰、不ノ然、交淺而言深、是忠也。【四】聽者寒　范景仁、嘗て累疏して、王安石を力詆す。安石大に怒り、其の疏を持して、手顫ふに至る。故にいふ、聽者寒と。【五】還ニ早白一　東坡の范公墓誌に、上疏請ノ擇ニ宗室賢者一、異ニ其禮物一、而試ニ之政事一、以繫ニ天下心一。凡章十九上、待ノ罪百餘日、須髮爲白。記昀いふ、去ニ髮字一、則白者何物。【六】還丹　李太白の詩に、待ニ吾還丹成一、投ノ迹歸ニ此地一。還丹は道家煉丹の循環變化をいふ。眞仙傳に、小還丹・大還丹あり。【七】無心　道德指歸論に、夫道之爲ノ物、無形無狀、無心無意。【八】走千盤　盤は旋る意。司馬溫公詩話に、范景仁、年六十三致仕、一朝思ニ鄕里一、逢ニ徑行入ノ蜀、至ニ成都一、日與ニ鄕人一樂飲、散ニ財於親舊之貧者一、遂游ニ峨眉青城上一、下ニ巫峽一、出ニ荊門一、凡期歲乃還ニ京師一。【九】投ノ老　老年に至る意。後漢書、仇覽傳に、母守ノ寡、養ノ孤、苦ノ身、投ノ老。【一〇】爲ニ櫻筍一　秦中歲時記に、唐有ニ櫻筍廚一。白樂天の歌馬嶠に、憶ニ家園一須ニ速去一、櫻桃欲ノ熟筍應ノ生。【一一】東道　左傳、僖公三十年に、舍ノ鄭以爲ニ東道主一。【一二】鵁鶄　文選、郭景純の詩に、甬道入ニ鵁鶄一。劉禹錫、洛下拜表の詩に、雪路鵁鶄想ニ退朝一。【一三】杖屨　世說に、陳太邱、謂ニ荀朗陵一、曾倹無ニ儀役一、乃使ニ元方持ノ杖從ノ後。韓退之の孔戡墓誌に、可ニ杖屨往來一。【一四】石樓　石樓は河南龍門伊水の中に在る。洛陽伽藍記に、城東門曰ニ建春門一、門外有ニ石橋一、穀水周圍繞ノ城、至ニ建春門外一、東入ニ陽渠一。【一五】驚ノ馬云云　唐、白居易、洛中に致仕し、既に老い、又、風を病み、將に其の駱馬を鬻がんとす。馬が悲鳴したから、不ノ能ノ忘ノ情吟を作り、又、賣ニ駱馬一詩あり。白樂天不ノ能ノ忘ノ情吟序に、樂天既老、又、病ノ風、乃捨ニ家事一、會ニ經費一、去ニ長物一、馬有ニ駱者一、最壯駿稔、乘ノ之亦有ノ年、籍在ニ長物中一、將ノ鬻ノ之、圍人牽ノ馬出ノ門、馬識ノ首反顧、一鳴似ニ知ノ去而戀ノ櫪者一、予感然且命廻ノ勒。【一七】驚ノ雷云云　崇山、韓退之題名にいふ、元和四年二月二十六日、與ニ樊宗師・盧全一、自ニ洛中一至ニ心室一、謁ニ李渤一、遂至ニ龍潭一、下釣、遇ニ雷雨一、明日乃歸。歐陽集古跋尾に、右韓退之題名在ニ洛陽嵩山天封宮一、石柱上刻ノ之、記ニ龍潭遇ノ雷事一。余爲ニ西京留

守推官、游二嵩山一、入二天封宮一、登二山頂之武后封禪處一、有二石記一、或ㇾ人溺二龍潭一者、以母妾語笑以驩、神龍、龍惡則有ㇾ雹、恐因ㇾ念二退之一ㇾ記遇ㇾ雹、竟二其有ㇾ所ㇾ誡也。【一八】蘇嘗云云　東坡の自注に、歐陽永叔、嘗游二嵩山一、日暮、於二絶壁上一、見二苔蘚一、成ㇾ文云、神清之洞、明日復尋不ㇾ見。【一九】天壇　九域志に、洛陽有二天壇山一。太平寰宇記に、天壇山在二河南府一、濁池縣東北一、一名壇屋山、高五百丈、四絶如ㇾ壇。【二〇】與二劉夫子一尋二靖長官一　東坡自注に、劉凡云、嘗見二人嵩山幽絶處一、眼光如ㇾ貓、意二其爲一靖長官一也。嘗徵、集仙傳に、靖不ㇾ知二何許人一、唐、僖宗時、爲二登封令一、託面寒ㇾ官學ㇾ道、遂仙去、隱二其姓一而以ㇾ名顯、故世謂二之靖長官一。劉凡嘗遇二於嵩高山中一、

【題義】熙寧十年三月、范景仁の西京に往く時、東坡の送つた詩である。紀昀いふ、大段疏暢と。又いふ、起四句、太激、查初白以爲二痛快一非也と。

【詩意】小人はもともと小才であつて、事理に暗く、ただ進むを榮となし、退くを辱となす。范景仁が前に侍郎となつて、進むを難とし、退くを易しとする態度は、小人だちの與り知る所でない。高位を勇退して閒地に就くは、范公に取りて、決して難しとする所ではない。顏回曰く、夫子の道は至つて大で、天下能く容るるなし。併し容れられないからと言つても何ぞ病へん。容れられない所に君子を見るのであると。道大である故に、吾、何ぞ病へんやである。又、言が深く立ち入るのは、聽くものをして寒からしめる。范景仁は累疏して王安石を力詆した。安石は大に怒り、其の疏を持ちて手も顫ふに至つた。（東坡いふ、鎭、多論二時事一、其言深切、聽者爲恐云云。）景仁は、天性が寬仁であつて、朝廷の安危、生民の利疚に關するものでなければ言はなかつた。帝、在位三十五年にして、未だ繼嗣が無心なれば如何なる境遇に置かれても安らかであると思ふ。我は去年、久し振りで、蜀に歸り、親舊と飮むことを樂しみ、期年にして後還つた。故に此詩に去年行二萬里一、蜀路走千盤の句がある。だんだん年取つても、身はいよいよ健かなので、山に登つても、心持は未だ闌でない。物足りない所がある。西遊は故山の櫻や筍の爲である。忽ち家園を憶ふ、須らく速かに去るべし、櫻桃は熟せんと欲し、筍はまさに生ずべしの意である。又、東道は所謂雲路鵷鸞、退朝を想はしめるのである。かくて杖屨、兒を携へて、此處彼處と往來し、園亭に客舍を借りた。東坡は京師門外の景仁園中に館したから、園亭借レ客看の句がある。斑竹寺に花を折りて看、石樓灘に下つて水を弄する。斑竹は一名湘妃竹ともいふ。相傳ふ。舜、蒼梧に崩じ、二妃追うて至る。帝を哭して哀を極め、淚は竹を染む。故に斑斑淚痕の如しと。又、石樓は河南、龍門、伊水の中に在る。洛中のことで憶ひ出すのは、昔、白樂天は洛中に致仕し、既に老年になり、又、風を病み、將に其の駱馬を鬻がうとして、馬が首を廻げて悲鳴したので、樂天は愍然として勒を廻したといふことである。今は、衰へた白樂天を憐むのである。又、洛陽嵩山の石柱に、韓退之の龍潭過レ雷の事を記した文がある。安りに語笑して神龍を觸してはならない。龍が怒ると雷がある、と言つて居る。今は、雷を怯れる韓退之を笑ふのである。又、歐陽永叔は、嘗て嵩山に游び、絶壁上に苔蘚を見る。文を成していふ、神清之洞と。明日、復、尋ねたが見えなかつた。又、洛陽には、天壇山がある。高さ五百丈、四絶壇の如しと傳ふ。又、嵩山の幽絶の處に、偉人を見る。眼光貓の如しといふ。

劉几は其の靖長官で、唐、僖宗時代の人で、登封令であつたが、官を棄て道を學び、遂に仙となつて去つた。以上は洛中の故事である。景仁も洛中に游ばれるからには、誠に劉夫子と、重ねて靖長官を尋ねられたら如何か。

次韻景仁留別

景仁の留別に次韻す

公老我亦衰。相見恨不數。
公は老い我も亦衰へ、相見ること數せざるを恨む。

臨行一杯酒。此意重山嶽。
行くに臨み一杯の酒、此意は山嶽より重し。

歌詞白紵清。琴弄黃鍾濁。
歌詞は白紵よりも清く、琴は黃鍾を弄して濁る。

詩新旹難和。飲少僅可學。
詩は新にして旹和し難く、飲むこと少れに僅に學ぶべし。

欲參兵部選。有力誰如犖。
兵部の選に參せんと欲するも、力あるは誰か犖に如かん。

且作東諸侯。山城鼓角雄。
且に東諸侯を作さんとし、山城鼓角雄なり。

南遊許過我。不憚千里邈。
南遊我に過るを許す、千里の邈なるを憚らず。

會當聞公來。倒屣髮一握。
會ず當に公の來るを聞くべし、屣を倒にして髮一たび握らん。

【字解】【一】公老我亦衰　文選、潘叔夜の養生論に、及ㇾ富各衰暮、非二復別離時一勿ㇾ言一杯酒、明日雖二重持一【三】重山嶽　文選、陸機の謝二平原内史一表に、旌重二山岳一、輕足二灰

毛一【四】白紵清　樂府解題に、白紵歌、白紵舞、吳地所ㇾ出、白紵舞、本、吳舞也、梁武帝、令ㇾ沈約改二其辭一爲二四時歌一。【五】黃鍾濁　史記、田完世家に、鮑息子曰、大絃濁以春温者、君也、聲中二於宮一、宮爲ㇾ君、五聲之本、生二於黃鍾一、琴有二黃鍾調一。周禮に、凡樂、黃鍾爲ㇾ宮。鄭氏云、凡五聲、宮之所ㇾ生、濁者爲ㇾ多。【六】有ㇾ力　朝野僉載にいふ、崔湜爲二吏部侍郎一、掌ㇾ銓、有二選人一白ㇾ湜曰、其能懸ㇾ關負ㇾ米、湜笑曰、若壯、何不ㇾ求二選兵部一、答曰、外議謂、崔侍郎下有二氣力一者即得ㇾ選。【七】誰如ㇾ犖　左傳、莊公三十二年に、季、講二於梁氏一、女公子觀ㇾ之、圍人犖自二牆外一與ㇾ之戲、子般怒、使ㇾ鞭ㇾ之、公曰不ㇾ如ㇾ殺ㇾ之、是不ㇾ可ㇾ鞭、犖有ㇾ力焉、能投二蓋于稷門一。季祭（天を祭る）の習禮を大夫梁氏の家で爲した時、子般が妹女公子も、兄と倶に梁氏の家に行く。國人（馬を養ふを掌る）の犖といふもの塔外より女子に戲る。子般怒り、鞭たしむ。莊公曰く、殺すに如かず、縛ちて虫かし置くべからずと。犖は力ありて、能く稷門の上へ蓋を投げ上げるほどであつたからである。【八】東諸侯　左傳、成公十六年に、郤犨將二新軍一、且爲二公族大夫一、以主二東諸侯一。合注に、東諸侯當ㇾ指二知徐州一とある。【九】堆二鼓角一　劉禹錫の送二婁司徒再命二太原一詩に、行色旌旗動、軍聲鼓角堆。【一〇】不ㇾ憚二千里邈一　晉、嵇康傳に、呂安服二康高致一、每二一相思一、千里命ㇾ駕。【一一】倒ㇾ屣　三國志、王粲傳に、蔡邕見而奇ㇾ之、聞二粲在ㇾ門、倒ㇾ屣迎ㇾ之。【一二】髮一握　史記、魯世家に、周公戒二其子伯禽一曰、我於二天下一、亦不ㇾ賤矣、然一沐三捉ㇾ髮、一飯三吐ㇾ哺、起以待ㇾ士、猶恐ㇾ失二天下之賢人一。

【題義】范景仁が留別の詩に次韻したのである。査慎行は此詩を評して、沈著といひ、紀昀は欲ㇾ參二句太激と評して居る。

【詩意】稽叔夜の言葉に、衰より白を得、白より老を得、老より終を得とある。白は白髮、終は死をいふ。范君は既に老境に達し、我も亦、衰へて、まさに白髮を得ようとして居る。范君と我、また、相見ることの數ならざるを恨むのである。ここに出發に臨んで、一杯を傾ける。言ふ勿れ一杯の酒と、明日とならば重ねて酌み難いであらう。此の情意は山嶽よりも重い。留別の歌詞は白紵（紵は麻の一

種、泉の粗なるもの）より清きも、琴は黄鍾を弄して濁る。琴に黄鍾の調といふがある。黄鍾は宮聲で、濁つた音が多い。それで、琴は黄鍾を弄して濁ると言つたのである。又、范君の詩は、新味があつて、其の微妙な調は、迚も和し難い。酒飲むことを少くして、僅に之を學ぶことが出來る。昔、崔湜が吏部侍郎となつて、銓考を掌つた時、選人があつて、湜に白していふ、私はよく闕を魁げ（くわんぬきをあげるは力の強きをいふ）米を負ふと。湜はいふ、然らばなせ兵部の選を求めなかつたのかと。強力の點は、誰か圍人の舉に及ばうぞ。併し強力のことは、必ずしも語るに足らない。まさに東諸侯の盟主を作さうとするので、山城には鼓角の聲も雄である。南遊して、我に過ぎるを許すからには、一たび相思ふ毎に千里駒を命じ、路の邈かなるを憚らない。そして公の來るを聞かば、必ず當に屣を倒にして之を迎へ、沐して居ても髮を捉へ、食事でも哺を吐いて君に接待したいと思ふ。

京師哭任遵聖

京師任遵聖を哭す

十年不レ還レ鄉。兒女日夜長。
豈惟催二老大一。漸復成二凋喪一。
每聞二耆舊亡一。涕泫聲輒放。
老任況奇逸。先子推二輩行一。

十年鄉に還らず、兒女日夜に長ず。
豈惟に老大を催すのみならんや、漸く復凋喪を成す。
耆舊の亡するを聞く毎に、涕泫聲輒ち放つ。
老任況んや奇逸、先子輩行を推す。

文章得二少譽一。詩語尤清壯。
吏能復所レ長。談笑萬夫上。
自喜作二劇縣一。偏工破二豪黨一。
奮レ髯走二猾吏一。嚼レ齒對二姦將一。
哀哉命不レ偶。每以レ才得レ謗。
竟使落二窮山一。青衫就二黃壤一。
宦遊久不レ樂。江海永相望。
退耕本就レ君。時節相勞餉。
此懷今不レ遂。歸見纍纍葬。
望哭國西門。落日銜二千嶂一。
平生惟一子。抱負珠在レ掌。
見レ之齠齔中。已有二食レ牛量一。
他年如入レ洛。生死一相訪。
惟有二王濬沖一。心知中散狀。

文章少譽を得、詩語尤も清壯。
吏能復長ずる所、談笑す萬夫の上。
自ら喜ぶ劇縣を作すを、偏工豪黨を破る。
髯を奮つて猾吏を走らせ、齒を嚼んで姦將に對す。
哀しいかな命偶ならず、每に才を以て謗を得。
竟に窮山に落ち、青衫をして黃壤に就かしむ。
宦遊久しく樂まず、江海永く相望む。
退耕本君に就き、時節相勞餉せんとす。
此の懷ひ今遂げず、歸りて見る纍纍の葬を。
望み哭す國の西門、落日千嶂を銜む。
平生惟一子、抱負珠掌に在り。
之を見る齠齔の中、已に牛を食ふの量あり。
他年如し洛に入り、生死一たび相訪ふ。
惟王濬沖ありて、心に中散の狀を知る。

【字解】【一】任遵聖　名は孜、眉山の人。嘗て寺丞たり。筆岡氣節を以て鄉里に推重ぜられ、名は老蘇公と竝し。【二】兒女日長　柳子厚の田家詩に、子孫日已長、世事還復然。【三】聾ニ老大一　杜子美の詩に、故實備ニ我老一。又、杜陵有ニ布衣一、老大意轉拙。【四】凋喪　杜子美の詩に、忍使ニ歸鞍氣彫喪一。【五】耆舊　老人をいふ。後漢書、魯恭傳に、至ニ列卿郡守一者數十人、而其耆舊大姓、或不レ豫ニ鷹擧一。【六】郡汲　禮記に、孔子汲然汲レ郡。南史任昉傳に、昉卒、其子流離不レ能ニ自振一。劉孝標、汲然矜レ之。杜子美の送ニ梁十八二詩に、汲然欲レ霑レ衣。【七】奇逸　めづらしくすぐれる。後漢書、孔融傳に、奇逸博聞。【八】推ニ轂行一　宗族、衆盛のもの、上下別なきを恐る。故に一二字を用ひて、以て之を排す。之を排行といふ。韓退之の王公神道碑に、當時名公、皆折ニ官位轂行一、願レ爲レ交。【九】清壯　晉士衡の文賦に、銘、博約而温潤、誄、頓挫而清壯。晉、訖綽傳に、文帝讀ニ九錫一、公卿將ニ勸進一、使ニ綽爲ニ其辭一、綽沈酣忘レ作、臨レ溷府、使レ取レ之、見ニ綽方據レ案酣眠一、使者以告、綽便書レ案、使レ寫レ之、無所ニ改竄一、辭甚清壯、爲ニ時所レ重。【一〇】吏能　吏才といふに同じ。北史に、秀之有ニ吏能一、仕レ齊爲ニ吳令一。【一一】談笑萬夫上　孟子、告子篇に、越人關レ弓而射レ之、則已談笑而至。【一二】自喜　漢、濫嬰傳に、景帝曰、親其沽沽自喜耳。【一三】作ニ酒縣一　晉書、袁甫傳に、晉詔ニ何劭一曰、自晉、能爲ニ劇縣一劭問、惟欲レ寧レ之、不レ爲ニ蕃閫職一。何也、甫曰、人各有レ能有ニ不能一。【一四】豪富　漢書、貨殖志に、井疆豪富之徒。【一五】嘗レ糞　前漢、朱博傳に、博遷ニ琅邪太守一、齊部舒緩奚レ名、博新視レ事、布ニ條教一、皆移レ病隊、博案レ行レ之、盡レ日、課ニ齊兒一、欲ニ以レ此爲一レ俗邪。【一六】幣吏　後漢書、周紆傳に、性難ニ幣吏一。【一七】嚬レ眉　唐書、狐巡守ニ睢陽一、製レ詩、血レ面、嚬レ眉、皆辭。【一八】不レ偶　史記、李廣傳に、文帝曰、情乎子不レ遇レ時、如令ニ子當ニ高帝時一、萬戸侯、豈足レ道哉。漢書、霍去病傳に、諸宿將、常留落不レ偶。【一九】青衫　白樂天、琵琶行に、就レ中泣下誰最多、江州司馬青衫濕。【二〇】黃襦　書孔貢に、黃襦千里。【二一】宦遊久不レ樂　王文誥いふ、公自謂也と、宦遊は、史記、司馬相如傳に、長卿久宦遊。【二二】退耕　史記、吳世家に、子胥退而耕ニ于野一。【二三】勞倦　漢、楊惲傳に、田家作苦、歲時伏臘、烹レ羊斗レ酒相勞。【二四】桑麻葬　陵仲子後記に、丁令威曰、何不ニ學レ仙冢纍纍一。潘安仁の懷舊賦に、墳纍纍而接レ墻、柏森森以攢植。【二五】千一　嶂は山峯の連りて屏障の如きをいふ。【二六】平生憶ニ一子一　東都事略に、任伯雨、字は鞏舅。聰於經術ニ、文力雄健。【二七】嶂在レ掌　杜子美の詩に、掌中貴見ニ一歲新一。白樂天の哭ニ崔兒一詩に、掌珠一顆見ニ三歲一。【二八】韶齔　韓詩外傳に、男子八月生レ齒、八歲

而韶齒、女子七月而齔生、七歲而毀齒。白樂天の親ニ兒銘一詩に、韶齔成レ文、已有ニ食レ牛之氣一。杜子美の徐卿ニ二子一歌に、小兒五歲氣食レ牛、滿堂賓客皆回レ頭。【二九】食レ牛量　尸子に、虎豹之子、雖レ未レ成レ文、已有ニ食レ牛之氣一。杜子美の徐卿ニ二子一歌に、小兒五歲氣食レ牛、滿堂賓客皆回レ頭。【三〇】黃襦　書禹貢に、直ニ詩に、行當レ拖ニ黃綬一、生死君一訪。【三一】王漙仲云云　晉書に、王漙仲云云　晉書に、中ニ始見ニ稽紹一、昂昂然如ニ野鶴之在ニ鷄羣一、或曰、嵇復未レ見ニ其父一耳。漙仲は戎の字。

【題義】京師で任遵聖の死を弔ふ詩であるが、合注には、玩ム詩中、竟使下落ニ窮山一、青衫就ニ黃壤一、歸見纍纍葬、望哭國西門句、當レ卒ニ於蜀中一、平泉官舍ニ也とある。王文誥いふ、據レ詩、伯雨方年少、而時家ニ洛中一、是遵聖卒ニ於洛一也、合注非レ是と。紀昀は此詩を評して、先寫ニ情懷一、次入ニ任遵聖一、倍加ニ悽惘一、と言つて居る。又いふ、筆筆作ニ起落之勢一、一率句、中有ニ眞情一、故語語深至と。

【詩意】仕宦して他郷に住み、十年も家に還らなかつた。其間に兒女は、日夜に成長した。我はただに老大を催したばかりでなく、だんだんと凋落に向つて來た。心細く感じて居る折から、耆舊の亡くなつたことを耳にする毎に、泫然として聲を放つて泣く。まして任遵聖老の死は、悲みに堪へない。任老はすぐれた人で、學問、氣節を以て鄉里に推重された。（名は老蘇公と竝し。）我父も君の輩行を推し、長者として交を結んで居つたのである。又、君は文章に少麥を得、詩語は尤も清壯であつた。又吏才にも長じて、悠悠萬人の上に談笑して居る。晉の袁甫は、嘗て何劭の許に詣つて、自ら劇しい縣を爲めたいと言つた。劭は、ただ縣に宰たらんと欲して、臺閣職とならないのは何故であると問ふと、甫は人には各〻能あり不能ありと答へたさうである。かやうに任老も、地方官となるを願つた。吏才

に長するが故に、劇縣を治めるを喜ぶのである。萬人の上に談笑する餘裕があるから、偏工の力でも幷
彙豪黨の徒を打ち破つたのである。前漢の朱博は琅琊の太守となつて、轡を奮ひ、几を抵つて右曹掾吏
を叱つたが、任老も亦、其の轡を奮つて猾吏を走らせ、齒を噛んで姦將に對したのである。哀しいこ
とには、任老の宦に在るや、運拙く、毎に才を以て謗を得、遂に窮山に落魄し、靑衫をして黃壞に
就かしめた。翻つて我身を顧みると、我は宦遊が久しきに亙つて、一日の樂みを得ない。任老と江海
永く相望むのみである。そこで、寧ろ退いて野に耕し、老の許に就き、歲時、伏臘毎に、相勞し相倒し
ようと思ふ。併し、此の願は、今は遂げられなく、忽ち任老と幽明遠く隔つて、歸つて纍纍の墳墓を見
るのみ。園都の西門を望んで哭すれば、落日は千嶂を銜んで、坐ろに物の衰れを感せしめる。任老の
一子伯雨は、經術に邃く、文力も雄健である。任老平生の滿足は、只此の一子にある。少時は、掌中
の玉として、抱いたり負うたりしたが、七八歲館齠の中、既に英雄の相があらはれたのである。虎豹の
子は未だ文を成さないけれども、已に牛を食ふの氣がある。他年、もし洛に入り、生死一たび相訪問す
ることとなれば、ただ王潛沖だけが、心に中散大夫の狀を知るのみである。（これは晉の嵇紹（中散
大夫嵇康の子）が始めて洛に入つたとき、或人が王戎に謂つていふ、昨、稠人の中で、始めて嵇紹を見
たが、昂昂然として野鶴の鷄羣に在るやうであつたと。戎が曰く、君は未だ其父を見ないからである
と、此の故事によつたのである。潛沖は戎の字である。）

書韓幹牧馬圖

韓幹牧馬の圖に書す

南山之下、
汧渭之間。
想見開元天寶年。
八坊分屯隘秦川。
四十萬匹如雲烟。
騅駔騮駱驪騮騵。
白魚赤兎騂皇騜。
龍顱鳳頸獰且妍。
奇姿逸德驁頑。
碧眼胡兒手足鮮。
歲時翦刷供帝閑。
柘袍臨池侍三千。
紅粧照日光流淵。

南山の下、
汧渭の間、
想ひ見る開元天寶の年。
八坊屯を分ちて秦川に隘る、
四十萬匹雲烟の如し。
騅駔騮駱驪騮騵、
白魚赤兎騂皇騜、
龍顱鳳頸獰且つ妍、
奇姿逸德驁頑を隱す。
碧眼の胡兒手足鮮かに、
歲時翦刷帝閑に供す。
柘袍池に臨み三千侍し、
紅粧は日に照りて光淵に流る。

【字解】【一】韓幹　歷代名畫記に韓幹、大梁人、王右丞維見其畫、遂推與之、官至太府寺丞、善寫貌人物、尤工鞍馬、幹は初、曹霸を師とした。【二】牧馬　放しがひの馬。唐、李益の詩に、牧馬幕南逢草綠。【三】汧渭之間　汧水は隴州汧源縣の東南より出で、鳳翔、岐縣に至つて、渭に入る。史記、秦始皇紀に、非子居二犬邱一、好レ馬及レ畜、善養二息之一、周孝王召、使レ主二馬於汧渭之間一、馬大蕃息。【四】開元天寶　唐、玄宗の年號。【五】八坊　唐、兵志に、八坊、一日、保樂、二日、甘露、三日、南普閑、四日、北普閑、五日、岐陽、六日、太平、七日、宜禄、八日、安定、八坊之田、千二百三十頃、募レ民耕レ之、以給二芻秣一。【六】隘二秦川一　蜀志に、諸葛亮傳に、身率二益州

樓下玉螭吐清寒。往來蹙踏生飛湍。衆工舐筆和朱鉛。先生曹霸弟子韓。廐馬多肉尻脽圓。肉中畫骨誇尤難。金羈玉勒繡羅鞍。鞭箠刻烙傷天全。不如此圖近自然。平沙細草荒芊綿。驚鴻脫兎爭後先。王良挾策飛上天。何必俛首服短轅。

樓下の玉螭清寒を吐き、往來蹙踏飛湍を生ず。衆工舐筆朱鉛に和し、先生は曹霸弟子は韓。廐馬肉多く尻脽圓かに、肉中畫骨を誇尤も難きを誇る。金羈玉勒繡羅の鞍、鞭箠刻烙天全を傷る、如かず此圖の自然に近きに。平沙細草荒れて芊綿、驚鴻脫兎後先を爭ふ。王良策を挾さんで飛んで天に上る、何ぞ必ずしも首を俛して短轅に服せん。

【一九】樓下　詩經、鄭風、有ㇾ女同ㇾ車に、有ㇾ女如ㇾ舜華。將ㇾ翱將ㇾ翔、佩ㇾ玉瓊ㇾ琚。彼美孟姜、洵美且ㇾ都。【二〇】玉螭吐ㇾ清寒　玉螭は玉製の螭龍。螭は龍の一種。清寒は、清冷。【二一】蹙踏　蹴踏に同じ。【二二】舐筆　筆を舐ること。【二三】曹霸　唐の畫家。【二四】廐馬　廐に飼ふ馬。【二五】尻脽圓　脽は尻の骨。【二六】畫骨　畫家の骨法。【二七】金羈玉勒　金羈は金の馬具。玉勒は玉の轡。【二八】鞭箠刻烙　鞭箠は鞭。刻烙は、焼き印。【二九】天全　莊子、馬蹄篇に、伯樂曰、我善治ㇾ馬、燒之剔之、刻之雒之、連之以ㇾ羈ㇾ、編之以ㇾ阜棧ㇾ、馬之死者、十二三矣。【三〇】芊綿　草木の蕃衍する貌。謝靈運の詩に、孤岸竦ㇾ秀、長洲芊綿。【三一】驚鴻　曹植の賦に、髣髴兮若ㇾ輕雲之蔽ㇾ月、飄颻兮若ㇾ流風之迴ㇾ雪。遠而望之、皎若ㇾ太陽昇ㇾ朝、迫而察之、灼若ㇾ芙蓉出ㇾ渌。【三二】脫兎　孫子、九地に、始如ㇾ處女ㇾ、敵人開ㇾ戸、後如ㇾ脫ㇾ兎、敵不ㇾ及ㇾ拒。【三三】王良挾ㇾ策　王良は趙簡子の時の御者。漢書、天文志に、東中四星、曰ㇾ天廐ㇾ、御一星、曰ㇾ王良ㇾ、王良策ㇾ馬、車騎滿ㇾ野。漢、王褒傳に、唐人御ㇾ駑馬ㇾ、亦僅ㇾ可ㇾ以代ㇾ歩而已。不ㇾ如ㇾ乘ㇾ駿馬ㇾ、背ㇾ風馳ㇾ電、追ㇾ奔逐ㇾ北、周ㇾ流八極ㇾ、萬里一息、何其遼哉、人馬相得也。【三四】短轅　轅、車轅。

【題義】王詵が韓幹の書いた牧馬圖を以て跋を求めたから、爲に此詩を作つたのである。馬の詩は、杜甫が多く作つた。東坡の此詩の起首は、杜甫の國初以來の起より出でて其の面目を變じたもの、中

之乘ㇾ、以出ㇾ秦川。【二九】四十萬匹云云　名畫記に、明皇好ㇾ大馬ㇾ、御廐至ㇾ四十萬匹ㇾ、遂有ㇾ沛艾大馬ㇾ、西域、大馬骨力追ㇾ風、毛彩照ㇾ地、不ㇾ可ㇾ名狀ㇾ、號ㇾ木槽馬ㇾ。唐、兵志に、唐初、得ㇾ突厥馬二千匹ㇾ、又、得ㇾ隋馬三千於赤岸澤ㇾ、徙ㇾ之隴右ㇾ、監牧之制、始ㇾ於此ㇾ、用ㇾ張萬歲ㇾ領ㇾ之、至ㇾ麟德二四十年間、馬七十六萬六千、置ㇾ八坊岐・豳・涇・寧間ㇾ、地廣千里、自ㇾ萬歲失ㇾ職、馬政頗廢、開元初、國馬益耗、及ㇾ王毛仲領ㇾ內外閑廐馬ㇾ、精精復ㇾ始、二十四萬、至ㇾ十三年ㇾ、及ㇾ四十三萬ㇾ。王毛仲傳に、從ㇾ帝東封ㇾ、牧馬數萬匹、每ㇾ色一隊相間、如ㇾ錦繡ㇾ、天子才ㇾ之。杜子美、天育驃騎歌に、當時四十萬匹馬、張公歎ㇾ其才德下ㇾ。【三〇】驊騮騄駬云云　詩、駉頌に、有ㇾ駜有ㇾ駜云云。注に、いふ、蒼白雜毛曰ㇾ駱、黃白雜毛曰ㇾ駰、白馬黑鬣曰ㇾ騮、純黑曰ㇾ騥、赤身黑鬣曰ㇾ騏と。又、爾雅に馬白腹曰ㇾ駽と見ゆ。【三一】白魚赤兎　爾雅に、一目白駟、二目白魚。注にいふ、似ㇾ魚目ㇾ也と。詩、駉頌に、有ㇾ駜有ㇾ魚。赤兎は呂布の馬名。曹瞞傳に、呂布馬名ㇾ赤兎ㇾ、當時歌曰、人中有ㇾ呂布ㇾ、馬中有ㇾ赤兎ㇾ。【三二】騏驥風颯　劉琨の馬賦に、龍頭烏目、麟腹虎脅。杜子美の胡馬行に、風塵際ㇾ三受ㇾ、驊騮開ㇾ道出ㇾ、鳴ㇾ鞭天地ㇾ動、萬馬救ㇾ一ㇾ哀。【三三】碧眼　高僧傳に、達摩眼睛青色、稱ㇾ碧眼胡僧ㇾ。【三四】供ㇾ帝閑ㇾ　唐、兵志に、開元二十四年、閑廐二日詳閲、二日風乾。周禮に、校人掌ㇾ王馬之政ㇾ、天子十有二閑、馬六種、邦國六閑、馬四種、家四閑、馬二種。【三五】拓跋　六典に、隋文帝服ㇾ祐黃袍及巾帶ㇾ、以聽ㇾ朝、至ㇾ今遂以爲ㇾ常。白樂天の長恨歌に、侍兒扶起嬌無ㇾ力、始是新承ㇾ恩澤時ㇾ。【三六】紅粧照ㇾ日　李太白の詩に、日照ㇾ紅粧ㇾ水底明。【三七】玉螭吐ㇾ清寒ㇾ　馬をいふ。洞冥記に、以ㇾ金簪ㇾ貫ㇾ玉螭腹ㇾ爲ㇾ轡。淮南子に、氣清寒。【三八】憂踏　杜子美の曹將軍、馬圖引に、霊異憂踏長秋閒。【三九】飛濕　奔湍に同じ。江南野錄に、長江一條、飛濕千里。【四〇】衆工舐ㇾ筆　莊子、田子方篇に、宋、元君將ㇾ畫ㇾ圖、衆史皆至、受ㇾ揖而立、舐ㇾ筆和ㇾ墨、在ㇾ外者半。杜牧之の詩に、舐ㇾ筆和ㇾ鉛欺ㇾ畫工ㇾ。【四一】先生曹霸云云　杜子美が贈將軍曹霸丹青引に、弟子韓幹早入ㇾ室、亦能畫ㇾ馬窮ㇾ殊相ㇾ、幹惟畫ㇾ肉不ㇾ畫ㇾ骨、忍使ㇾ驊騮氣凋喪ㇾ。名畫記に、韓幹初師ㇾ曹霸ㇾ、其後遂自獨擅。【四二】尻脽　尻の骨。漢、東方朔の傳に、結ㇾ駟連ㇾ騑尻ㇾ。【四三】刻烙傷ㇾ天全ㇾ　莊子、馬蹄篇に、伯樂曰、我善治ㇾ馬、燒之剔之、刻之雒之、連之以ㇾ羈ㇾ、編之以ㇾ阜棧ㇾ、馬之死者、十二三矣。【四四】芊綿　草木の蕃衍する貌。謝靈運の詩に、孤岸竦ㇾ秀、長洲芊綿。【四五】驚鴻　曹植の賦に、髣髴兮若ㇾ輕雲之蔽ㇾ月、飄颻兮若ㇾ流風之迴ㇾ雪。遠而望之、皎若ㇾ太陽昇ㇾ朝、迫而察之、灼若ㇾ芙蓉出ㇾ渌。【四六】脫兎　孫子、九地に、始如ㇾ處女ㇾ、敵人開ㇾ戸、後如ㇾ脫ㇾ兎、敵不ㇾ及ㇾ拒。【四七】王良挾ㇾ策　王良は趙簡子の時の御者。漢書、天文志に、東中四星、曰ㇾ天廐ㇾ、御一星、曰ㇾ王良ㇾ、王良策ㇾ馬、車騎滿ㇾ野。漢、王褒傳に、唐人御ㇾ駑馬ㇾ、亦僅ㇾ可ㇾ以代ㇾ歩而已。不ㇾ如ㇾ乘ㇾ駿馬ㇾ、背ㇾ風馳ㇾ電、追ㇾ奔逐ㇾ北、周ㇾ流八極ㇾ、萬里一息、何其遼哉、人馬相得也。【四八】短轅　轅、車轅。

【題義】王詵が韓幹の書いた牧馬圖を以て跋を求めたから、爲に此詩を作つたのである。馬の詩は、杜甫が多く作つた。東坡の此詩の起首は、杜甫の國初以來の起より出でて其の面目を變じたもの、中

間の廐馬云云は、杜甫の丹青より來つて其の面目を變じたもの、末二句は、杜甫の天育驃騎の詩を學んだのである。唐宋詩醇に、馬詩有二杜甫諸作一、後人無二從著一筆矣、千載獨有二弒詩數篇一、能別出二一奇於浣花之外一、骨幹氣象、實相等埒とある。浣花溪は杜甫が草堂の在る所。老學菴筆記に、杜少陵在二成都一、有二兩草堂一、一在二萬里橋西一、一在二浣花溪北一と見ゆ。烏臺詩案に、結末意、以二諷驭一自比、譏下執政大臣無中能盡二我才一、如二王良之能御一者上、何必折レ節干二求進用一也とある。（餘錄を見よ）

【詩意】南山の下、汧水・渭水の間は、牧馬の産地である。昔、周の孝王は、非子を召して馬を汧水・渭水の間に主らしめたが、馬が大に蕃息したといふことである。唐は貞觀より麟德に至る四十年間、馬七十六萬六千を八坊・岐・豳・涇・寧の間に置いた。想ひ見る、玄宗皇帝の開元・天寶の年、保樂・甘露・南普閭・北普閭・岐陽・太平・宜祿・安定の八坊の田、千二百三十頃の廣い地に、民を募つて耕さしめ、芻秣を給したことがある。かくて屯を分つたが、秦川に隘つた。卽ち牧馬四十萬匹、之を望むに雲烟の如くであつた。其の馬の種類をいふと、蒼白雜毛のもの、黃白雜毛のもの、陰白雜毛のもの、白馬黑鬃のもの、純黑のもの、赤身黑鬃のもの、そして腹の白い馬も交つて居る。又、白魚といふ馬もある、魚の目に似た所から言つたのであらう。赤兎といふのも、馬の名である。又、赤黃の馬を騂といひ、黃白の馬を皇といふ。翰といふも、馬の名。又、龍頭の形した馬、鳳凰の頸の如き馬、容貌の凶惡なのも、又、美好なのもある。奇しい姿や、逸駿の德、よく駿頑な所を隱して居る。さて碧眼の胡兒は、手も足も鮮かに、馬の毛を翦刷して、帝の廐に奉納する。帝は柘の黃袍を服されて、後宮の侍女三千人とともに御池に臨んで、馬を御覽になる。日は紅粧を照らして、光は漏に流れる。樓下の玉螭（馬をいふ）は清い寒い氣を吐き、往きつ來りつ、驀踏して、早瀾を生じて居る。（神馬の出たといふ渥洼水の狀を寫したのである）多くの畫工は、ただ畫筆を舐つて、顏料に和して居るのみ。畫の先生は、善く馬を畫く曹霸將軍、韓幹は其弟子である。韓幹はただ肉を畫いて骨を畫かない。廐の馬は、肉が多く尻の骨が圓い。肉中に骨を畫くのが最も難いのである。世の馬を見るに、金の羈（馬の馬絡頭）、玉の勒（銜）、繡縻の鞍、そして鞭箠（箠は馬策）を加へ、燒鐵をあて、其毛を剪み其爪を切る。かくては其の天全を傷ふのである。到底、此馬の圖の自然に近いのには及ばない。平沙細草は荒れて、日に蕃衍し、驚鴻、脫兎、孰れが迅きかと、先後を爭つて居る。王良は古の馬を御する名人、策を挾んで馬に騎ると、都を過ぎ、國を越え、萬里も一息の間、飛んで天上にも上るのである。何ぞ局促として首を俯し、短轅の下に服しようぞ。（紀昀いふ、到レ末、又拖二一意一、變化不レ測と。結尾の二句を得て全篇が飛動する。）

【鋒鋩】此詩の雖駑駘驥騄駬は、蓋し韓退之が陸渾山火詩の鴟鴞鵰鷹雉鸛鶴の句に本づく。王士正謂ふ、竝是學二急就篇句法一、由二其氣大一、故不レ見二其累重之迹一と。紀昀いふ、通首旁襯、只結處一著二本意一、章法奇絕、放翁嘉陵驛、折枝海棠詩、似二從レ此得一法と。又いふ、若第二句、去二一之字一作二一句一、神味便減と。又いふ、到レ末又拖二一意一、變化不レ測と。名畫錄に、韓幹、天寶中、召入供奉、能狀二飛黃之質一、圖二噴玉之奇一、開元後、外國名馬重レ譯累至、明皇擇二其良者一、與二中國之駿一同頒、畫二寫之一、陳閎

（會稽の人、唐書、藝文志には、陳宏に作る）貌之於前、韓幹繼之於後、寫渥洼之狀、（渥洼は川の名、甘肅省に在り。漢の武帝は、神馬を此の水中より得。）若在水中、移曖裏（金縣赤色で、一日に一萬八千里を行く神馬、上林賦に見ゆ。）之形、出於圖上、故幹居神品宜矣とある。烏臺詩案に、熙寧十年二月、到京、三月初一日、王詵約、來日出、城外相見、次日、軾與詵相見、次日、王詵送韓幹畫馬十二匹、共六軸、求軾題跋、詩云、王良挾策飛上天、何必俛首服鹽車、意以驥自比、譏諷執政大臣無能盡我才、如王良之能御者、何必折節干求進用也、其詩卽不係朝旨、降到一冊子內、とある。

送魯元翰少卿知衢州　魯元翰少卿が衢州に知たるを送る

冗士無處著、寄身范公園。　冗士著を處くなし、身を寄す范公の園。
桃李忽成陰、麥秀已繁。　桃李忽ち陰を成し、麥秀でて已に繁し。
閉門春晝永、惟有黃蜂喧。　門を閉ぢて春晝永く、惟黃蜂の喧しきあり。
誰人肯攜酒、共醉榆柳村。　誰人か肯て酒を攜へ、共に醉ふ榆柳村。
髯卿獨何者、一月三到門。　髯卿獨り何物、一月三たび門に到る。
我不往拜之、髯來意彌敦。　我往いて之を拜せず、髯來り意彌〻敦し。
堂堂元老後、亹亹仁人言。　堂堂元老の後、亹亹仁人の言。
憶在錢塘歲、情好均弟昆。　憶ふ錢塘に在る歲、情好は弟昆に均し。
時於冰雪中、笑語作春溫。　時に冰雪の中に於て、笑語春溫を作す。
欲飲徑相覓、夜開叢竹軒。　飲まんと欲して徑に相覓め、夜開く叢竹軒。
搜尋到篋笥、鮓醢無復存。　搜尋篋笥に到るも、鮓醢復存するなし。
每愧烟火中、玉腕親炮燔。　每に愧づ烟火の中、玉腕親しく炮燔す。
別來今幾何、相對如夢魂。　別來今幾何、相對して夢魂の如し。
告我當北渡、新詩侑清樽。　我に告ぐ當に北に渡るべしと、新詩清樽を侑む。
坡陁太行麓、洶湧黃河翻。　坡陁太行の麓、洶湧黃河翻る。
仕宦非不遇、王畿西北垣。　仕宦遇はざるにあらず、王畿西北の垣。
斯民如魚耳、見網則驚奔。　斯民は魚の如きのみ、網を見れば則ち驚奔す。
皎皎千丈清、不如尺水渾。　皎皎として千丈清きは、尺水の渾れるに如かず。
刑政雖首務、念當養其源。　刑政は首務と雖も、念ふ當に其源を養ふべし。
一聞襦袴音、盜賊安足論。　一たび襦袴の音を聞かば、盜賊は安んぞ論ずるに足らんや。

【字解】【一】魯元翰少卿　名は有開、魯国公の子、南康に知たり。代り還ると、王安石問ふ、江南如何と。元翰は新法苦に堪ざるの事を答ふべしと計ふ。安石怒る。傍に杖に伴たるを以て、東坡も亦、杖伴となつて命を待つ。暮先づ代り去る。東坡の魯直寺丞に贈る詩は、即ち元翰である。宋史、有開傳に、自南康軍代還、出知和州、知潤州、徙蘇州、元祐中、歴知杭潤州、官至三中大夫。【二】潤州　元和郡縣志に、「本丹徒縣之地、即故京口之地、漢爲丹徒縣、屬會稽郡、晉武帝改爲南徐州、周武帝改爲潤州。【三】魯公　子由文集に、「子瞻兄弟三人、皆仕杭州、及自黄還一遇、止郟門、家居范長老園、元翰即相過。本集、與參寥書に、「初自黄州上書、改汝州、過九江、見廬山、欲留不能、以見子姿、留旬日、送東林仁長老中。【四】參寥　黄は訪亭の一、初生のものは甘味がある。詩、邶風に、「誰謂荼苦、其甘如薺。【五】橘柚　橘は白柑。説文に、「橘、白柑。蜀地に産する喬木の一、赤・白の二種あり。赤橘は先づ実を着けて、後に葉を生ず。白橘は先づ葉を生じて、後に実を着く。陸璣、草木疏に、「橘有十種、葉皆相似、皮及木異。【六】載籍　魯元翰有記載、故以載籍之。即圖書傳に、「凡書未著之記曰籍。【七】宛陵歐公　文選、謝靈運の彭蠡湖に、「故郡命宛陵、【八】李李元老後　漢、薛宣之後に、「李延年面不合。晉、鍾雅に、「李氏之興、方叔元老。宋史に、「魯宗道、字真之、嘉州、譙人、真宗朝、爲翰林學士兼龍圖閣直學士、宗立拜右諫議大夫、參知政事、在政府七年卒、謚曰忠定、有開之祖父也、用其姓入作。【九】靈靈　つとめて倦まない貌。詩、小雅に、「靈靈文王、令聞不已。晉書謝安傳に、「朝廷謂王濛、清言良久、既去、安子姪曰、向客何如大人、濛曰、此法靈靈爲來爽人。又阮修傳に、王衍被子敎謂、衍曰、阮宣子可與言、衍曰、吾亦聞之、但未知其靈靈之處。【一〇】仁人言　左傳、昭公三年に、「晏子曰、仁人之言、其利溥哉。【一一】弟昆　爾雅に、「昆兄也。【一二】笑語作春風　杜子美の始二郎少府詩に、「即使我笑來、見我顔色温。【一三】匪相愛　杜子美の酔時歌に、「非交態即相疑、沽酒不二直錢。【一四】建安詩　魏、曹植の贈白馬王彪詩に、「願飛情不達、願得一展。【一五】新詩　潘岳の内顧詩に、「新詩清且閑。【一六】王風　左傳の本事詩に、「吹大呂兮、施ニ黄鍾之宮一、即位鐘中、所以和二陰陽一也、以二國家一論レ之、以爲二温暖而養一レ之也。【一七】王孫　左傳の本事詩に、「吹大呂兮、施ニ黄鍾之宮一、即位鐘中、所以和二陰陽一也、以二國家一論レ之、以爲二温暖而養一レ之也。【一八】楚詞　離騒に、「楚辭、離騒傳に、「離騒者、猶二離憂一也。司馬遷、屈原傳に、「屈原作二離騒一、班固、離騒贊に、「離騒之作、蓋自二怨懟一而生、屈平之志、蓋亦悲二其所一レ遭而已矣。【一九】千丈清泉　宋詩の水至清則無レ魚の意。【二〇】種種　佳貌、離騒傳に、「扈江離與二辟芷一兮、紉二秋蘭一以爲レ佩、王逸注に、「種種、衆多貌。

【題義】此詩は熙寧十年三月の作。東坡が杭州に伴であつたとき、魯と官名を同うす。魯、先づ代り去つて、潤州に知となつた。其時の送詩である。東坡は杭州より移つて河中に守となり、京師に至た。徐州に改められた時、旨ありて國門に入ることを許されなかつたから、城外范蜀公の園に寓した。故に首句に「元士無二處著一、常身范公園とある。紀昀いふ、先作二頓宕一便入、得レ不レ突と。

【詩意】我が如き無用のものは、落ち着くべき處がないので、暫く身を城東の范景仁の園中に寄せたのである。桃や李がいつしか陰をなし、蕎や麥も、已に繁つた。門を閉ぢて家居すれば、春の日も永く、ただ黄蜂の喧しく飛んで居るのを見る。誰か人がここに訪れるものがあつて、酒を携へて、共に楡や柳の村家で酔ひたいものである。折しも鯉魚の美はしい魯元翰は、獨り、いかなれば一月に三たび我が門を叩かれる。我れは殊更に禮をなして、出で迎へて拜することもしないけれども、魯卿は、心持がいよいよ敦く、親しんで来られる。魯卿は、堂々たる元老魯宗道（字は貫之）の後である。宗道は仁宗の朝に、右諫議大夫、參知政事に拜された人とで、元翰の從父に當つて居る。元翰も實は其のお蔭（父祖の功勞によつて官に敍せられしをいふ）で官に入つた次第である。晉の謝安は、弱冠の頃、王濛の許に詣つて清談をなした。既に去ると、濛はいふ、此の客は「靈靈（つとめて倦まない）として来た。濛の許に詣つて清談をなした。既に去ると、濛はいふ、此の客は「靈靈（つとめて倦まない）として来た。濛の許に詣つて清談をなした。既に去ると、濛はいふ、此の客は「靈靈（つとめて倦まない）として来た。

て人に逼ると。今、聲卿も壓壓として人に迫つて、所謂仁人の言、其の利が溥きものである。首を回せば、錢塘に在つた歳、（紀昀いふ、插二一事一、便生動有レ情と。）君と僕との情好は兄弟に均しくあつた。時に氷雪の中に於て、談笑春を生じ、我を見て顔色温であつた。錢を得て卽ち相覓め、酒を沽つて復疑はない。飲まんと欲して、夜、叢竹軒を開いた。そして好物を搜尋して饁筒に到る。韓退之の詩に、深藏二饁筒一時一發とあるものであらう。さて搜して見たが、鮓も醢も、復存して居ない。火を吹いて紅脣動き、薪を揖（手で衣を發く）して玉腕斜に、遙に觀る煙裏の面、卻つて霧中の花に似るといふは小說の中に見えた言葉であるが、烟火の中で、玉腕親しく炮燔した、昔のことも思ひ出される。一別以來、幾何の年月を經しぞ、相對してまことに夢魂のやうである。我に別を告げて、北に渡るべしといはれる。乃ち新詩を作り、淸樽を侑めて別を述べる。前途を望むと、太行の山は、斜に傾いて連つて居る。黃河は波湧き立つて居る。仕宦して不遇といふ譯でもないが、王畿は西北の垣となつて居る。（太平寰宇記に、衞州東南、至二東京一二百三十五里とある。）さて人民は譬へば魚のやうなもので、網を見ると驚奔するものである。故に政を施すは濕つた薪を束ねるやうでは、民は迚も堪へられない。水至つて淸ければ、魚が居ない。皎皎として千丈の淸きは、尺水の渾れるには及ばないと思ふ。刑政は首務であらうが、當に其の源を養ふべきである。後漢の廉范が蜀郡の太守となつたとき、百姓は之を歌うて、平生無レ補今五綺と。民をして襦袴の音を聞いて、其の生を樂むやうにすれば、盜賊などのことは、決して論ずるに足らないのである。（紀昀いふ、一結立言得レ體、不レ以二理路一爲嫌と。）

次韻子由送蔣夔赴代州學官

子由が蔣夔の代州學官に赴くを送るに次韻す

(一)功利爭レ先變レ法初。
(二)典型獨守老成餘。
窮人未レ信詩能爾。
(三)倚レ市懸知繡不レ如。
(四)代北諸生漸狂簡。
(五)牀頭雜說爲爬梳。
(六)歸來問レ雁吾何敢。
(七)疾レ世王符解著レ書。

【字解】【一】代州學官　九域志に、河東路、代州、雁門郡、宋、乾德元年、爲二上州一、治二雁門縣一。宋史、職官志に、慶歷四年、詔三州軍監、各立レ學置二教授・訓導一云云。【二】功利爭レ先云云　史記商君傳に、利不レ百不レ變レ法、功不レ十不レ易。文選、鮑明遠の詩に、爭レ先萬里途。宋史、王安石傳に、訓二釋詩書周禮一頒レ之、號曰二新義一、主司、純用以取レ士、士莫レ得二自名一一經一、先儒傳注一切廢不レ用。【三】典型　書法といふに同じ。詩、世を疾む王符は解く書を著す。【四】倚レ市　史記、貨殖傳に、用レ貨求大雅に、雖レ無二老成人一、尙有二典型一。【四】老成　杜子美の詩に、老髮無二遺態一、波瀾獨老成。【五】倚レ市　史記、貨殖傳に、用レ貨求レ富、農不レ如レ工、工不レ如レ商、刺二繡文一不レ如レ倚二市門一、此言二末業・貧者之資一也。【六】懸知　懸は度なり、はるかにと訓す。唐、嬰の詩に、懸知此地是神仙。【七】代北　陳子昂の詩に、雁山橫二代北一。【八】狂簡　志が大で、事に略なるをいふ。論語、公冶長篇に、吾黨之小子、狂簡斐然成レ章。【九】牀頭　晉書に、王濟嘗語二王濟一、見二牀頭有二周易一。【一〇】爬梳　韓退之が送二鄭尙書一序に、蜂屯蟻聚不レ可二爬梳一。韓退之、進學解の爬羅剔抉の宣。學官に切である。【一一】歸來問レ雁云云　潛夫論の述教篇に、皇甫規解レ官歸二安

定、鄉人有ㇾ以ニ貨得ニ臨門太守一者ハ、赤去ㇾ職還ㇾ家、規素聞ニ符名一、乃驚遽而起、衣不ㇾ及ㇾ帶、屨履出迎、授ニ符手一而還、與ニ同坐一、極ㇾ歡、時人爲ㇾ之語曰、徒見ニ二千石一不ㇾ如ニ一逢掖一、言ニ書生道義之爲ㇾ貴也。【三】 疾ㇾ世　王符云云　後漢、王符傳に、隱居著ニ書三十餘篇一、以譏ニ當時得失一、號曰ニ潛夫論一。

【題義】 此詩も熙寧十年三月の作。蔣夔は時に京中に在つた。欒城集、送ニ蔣夔赴ニ代州學官一詩に、憶遊ニ太學一十年初、猶見ニ胡公登弟餘、獨閉諸生非ㇾ有ㇾ道、最憐能賦似ニ相如一、青衫共笑方持ㇾ板、白髮相看各滿ㇾ梳、暫免百憂趨ニ長吏一、勉調ニ三寸一事ニ新書一とある。紀昀は此詩を評して語太激切と。

【詩意】 功利に急であつて、先を爭ふは、法を變ずるの初である。利、百ならざれば、法を變へないといふは、舊法を守る人である。老成人なしと雖も、典型ありと、古詩にあるが、典型は獨り老成人の守る所である。詩人は窮して其の詩ますます見はると言はれて居るも、窮する人、必ずしも詩を能くするとは信じない。貧を用つて富を求むるは、農は工に如かない。工は商に如かない。そして繪文を剌すのは、市門に倚るには如かないのである。人の功利を爭ふのも無理ならぬことと思ふ。ここに代北の諸生蔣夔は狂簡で、志は大であるも、事に略である。功利を外にし、牀頭の圖書雜說、之を搔きよせ、網羅して、會心の處を探し求める。昔、東漢の世、皇甫規は官を解いて鄉に歸つた。たまたま鄉人に金の力で雁門の太守となつたものも、亦職を去つて家に還つて居たが、一日規を訪問した。規は臥して出迎もしない。既に入ると、規は問ふ、君は郡に在り、雁を食うて美かつたかと。頃くすると、王符も來り訪ねて門に在る、規は平生、其の名を慕ひ、驚いて出で迎へ、同じく坐して歡を極めたといふことである。歸つて雁を問ふの態度は、吾は敢てしない。世を疾む王符が、隱居して書三十餘篇を著はし、當時の得失を譏つた狂簡は、我の慕ふ所である。これを蔣君が赴任を送る辭とする。

宿州次韻劉涇に次韻す

宿州劉涇に次韻す

我欲歸休(二)懇漸希。　我歸休せんと欲して懇漸く希に、
舞雩(三)何日著春衣。　舞雩何れの日か春衣を著けん。
多情白髮三千丈。　多情白髮三千丈、
無用蒼皮(四)四十圍。　無用蒼皮四十圍。
晚覺文章眞小技(五)。　晚に文章の眞に小技なるを覺り、
早知富貴有危機(六)。　早く富貴の危機あるを知る。
爲君垂涕君知否。　君の爲に涕を垂る君知るや否や、
千古華亭(七)鶴自飛。　千古華亭鶴自から飛ぶ。

【字解】 【一】 宿州　太平寰宇記に、元和四年、以ニ徐州符離之地一、南臨ニ汴河一、有ニ埇橋一、爲ニ輸運之會一、襟ニ帶梁宋一、漕運所ㇾ歷、乃以ニ符離一、新縣・虹縣三邑一、立ニ宿州一、開寶元年、陞爲ニ保靜軍節度一、北至ニ徐州一百四十里。【二】 劉涇　字は巨濟、逸士に擧げられ、宿州を爲む。王安石、薦めて經義所檢討となし、太學博士に除す。後、處・饒・眞・坊四州に知となり、職方郎中に除せらる。【三】 歸休　白居易傳に、居易、早年歸休、於ニ所居一第ニ山石樓一、繫ニ龍潤八節灘一、爲ニ遊賞之樂一。【四】 懇漸希　論語、先進篇に、鼓ㇾ瑟希。希は、時時聲の絕ゆるをいふ。【五】 舞雩　同

じく免遣篇に、莫春者、春服既成、冠者五六人、童子六七人、浴二乎沂一、風二乎舞雩一、詠而歸。舞雩は天を祭り、雨を請る處。【六】白髮三千丈　李太白、秋浦歌に、白髮三千丈、緣レ愁似レ箇長。【七】蒼皮四十圍　杜子美の古柏行に、霜皮溜雨四十圍、黛色參レ天二千尺。【九】小技　杜子美の詩に、文章本小技、於レ道未レ爲レ尊。【一〇】華亭鶴　晉書に、陸機受レ誅歎曰、華亭鶴唳、豈可二復聞一乎。東坡の自注に、謝二靈運之見一レ作、亦有レ文死矣。本集、與二劉巨濟一書に、賢兄、文格奇拔、不幸早世、見二其手書謝文一、不レ覺痛レ鄙云云。

【題義】宿州で、劉涇の詩に次韻したのである。東坡の自注に據ると、涇の兄汴、亦、文あつて死すとあるが、詩中に、富貴危機の語あり、又、華亭の鶴、すなはち陸機が刑に臨むことを引いて居る所を見れば、其の死を得ざるもののやうである。

【詩意】我は歸休して、遊賞の樂を爲さうとし、眥點が惡を鼓することも、だんだん希となつた。併し、春服既に成る暮春、沂水舞雩の遊をなすのは、そもそも何れの日であらうか。多情の我は、愁に緣つて白髮三千丈となる。又、我は散木と同じである、無用の爲に人に採伐もされないから、蒼い皮は、四十圍にもあまり、天に參すること二千尺の高さに及ぶ。晩年になつてから、文章は本、小技であつて、道に於て未だ尊しとしない道理も解つた。又、早くから、富貴の必ず危機を踐むものであるといふことにも、氣が付いたのである。今、君の爲に弟の垂れる譯を君知れりや否や。それは晉の陸機が誅を受けし際、華亭の鶴唳、豈復、聞くべけんやといつた怨言である。陸機が將に殺されようとするとき、昔日、華亭で、鶴の聲を聽いて樂んだことを思ひ起して歎息したのである。劉涇君に就いても此事が思はれる。千古華亭の鶴は自ら飛ぶも、劉涇の兄汴は、最早、此世には居ないのである。

和二李邦直沂山祈一レ雨有一レ應　李邦直沂山に雨を祈りて應あるに和す

高田生二黃埃一　下田生二蒼耳一
蒼耳亦已無　更問麥有レ幾
蛟龍睡足亦解レ慙　二麥枯時雨如レ洗
不レ知雨從二何處一來　但聞呂梁百步聲
如レ雷　試上二城南一望二城北一
際レ天菽粟青成レ堆

【字解】【一】李邦直　李清臣、字は邦直、進士に擧げらる。神宗、召して兩朝國史編修官となす。【二】沂山　周禮に、青州、其山鎭曰二沂山一。元和郡縣志に、沂山、在二沂水縣北一百二十里一云云。【三】高田　漢書、溝洫志に、高田五倍、下田十倍。【四】生二黃埃一　杜子美の詩に、雨降不レ濡レ物、良田起二黃埃一。自樂天、長恨歌に、黃埃散漫風蕭索。【五】蒼耳　本草に、蒼耳、一名胡葉、一名地葵、亦名二卷耳一・猪耳一。【六】二麥　大麥・小麥。宋書、孝武帝紀に、苗稼多傷、今二麥未レ晩云云。【七】呂梁百步　徐州二洪をいふ。莒縣に石梁あり、之を呂梁といふ。今は百

飢火燒〻腸作〔一〇〕牛吼。飢火腸を燒いて牛吼を作す、
不〻知待〔一一〕得秋成〔一二〕否。知らず秋成を待ち得んや否や。
半年不〻雨坐〔一三〕龍慵。半年雨らざるは龍の慵るに坐す、
共怨〔一四〕天公〔一五〕不〻怨〻龍。共に天公を怨んで龍を怨まず。
今朝一雨聊〔一六〕自贖。今朝一雨聊か自ら贖ふ、
龍神社鬼〔一七〕各〔一八〕功。龍神社鬼各〻功を言ふ。
無〔一九〕功日盜太倉穀。功なくして日に盜む太倉の穀、
嗟我與〻龍同〔二〇〕此責。嗟す我と龍と此責を同うす。
勸〔二一〕農使者不〔二二〕汝容。勸農の使者汝を容さず、
因〻君作〔二三〕詩先自劾。君に因つて詩を作り先づ自ら劾す。

【三】自贖　唐、李邕傳に、請戍〻邊自贖。【一四】龍神　法華經に見ゆ。梵名な那伽といふ。【一五】社鬼　虞、王莽傳に、社鬼記〻之。【一六】言〻功　箭何傳に、漢五年、論〻功行〻封、羣臣爭〻功、歲餘不〻決。【一七】無〻功　毛詩、鄭風、伐檀に、在〻位貪鄙、無〻功而受〻祿。【一八】勸農使者　時に邦直は京東提刑であつた。職官分紀に、天禧四年、改二諸路提刑一爲二勸農使一。【一九】作〻詩先自劾　王注に、章元成作〻詩自劾賞。韓退之の詩に、家請二官供一不二報答一無二異鳳雀偷二太倉一、行柚手版付二丞相一、不〻待二彈劾一還耕桑一。これ公の意である。

【題義】熙寧十年六月、旱の時、李清臣が沂山に雨を祈つて、應があつたから、詩を作つて東坡に寄

步洪といひ、徐州彭城の東に在る。莊子、繕生篇に、孔子觀二於呂梁一、縣水三十仞、流沫四十里。【八】城南　望二城北一　杜子美、哀江頭の詩に、黃昏胡騎塵滿〻城、欲〻往二城南一忘二城北一。【九】際〻天　莊子刻意篇に、上際二於天一下蟠二於地一。柳子厚の詩に、放國千里無二山河一、參老際〻天搖二青波一。【一〇】飢火燒〻腸　白樂天の詩に、飢火燒二其腸一。【一一】作二牛吼一　沈約、禪林寺尼淨秀行狀に、忽聞空中有〻聲、狀如二牛吼一。【一二】待二秋成一　莊子、庚桑楚篇に、春氣發而百草生、正得二秋而萬寶成一。杜牧之の晉谿舊詩に、萬家相慶喜二秋成一。

せた。此詩は之に和したのである。清臣は此時、未だ徐に至らなかつたのである。李邦直の詩は、南山高峻層、北山亦嶙峋、坐看雨山雲出沒、雲行如〻驅踣若〻呼、始覺山中有二靈物一、鬱鬱其焚〻蘭、羣羣其擊〻鼓、祝融祝巫屢舞、我民無〻罪神所〻憐、一夜雷風三尺雨、嶺木兮蒼蒼、谿水兮泱泱、雲散諸峰互明滅、東阡西陌農事忙、廟閉山空音響絶といふのである。烏臺詩案に、此詩言因二龍神慵懶不〻行〻雨、却使二人怨二天公一、以譏下執政大臣不〻任〻職、不〻能〻燮二理陰陽一、却使二人怨二天子一、以二龍神・社鬼一、比二執政大臣及百執事一、喻自言、無〻功竊〻祿、與〻龍無〻異云云と。紀昀いふ、憤語、却極二奇矯一、以〻借〻比故、不二甚覺一其訐一と。

【詩意】泉涸れ、苗焦げて、高田は黃塵を起し、下田も蒼耳（一名地葵）を生ずる。旱は日に甚だしくなつて、其の蒼耳さへも無くしてしまつた。今は麥がどれ程あるかなどの問題ではない。直に龍を水廟の前に迎へて此の旱を濟はなければならない。蛟龍も定めし睡足りて、亦慙を解したと見え、大麥、小麥の枯れた今日此頃、大雨は洗ふが如くに降り出した。知らず雨は一體何處から來たのか。呂梁百步の地、ただ沛然として聲が雷の如くであるを聞くのみ。試みに城南に上つて城北を望むと、千里山河なく、菽も粟も青青として堆をなして居る。併し、所謂飢火腸を燒いて、牛吼を作して居る、今日であるから、果して秋の成るまでを待ち得るかどうか、まことに危まれる。一體、半年も雨がなかつたのは、全く龍の慵りである。（執政大臣及び百職を指す）然るを天公（天子）を怨んで、怠けた龍を怨まないのは解らない話である。今朝も一雨があつたから、これで少しは罪滅しともなるであら

うと思ふ。神龍・社鬼各〻其の功を言つて居るが、實はどちらも功がなくて、日に太倉の穀を盜んで居る。ああかく言ふ我も亦、龍と此の責を同うして居る。京東提刑（勸農使）である李邦直は、決して汝を容さない。それで君の詩に因つて此詩を作り、功なくして祿を竊む我は、龍と少しも異なることなしと自らを劾したのである。（查愼行いふ、一轉入レ題、然結四句、却是餘波作レ收、非二本題正意一也と。）

徐州送二交代仲達少卿一

徐州、交代仲達少卿を送る

此身無用且東來。　此身は無用且東より來る、
賴有二江山一慰二不才一。　賴に江山あつて不才を慰む。
舊尹未レ嫌衰廢久。　舊尹未だ嫌はず衰廢の久しきを、
清樽猶許再三開。　清樽猶ほ許す再三開くを。
滿城遺愛知誰繼。　滿城遺愛知る誰か繼がん、
極目扁舟挽不レ回。　極目扁舟挽けども回らず。
歸去青雲還記否。　歸去青雲還た記するや否や、
交遊勝絕古城隈。　交遊勝絕古城の隈。

【字解】【一】徐州　古、九州の一。晉雅に、濟東曰二徐州一。今の銅山縣は、其の書治。【二】交代　官吏の任期が滿ちて他の人と代る。漢書、荀寬傳に、及二陵霊一交代、自請歸復留。【三】東來　詩、豳風、東山に、我來自レ東、零雨其濛。【四】賴　さいはひと訓す。賴遇二無心雲一。賴逢二征路晝一。賴逢二閨女曾相識一。賴是春風不二是秋一など用例多し。【五】江山慰二不才一　唐書に、張說謫二岳州一詩益凄惋、人謂得二江山助一云。莊子、人間世篇に、是不材之木也。【六】衰廢　陸機の文に、性實疾頑、同學衰廢。【七】清樽　詩、賓筵、

王の詩に、還悲三征魄晚、獨對一清樽一、樽は樽と同じ。【八】遺愛　仁愛が後世に遺留する意。左傳、昭公二十年に、及二子產卒一、仲尼聞レ之、出レ涕曰、古之遺愛也。【九】誰繼　同じく左傳、襄公三十年に、子產而死、誰其嗣レ之。【一〇】扁舟　史記、貨殖傳に、乃乘二扁舟一浮二于江湖一。【一一】挽不レ回　晉、郭伋傳に、伋爲二吳郡一、刑政清明、去レ郡不レ受二一錢一、百姓數千人、留二乘伋船一不レ得レ進、伋乃少停、衆中棄去、吳人歎レ之曰、前(鼓を打つ聲)如レ打二五鼓一、後(鐘鳴天欲レ曙、郡侯挽不レ留、謝令攝不レ去。【一二】青雲　史記伯夷傳に、閭巷之人、欲二砥レ行立レ名、非レ附二青雲之士一、惡能施二於後世一哉。【一三】交遊　史記に、朋友交遊、久不二相見一、卒然相覩、歡然道レ故。【一四】勝絕　白樂天の詩に、觸レ目勝絕不レ可レ名。東坡の寒菜詩に、相符謂二勝絕一、更衰三月後。【一五】隈　くま。晉雅に、屋內爲レ隈、外爲レ隅。

【題義】此詩は熙寧十年四月の作である。王文誥いふ、詩題作二仲達少卿一、欒城集有レ徐州送二江少卿一詩、并有レ公來初無レ事、豐歲多二牟麥一、鈴閣度二清風一、芳樽對二佳客一句、信前守爲二江仲達一、無レ疑也、查注引二題跋之詩人戴仲達一、以擬レ之、此元祐間事、毫無二根據一云云と。

【詩意】此身は世に用なきもの、且つ東方から來たのであるが、幸に江山が、我が不才を慰めてくれる。又、前の官であつた江仲達も、此身の衰廢久しいことをも構はずに歡迎してくれ、猶ほ清樽を再三回も開かれた。さて徐州に於ける仲達が遺愛は、一體、誰が繼ぐであらう。晉の鄧攸は吳郡を爲めて、一錢をも受けないので、百姓數千人相聚つて、攸が船を留め牽いた。攸は爲に進むことが出來なく、少しく停つて、夜中に出發したといふことである。江仲達も亦挽けども回らず、扁舟に棹して去る。目を極めて其舟の往くのを見送る。歸山の後は、果して青雲

の志また念頭に存するや否や。蚤く世外の人となるであらう。思ふに、故城の隈で、久しく逢はなかつた故舊と歎然として昔を談るに違ひない。そして、相將ゐて勝絕の地を蹈むことも想像できる。

和孔密州五絕　孔密州に和する五絕

見邸家園留題　邸家園の留題を見る

大旆傳聞載酒過。小詩未忍著磚磨。陽關三疊君須祕。除却膠西不解歌。

大旆傳へ聞く酒を載せて過ぐるを、小詩未だ忍ぶに磚磨を著くるに忍びず。陽關三疊君須らく祕すべし、膠西を除却して歌ふを解せず。

【字解】【一】孔密州　東坡に代つて高密の守となつた孔宗翰。字は周翰、道輔の子、陝・堰・洪・兗・鄧州を歷、皆、治を以て聞ゆ。哲宗の時、刑部侍郎に累遷し、寶文閣待制を以て徐州に知となる。未だ拜せずして卒す。【二】邸家園　漢、上郡太守邸柱の家園。【三】大旆　種種の色の帛で造つた旗。旆、沈傳師の詩に、大旆理錯（衆く盛な貌）輝二松門一。【四】著二磚磨一　傳燈錄、南岳讓師曰、磨磚若不レ成レ鏡、坐禪豈得レ成レ佛。【五】陽關三疊　送別の詩、此詩を唱ふるに、後の三句を二度重ねて唱ふ。之を三疊といふ。陽關は、今の甘肅省、安正州、敦煌縣の西南に在る。王注に、漢於二燉煌郡敷一置二陽關一、以扼二三疊之說一、則蓋然無二復節奏一、余在二密州一、有二文勛長官一、以レ事至レ密、自云、得二古本陽關一、其聲宛轉流咽、不レ類二向之所レ聞、每句皆再唱而第一句不レ疊、乃知古本三疊蓋如レ此云云と。除二却膠西一不レ解レ歌は、文長官が傳ふる所の聲か。東坡の自注に、來詩有二消娥之句一と。【六】膠西　漢、膠西王の國。今の山東膠縣高密等の地。

【題義】此詩は熙寧十年四月の作である。密州の孔宗翰が邸家園を見て留題した諸作に和したのである。王文誥いふ、題謂レ見二孔宗翰所二留題一也、合注謂二公留題一誤云云と。

【詩意】孔宗翰は高密の守となつたので、大旆を推し立てて、酒を載せて過ぎ行くといふことを傳へ聞いた。磨磚若し鏡を成さずば、坐禪豈佛を成すを得んやといつた南岳讓師の言葉を曾て聞いたが、我が詩は、其の磚磨を著けるに忍びない。又、孔密州が留題の詩中に渭城の句があるが、陽關三疊の詩は、其の聲が宛轉淒斷であるから、君須らく祕して置かるべし。そして每句皆再唱して、第一句を疊まないときは、肝心な、膠西を除卻するので、歌ふ所の意味が解らなくなるであらう。

【餘錄】唐、王維の送二元二使二安西一の詩に、渭城朝雨浥二輕塵一、客舍青青柳色新、勸レ君更盡二一杯酒一、西出二陽關一無二故人一。渭城は咸陽の東北にある。東坡の詩に、佳人亦何念、淒斷陽關曲。陸游の詩に、倦遊短鬢無二多綠一、生怕尊前唱二渭陽一。又、東坡の中秋月の詩に、暮雲收盡溢二清寒一、銀漢無レ聲轉二玉盤一、此生此夜不二長好一、明月明年何處看とある。其の查注に、風月堂詩話、東坡中秋詩、紹聖（宋、哲宗年號）元年、自題二其後一云、予十八年前中秋、與二子由一觀二月彭城一、作二此詩一、以二陽關一歌レ之と。江藩いふ、陽關詞、古人但論二三疊一、不レ論二聲調一、以二王維一首一、定二此詞平仄一、此詩與二摩詰一、毫髮不レ爽と。

春步西園見寄　春西園を步して寄せらる

歳歳開レ園成故事。　歳歳園を開いて故事を成し、
年年行樂不レ辜レ春。　年年の行樂春に辜かす。
今年太守尤難レ繼。　今年の太守尤も繼ぎ難し、
慈愛聰明惠利レ人。　慈愛聰明人を惠利す。

【字解】【一】歳歳開レ園　宋の劉に據るに、州の守は、毎歳二月、園を開いて父老に酒食を散ず。【二】行樂　楊惲の詩に、人生行樂耳、須二富貴一何時。李太白の詩に、行樂須レ及レ春。【三】不レ辜レ春　辜は辜負と熟す。そむく意。白樂天の詩に、猶有二一般辜負事一、不レ辜二欵管絃一來。【四】聰明惠二利人一　前漢、馮奉世の傳に、奉世子野王與二弟立一相代爲二上郡太守一、（立、五原太守、徙二上郡一）治行略相似、吏民歌レ之曰、大馮君小馮君、兄弟繼レ踵相因循、聰明賢知惠二吏民一、政如二脅衛一德化鈞、周公康叔猶二二君一也、後漢、蔡邕傳に、嘗下以二惠利一爲レ歸。

【詩意】州の太守は、毎歳二月、園を開いて父老に酒食を饗するのが例となつて居る。人生は行樂のみ、行樂は須らく春に及ぶべきである。孔太守は年年春時の行樂に負かなかつたが、今年太守となつた我は、迚も前太守に及ばない。尤も繼ぎ難い所は、慈愛聰明とそして人を惠利することである。前漢の馮奉世の子野王は、弟立と相代つて上郡の太守となり、治行も略ぼ相似たので、吏民は之を歌つて、大馮君、小馮君、兄弟踵を繼いで相因循、聰明賢知吏民を惠すと言つたさうである。ここは此故事に據つたものである。併し紀昀は、此詩の結句を評して、不レ成二句法一と言つた。

東欄梨花

東欄の梨花

梨花淡白柳深青。　梨花は淡白にして柳は深青、
柳絮飛時花滿城。　柳絮飛ぶ時花城に滿つ。
惆悵東欄二株雪。　惆悵す東欄二株の雪、
人生看得幾清明。　人生看得るは幾清明。

【字解】【一】柳絮　柳の綿。晉書に、謝安、晉内集、徽雨雪下、安曰、何所レ似也、安兄子郎曰、撒二鹽空中一差可レ擬、王凝之妻謝道韞曰、未レ若二柳絮因レ風起一。前にも出づ。【二】花滿レ城　劉禹錫の詩に、柔條不レ忍レ見二千株雪一相映。李白の詩に、梨花白雪香。【三】惆悵　痛ましく戀し。韓退之の詩に、走二馬西城一惆悵歸、行二長安一二月花滿レ城。柳絮を舞へるも、亦、一時の景物である。【四】二株雪　一本に、一株雪に作る。梨花を雪に比していふ。韓退之の聞二梨花發一詩に、閒遊郭西千樹雪。【五】清明　寒食の節後、兩日を清明の節といふ。鄭中記に、并州俗、冬至後百五日、爲二介子推一斷レ火冷食、謂二之寒食一。

【詩意】梨花は淡白に、柳は深青で、春色は正に酣である。柳の絮の飛ぶ時分は、花も散つて城中に滿ち、一年の春は盡きる。今日、東欄に雪のやうに咲いて居る二株の梨の花を看ても、人生果して幾度か此の清明に逢ひ得る。念うて茲に到ると、痛み悲しまざるを得ない。（梨花を賦し、併せて柳絮を言つたのは、未だ害としない。柳を以て梨花の陪客としたもので、詩人には往往此格があるからである。轉句に至り、二株雪を以て本題の梨花を回顧し、感慨を以て、筆を收めた。此の詩を一誦すると、人をして歳月の速かに去つて、飄忽たるの感あらしめると古人も言つて居る。此詩、梨花盛に開くをいへば、寒食清明の際である。故に東坡また詩ありていふ、共藉二梨花一作二寒食一と。）

【餘錄】宋の洪邁の容齋隨筆に、張文潛好吟二東坡梨花絶句一、毎レ吟一過一、必擊レ節歎不レ能レ已、文潛盡有レ省二於此一云とある。唐宋詩醇に、濃至之情、偶於レ所レ見發露、絶句中、幾與二劍夢得一爭レ衡とある。志林（一名東坡手澤）に據るに、東坡、彭城の守と作つたとき、齊州の李公擇に過ぎり、席上、此詩を作つたといふことである。

和二流杯石上草書小詩一　流杯石上草書の小詩に和す

清めるないふ。全句、皆、清みて中の一字濁るを鶴膝といふの謝である。南史、齊、陸厥傳に、永明時、盛爲二文章一、吳興沈約、陳郡謝朓、琅邪王融、以二氣類一相推轂、汝南周顒善識二聲韻一、約等文、皆用二四聲制韻一、有二平頭上尾蜂腰鶴膝之病一、世呼爲二永明體一。（五字之中、音韻悉異、兩句之內、角徵不レ同。）【三】春蚓秋蛇　晉、王羲之傳に、蕭子雲、近出、復三名江表一、然僅得二成書一、無二丈夫之氣一、行行者レ縈二春蚓一、字字如レ結二秋蛇一。【四】醉裏自書云云　唐の張旭、醉ふ毎に、或は頭を以て墨を濡して書す。既に醒め、自ら視て、以爲らく神にして復、得べからずと。【六】二絶　南史、顏延之傳に、宣城王爲二揚州刺史一、延之爲二王府一、王於二東齋一起レ齋、令レ延之著二古賢一、王褒書。

【字解】【一】流杯　流觴と同じ。曲水の宴にて流す杯。杜牧之の詩に、且環二流水一醉二流杯一、隋、煬帝は流杯殿を造る、宋にも亦之あり。【二】蜂腰鶴膝　晉、沈約の詩格八病の一、一說に、全句皆、濁りて、中の一字清めるをいふ。全句、皆、清みて中の一字濁るを鶴膝といふの謝であると。南史、齊、陸厥傳に、永明時、盛爲二文章一、吳興沈約、陳郡謝朓、琅邪王融、以二氣類一相推轂、汝南周顒善識二聲韻一、約等文、皆用二四聲制韻一、有二平頭上尾蜂腰鶴膝之病一、世呼爲二永明體一。（五字之中、音韻悉異、兩句之內、角徵不レ同。）【三】春蚓秋蛇　晉、王羲之傳に、蕭子雲、近出、復三名江表一、然僅得二成書一、無二丈夫之氣一、行行者レ縈二春蚓一、字字如レ結二秋蛇一。【四】醉裏自書云云　唐の張旭、醉ふ毎に、或は頭を以て墨を濡して書す。既に醒め、自ら視て、以爲らく神にして復、得べからずと。【六】二絶　南史、顏延之傳に、宣城王爲二揚州刺史一、延之爲二王府一、王於二東齋一起レ齋、令レ延之著二古賢一、王褒書。

【詩意】沈約の詩格八病の中に、蜂腰といふがあり鶴膝といふがある。五字の中、音韻が悉く異り、兩句の內、角・徵（五音の內）が同じでない。世に呼んで永明體といふ。（永明は齊、武帝の年號である。）謝希逸の詩は永明體の弊があるので、蜂腰鶴膝と嘲けつたのである。又、蕭子雲は一時、書名を江表に擅にしたが、惜しいかな丈夫の氣がない。行行、春蚓を縈ふが如く、字字、秋蛇を結ぶがやうであつた。石上の草書と小詩とを見て、此等の事が思ひ出される。張旭は醉筆に妙を得たさうであるが、君も亦、醉うて自ら書し、醒めて自ら笑つて居られる。昔、宣城王が揚州を爲めたとき、書齋を起したことがある。王は顏野王をして古賢を畫かしめ、王褒をして贊を書かせた。時に二絶と稱されたが、今、君の書かれた草書も、作られた小詩も、まことに逸品で、亦、二絶と稱すべきである。

【字解】【一】城西千葉　牡丹に城西千葉紅の名あり。【二】醉臉　臉は目の下、頬の上。同じく東坡の詩に、醉臉輕勻親二眼餧一。陸游の詩に、醉李沃レ酒醉臉酡、長笛裊詩三巴歌一。【三】遊蜂　韓退之が、戲題二牡丹一詩

堂後白牡丹

堂後の白牡丹

城西千葉豈不レ好。　城西の千葉豈好からざらんや、
笑舞二春風一醉臉丹。　笑つて春風に舞つて醉臉丹し。
何似後堂冰玉潔。　何ぞ似かん後堂冰玉潔うして、
遊蜂非レ意不二相干一。　遊蜂意あらずして相干らざるに。

に、變而無レ媚選拂拭、遊蜂多レ思正經營。【題】非レ意不二相干一　晉謝弈が傳に、晉謂、人有レ不レ及、可二以情恕一、非レ意相干、可二以理遣一、故終レ身不レ見二喜怒之容一。

【詩意】嫵西千葉の名ある牡丹は、光色が艷媚（なまめかしく美しい）で笑つて春風に舞ひ、酔うた目許が丹いので、（牡丹の紅色を說く。）之を愛するものが多い。併し白牡丹の氷清玉潔であつて、幽獨の地に處り、嫵然として游蜂の近くべからざるには及ばない。（彼を抑へて、此を揚ぐ。本集の自注に、孔密州顧有二聲妓一、而客無二見者一、故東坡作二此詩一譏レ之とある。紀昀いふ、非二自注一則此詩不レ可レ解、故解レ詩最難と。）

和趙郎中見レ戲二首　趙郎中戲れらるるに和す　二首

燕子人亡三百秋、燕子人亡して三百秋、
捲レ簾那復似二揚州一。簾を捲くも那ぞ復揚州に似ん。
西行未レ必能レ勝レ此。西行未だ必ずしも能く此に勝らず、
空唱崔徽上二白樓一。空しく崔徽を唱へて白樓に上る。

【字解】【一】趙郎中　趙成伯をいふ。前にも出づ。東坡の自注に、趙以二徐妓不レ如二東武一詩中見レ戲云、只有二當時燕子樓一。【二】燕子人亡云云　白樂天の燕子樓詩序に、徐州故尚書張建封愛妓曰二盼盼一、善二歌舞一、第中有二小樓一名二燕子一、盼盼念二建封一而不二肯嫁一、居二是樓一十餘年、鬱鬱而終。【三】捲レ簾　捲一に巻に作る。杜牧之の贈別の詩に、春風十里揚州路、卷二上珠簾一總不レ如。揚州は今の江蘇省の地。【四】西行未必云云　宣注に、言赴二河中一、來二必便歸二徐州一也と。【五】空唱二崔徽一云云　元微之の崔徽傳に、崔徽、蒲女也、裴敬中、使レ蒲、徽一見動レ情、不レ能レ忘、敬中使回、徽以不レ得レ從爲レ恨、久之成レ疾、寫レ眞、以寄レ裴、且曰、崔徽一旦不レ及二卷中人一矣、裴之爲作二崔徽歌一、以敍二其事一。【六】白樓　河中府城の西北に在る。三國、呂布傳に、魏太祖圍レ布、布登二白門樓一、圍急、乃下降。歸道元の水經注に、南門謂二之白門一。

【題意】此詩も熙寧十年四月の作。趙成伯の戲れて作つた詩に和したのである。紀昀いふ、頗有二風致一と。

【詩意】昔、徐州の故尚書張建封に盼盼といふ愛妓があつた。張が亡くなつても、盼盼は舊愛を念うて、他に緣附かなかつた。第中の燕子樓に居つて、十餘年も幽獨をつづけたといふことである。燕子樓の人が亡くなつて三百年、杜牧之が所謂春風十里揚州の夢、珠簾を捲き上げるも、ありし昔には似ない。たとひ、西の方、河中に赴いた所で、未だ必ずしもこの徐州に勝らないであらうから、空しく元微之の崔徽歌でも唱へて、白樓に上ることにしよう。（昔、裴敬中は、河中に使ひし、崔徽と相從ふこと累月であつた。敬中が罷め歸るに及んで、從ふことが出來ないので、情懷怨抑、遂に疾を成した。崔は眞を寫して、裴に寄せたのである。元微之の此事を敍したのが、卽ち崔徽歌である。）

我擊二藤牀一君唱レ歌。我は藤牀を擊ち君は歌を唱ふ、
明年六十奈レ君何。明年六十君を奈何。

古今體詩　和趙郎中見戲二首

【字解】【一】藤牀　白樂天の詩に、六尺白藤牀、一堂青竹枝。【二】明年六十　東坡の自注に、趙每レ醉歌

醉顚只要裝風景。醉顚只要す風景を裝ふを、
莫向人前自洗磨。人の前に向つて自ら洗磨すること莫れ。

贈三張旭一詩に、興來書自狂、醉後語猶顚。【四】風景　風采の意。晉書の劉毅傳に、能令三羣士宗二其風景一。

【詩意】王維の詩に、醉歌田舍酒、笑讀古人書とあるが、我は藤の牀を擊つて拍子を取り、君は歌を唱へる、是れ我が醉鄕の歡樂である。さて、趙郎中は醉へば歌ひ、歌が畢ると、毎にいふ、明年は六十である、君を奈何せんと。口癖のやうにいふ。凡そ醉顚の餘は、只、風采を裝ふことが大切であるが、人の前に向つて、自ら洗磨するやうなことがあつてはならない。

次韻子由與顏長道同遊百步洪相地築亭種柳

子由顏長道と同じく百步洪に遊び、地を相、亭を築き柳を種うるに次韻す

【字解】【一】顏長道　宋史に、顏復、字長道、眉人顏子四十八世孫、安太初、以二名儒一爲二國子監直講一。嘉祐中、試中書第一、爲二遊士一。元祐初、起二太常博士一、累遷中書舍人一、兼二侍讀一。【二】百步洪　名勝志に、在二徐州城東南二里水中一、亂石激濤、凡數里。【三】相地　史記、周紀に、后稷相二地之宜一、宜二穀者稼一、桑麻、民皆法二則之一。【四】平明　平旦といふに同じ。史記、留侯世家に、五日平明良往。一本に平生に作る。【五】坐不暖席　白樂天の寄二微之一詩に、枕上休二聞報一、坐不二暖席一。【六】閉閣云云　漢書、汲黯傳に、黯多病、臥二閤內一、不二出踰一歲、東海大治。終日、一本に臥疾に作る。【七】倒屣迎　陳寥三國志、魏、王粲傳に、左中郎將蔡邕見而奇之、時邕才學顧著、賓客滿門、聞二粲在一門一、倒屣迎之。【八】蒙籠　郭璞、遊仙詩に、蒙籠蓋二一山一。文選に

路轉二河洪一翻雪白。路河洪に轉じて雪白を翻へす。
安得二青絲絡一駿馬。安んぞ青絲駿馬を絡ふことを得て、
蹙踏飛波柳陰下。蹙踏して波を飛ばす柳陰の下、
奮二身三丈兩蹄間一。身を奮ふ三丈兩蹄の間。
振レ鬣長鳴聲自乾。鬣を振つて長鳴して聲自ら乾かん。
少年狂興久已謝。少年の狂興久しく已に謝し、
但憶嘉陵繞二劍關一。但憶ふ嘉陵の劍關を繞るを。
劍關大道車方レ軌。劍關の大道車軌を方ぶ、
君自不レ去歸何難。君自ら去らず歸ること何ぞ難からん。
山中故人應二大笑一。山中の故人應に大に笑ふべし、
築二室種一レ柳何時還。室を築き柳を種ゑて何れの時か還らん」と。

【九】酒水　九城志に、徐州酒水、今呼爲二清河一。【一〇】青絲絡二駿馬一　杜子美の詩に、青絲絡レ頭爲レ君老。【一一】奮二身三丈一　三國志注に、劉備乘二馬名一的盧、走躍三檀溪中一、（襄陽城西）溺不レ得レ出、備急曰、的盧、今日死矣、可二努力一、乃一踴三丈、遂得レ出。【一二】兩蹄間　史記、張儀傳に、秦馬之良、探レ前趹レ後、蹄間三尋、騰者、不レ可二勝數一。【一三】長鳴　戰國策に、楚國謂二春申君一曰、鼠雖二伯樂一俯而噴、仰而鳴、以二伯樂之知一己也、今、君爲無レ意レ使二僕長鳴一乎。【一四】嘉陵繞二劍關一　九城志に、嘉陵江在二果州一。一說に、出二大散關一、南行三劍門關一、東向二閬中一、與二涪水一會。元和郡縣志に、劍閣道、其山削壁千丈、下瞰二絕壑一、飛閣以通二行旅一。

【二五】車万ノ軌　漢書に、李左車說二成安君一曰、井陘之道、車不レ得レ方レ軌、騎不レ得レ成レ列。戰國策に、蘇秦說二齊宣王一曰、亢父之險、車不レ得レ方レ軌、馬不レ得二竝行一。【二六】塵三大笑一　李太白の詩に、仰レ天大笑出レ門去。

【題義】此詩は熙寧十年六月、東坡が子由・顏復と同じく百步洪に遊んで、地を相し、亭を築き、柳を種ゑた時の作である。紀昀いふ、突插二一波一、便有二生動之致一、此避レ平避レ板之意と。

【詩意】夜が明けて、平旦、一たび役所に坐したが、客が來て、門に在ると聞いて、あわてて草履を倒に穿いて出迎へたのである。兩眼がおぼろげで、まだ睡氣が餘つて居る。徐州の城東を流れて居る四水へは、步いて到るべきも、路を河洪（百步洪）に轉じて、水中を渡る。亂石激湍、雪白を飜へして居る。どうか、青絲を驟馬の頭に絡うて、蹴踏して波を柳陰の下に飛ばしたいものである。昔、劉備は的盧と名くる愛馬に騎つて走つたとき、誤つて襄陽城の西、檀溪中に墜ちた。馬は溺れて出ることが出來なくなつた。劉備曰く、的盧よ、かくては今日死ぬるのだ、努力してくれと。言葉の未だ終らない內に、馬は一蹶三丈、遂に出ることが出來たとある。馬の良いものは、前を探り、後を趺み、蹄の間三尋と

古今體詩　次韻李邦直感舊

いふことである。どうか的盧のやうな良馬に乘つて、轡を振つて長鳴し、聲も自ら乾くやうにありたい。併し少年時代の狂興も、今は已になくなつたので、ただかの嘉陵江の劍閣を繞つて居る絕勝を憶ふのである。劍閣の道、其の山は削壁千丈で、下は絕壑を瞰る。それで飛閣を架けて旅人を渡すといふことである。併し飛閣は大道をなして車は軌を方べて行くことが出來る。故に君は自ら去らないのである。去らうとすれば、何の難いことがあらうぞ。山中の故人も定めし笑つて居るであらう。百步洪に室を築いたり、柳を種ゑたりして、一體、何時還らうとするのであるか。

次韻李邦直感舊

李邦直の感舊に次韻す

【字解】【一】李邦直　李清臣。字は邦直、逸士に擧げらる。神宗、召して國朝國史編修官となす。清臣、少うして才名を負ふ。一日、往いて韓琦に謁す。其經報じて曰く、大叔、方に睡る、弥且つ去れと。清臣因つて詩を壁に題していふ、公子乘レ閑臥二碧蘚一、白衣老吏慢二來儒一、不レ知夢見周公禮、曾說當年吐レ哺無と。琦、之を

駿騎傳呼出跨坊。【二】駿騎傳呼　駿騎傳呼出でて坊に跨る、

簿書塡委入充堂。【三】簿書塡委　簿書塡委入つて堂に充つ。

誰敎按部如何武。【四】誰か部を按ずる何武の如からしむる、

只許淸樽對孟光。【五】只許す淸樽孟光に對するを。

婉娩有レ時來入夢。【六】婉娩　婉娩時あり來つて夢に入り、

溫柔何日聽還鄉。【七】溫柔　溫柔何れの日か鄉に還るを聽されん。

酸寒病守尤堪笑。（一二）千歩空餘僕射場。

酸寒病守尤も笑ふに堪へたり、千歩空しく餘す僕射の場。

得二佳句一無レ易二邦直、巨源一、於レ是首肯、卒以歸レ之、故此感舊詩、有二入レ夢還レ鄉之歎一、又、長短句云、誰教二圖夢裏插一他花一、亦此意也と見ゆ。邦直の元配は韓氏、巨源の女は龐室である。【二】感舊　後漢書に、非人憤二感舊之哀一。【三】僕射　龐御ないふ。漢、東方期傳注に、龐、奉車之御也、後以爲レ騎、謂二之龐騎一。【四】傳呼　前漢、馮野王傳に、望之出入、蒼頭廬兒、下レ車趨レ門、傳呼長安。【五】出跡レ坊　跡は乃ち凌跡の跡。王注に出而驅騎傳呼、則凌二跡坊巷一入而傳書填委、則充二滿堂廡一。蓋はいふ、跡坊は、龍街の謂と。龍街は、輿衞の盛を形容す。唐書、温造傳に、舒元輿爲二京兆尹一、元和時、中丞呵止、不レ過二半坊一、今乃至二兩坊一、謂二之龍街喝道一。【六】塡委　文選、劉公幹の詩に、職事煩塡委、文墨紛消散。【七】充レ堂　陸士衡、歎逝の賦に、居充レ堂而衍レ宇、行遶レ舘而比レ軒。【八】何武　字は君公。官に居り、好んで士類を笑む。士、多く之に歸す。居る所、赫赫の名なくして、去て後、常に思はる。武、揚州刺史となりて、部を行り、九江郡守戴聖が不法の狀を得。聖、懼れて自ら免す。後、武を朝に譖る。聖の子、賓客、毆賊を以て廬江に繫がる。武、心を平にして之を決し、死せざるを得たり。聖、大に慚服す。漢書、何武傳に、行レ部必先二郵亭一、見二諸生一、試二其論一、問以得失一、然後入二傳舍一、出レ記、問二縣田頃畝五穀美惡一、已知見二二千石一、以爲レ常。【九】孟光　梁鴻の妻。狀、肥醜にして黒く、力、石臼を擧ぐ。鴻と共に霸陵の山中に隱る。李清臣本傳に、清臣自レ幼敏悟、韓琦以見子二妻レ之、則邦直元配爲レ韓、而巨源之女、爲二龐室一耳。【一〇】鋌挽　婦容のおとなしく、しとやかな貌。鋌、内則に、女子十年不レ出、鄰教三鋌挽聯從一。韓退之の詩に、孤遊懷二耿介一、旅宿夢二鋌挽一。【一一】温柔　鄉、經解に、温柔敦厚、詩教也。趙飛燕外傳に、飛燕遣二合德一、成帝見二合德一曰、吾當レ老二此温柔鄉一、不二復效一武皇老二白雲鄉一也と。合德は趙飛燕の姉妹。前漢、成帝の時、趙飛燕合德の姉妹、一は后となり、一は昭儀となつた。【一二】醜寒　東坡の詩に、故人留飲慰二酸寒一。【一三】千歩僕射場　張延封は擧秘の歳を好む。韓退之は幕に佐たりしかば、書を以て之を諫む。韓退之の要僕射に贈る詩に、亦猶交流郡城角、斷場千歩平如レ削。

【題義】李清臣が感舊の詩に次韻したのである。紀昀いふ、語自流利、然無二出色之處一と。査慎行い

ふ、前六句、皆說二邦直一、結處則先生自謂と。

【詩意】昔を思ひ出すと、まことに感に堪へない。出ては廐御となつて傳呼し、坊巷に跨る。是を龍街喝道といふ。龍街とは、輿衞の盛なるをいひ、喝道とは行くに先を拂ふをいふ。又、入つては簿書が堂廡に塡充する。職事文墨の煩多なるを思はしめる。昔、漢の何武は揚州の刺史となつて、部を行つたとき、九江郡守戴聖の不法を知つた。聖は懼れて自ら免じ、後、武を朝廷に毀つた。聖の子の賓客が罪を以て獄に繫がれたとき、武は舊怨を思はず、心を平にして之を決したので、聖は大に慚服したといふ話がある。誰か部を按ずること、この何武の如からしめるものぞ。又、ただ許す清樽孟光に對するをといふ意は、李清臣が韓氏の女壻となつたことをいふのである。清臣の本傳に據ると、韓琦は其兄の子を以て清臣に妻はす、卽ち清臣の元配である。後、巨源の女も、清臣に歸したが、これは繼室である。韓退之の詩に、旅宿夢二鋌挽一とあるが、おとなしくしとやかな婦容が時あつてか來つて夢に入るであらう。前漢の成帝は、合德を喜び、聞ひて温柔鄉となし、吾は是鄉に老いんと言つたが、今、清臣も故山の妻を夢み、何れの日か我が温柔鄉に還るを聽されるであらうかと思はれるであらう。之に反して此の酸寒の病太守（自らを指す）は、尤も笑ふに堪へる。廣さ千歩もある平地の張僕射が擊毬の戲をなすに好い場所を空しく餘して居る。（韓退之の詩にも、孤遊懷二耿介一とあるが、思へば惜しいことである。）

與梁先舒煥泛舟得臨醼字二首

梁先・舒煥と舟を泛べて、臨醼の字を得たり　二首

彭城古戰國。孤客勸登臨。
汴泗交流處。清潭百丈深。
故人輕千里。繭足來相尋。
何以娛嘉客。潭水洗君心。

【字解】【一】梁先　字は吉老、本集の李憲仲哀詞引中に見ゆ。【二】彭城　徐州である。古の有莘氏の國で、春秋より唐末に至るまで、戰爭の多かつた地。漢の高祖・項羽・劉裕、皆、彭城に起つた。水經注に、彭城、殷大夫老彭之國也、於三春秋一爲二宋地一、成十八年、楚伐レ宋并レ之、以封二魚石一云云。名勝志に、秦始置二彭城縣一、屬二泗水郡一、漢高祖改二泗水一爲二沛縣一、又分二沛郡一立二楚國一、因置二徐州一。【三】汴泗交流　水經注に、泗水又南、淮水入焉、經二彭城縣故城一、名勝志に、泗水、源出二山東泗水縣一、南流過二沛縣一、至二徐州城東北一與二汴水一合、二水匯而爲レ潭、極深、有レ龍居レ之。【四】清潭　李太白の贈二楚司馬一詩に、百尺清潭寫二翠帷一。潭は淵。【五】繭足　繭は足胝をいふ。王注に、吳入レ郡、申包胥、走レ秦乞レ師、足皆生レ繭。戰國策に、蘇秦、足重繭、日百而舍、遺二外閽一、顧レ見二於前一、口遺二天下之事一。【六】洗二君心一　李太白の詩に、罷思二翻水操一、忽復歸二滄浪一。歸時莫レ洗レ耳、爲レ我洗二君心一。

【題義】東坡が梁先や舒煥と舟を泛べ、互に韻字を分つて詩を作つたとき、臨・醼の二字を得たので、此の二首が出來た。紀昀は前詩を評して十字渾成といひ、後詩を評して出手太快、結二句尤率といつて居る。

【詩意】此詩は梁先に與へたのである。彭城は古の大彭氏の國で、春秋時代から唐の末に至るまで、戰爭の多かつた地である。漢の高祖も、項羽も、南朝宋の劉裕も、皆、彭城から起つた。孤客は古を懷うて、登臨に勤む。泗水は源を山東に發し、南流して徐州に至り、東北、沛水を合せ、東南、淮水に達す。汴水は河南より東流して蕭縣を過ぎ、州城の東北に至り、泗水と合す。二水は匯（水流が廻旋する）して潭となり、深さ百丈、龍が居るといふことである。故人は情に厚く、千里を遠しとしないで、足に繭（足胝）を生じ、來つて相尋ねる。何を以て佳客を娛ましめよう。この清潭の水で、耳を洗はないで、君の心を洗ふやうに致したい。

老守厭簿書。先生罷函丈。
風流魏晉間。談笑羲皇上。
河洪忽已過。水色綠可釀。
君無輕此樂。此樂清且放。

【字解】【一】厭簿書　漢書、賈誼傳に、大臣特以簿書不レ報二期會之間一、以爲二大故一。簿書は、官府の錢穀記入をいひ、期會は、日限を定めて租稅を徵收するをいふ。【二】罷二函丈一　禮、曲禮に、非二飮食之宰一、則布レ席、席間函レ丈。鄭氏註ふ、講問之客也と。

【三】風流談笑間　魏・晉の間、士は清談を尚び、通節を高ひ、名敎・史事を絶て俗と爲す。晉、樂廣傳に、天下言三風流一者、謂三樂王一爲二第一一焉。【四】義皇上　晉書、陶潛傳に、陶潛晉宋之間人。自謂二羲皇上人一。【五】河洪　一に洪河に作る。

【詩意】此詩は舒燒に與へたのである。老いた太守の我は、物事に懶く、簿書の事務なども厭になつた。又、先生と弟子との席は、間に一丈の餘地を容れるといふは古からの禮法である。其の禮法も、兎角、煩はしいので罷めにした。凡そ魏晉の間は、士大夫の風が、清談を尚び、曠達を慕ひ、名敎や吏事を俗の事となして之を卑しんだのである。言ひ換へれば、うるさい俗事を脫して世外に談笑し、太古義皇上の人となつたのである。さて河洪も忽ち已に過ぎ去つて、紅塵なく、水の色は綠にして心地よく、酒を釀すことも出來る。君よ、此の塵外の樂を輕んじてはならない。此の樂は清くして且つ束縛がない。

次韻答邦直子由五首　韻に次して邦直・子由に答ふ　五首

簿書顚倒夢魂間。　簿書顚倒す夢魂の間、
知我疎慵肯見原。【二】　知る我疎慵肯て原さるるを。
閒作閉門僧舍冷。【三】　閒作門を閉ぢて僧舍冷かに、

【字解】【一】疎慵　疎懶といふに同じ。白樂天の詩に、世名檢束爲二朝士一、心性疎慵是野夫。【二】見原　原は宥す意。晉書、潘岳傳に、會二韶原之一。原宥と熟す、蔡邕の文に、屢見二原宥一、仰愧二先臣一、傷レ肌入レ骨。【三】閒作　班固、兩都賦序に、董仲舒・蕭望之等、時時間作。謝靈運の詩に、臥レ病惜二暇隙一、論レ儀時閒作。【四】僧舍冷　歎二塵物之囂膏一詩に、惟我出レ塵意、賞愛似二僧家一。【五】忘レ懷　忘懷と同じ。

臥聞吹レ枕海濤喧。　臥して聞く枕を吹く海濤の喧すしきを。
忘レ懷杯酒逢レ人共。【六】　懷を忘れ杯酒人に逢うて共にし、
引レ睡文書信レ手翻。【七】　睡を引いて文書手に信せて翻へる。
欲レ吐二狂言一喙三尺。【八】　狂言を吐かんと欲して喙三尺、
怕二君嗔一我却須レ呑。【九】　君が我を嗔るを怕れ却つて須らく呑む。「べし。」

【六】杯酒逢レ人共　白樂天の閒游即事詩に、逢レ人共二杯酒一。【七】引レ睡　白樂天の詩に、臥レ枕一卷書、起管一杯酒、書辨レ引二昏睡一、酒用扶二衰朽一。同じく晩庭逐涼詩に、引レ睡臥看レ書。【八】狂言　莊子に、無レ所二予之狂言一。杜牧之の詩に、忽發二狂言一驚二滿坐一。【九】喙三尺　莊子、徐無鬼篇に、郢人有二堊慢三尺一。唐、馬異は虛仝雯を結ぶ詩に答へて、與レ君傾レ首大眼阻、喙長三尺不レ得レ語と。盧仝の詩は、同不レ同異不レ異、是謂二大同而小異一。朝野僉載に、陸餘慶爲二洛州一、善斷レ事、而譴二於判決一、時嘲レ之曰、說レ事喙長三尺、判レ事手重五斤。【一〇】却須レ呑　東坡の自注に、邦直屢以レ此見レ戒。杜牧之の詩に、擬レ頭難レ欲レ吐、到レ口卻成レ呑。

【題義】此詩は熙寧十年六月の作である。李清臣が部を按じて徐州に來り、蘇子由を邀へ、南城亭上に對臥して唱和した。此五首は其の諸詩に次韻したのである。王文誥いふ、李清臣、小人之尤者、自後爲二胡越一、不二復合一矣と。

【詩意】夢魂は塵を出で、又、塵に入つて、簿書も夢魂の間に顚倒して居る。是れ我が閑居である。白樂天の詩に、心性疎慵是れ野夫とあるが、簿書を顚倒して居つても、是れ野夫の疎慵だとして、我

は宥されるであらう。かくて我は門を閉ぢて僧舎冷かに、時時輞疆を弄して閒作を試みる。臥して聞くと、海濤は、枕を吹いて喧しい。閒遊の我は眞俗の中に在つて、憶を忘れ、人に逢うて杯酒を共にする。又、睡を引いて、臥して書を看るも、文書は手に信せて翻へる。狂言を吐かんと欲して喙三尺、而も口に到つて却つて呑むのは、君が我が狂言を嘱るを怕れるからである。（劉辰翁いふ、以レ我爲二輕率一と。）

城南短李好二交遊一。箕踞狂歌不二自由一。尊レ主庇レ民君有レ道。樂レ天知レ命我無レ憂。醉呼妙舞留連夜。閒作清詩斷送秋。灩灩使君殊不レ俗。樽前容レ我攬須不。

城南の短李交遊を好み、箕踞狂歌自由ならず。主を尊び民を庇ふ君道あり、天を樂み命を知る我憂なし。醉呼妙舞留連の夜、閒作清詩斷送の秋。灩灩使君殊に俗ならず、樽前我を容れて須を攬るや不や。

【字解】【一】交遊　史記に、嗣公友交遊、久不二相見一、卒然相遇、歡然道レ故。【二】箕踞　兩足を投げ出して坐る。史記、刺客傳に、倚レ柱而笑、箕踞以罵。劉伶の酒德頌に、奮レ髯箕踞。【三】狂歌　杜子美の詩に、乾レ酒須二徹歌一狂歌能二遮朝一。【四】不二自由一　一本に縱自由に作る。【五】尊レ主庇レ民云云　唐書に、尊レ主庇レ民者、讓レ時也。王文路いふ、邦直非尊レ主庇レ民者二類下句一、似レ有二謙意一。【六】樂レ天知レ命　列子、仲尼篇に、顔回曰、昔聞二之夫子一曰、樂レ天知レ命、故不レ憂。【七】醉呼　韓愈が鄭羣墓誌に、飲レ酒輒醉、醉輒呼、歌詩相和、或笑或哭、或嘲或罵、或自嘲詠、或嘲二其妻子一、或嘲二其兄弟一、或嘲二其賓客一、或嘲二其僕一、或嘲二其鄰里一、或嘲二其鄕人一、或嘲二其長老一。【八】妙舞　謝朓の詩に、清歌留二上客一、妙舞送レ將レ歸。杜子美の詩に、妙舞遶二溫夜一、未レ休。東坡の自注にいふ、邦直家中、舞者甚多と。【九】留連夜　淮南子に、愚夫豐歲、皆有二留連之心一。杜子美の詩に、留連春夜舞。【一〇】閒作　謝靈運の詩に、翰墨時閒作。前詩に出づ。【一一】斷送　送り過す意。韓退之の詩に、斷二送一生一唯有レ酒。白樂天の詩に、斷送春歸無二覓處一。【一二】灩灩使君　文選、孔雅圭の北山移文に、灩灩出レ塵之想。使君は刺史をいふ。前に屢〻注す。【一三】殊不レ俗　魏志、公孫度傳の注に、舜而不レ俗。

【詩意】城南の短軀李邦直は、交際好きであるが、兩足を投げ出して坐つたり、狂歌したりすることは自由に出來ない。又、主を尊び、民を庇ふことは、李君に道がある。（諷意がある。君は邦直を指す。邦直は主を尊び民を庇ふものではない。）天を樂み命を知つて居るから、我には心配がない。李邦直の家には歌舞の人が多いので、醉歌し妙舞して、日夜留連する。又、閒作の清詩は、留連の光景を寫して、涼秋を送り過す。そして灩灩たる使君は、殊に俗でないが、果して樽前に我を容れて須を攬る雅懷があるか。

【餘錄】烏臺の詩案に、李邦直、原唱一首云、東來嘗恨少二朋游一、得レ遇高人蘇子由一、已誓不レ言天下事、相看俱遣世間憂、新詩定及三千首、曩別幾成二十秋、南省都臺風雪後、問君還記二劇談一不。欒城集の和二李邦直見レ邀、終日對二臥南城亭上一二首に、一徑坡陀草木間、孤亭勝絕俯二川原一、青天圖畫四山合、白晝雷霆百步喧、煙柳蕭條漁市遠、汀洲蒼莽白鷗翻、客舟何事來恩草、逆上波濤吐復呑。東來無事得二邀遊一、奉二使清閒一亦自由、撥二棄簿書一成二一飽一、留連笑語失二千憂一、舊書半卷都如レ夢、清簟橫眠似レ欲レ秋、

閉說鄰朝今不レ久、慶埃還有二此亭一不。

老弟東來殊寂寞、　老弟東より来つて殊に寂寞、
故人留飲慰二酸寒一。　故人留飲して酸寒を慰む。
草荒二城角一開二新徑一。　草は城角に荒れて新徑を開き、
雨入二河洪一失二舊灘一。　雨は河洪に入つて舊灘を失ふ。
車馬追陪跡未レ掃。　車馬追陪して跡未だ掃はず、
唱酬往復字應レ漫。　唱酬往復して字應に漫すべし。
此詩更欲レ憑二君改一。　此詩更に君に憑つて改めんと欲す、
待與二江南子布一看。　待つて江南の子布に與へて看しめん。

【字解】【一】寂寞　さびしく靜かなるをいふ。楚辭、劉向の九歎に、幽空虛以寂寞。淮南子に、寂寞者、音之主也。【二】留飲　說苑に、高祖使レ陸賈賜二尉佗印一爲二南越王一、陸生至、尉佗大悅、留飲數月。【三】酸寒　韓退之の薦レ士詩に、酸寒課閑試、五十猶何奮。陸游の詩に、野寺秋陰更蕭瑟、書生老瘦轉酸寒。【四】城角　水經注に、淮・淝之會、卽城角也。【五】追陪　陪從といふに同じ。韓退之の詩に、終日相追陪。【六】憑　依レ據レ勢　後漢、杜密傳に、劉勝自二蜀郡一告二陽翟里一、開レ門掃レ軌、無レ所二干及一。注にいふ、軌、車迹也。【七】唱酬　詩文を互にやり取りする。宋史、沈遘傳に、遘長二於歌詩一、曾鞏・蘇軾・黃庭堅、皆與唱酬相往來。【八】字應レ漫　後漢、酈衡傳に、初逮二細川一、陰懷二一劍一、既無レ所レ之、遇レ亟、劍字漫滅。【九】與二江南子布一看　吳志に、張昭、字子布の注に、典略云、余義聞、劉荊州嘗自作レ書、欲レ與二孫伯符一（孫策の字）以示二關正平一（關衡の字）正平嘗レ之言、如レ是、貧レ欲二孫策帳下見覆一之邪、時レ使二張子布見一乎、如二正平言一、以爲二子布之才高一乎。

【詩意】老弟の子由は、折角、東から來たが、何も持て爲すこともなく、殊に寂寞を感ずる。幸に舊い友達と留飲することが出來たので、貧しくて苦しい此身を慰める。淮水と泗水と會する處、草が荒れて、道筋も分らなくなつたから、新しい徑を開いた。又、雨は河洪に入つて水嵩が增し、舊の灘も知れなくなつた。車馬が後につき從つて來たが、車迹も掃はない。詩文を唱酬して、往復の際、文字も應に漫滅するであらう。（漫滅の二字の出處をいふと、灌の酈衡、字は正平は、建安の初、許下に遊び、陰に一劍を懷にしたが、既にして適く所もなく、劍字が漫滅するに至つた。或人が之に問うて曰く、何ぞ陳長文・司馬伯達に從はないかと。對へて曰く、卿は我をして屠沽兒輩に從はしめんと欲するかと。又、問ふ、當今の世、誰か賢なるかと。對へていふ、大兒は孔文擧、小兒は楊德祖と。文擧は深く其の才を愛し、上疏して之を薦めたといふことである。）酈衡は文を作るに、筆を援れば立ろに成りて、文に點を加へない。劉荊州は、嘗て自ら書を作り、孫伯符に與へようとし、以て衡に示す。衡はいふ、是の如きは孫策帳下の兒をして之を讀ましめんとするのか、將、張子布をして之を見しめんとするのかと。今、此詩も更に君から添削して貰ひ、之を江南の張子布に看しめようかと思ふ。（紀昀いふ、末句指二邦直一と。）

君雖爲我此遲留。　君我が爲に此に遲留すと雖も、

【字解】【一】遲留　韓退之の賦

別後淒涼我已憂。（二）別後淒涼我已に憂ふ。
不レ見便同二千里遠一。（一）見ざれば便ち千里の遠きに同じ、
退歸終作二十年游一。退歸終に十年の游を作す。
恨無二揚子一區宅一。（一）恨むらくは揚子一區の宅なきことを、
懶レ臥元龍百尺樓。（二）懶し元龍百尺の樓。
聞道鵷鸞滿二臺閣一。（三）聞道らく鵷鸞臺閣に滿つと、
網羅應レ不レ到二沙鷗一。（四）網羅應に沙鷗に到らざるべし。

【詩意】君が我が爲に此地に遲留してくれても、別後の淒涼が思ひ遣られて、我は已に之を憂へるのである。渭北春天の樹、江東日暮の雲、故人相思の情は深いから、相見ざれば、千里の遠きと同じである。それで、故山に退き歸つて、終に十年樹木の游をなさうとする。併し殘念なことには、我に揚子一區の宅地がないことである。三國の許汜は劉備に謂ふ、陳元龍は湖海の士で、豪氣が除けない。昔、亂に遭つて、下邳で、元龍に會つたとき、元龍は暫く言葉も交へなく、自ら大牀に上つて、我を下牀に臥せしめたと。劉備曰く、君は國士の名があつて、而も田を求め舍を問ひ、其の言葉にも採るべきものがないから、元龍に嫌はれたのである。もし、我であつたなら、百尺樓上に臥し、君をば地に臥せしめた筈。何ぞ但に上下牀の間ばかりではないと。田を求め舍を問ふは、劉備の取らない所である。併し揚子の宅がなければ、臥すに懶し元龍百尺の樓である。（宋、邵博の聞見後錄に、百尺樓者、劉備、非二元龍語一也と。）聞けば、鵷や鸞の立派な鳥が臺閣に滿ちて居るといふことであるから、網羅は我等のやうな沙鷗には到らないであらう。（紀昀いふ、此却蘊藉と。）唐宋詩醇に、自寫二疎慵一、潦倒令二人意惻一と見ゆ。）

【餘錄】以上の二首は、子由が原韻に答へたのである。欒城集、次二韻邦直見答一首にいふ、眞能一醉逃二煩暑一、定勝三杯禦二臃塞一、自有二詩書一供二永日一、莫レ將二絲竹一亂二風灘一、舞雩何處歸二春暮一、叩角誰人怨二夜漫一、聞道丹砂近有レ術、鐺鉄稱レ火共レ君看。烏臺詩案、李邦直の一首にいふ、匙飯盤蔬强少留、相逢何物可レ消レ憂、緣二君未一得二酒中趣一、與レ我漫爲二方外遊一、草亂不レ容移二鳥迹一、山雄全欲レ逼二城樓一、濟レ時異日須二公等一、莫レ狎二鷗鷺一海上鷗。

に、僧二郭邪一而掩レ扉、空庭レ日以遲留。杜牧之の詩に、青苔滿二堦砌一、白鳥故遲留。【二】淒涼　李太白の詩に、懷レ歸路綿邈、覺二古情淒涼一。【三】不レ見便同二千里一　詩、王風に、一日不レ見、如二三秋一兮。東坡の詩に、望眼儻千里遠、白雲深處是吾鄉。【四】揚子云云　王倫の詩に、由來揚子宅、寂寞閉二丹丘一。漢書、揚雄傳に、揚雄、成都人也、其先楊季、處二岷山之陽一、揚子云云　王倫の詩に、由來揚子宅、寂寞閉二丹丘一。漢書、揚雄傳に、揚雄、成都人也、其先楊季、處二岷山之陽一、

日レ鄰、有二田一廛一、有二宅一區一。左太沖が詩に、寂寂揚雄宅、今草玄亭餘迹尙存と。【五】元龍百尺樓　三國志に、陳登、字元龍、許汜與二劉備一在二下邳一、汜見二元龍一、無二客主之意一、久不二相與語一、自上二大牀一、使二客臥下牀一。劉備曰、今、天下大亂、所レ望レ君、憂レ國忘レ家、有二救レ世之意一、君有二國士之名一、而求レ田問レ舍、言無レ可レ採、是元龍所レ諛也、何緣當二與レ君語一。如レ我、欲レ臥二百尺樓上一、臥レ君於地上、何但上下牀之間邪。【六】鵷鸞　鵷は鳳凰の一種、劉禹錫の和二蘇十郎中一詩に、左掖鵷鸞到二室中一。【七】臺閣　臺省といふに同じ。蔡邕、陳レ政破レ閹、擧二網羅一、疏二羣賢一、入二臺閣一。【八】網羅　後漢、儒林傳に、網二羅遺逸一、博存二載籍一。【九】

五斗塵勞尚足留、閉關却欲治幽憂。
羞爲毛遂囊中穎、未許朱雲地下遊。
無事會須成好飲、思歸時欲賦登樓。
羨君幕府如僧舍、日向城南看浴鷗。

【詩意】たとひ五斗米薄俸の爲に煩はされて苦勞をなしても、尚ほ留まるに足る。（必ずしも印綬を解いて、職を去るには及ばない。）ただ關門を閉ぢて、鬱憂の病を療治しようとした。秦が邯鄲を圍んだ時、平原君は救を楚に求めんとし、同行のものを門下の客に取つて、十九人を得た。毛遂は自ら薦めて其の員に備はつていふやう、遂をして蚤く囊中に處るを得しめば、穎を脫して出でんものをと。毛遂が所謂囊中の穎となつて、外に見はれるのを羞ぢるも、朱雲が所謂龍逢・比干に從つて地下に遊ぶことは許さない。今は別に事が無いから、宜しく心地よく酒を飲むべきである。又、故郷に歸りたいからも、時に王仲宣が登樓の賦を口吟しようとも思ふ。羨ましいのは、君の仕へて居る幕府には面倒な事もなくて、僧舍のやうに靜なことである。そして日に城南に向つて浴鷗を看て居られることである。（紀昀いふ、三四二句、却有レ體と。又いふ、語雖二稍露一、而未レ至二激訐一と。）

【餘錄】烏臺詩案、李清臣と干涉の事は、此の五斗塵勞尚足レ留の一首である。朱雲、漢成帝時、乞レ斬二張禹一、成帝欲レ誅レ之、雲曰、臣得下從二龍逢・比干一遊上足矣、龍逢、夏桀臣、比干、商紂臣、皆由レ諫而死、軾爲下屢言二新法不便一、不レ蒙二施行一、以二朱雲一自比、意至明之世、無二誅戮之事一、故言、軾未レ許下與二朱雲一地下遊上、王粲、是魏武時人、因二天下亂離一、故粲在二荊州一依託、作二登樓賦一、賦中有レ懷レ鄉思レ歸之意一、軾爲下屢言二新法不便一、不レ蒙二施行一、有レ罷レ言懷レ鄉之意一、亦欲レ作二此賦一也。又、施注に東坡詩案云、李清臣答二軾弟轍一詩二首、批云、可レ求二子瞻和一、軾卻作二詩二首一、和二清臣一、其內一首首句云、五斗塵勞尚足レ留、集中失レ載二此詩一、今附二於後一。又云、軾又用二弟轍韻一與二李清臣一六首、蓋東坡次韻、通爲二八首一、集中止有二四首一、今收二詩案一首一、猶逸二其三一也と見ゆ。王文誥いふ、施注所レ收詩案一首、卽五斗塵勞一章、在二欒城集一、乃次二韻邦直子由五首一之第二首一、而查注以爲下子由鷗字韻已逸、以二公詩一充上數者、以レ詩論、當二

【字解】【一】五斗　五斗米ないふ。宋書、陶潛傳に、我不レ能下爲二五斗米一折レ腰向中鄉里小人上邪と。【二】閉關　關を閉ぢて人に見えないこと。【三】羞爲毛遂囊中穎　羞づ毛遂が囊中の穎となるを、毛遂は平原君の門客。史記、平原君傳に、秦圍二邯鄲一、平原君、求二合從於楚一、取二於門下客一得二十九人一、有二毛遂者一、自薦レ備レ員曰、使二遂蚤得レ處二囊中一、乃脫レ穎而出。【四】未許朱雲地下遊　未だ許さず朱雲の地下に遊ぶを。朱雲は漢の人。漢書、朱雲傳に、臣願賜二尚方斬馬劍一、斷二佞臣一人一、以厲二其餘一、上問曰、誰也、對曰、安昌侯張禹、上大怒、御史將レ曳下、攀二殿檻一檻折、雲呼曰、得下從二龍逢・比干一遊上於地下一足矣。【五】無事會須成好飲　事無し會ず須らく好飲を成すべし、會は適。【六】思歸時欲賦登樓　歸るを思ふ時に登樓を賦せんと欲す。魏の王粲、荊州に客たり、登樓賦を作る。【七】羨君幕府如僧舍　羨む君が幕府僧舍の如く、幕府初開、軍公辟命。【八】日向城南看浴鷗　日に城南に向つて浴鷗を看る。杜子美の詩に、鷺浴白二晴川一つといふに同じ。莊子、讓王篇に、我適有二憂色一之病一方且レ治レ之。【九】毛遂囊中穎　史記、平原君傳に、秦圍二邯鄲一、平原君、求二合從於楚一、取二於門下客一得二十九人一、有二毛遂者一、自薦レ備レ員曰、使二遂蚤得レ處二囊中一、乃脫レ穎而出。【十】朱雲地下遊　漢、朱雲傳に、臣願賜二尚方斬馬劍一、斷二佞臣一人一、以厲二其餘一、上問曰、誰也、對曰、安昌侯張禹、上大怒、御史將レ曳下、攀二殿檻一檻折、雲呼曰、得下從二龍逢・比干一遊上於地下一足矣。【十一】思歸時欲賦登樓　歸るを思ふ時に登樓を賦せんと欲す。魏の王粲、荊州に客たり、登樓賦を作る。【十二】羨君幕府如僧舍　羨む君が幕府僧舍の如く、幕府初開、軍公辟命。【十三】浴鷗　杜子美の詩に、鷺浴白二晴川一つといふに同じ。

【字解】【一】五斗　五斗米ないふ。宋書、陶潛傳に、我不レ能下爲二五斗米一折レ腰向中鄉里小人上邪と。【二】閉關　關を閉ぢて人に見えないこと。【三】羞爲毛遂囊中穎　羞づ毛遂が囊中の穎となるを、毛遂は平原君の門客。史記、平原君傳に、秦圍二邯鄲一、平原君、求二合從於楚一、取二於門下客一得二十九人一、有二毛遂者一、自薦レ備レ員曰、使二遂蚤得レ處二囊中一、乃脫レ穎而出。【四】未許朱雲地下遊　未だ許さず朱雲の地下に遊ぶを。朱雲は漢の人。漢書、朱雲傳に、臣願賜二尚方斬馬劍一、斷二佞臣一人一、以厲二其餘一、上問曰、誰也、對曰、安昌侯張禹、上大怒、御史將レ曳下、攀二殿檻一檻折、雲呼曰、得下從二龍逢・比干一遊上於地下一足矣。【五】無事會須成好飲　事無し會ず須らく好飲を成すべし、會は適。【六】思歸時欲賦登樓　歸るを思ふ時に登樓を賦せんと欲す。魏の王粲、荊州に客たり、登樓賦を作る。【七】羨君幕府如僧舍　羨む君が幕府僧舍の如く、幕府初開、軍公辟命。【八】日向城南看浴鷗　日に城南に向つて浴鷗を看る。杜子美の詩に、鷺浴白二晴川一つといふに同じ。莊子、讓王篇に、我適有二憂色一之病一方且レ治レ之。【九】毛遂囊中穎　史記、平原君傳に、秦圍二邯鄲一、平原君、求二合從於楚一、取二於門下客一得二十九人一、有二毛遂者一、自薦レ備レ員曰、使二遂蚤得レ處二囊中一、乃脫レ穎而出。【十】朱雲地下遊　漢、朱雲傳に、臣願賜二尚方斬馬劍一、斷二佞臣一人一、以厲二其餘一、上問曰、誰也、對曰、安昌侯張禹、上大怒、御史將レ曳下、攀二殿檻一檻折、雲呼曰、得下從二龍逢・比干一遊上於地下一足矣。【十一】思歸時欲賦登樓　歸るを思ふ時に登樓を賦せんと欲す。魏の王粲、荊州に客たり、登樓賦を作る。【十二】羨君幕府如僧舍　羨む君が幕府僧舍の如く、幕府初開、軍公辟命。【十三】浴鷗　杜子美の詩に、鷺浴白二晴川一つ

是公作」と。

司馬君實獨樂園

青山在屋上。流水在屋下。
中有五畝園。花竹秀而野。
花香襲杖履。竹色侵杯斝。
樽酒樂餘春。棋局消長夏。
洛陽古多士。風俗猶爾雅。
先生臥不出。冠蓋傾洛社。
雖云與衆樂。中有獨樂者。
才全德不形。所貴知我寡。
先生獨何事。四海望陶冶。
兒童誦君實。走卒知司馬。
持此欲安歸。造物不我捨。

【字解】【一】司馬君實　司馬光、字は君實。神宗の朝、新法の行はるゝや、首として其の害を言ひ、身を以て之を爭ふ。用ひられなく、閑居十五年。元祐元年、洛陽に家し、田二十畝を買ひ、園いて園となし、命けて獨樂といふ。爾來、口を絕つて時事を論ぜず。天下、以て相となさんことを望む。哲宗位に卽き、政を爲すこと一年、疾病之に乘じたが、施設は凜凜として治に向つた。元祐元年、位に薨ず。年六十八。太師溫國公を贈らる。【二】獨樂園　宋の馬永卿の元城語錄に、司馬溫公既居レ洛、於二國子監之側一得二故僧地一、創二獨樂園一。園有二讀書堂一。堂後有二弄琴軒一。軒後有二釣魚庵一。庵後有二種竹圃一。圃後有二採藥徑一。徑盡有二百花塢一。塢中有二浴德池一。池北曰二見山臺一。臺東曰二讀易齋一。齋東曰二虛白亭一。亭東曰二客位一。客位東曰二臨高臺一。臺下曰二種藥畦一。畦東曰二秀岩一。岩下曰二採實亭一。亭東曰二樂春塢一。塢東曰二歸老庵一。庵東曰二見天地之心之軒一。軒東曰二弄水堂一。堂東曰二會客位一。客位東曰二東屋一。東屋之南曰二藥欄一。欄南曰二種竹一。竹南曰二斯遠堂一。堂南曰二臨水亭一。亭南曰二釣魚臺一。臺南曰二獨樂園一。園有二四景一。曰二讀書堂之後軒一。曰二弄琴軒之後庵一。曰二臨高臺之後亭一。曰二斯遠堂之後亭一。獨樂園の詩多く、花庵に乘牛花を植ゑられたこと詩に見ゆ。故舊地は、舊宅。【三】青山在二屋上一云云　石季倫の思歸引序に、古木參二於高株一、流水周二舍下一。楚辭、屈原、九歌に、烏次兮屋上、水周兮堂下。柳子厚、慈屋縣の食堂記に、高山在レ前、流水在レ下、可二以仰一、可二以宴樂一。とある。慈屋は扶風縣である。孟浩然の符公闕若の詩に、綠篠夾二路旁一、清泉流二舍下一。【四】五畝　司馬法に、六尺爲レ步、步百爲レ畝。百樂天の池上篇に、十畝之宅、五畝之園。【五】舉　音莒、玉の臂。【六】棋局消二長夏一　唐、張固の幽閑鼓吹に、令狐相公遣二李遠一爲二杭州一。宜宗曰、聞李遠詩云、長日惟消一局棋。豈可レ謂レ郡。【七】洛陽古多士　詩、文王の什に、濟濟多士、文王以寧。【八】爾レ雅　儒雅に通き意。爾は近なり、雅は正なり。一說に、麗雅にして閑雅の義と。【九】冠蓋　冠を戴き蓋を翳す貴官の人。文選、西都の賦に、冠蓋如レ雲、七相五公。【一〇】傾二洛社一　溫公は洛に在りて、眞率會といふを開き、名士多く相會すといふ。天眞にして飾らず、脫粟一飯、酒數行、物薄くして情厚い會合。又、富弼・司馬溫公等老人の會に洛陽耆英會といふがある。これは、白居易が九老會の故事を用ひたものである。唐詩紀事に、白居易致レ仕居レ洛、愛二香山之勝一、與二僧如滿一、結二社於此一。【一一】與レ衆樂　孟子、梁惠王篇に、與レ衆樂樂云云。【一二】才全德不レ形　莊子の全語、德充符に、才全而德不レ形者也。【一三】所レ貴知レ我寡　老子七十章に、知レ我者希、則我貴矣、是以聖人被レ褐懷レ玉。【一四】陶冶　陶は瓦器を作る。冶は鑛を鑄て器を作る。二字を借りて、善政を施し、天下を和化するをいふ。淮南子に、陶二冶萬物一。【一五】兒童誦二君實一云云　二句、姓字を以て對するは、唐賢未だ有

名聲逐吾輩。此病天所賜。撫掌笑先生。年來效瘖啞。

【字解】【一】司馬君實　司馬光、字は君實。神宗の朝、新法の行はるゝや、首として其の害を言ひ、身を以て之を爭ふ。用ひられなく、閑居十五年。元祐元年、洛陽に家し、田二十畝を買ひ、園いて園となし、命けて獨樂といふ。爾來、口を絕つて時事を論ぜず。天下、以て相となさんことを望む。哲宗位に卽き、政を爲すこと一年、疾病之に乘じたが、施設は凜凜として治に向つた。元祐元年、位に薨ず。年六十八。太師溫國公を贈らる。【二】獨樂園　宋の馬永卿の元城語錄に、司馬溫公既居レ洛、於二國子監之側一得二故僧地一、創二獨樂園一。園有二讀書堂一。堂後有二弄琴軒一。軒後有二釣魚庵一。庵後有二種竹圃一。圃後有二採藥徑一。徑盡有二百花塢一。塢中有二浴德池一。池北曰二見山臺一。臺東曰二讀易齋一。齋東曰二虛白亭一。亭東曰二客位一。客位東曰二臨高臺一。臺下曰二種藥畦一。畦東曰二秀岩一。岩下曰二採實亭一。亭東曰二樂春塢一。塢東曰二歸老庵一。庵東曰二見天地之心之軒一。軒東曰二弄水堂一。堂東曰二會客位一。客位東曰二東屋一。東屋之南曰二藥欄一。欄南曰二種竹一。竹南曰二斯遠堂一。堂南曰二臨水亭一。亭南曰二釣魚臺一。臺南曰二獨樂園一。園有二四景一。曰二讀書堂之後軒一。曰二弄琴軒之後庵一。曰二臨高臺之後亭一。曰二斯遠堂之後亭一。獨樂園の詩多く、花庵に乘牛花を植ゑられたこと詩に見ゆ。故舊地は、舊宅。【三】青山在二屋上一云云　石季倫の思歸引序に、古木參二於高株一、流水周二舍下一。楚辭、屈原、九歌に、烏次兮屋上、水周兮堂下。柳子厚、慈屋縣の食堂記に、高山在レ前、流水在レ下、可二以仰一、可二以宴樂一。とある。慈屋は扶風縣である。孟浩然の符公闕若の詩に、綠篠夾二路旁一、清泉流二舍下一。【四】五畝　司馬法に、六尺爲レ步、步百爲レ畝。百樂天の池上篇に、十畝之宅、五畝之園。【五】舉　音莒、玉の臂。【六】棋局消二長夏一　唐、張固の幽閑鼓吹に、令狐相公遣二李遠一爲二杭州一。宜宗曰、聞李遠詩云、長日惟消一局棋。豈可レ謂レ郡。【七】洛陽古多士　詩、文王の什に、濟濟多士、文王以寧。【八】爾レ雅　儒雅に通き意。爾は近なり、雅は正なり。一說に、麗雅にして閑雅の義と。【九】冠蓋　冠を戴き蓋を翳す貴官の人。文選、西都の賦に、冠蓋如レ雲、七相五公。【一〇】傾二洛社一　溫公は洛に在りて、眞率會といふを開き、名士多く相會すといふ。天眞にして飾らず、脫粟一飯、酒數行、物薄くして情厚い會合。又、富弼・司馬溫公等老人の會に洛陽耆英會といふがある。これは、白居易が九老會の故事を用ひたものである。唐詩紀事に、白居易致レ仕居レ洛、愛二香山之勝一、與二僧如滿一、結二社於此一。【一一】與レ衆樂　孟子、梁惠王篇に、與レ衆樂樂云云。【一二】才全德不レ形　莊子の全語、德充符に、才全而德不レ形者也。【一三】所レ貴知レ我寡　老子七十章に、知レ我者希、則我貴矣、是以聖人被レ褐懷レ玉。【一四】陶冶　陶は瓦器を作る。冶は鑛を鑄て器を作る。二字を借りて、善政を施し、天下を和化するをいふ。淮南子に、陶二冶萬物一。【一五】兒童誦二君實一云云　二句、姓字を以て對するは、唐賢未だ有

らざる所。然れども本なきにあらず。劉越石の詩に、獲麟悲二宣尼一、西狩泣二孔丘一。諸葛孔明の詩に、遊レ好二相如達一、不レ學二長卿慢一。正に此詩の斂ふ所。其他、史傳載する所、萬事不レ理問二伯始一、天下中庸有二胡公一、慨中生レ塵范史雲、釜中生レ魚范萊燕の類の如き、僅指するに勝へない。記昀いふ、兒童二句、乃五文、非レ惠遠用二和如・長卿一總石用二宣尼・孔丘一之比。【一六】持レ此欲二安歸一　持レ此は、此の名望を持ちての意。前漢書に、劉通說二韓信一曰、足下歸レ楚、楚人不レ信、歸レ漢、漢人震恐、足下欲二持レ是安歸一乎。三國志、魏、鍾會傳に、呼二所親一語レ之曰、我自二淮南一以來、晝無二遺策一、四海所二共知一也、我欲二持レ此安歸一乎。【一七】造物　萬物を造り出すものは、天命であるから、天命を指して造物といふ。人が逃れ去らうとしても、天命は逃れしめない。溫公臥して出でなくしても、天命は必當レ用といふ意。【一八】天所レ繫　名の身を離れないことは、老莊思想より觀れば、一種の病である。名譽の病に侵されるは、天罰を受けて刑された赤衣の人といふべきである。古、刑には繫衣を衣す。所レ繫は所レ罹といふ意。【一九】瘖啞　おし。舊唐書、太宗紀に、一歲再赦、奸人喑啞。

【題義】此詩は熙寧十年五月六日、徐州で作つた。仙溪紀年錄に見えて居る。東坡が、溫公に與へた手簡に、久しく公の新文を見なかつたのに、忽ち獨樂園記を領す、誦味して已まない。輒ち自ら揆らず、一詩を作る、聊か一笑を發せんのみとある。又、溫公自作の記に、若し夫れ鷗鵬は林に集ふも、一枝に過ぎず。偃鼠は河に飲むも、滿腹に過ぎず。各、其の分を盡くして之に安んず。これ乃ち迂叟の樂しむ所なり。迂叟はじめ、洛陽に家すること五年にして、園を爲り、其の中に堂を爲り、書五千卷を聚め、之を命じて讀書堂といふ。迂叟、平生多く堂中に處りて書を讀む。志倦み體疲れれば、竿を投じて魚を取り、裡を執つて藥を采り、渠を決して花に灌ぎ、斧を操つて竹を剖り、熱を濯うて水に盥し、高きに臨んで目を縱にし、逍遙徜徉、惟、意の適する所、明月時に至り、淸風自ら來る。行くも牽かるる所なく、止まるも扼せらるる所なし。耳目肺腸、卷いて己の有と爲す、踽踽焉たり、洋洋焉たり。知らず天壤の間、復、何の樂あつて此れに代ふべけんや。因りて合せて之を命じて獨樂といふと見えて居る。

【詩意】青山は高く聳えて屋の上を覆ひ、流水は淸く流れて屋の下を行く。（青山以下の四句は、園の全景を概說す。便ち以て圖畫に入るべし。紀昀いふ、直起脫酒と。）其の青山流水の中に、五畝ばかりの園があつて、園中には花竹秀でて、原野の趣がある。（花香二句は、前の花竹の二字を分けて承く。）花の香は、遊人の杖や、履物に薰ずる。（襲は因る意である。）又、竹の色は酒盃を侵して翠にうつる。客が來ると、樽中の酒を酌みて、殘春の美景を樂み、棊局を圍みて、夏日の長きを消遣し、常に從容として園中の樂みをする。（樽酒の二句は、春と夏との樂事を敍する。）洛陽は古より實哲の士が多い。其の遺風で、今に於ても、士人の風俗が猶は儒雅に遒い。先生は此の洛陽に、長く閑臥して外に出でないけれども、冠蓋の貴官名士が聚まつて來ることは、洛社を傾けるばかりである。（從遊の士多きを敍す。）先生は王安石と政治上の意見が合はなく、洛に歸つて十五年、口を絕つて、國事を論じないから、臥不レ出といつたのである。さて客を招き、友を迎へ、酒を酌み、棋を圍んで、衆と共に園中の景を樂しむものの、其の樂は、衆人の知り得ない所、そして先生の獨り悅ぶ所であるから、中有二獨樂者一と言つたのである。才が內に全うして、德が外に形はれないときは、外昧くして人が窺ひ易くないから、我を知るもの希である。君子の道は、內、已に足つて、外に形は

れないのを貴ぶ。故に所レ貴は、人の我を知ることが寡きに在る。先生は全才の君子で、其の德が外にあらはれないから、先生に貴ぶ所は、先生を識るもの稀なるに在る。識る者寡き等であるのに、皂童走卒までも先生を知り、四海の民、皆、先生の宰相となられて、天下を平治されるやうにと望まないものはない。かかる德望の歸した人であるから、何時までも、引籠つて居ることは出來ない。早晩、宰相とならねばならぬ。故に先生獨り何事ぞと咎めたのである。先生には此の名望を持して安くに歸らうと欲するか。造物の神は貴方を捨てないで必ず起し用ひるであらうから、到底逃れ歸ることは出來ない。（我とは溫公を指す）たとひ、世を逃れようとしても、名聲の此身を離れないことは、莊子の所謂影を畏れて日中に走れば、影も亦隨つて疾く走ると同じである。一體、名譽といふものは、大悟徹底したものから觀ると、身の邪魔物で、一種の病といふべきである。言ひ替へれば、罪を天に得たものであるから、之を懲さんが爲に赭い衣服を著せるのである。今、先生も、此の名譽の病に罹つて、罪人として赭い衣を著せられて居る。如何に先生でも、天の譴を息めることは出來ないであらう。卽ち宰相となつて、天下の爲に活動しなければならないと、老莊の思想を以て厭れたのである。（吾輩の二字も溫公を指す。）先生は口を絕つて、時政の得失を言はないで、瘖啞の如くなつて居られる、卽ち莊子の所謂不具の人となつて、獨樂を全うせんと欲して居られる。併し、既に名譽の病に取り付かれた以上は、致し方がない。是非、一度は宰相となられて、天下を陶冶せられよ。赭い衣を著せられて、一はたらきせられよ。此時、王安石は宰相として、新法を行ひ、呂惠卿の徒、權を專にして、政を誤る。それで四海の人は、頷を引いて、先生の陶冶を望む。これ當に出でて政を改め民を救ふべき秋である。故に掌を撫して先生の年來瘖啞に效つて口を箝して居られるのを笑ふ譯である。かく東坡が溫公の出でないのを非笑せるは、要するに時の宰相の善人でなく、時の新法の不便であるを譏つた譯である。（紀昀いふ、末二句、終是太露と。）

【餘錄】烏臺詩案に、此詩言「四海望二司馬光執一政陶二冶天下一、以譏下見任執政不上得二其人一。又言二兒童走卒、皆知二其姓字一、終當二進用一、緣光曾言二新法不便一、軾亦曾言二新法不便一、既言二終當一進用一、光意亦譏二新法不便一、終用レ光改二變此法一也。又、言二光却瘖然不レ言、意望二光依然上言攻二擊新法一也とある。司馬光の祖先は河內の人、後、陝州夏縣涑水鄉に家す。進士甲科に中る。仁宗は、知諫院事に擢んで、英宗・神宗は翰林學士・御史中丞となす。王介甫、相と爲り、始めて青苗・助役・農田・水利を行ひ、之を新法と謂ふ。光、其の害を言ひ、身を以て之を爭ふ。當時、士大夫の新法の不便を言ふもの、皆、倚つて以て重きを爲す。樞密副使に拜せられしが、言、行はれざるを以て命を受けず。鑄明殿學士に除せられ、出でて永興軍に知たり。力め乞ひて歸る、以て留司御史臺となす。崇福宮に提舉たり。閒居十五年、自ら迂叟と號す。熙事の四年に當り、始めて洛に家す。六年、田二十畝を尊賢坊の北に買ひ、闢いて以て園となす。之を命けて獨樂といふ。王文誥いふ、謂二首言一其害一者誤、當二呂誨首彈一新參、光遇二於資善堂一、苦勸二止之一、且自謂先見不レ及二呂誨一、敢言不レ及二蘇軾一云云と。宋の李格非（字は文叔）が洛陽名園記に、司馬溫公在二洛陽一、自號二迂叟一、謂二其園一曰二獨樂園一、園極卑小、不レ可レ與二它園一班、其曰二讀書

堂ニ者、數十椽屋、澆花亭者益小、弄水種竹軒者、尤小、曰ニ見山臺ニ者、高不レ過ニ尋丈ニ、曰ニ釣魚庵ニ、曰ニ採藥園ニ者、又特結ニ竹杪ニ、蓊蕃蔓草爲レ之爾、溫公自爲ニ之序ニ、諸亭臺詩、顏行ニ於世ニ、所ニ以爲ニ人欣慕ニ者、不レ在ニ於園ニ耳、云云。溫公自ら獨樂園記を撰していふ、中有レ堂曰ニ讀書堂ニ、堂北爲レ沼、沼上有レ廬曰ニ釣魚庵ニ、沼北曰ニ種竹齋ニ、沼東曰ニ采藥圃ニ、圃南爲ニ六欄ニ、欄北曰ニ澆花亭ニ、又於ニ園中ニ築レ臺作レ屋曰ニ見山臺ニ、合而名レ之曰ニ獨樂園ニ一と。宋の王闢之が澠水燕談錄に、司馬文正公、高才全德、大得ニ中外之望ニ、士大夫識與レ不レ識、稱レ之曰ニ君實ニ、下至ニ閭閻耿直匹夫匹婦ニ、莫レ不ニ能道ニ司馬公ニ、身退十餘年、而天下之人、日冀ニ其復用ニ於朝ニ、子瞻獨樂園詩、蓋紀レ實也と見ゆ。

送ニ顏復兼寄ニ王鞏ニ

顏復を送り兼ねて王鞏に寄す

彭城官居冷如レ水。　彭城の官居は冷なること水の如し、
誰從レ我遊顏氏子。　誰か我に從つて遊ぶ顏氏の子。
我衰且病君亦窮。　我衰へ且つ病み君も亦窮す、
袞窮相守正ニ其理ニ一。　袞窮相守つて其理を正す。
胡爲一朝捨レ我去。　胡爲れぞ一朝我を捨てて去り、
輕衫觸レ熱行ニ千里ニ一。　輕衫熱に觸れて千里を行く。

【字解】【一】顏復　字は長遠、魯の人。父、名は太初、字は蘇之。先師宼公四十七世の孫。魯諱先生と號す。東坡、爲に其文に敍す。元祐の初、入つて太常博士となる。【二】王鞏　字は定國、文正公且の孫。能敏公素の子。爲才あつて、詩に長ず。東坡、其詩を稱し、清平豐融、飄然として塵世の香ありと。【三】彭城　古の大彭氏の地、今の江蘇銅山縣治。【四】冷如レ水　白樂天が司馬庾の詩に、官曹冷似レ冰。【五】從レ我遊　漢高帝紀、十一年に、詔曰、有ニ賢從レ我者ニ一吾能尊ニ顯之ニ一。【六】顏氏子　繫辭に、顏氏之子、其殆庶幾乎。【七】捨レ我去　韓退之の贈ニ張籍ニ一詩に、子又捨レ我去、我懷焉所レ寫。【八】輕衫　衫は單衣の短きころも。白樂天の詩に、輕衫細馬春年少、十字津頭一字行。【九】觸レ熱　杜子美の詩に、僧問ニ今何官ニ一觸レ熱向ニ武威ニ一。藝文類聚に、晉、桓曄が伏日詩に、今世慵懶子、觸レ熱到ニ人家ニ一。【一〇】日日新　湯の盤銘に、苟日新、日日新、又日新。【一一】牛行　王鞏の大父文正公牛行街に居りしこと、徐度の却掃紀談に見ゆ。東京夢華錄に、潘樓東街巷、出ニ鵝貨門ニ一、朱家橋、瓦子下橋、人煙市井、不レ下ニ州南以東ニ一牛行街、一

問レ君無ニ乃求レ之與ニ一。　君に問ふ乃ち之を求むるなからんか、
答レ我不レ然聊爾耳。　我に答ふ然らず聊か爾るのみと。
京師萬事日日新。　京師萬事日日に新に、
故人如レ故今有レ幾。　故人の故の如きは今幾かある。
君知ニ牛行相君宅ニ一。　君は牛行相君の宅を知るならん、
扣レ門但覓王居士。　門を扣いて但覓む王居士を。
清詩草聖俱入レ妙。　清詩草聖俱に妙に入り、
別後寄レ我書連レ紙。　別後我に寄せて書は紙を連ぬ。
苦恨相思不ニ相見ニ一。　苦だ恨む相思うて相見ざるを、
約レ我重陽嗅ニ霜蘂ニ一。　我に約す重陽霜蘂を嗅ぐを。
君歸可ニ喚與ニ一俱來ニ一。　君歸らば喚びて與に俱に來るべし、
未レ應ニ指目ニ一進擬ニ一。　未だ應に指目して進擬を妨ぐべからず。
太乙老仙閒不レ出。　太乙老仙閒にして出でず、
踵レ門問レ道今時矣。　門に踵りて道を問ふは今時なり。

因レ行過レ我路幾何。行に因つて我に過ぎる路幾何、
願君推挽加二鞭箠一。願はくは君推挽して鞭箠を加へよ。
吾儕一醉豈易得。吾儕一醉豈易からんや、
買レ羊釀レ酒從レ今始。羊を買ひ酒を釀すは今より始めん。

說レ法、令二其成就一。【一四】入レ妙　法書苑に、衛瓘・傅嘏各異レ躰、展轉不二相見一。【一五】不二相見一　古樂府に、道遠不レ可レ思、宿昔夢見レ之、傳に、鄭安平言三於王精一曰、臣里中有二鴈祿先生一、欲レ道二而以二重陽一謁二公於徐一、故屬二長道一、拉與俱來、然定國過二南京一、竟以レ事不レ至、有レ詩送二梁交一寄レ坡、坡和答、有二花枝不レ共秋蕪帶。楞嚴經に、若諸衆生愛二談名言一、清淨自居、我於二彼前一現二居士身一、而爲書唐書、李玨傳に、文宗語レ玨曰、寶易直勤レ我、凡、宰相過振五取レ三、二取レ一。詩意は王鞏は已に勅停されて、過擬が出來ないからら、徐州に來り遊ぶも、妨げがないといふのである。【一〇】太乙老仙　東坡の自注に、張安道爲二中太一宮使一。王鞏は安道の壻である。日知錄に太乙、北辰神名也、漢立二太乙祠於甘泉泰時一、宋時、尤崇二祀之一、建二東太乙・西太乙・中太乙各祠一、以二太乙飛在二九宮一、每四十餘年一面一徙、所レ臨之地、兵役不レ興、水旱不レ作。【一一】鄽レ門問レ道云云　莊子、達生篇に、有二採侏者一、鄽レ門而訊二子屬慶子一云云。訊は告ぐるなり。子屬慶子、姓は屬、字は慶子、魯の賢人。【一二】推挽　人を推し薦める。左傳、襄公十四年に、祝孫謂二其人一曰、衛君必入、夫二子者、或輓レ之、或推レ之、欲レ無レ入得乎。【一三】釀酒　韓退之の詩に、買レ羊酤レ酒謝二不敏一。

【題義】此詩は熙寧十年六月の作。顏復（字は長道）の闕に赴くを送り、兼ねて王鞏（字は定國）に寄せたのである。紀昀いふ、順レ筆直走、以二波瀾縈繞一、故不レ覺二其滑一。

【詩意】徐州彭城の官居は、冷かなことが水のやうである。此の官居で、我と交り遊ぶは誰であらう、顏長道である。我は衰へ且つ病に臥して居る。君も亦、窮して志を得ないやうである。お互に衰窮を守つて、其の誼を正うして居つたのに、どういふ譯で、忽ち我を棄てて去られるのである。我が懷はまことに窮まりない。君は輕衫を衣て、熱に觸れて千里の遠きに行かるるが、君に問ふ、それは、態と求めてするのであるか。君の我に答へるには、求めたのでない、まあ、さうなつたのであると。顧みれば、京師は萬事が日日に新になつて、故人の舊のままであるものは、今は幾人もない。君は王鞏君の祖父にあたつて居る文正公（相君）の居られた牛行街を御存じでせう。今、其門を叩いて見る。只、王居士を覓めるのみであつて、相君は居ない。王居士は、詩も書も、倶に妙に入つたもので、一別後、我に幾枚もの詩と書とを寄せられた。相思うて居りながら相會ふことの出來ないのが殘念である。王居士は書中で我に約す、九月九日の節句には、共に菊を見ようと。今、君が歸つたら、喚びて與に來られよ。王居士は勒停されて居るから、徐州に來り遊ぶとて、其の進擬を妨げることにはなるまいと思ふ。太乙は北辰神で、四十餘年毎に一たび徙り、臨む所の地は、兵役も興らず、水旱も作らないといふことである。王鞏は岳父張安道は中太乙宮使である。閒にして外に出でないから、門に至つて道を問ふは、今がよい。行くときに我が許に過ぎられよ、路程は幾何もない。君から一つ推擧して貰ひたい。そして鞭箠を加へて欲しい。吾が儕の一醉を得ることは、容易でないから、今より羊を買ひ、酒を釀して用意を致さうと思ふ。

蝎虎　蝎虎

黃雞啄蝎如啄黍。　黃雞の蝎を啄むは黍を啄むが如し、
窗間守宮稱蝎虎。　窗間の守宮は蝎虎と稱す。
闇中繖尾伺飛蟲。　闇中の繖尾は飛蟲を伺ひ、
巧捷功夫在腰膂。　巧捷の功夫は腰膂に在り。
跂跂脈脈善緣壁。　跂跂脈脈善く壁に緣り、
陋質從來誰比數。　陋質從來誰か比數せん。
今年歲旱號蜥蜴。　今年歲旱蜥蜴を號び、
狂走兒童鬧歌舞。　狂走兒童歌舞を鬧がす。
能銜渠水作冰雹。　能く渠水を銜んで冰雹を作し、
便向蛟龍覓雲雨。　便ち蛟龍に向つて雲雨を覓む。
守宮努力搏蒼蠅。　守宮は努力して蒼蠅を搏つ、
明年歲旱當求汝。　明年の歲旱當に汝を求むべし。

【字解】【一】蝎虎　方言に、秦晉西夏、謂二之守宮一、又呼二蝘蜓一、其在二澤中一者、謂二之蜥蜴一、南楚謂二之蛇舅一。【二】守宮　蜥蜴とも壁虎ともいふ。王注に、漢武帝、以二端午日一取二蜥蜴一、置二之器一、飼以二丹砂一、至二明年端午一、搗レ之以點二宮人之臂一、有レ所レ犯、輒消去、以二其驗一於此一、故得二守宮之名一、李賀所謂玉臼秧春紅守宮者是也。【三】巧捷　文選、曹子建の樂府に、連翩擊二鞠旗一、巧捷能萬端。【四】功夫　工夫に同じ。韓愈の詩に、始知名業有二功夫一。【五】腰膂　こしとせぼれ。東坡の文に、老病人二腰膂一。【六】跂跂脈脈　跂跂は蟲の行く貌。脈脈は絕えざる貌。漢書、東方朔傳に、上嘗使二諸家射一レ覆、置二守宮盂下一、射之、皆不レ能レ中、東方朔別レ署布レ卦而對曰、臣以爲レ龍、又無レ角、謂レ之爲レ蛇、又有レ足、跂跂脈脈、善緣レ壁、是非二守宮一、卽蜥蜴。【七】陋質　曹植の賦に、以二才薄之陋質一、奉二君子之清塵一。【八】冰雹　雹は雨冰。禮記、月令に、仲夏行二多令一、則雹凍傷レ穀。【九】蛟龍　三國志、吳、周瑜傳に、上疏云、劉備・關・張、俱在二籠檻一、恐蛟龍得レ雲雨一、終非二池中物一也。【一〇】蒼蠅　歐陽修に憎二蒼蠅一賦あり。後漢書、蜀敏傳に、蒼蠅之飛、不レ過二十步一、自託二驥尾之末一、乃騰二千里之路一。【一一】歲旱當レ求レ汝　楊文公談苑に、魏庠官、晉使二諸家射一レ覆、置二守宮盂下一、射之、皆不レ能レ中、東方朔別レ署布レ卦而對曰、臣以爲レ龍、又無レ角、謂レ之爲レ蛇、又有レ足、跂跂脈脈、善緣レ壁、是非二守宮一、卽蜥蜴十數一置二壺中一、以二樹葉一漬レ水、使下童男女數十衣二青衣一持二柳枝一、周壁呪上、曰、蜥蜴蜥蜴、興レ雲吐レ霧、雨今滂沱、放レ汝歸去。歲旱禱レ之頗有レ驗。

【語義】續通鑑長編によると、熙寧十年三月、內出二蜥蜴祈雨法一、試レ之、果驗、詔附二宰執祈雨法一頒二行之一云云と。此詩は此時の作である。紀昀いふ、寓刺之意與二后山蠅虎詩一略同と。

【詩意】李太白の詩に、黃鷄啄レ黍秋正肥とあるが、黃雞の蝎を啄むは、黍を啄むやうである。守宮は蠅を食ふ所から、蝎虎といふ。倦遊雜記に、熙寧中、久旱、按二古法一、以レ甕貯レ水、插二柳枝一、泛二蜥蜴一、時蜥蜴不レ能二盡得一、往往以二蝎虎一代雫、入レ水卽死云云と見えて居る。（昏沈する蝎虎では、甘雨を得ることが出來ない譯である。）さて蝎虎が闇中に發する繖はよく飛蟲を射る。巧捷と功夫とは、かの腰と脊の處にあるやうに思はれる。蝎虎は跂跂（蟲の行く貌）として行き、脈脈（絕えざる貌）として連つて善く壁に緣るから、壁虎の名を得る。もともと陋質である故に、誰も比べ數へることをしない。（遠ざけて居る。）今年は旱で、蜥蜴を號びて、雨乞をする。兒童は何れも狂走して、歌舞を鬧がして居る。其の應驗があつたと見え、よく渠の水を銜んで冰雹を作し、便ち蛟龍に向つて雲雨を覓める。蛟龍が雲雨を得ば、終に池中の物ではない。（何焯いふ、亦有二諷意一と。）守宮は努力して蒼蠅を搏つが、明年もし歲旱があらば、當に汝を求めて雨乞をしようと思ふ。昔、村民が雨を祈るとき、胡

法を善くする沙門があつて、蜥蜴を甕の中に置いて、童男童女をして青衣を著け、同聲に呪せしめていふ、蜥蜴蜥蜴、雲を興し霧を吐き、雨、今滂沱、汝を放つて歸り去らしむと。旱は忽ち驗があつたといふことである。歲旱の際、特に汝を求める所以である。

子由將赴南都。與余會宿於逍遙堂。作兩絕句。

讀之殆不可爲懷。因和其詩以自解。余觀子由。自少曠達。天資近道。又得至人養生長年之訣。而余亦竊聞其一二。以爲今者宦游相別之日淺。而異時退休相從之日長。既以自解。且以慰子由云

子由將に南都に赴かんとし、余と逍遙堂に會宿し、兩絕句を作る。之を讀むに殆ど懷を爲すべからず。因つて其の詩を和して以て自ら解く。余子由を觀るに、少きより曠達、天資道に近く、又、至人養生長年の訣を得たり。而して余も亦竊に其の一二を聞き、以爲らく今者宦游相別るるの日淺くして、異時退休相從ふの日長し。既に以て自ら解き、且つ以て子由を慰むといふ

別期漸近不堪聞。
風雨蕭蕭已斷魂。
猶勝相逢不相識。
形容變盡語音存。

別期漸く近くして聞くに堪へず、
風雨蕭蕭已に斷魂。
猶勝る相逢うて相識らず、
形容變じ盡して語音存するに。

【字解】【一】將赴南都　宦正赴南都也と。【二】曠達　心が廣くて物に通ずる。晉書、張翰傳に、時人貴其曠達。【三】至人養生云云　至人は道德の至極ぜる聖人。莊子逍遙遊に、至人無己、神人無功、聖人無名。同じく養生主に、文惠君曰、善哉、吾聞庖丁之言、得養生。長年は長壽といふに同じ。會子に、導血氣以來長年と見ゆ。【四】風雨蕭蕭　風雨にて物さびしい。詩、鄭風に、風雨淒淒、雞鳴喈喈、既見君子、云胡不夷。【五】斷魂　斷腸といふに同じ。韋莊の詩に、自是春愁正斷魂。【六】相逢不相識　後漢、黨錮傳に、夏馥爲三黨魁一、及三張儉等亡命一、皆被三收考一、辭所三連引一、布徧三天下一。馥乃自剪髮變レ形、隱三匿姓名一、爲三冶家傭一。形貌毀瘁、人無三知者一。弟靜遇レ馥不レ識、問三其言聲一、乃覺而拜レ之。【七】語音存　戰國策に、趙襄子將三知伯頭一爲三飲器一、漆レ面曰、吾其報三知氏之讎一矣、乃漆レ身爲レ厲、滅レ鬚去レ眉、自刑以變三其容一、爲三乞人一而往乞、其妻不レ識曰、狀貌不レ似三吾夫一、其音何類三吾夫一之甚也。又呑レ炭爲レ啞、變三其音一。

【題義】此詩は熙寧十年七月の作である。紀昀前詩を評していふ、寬一步、更沈著と。後詩を評していふ、此亦剩三當日小人營營終歸三於盡一、而語意渾然不レ露と。唐宋詩醇の評に、二詩惟語語解慰、乃益見三別恨之深一、低回欲レ絕とある。

【詩意】子由が南都に赴くこととなつて、別れる日もだんだんと近づいた。風雨蕭蕭物さびしくて聞くに堪へない。まことに心を痛ましめるのである。それでも、後漢の夏馥・夏靜の兄弟が相逢うても

相識らず、容貌が全く變つて、言葉だけが以前のままであつたといふ狀態よりも、餘程ましである。後漢の靈帝の時、中常侍曹節等が朝政を專にし、善人を禁錮し、之を黨人といつた。馥は時の官人に變らないが、夙に聲名があつて、節等に憚らる。遂に范滂・張儉等數百人と竝に黨中に入る。詔を郡縣に下して之を捕へた。馥は頓足し、歎じて曰く、一人、死を逃れ、禍、萬家に及ぶ、何を以てか生くるを爲さんと。鬚を剪り、形を變へ、冶家の傭となつた。形貌毀悴、人知るものなく、弟にも判らない。ただ音聲を聞いて、機に覺つたといふ。此詩は此故事によつたのである。

【餘錄】子由逍遙堂會宿二首 并引にいふ、轍幼從二子瞻一讀レ書、未レ嘗一日相捨一、既壯、將レ遊二官四方一、讀二韋蘇州詩一、至二那知風雨夜、復此對レ床眠一、惻然感レ之、乃相約早退爲二閒居之樂一、故子瞻始爲二鳳翔幕府一、留レ詩爲レ別曰、夜雨何時聽二蕭瑟一（眞情藹然可二欽羨一）其後子瞻通二守餘杭一、復移守二膠西一、而轍滯二留於淮陽・濟南一、不レ見者七年、熙寧十年二月、始復會二澶・濮之間一、相二從彭城一、留百餘日、時宿二於逍遙堂一、追二感前約一、爲作二小詩一曰、逍遙堂後千尋木、長送中宵風雨聲、誤喜對牀尋二舊約一、不レ知漂泊在二彭城一」秋來東閣涼（一本に冷に作る。）如レ水、客去山公醉似レ泥、困二臥北窓一呼不レ起、（一本に醒に作る。）風吹二松竹一雨淒淒と。玩味するに、不盡の情趣がある。足未だ關外を出でない人には、其の味を解することが出來ないであらう。

但令朱雀長金花。　但朱雀をして金花を長せしむ、

【字解】【一】今二朱雀長二金花一　陸眞君、金液還丹歌に、北方正氣爲二河車一、東方甲乙成二丹砂一、兩情合要歸二一體一、朱雀調護生二金花一。注にいふ、朱雀、火也と。河車は道家、鮑姥の喩。【二】轆車　賈島の詩に轆轤復轆轤、百年變轉數。【三】銅狄　後漢、劉子駿傳に、人於二長安東霸城一見レ之、與二一老翁一共摩二銅人一、相謂曰、適見レ鮑レ此、今已近二五百歲一矣。水經注に、魏、黃初元年、徙二長安一、金狄重不レ可レ致、因留二霸城南一。【四】杳嗟　杳欸といふに同じ。孔叢子に、嘆聲同レ軌、伯樂爲レ之杳嗟。

此別還同一轉車。　此別還同じ一轉車。

五百年間誰復在。　五百年間誰か復在る、

會看銅狄二兩杳嗟。　會す銅狄を看て兩ながら杳嗟せん。

【詩意】道家に煉丹の說がある。道士、金石を煉つて藥となし、之を服するときは、仙人となること が出來るといふので、之を金丹といふ。其說は內丹・外丹に分れて居る。外丹は煉る所の金丹を指していひ、一轉より九轉に至るのである。內丹は己の身、精氣煉成の丹をいふ。さて、我弟の子由は、天資道に近く、至人養生長年の訣を得て居るから、時に火力を調護して金丹を長せしめる。それで今は暫し相離れて居ても、此別はまた煉丹の一轉車に外ならない。何も悲しむには足らないのである。併し、又考へると、人が長安の東、霸城に於て、銅狄を見たとき、一老翁と共に銅人を摩擦し、相謂ひて曰く、たまたま此を鑄てから、今已に五百歲に近いといつたさうである。人生五十年、七十古來稀である。五百年、誰かまたある。銅狄を見て、相杳嗟せざるを得ないのである。

留題石經院三首

石經院に留題す　三首

蔥蒨門前路。行穿翠(三)密中。
卻(四)來堂上看。巖谷意無窮。

【字解】【一】石經院　潁頭寺中に在る。【二】蔥蒨　あなあなと草の盛にしげる。謝朓が登三孫權故城一詩に、文物共蔥蒨、雲開見二平陸一。【三】翠密　孟浩然の詩に、尋レ林采レ芝去、谷轉松聲密。【四】卻來　反るないふ。孟浩然の詩に、只長却來遲。また、回首却來遲。

【題義】此詩は熙寧十年八月四日、子由と同じく石經院に遊んだ時の作である。子由の和した三首は、岩巒山上寺、近在二古城中一、苦恨河流遠、長敷二眼力窮一。盤曲山前路、流年向レ此消、與亡須二一弔一、范曳臥二山腰一。孤絶山南寺、僧居無限情、不レ知行レ道處、空聽暮鐘聲といふのである。王文誥いふ、蔥蒨門前路、天矯庭中檜、窈窕山頭井、特有レ意、句法一式、而淺深則別と。

【詩意】門前には、青青と草が茂つて居る。行いて松の翠密の中を通る。（王文誥いふ、此二句、是第一首起法。石經院の幽致を言つたのである。）さて反つて堂上より看るに、煙風は斷えず孤雲纔り、蒼巒は凝る萬木の姿と言つたやうな趣がある。まことに、巖谷の意窮まりがない。

天矯庭中檜。枯枝鵲踏消。
瘦皮纏二鶴骨一。高頂轉二龍腰一。

【字解】【一】天矯　飛び舞る貌。淮南子に、天矯夭蟜。郭璞の江賦に、擠二凌波一而鳥曜、吸二翠霞一而天矯。【二】枯枝鵲踏消　王文誥いふ、崔駰賦に、幹剔枝殘、來大本消、詩用二其意一、故以二枯枝一代二本字一也と。紀昀いふ、消字未レ詳、疑二子由和詩一又非二譏字一と。【三】纏腰　檜をいふ。東坡の游二靜山一詩に、龍腰蟠二故國一。范成大の馬跡石の詩に、跨レ馬凌レ空亦快哉、龍骨鶴背襄徘徊。

【詩意】石經院の庭中には、檜が天矯として聳えて居るが、其の枯枝は、鵲が消して垂れ、瘦せた皮は、鶴骨のやうな幹を纏うて居る。高い頂は、龍の腰を轉じた姿である。（范成大の詩にも、龍骨鶴背襄徘徊とある。）

【餘錄】檜は說文に、栢葉松身と見えて居る。東坡の詩に、應レ憐四孺子、不レ隨二凡木羣一、體備二松栢姿一、氣含二芝朮薰一、初扶鶴骨立、未レ出龍鱗レ筋、巢レ根白蟻亂、網レ葉青蟲紛、乃知蔽芾初、甚要二封植勤一、他年皮三寸、狐鼠了不レ聞。

窈窕山頭井。潛通伏澗清。
欲知深幾許。聽二放轆轤聲一。

【字解】【一】窈窕　山水などの奥深い貌。歸去來の詩に、既窈窕以尋レ壑。文選、王文考の魯光殿賦に、旋室窈窕以窮レ奧。【二】潛通伏澗清　窈窕山頭の井、潛通伏澗清し。

「に聽け。
深さの幾許なるかを知らんと欲せば、放てる轆轤の聲」